無山

第七年
第三號

（齋　北）士富の空晴

第七年

山岳

第三號

目次

（著作權所有）

表紙……落葉松……中村清太郎氏筆
卷頭畫……晴空の富士（北齋）……三色版……
タイトルページ……後立山より劍岳を見る……茨木猪之吉氏筆

挿畫

うらじろきんばい……寫眞銅版……志村烏嶺氏撮影……頁一六
高山植物播種發芽狀態……同……上……一六
山の影（穗高岳の倒影）……同……辻村伊助氏撮影……八
雪のくま（徳本峠の春）……同……上……九六
電光と夕立の富士（北齋）……同……一〇四
丘陵（ヴァン、ゴッホ）……同……一一三
峽谷（ヴァン、ゴッホ）……同……一一三
森（ポール セザンヌ）……同……一一〇

地圖

白峰山脈應測圖……石版四度刷……高頭式氏作……一二八

本欄

山の形に就て　理學士　山崎直方……一頁
高山の植物に就きて　志村烏嶺……一七
山岳寫眞（二）　高野鷹歳……四三
羽後田代山登山記　泉茂家……五八
小無間山と大無間山、駿州田代よりの登路　關口泰……六四
甲斐駒ヶ岳及仙丈ヶ岳登山記　大槻禎郎……七〇
神河内と常念山脈　農學士　辻村伊助……八二

雜錄

○「白峰三山に就いて」の異議を讀む（高頭式）○白峰山名の改稱に就いて（N生）○日本南アルプス南半登山雜談（中村）○北アルプス瑣談に就いて（榎谷徹藏）○鉢伏山に就いて（梅澤親光、山川默）○赤城山と尾瀬沼（關口泰）○信州駒ヶ岳、御岳、白山の眞地圖出版さる○山岳雜信（濱谷泰次郎）○愛鷹山土鼠おつ立（八代生）○白峰山脈臆測圖解說（高頭式）

雜報

○燒ヶ岳の變狀○降灰時の施設○降灰豫防につき○燒岳の活動に就て○燒岳山麓大崩壞○福島王瀧間電鐵○駒ヶ岳撮影隊○駒ヶ岳降雪○駒ヶ岳近道開き○木曾の御嶽山○淺間山危險告知○富士山の近況○富士山の大降雪○富士山の降雪○昨今の富士山○初夏の降雪○諸高山の晩雪と融雪

會報

○會員登山報○英國より○第十回有志晩餐會○「高山深谷」第四輯の發行○參考圖書の寄贈○會員逝去○寄贈交換圖書○新入會員○退會、除名○本號の挿繪に就いて

附錄

日本山名錄初稿（一）　高頭式……一頁
宮川水源泝行大臺ヶ原山登山記　大北聰彦……三

山の形に就て

理學士　山崎直方

先達て或る所でこちらの高頭君に御目に掛りましたときに、私が昨年海外に少し長い旅をして參りましたから、其旅行中で登つた山の話でも是非するやうにと云ふ事でありましたが、假令こゝにアルプス登山のことに就きまして申上げました所で、細かい峯の名とか、峠の名を繰返すやうなことになりましては、乾燥に陷りはしまいかと云ふ憂ひがありますので、甚だ漠然としたやうなことでございますが、「山の形に就て」と云ふ題に致しまして、唯之を說きまする間に途中で實踏した山の特色を成るべく加味しまして、短時間の淸聽を煩はさうと思ふのであります。

さて山の形に就きましては今更に繰返して申上げるのもどうかと思ひますが、順序としまして一と通り、山にはどう云ふ形があるか、山の形はどう云ふものに因つて定まるものであるかと云ふことを、前きに簡單に述べまして、さうして其實例としまして此頃見聞しましたことを種々申上げた方が、私の方でも大變申上げるのに樂でありますから、そんなやうなことに致したいと思ひます。

御承知の通り山の形が出來ますには二通りの主な原因があると見て宜からうと思ひます、即ち山の最初の原始的の形を造る所のもの、換言すれば山の基本的形相を造る所のものと、更に其基本的形相の上に種々細々しい變化を與へる所のものとの二種があるのである、即ち一は構造的、一は破壞的である、積極、消極の相反する二種類の形相が出來るのである、假に富士山について見るに彼の、富士山のやうな、あゝ云ふ圓錐形の山はどうして出來たかと云ふと、是は言ふまでもない火山力の作用であります、火山力に因つて噴き出した所の熔岩とか灰のやうなもの、それが一つの中心から噴き出し

ては其近所に降り、又噴き出しては其近所に降り、積もり積つてあゝ云ふ圓錐形が出來て居る、是が火山の特色である、其圓錐形の山は、是は火山力に因つて出來る山の一つの特色である、火山力に因つて初めて出來る形は圓錐形が普通である、併ながら一つの圓錐形の山が地球の表面に出來た所で、是がいつまでも圓錐形を保つて居られるかと云ふと、それは疑問である、今富士山を見ると、頂上は急に、麓に下るに從ひなだらかな形をして誠に何とも云へぬ見事な曲線美を現はして居ます、併ながら一とたび地球の表面にあゝ云ふ形が出來ますと、直にそれから外界の力が働くのである、即ち風雨の破壞的作用が働くのである、それで富士山は新しい山でありますから、此破壞的の浸蝕作用がまだ十分に働て居らない、從て餘り幾つも峰が出來ても居らず、又幾つも放射谷が出來て居りませぬ、しかし彼の富士山の前にある愛鷹山を見ると、之も始めは富士山と同じく火山力で圓錐形を造つたものでありますが、此愛鷹山の方は完全なる圓錐の形は既に消え失せて居ります、能く其缺けた所を繕つて見れば圓錐形と云ふことは分りますが、唯瞥見した所では富士山と同じ形を認めることは出來ない、さう云ふことになつたのはどう云ふ譯であるかと云ふと、是は愛鷹山の方が富士山より古い時代に噴き出して、又富士山よりずつと古い時代に其活動が總んで仕舞つて、即ち熔岩が流れるとか灰が噴き出るとか云ふことが無い、唯働く所の力は外界の雨水の方のみである、雨水の浸蝕作用の爲めに山は次に破壞せられて、初めは單一の圓錐形であつたものが、谷は深く刻まれ頂上は幾つもの峰になつて仕舞つたりして、最初の美しい形は見えなくなつて居る、即ち兩方とも最初は圓錐形の山を造つて居つたが、併し一方は新しい爲めにまだ〳〵圓錐形が完全に近いし、一方は古い爲めに既に毀はれて仕舞つて居る、そこに違ひが出來て居ります、是はたゞ一つの火山を例に取つたのでありますが、何れの山にしても最初に出來た所の山の形、即ち原形と、それから更にそれに次いで出來る所の「セコンダリー」の形、即ち續發的の形とが現はれて來るものであります。

此最初に山の原形を造る所の力は何であるかと云ふと、是は先づ重もに地熱の作用であります、地球の內部の力から出來る所のものであります、今の火山の如きもそれでありますし、又地球が段々收縮する爲めに地球の表面に皺が出來る、其皺が大きな山脈を造るのもそれである、或は斷層が出來る、地球の一部分が陷落すると、さうすると一部分の殘る所のものが高くなつて山になる、或は一方が陷落し一方が飛上がると云ふこともありませう、一とたびさう云ふ山が出來まして、地球の表面に高低が出來ますれば、其時には必ず高い所に降つた雨水は低い所に流れなければならぬ、其流れる時に地面を削つて行く、即ち最初に山が出來たならば其處に彫刻的作用が働いて、さうして更に第二の形が出來て來るのである、併ながら尙ほ能く見ますと云ふと、假に地球に皺が寄つて來たとしましても、其皺が極完全なる、又規則正しい皺を造るといふやうなことは、是亦甚だ不可能のことである、地球の表面に皺が寄る塲合に其高い所が山脈になり、一番高い所が峰になり、極低い所が谷になると云ふやうな規則正しいものは少ないのであります、其原形の出來るときに、もう既に種々の形の變化が起るのであります。

今、地球上の現在ある種々の山脈の中で比較的最も規則正しい、又行儀の宜い山脈は何處であるかと云ふと、是はアルプスの山脈の外側、即ち其北側に平行して居ります所のユラ山脈が、是が先づ模範的の皺の山と言はれて居る、併ながら此山脈でも其皺の最も高い所が必ずしも高い儘に存在して居らない。

一番高い峰の所が缺けて、高かるべき所が却つて凹んで居るやうな所が出來て居る、我々がボール紙のやうな物を重ねて、之を壓迫して皺を寄せて見ましても、其皺が寄つて高くあるべき所が、破れて却つて低くあると云ふことがあり勝ちであります、又アルプス山脈の皺の如きは、是はなか〳〵複雜なものである、あのアルプスなるものは先づ以て歐羅巴大陸の中では一番高い山脈であります、全

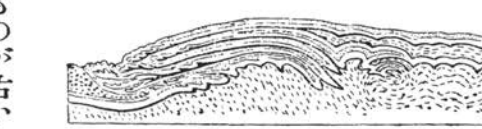
體の形から言ふと、皺曲山脈の特色として大きな弓狀を畫いて居ります、是は幾つかの山脈が集まつて出來て居り、幾つかの大きな山脈が寄つて一大山系を造つて居る所は實に立派であります、併ながら此アルプスの大きな皺が組立てられるときに於てはどう云ふ皺が出來たかと云ふと、今申したユラ山脈のやうな規則正しいものでない、複雜した皺が出來て其皺が更に少なからざる變化を經て現在見る所のアルプス山系を造つたのである。

此アルプスの山の皺の出來かたに就きましても、隨分學說が種々異つて居りますが、今より丁度五十年前の有名なハイムと云ふ人はアルプスの皺は或る一方から働た力のみで出來るものでない、片方から押せば又他の片方からも押し、兩方から押した爲めに、眞中の所に波の樣なものが出來て、而かも眞中の所が一番高まつて兩方の側が同じやうに傾いた、そして其餘波が更に北の方に起つてこゝにユラ山脈を拵へたものであらう、斯ふ云ふやうに解釋して居る、又是が一般に認められて居つたのであります、ところが近來になりましてアルプスの研究が段々進み、殊にアルプスに大きなトンネルが段々出來上がり、彼のシンプソンのトンネルの如きは世界第一のトンネルで、是が而かもアルプスの中央山脈を横斷して居る、今までは地の表面に露出して居る岩石から想像して居つたのが、地の中の樣子が大變明らかになつた爲めに、アルプスも今日まで想像されて居つた皺とは異なれる皺から出來たものであると云ふ新しい考へが現はれて來たのであります、其考へに依るとアルプス山脈の皺は兩方から押されて出來て來たものでない、それよりもつと大きな力が南の方から働いて來て、非常な勢ひで北に押寄せた爲めに起つたのである。

前のやうにこちらからも働き、あちらからも働いたならば、こんなやうな皺は出來ないのでありますが、たゞ南一方から盛に働いた爲めに、地面をぐつと押して、丁度濱邊に磯波が打掛けるやうに覆ひ被せる所の波を拵へた、それで南の方の底の方にあるものが押上げられて上の方に來、又或る一つ

の岩石、一つの地層が、第一圖の左半で見るように重なつて居りますから、一箇所の山に就いて見ましても、一つの山の中に、下の方にも上の方にも同じものが幾度か繰返して出て來ると云ふやうな、大變に複雜な構造をして居るものである、其の皺の波の頭がずつと細かくなりますと、幾つもの枝が分れて、丁度波の花と同じやうなものが出來て、それが重なり重なつて今日のアルプス山系北部の地方を拵へたものである、それでアルプスの皺と云ふものはなか〳〵複雜したものである、甚しきに至つては或るものは波の花の迸りが飛んで、其破片が又一つの山を形造て居る所があります。

アルプスの中で瑞西の方にある有名の湖水でフィアワルドステッテル湖と云ふ湖水がある、其湖水の傍にミーテンと云ふ山がある、此ミーテンと云ふ山は大變に景色の佳い山でありまして居るものと比べて見ると、山を拵へて居るものが古いもので出來て居つて、山を載せて居る地盤の



第一圖

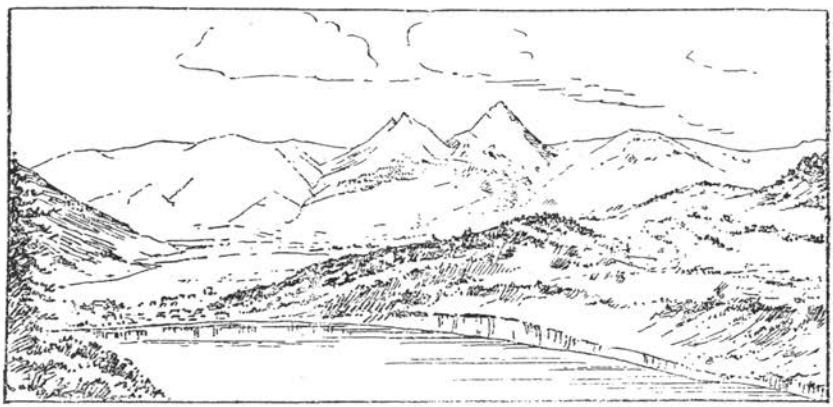
◎山の形に就て　山崎

ふ山は大變に景色の佳い山でありまして、其邊の外の山の間に一段高く抽でゝ居ること第二圖の如きものである。

外の山はなだらかであつて、この邊に谷が出來て居る、外の平らの山がある所に、尖つた丁度二子山に似た山が横はつて居る、山の高さはそれほど高い山ではありませぬが、綺麗な形をなして居る爲めに瑞西では名山になつて居ります、此ミーテンと云ふ山は今迄疑問の山であつた、何故かと云ふと、一體地層は古く出來たものが下にあるのが普通で、古いものゝ上に段々新しいものが重なつて來るのである、ところが此ミーテンと云ふ山は、此山の麓の地盤を拵へて居るものと、山其ものを拵へ

◎山の形に就て　山崎

方が新しいもので出來て居る、尤も山の麓へ川流が新しい土砂を齎らして沈澱すれば下に新しいものがありますが、此處のはさう云ふものでなく、下の地盤が一體に新しいので、其上に古いものが載つて居る、是は大變矛盾した現象で、今迄之を漸くこじつけて解釋して居る所に依りますと、古い山があつて、其山は深く根を張つて居る其古い山が地の底から聳えて居るさうして其附近に新しい層が横はつて居る、新しい層を貫いて古いものが頭を出して居るのである、斯樣に解釋して居ります、しかし之は苦い說明であります、今の*



第二圖

六

*やうに非常に大きな波が押寄せて來たと云ふ說でありますと簡單に解釋が出來る、南の方から波が飛んで來て、其一片がここに落ちて、之が段々風雨の作用か何かで崩れて仕舞つて、今はこんな樣な二子山が出來て居るのであると云ふ風に解釋されて、一層此山を說明するに面白くなつて來て居るのであります、實際此山は前の第一圖で言ひますと左の端の邊にある山で丁度波の迸りの先きの所にあるのであります。

斯う云ふやうな有樣で最初の原の形を拵へる所の皺其ものが既に複雜な

形を拵へて居るので、あの山は皺から出來て居ると云ふ風に簡單に言ひ去りますが、其皺はさう手輕いものでなく、又出來上がつた後も大變に變化して居る、そこへ持つて來て更に大きな他の作用が働て來る、即ちそれが外界の作用であります、我々が通常、山に登つて見ます現在見る所の山の形と云ふものは、是は外界の作用が餘程手傳て居るのであります、妙義山に行つて妙義山の形が大變珍らしいと云ひますが、あれは妙義山其ものは最初は火山である、併し今日のやうな大變面白い景色、珍らしい形をして居りますのは水蝕作用で出來たものであります、何處の山に參りましても、深い谷、高い崖など丶云ふものは、多くは此水蝕作用に因つたものであります、即ち彫刻的の作用で出來て居るのであります。

ところで此彫刻的の作用が又其作用を始める時には、是が地方〳〵に依つて働き方が異つて居ります、第一に水が働くのでありますから、水の多い所、言葉を換へて言へば雨量の多い所に於ては、其作用の著しいと云ふことは言ふ迄もないのであります、日本のやうな所は世界中で雨量の多い所に數へられて居る、尤も印度などに比べて見ると、或は敵ひませぬけれども、併し歐羅巴に比べて見ると、日本は雨量が多い、概して日本の島は雨量に於て勝つて居る、斯う云ふ所に於きましては水即ち雨が山を崩す所の作用も著しいのであります、是が熱帶地方の中でも殊に乾燥して居る地方、又雨の一向降らない地方、或は雨の極めて少ない地方などに行つて見まするとその作用がない爲めに山が皆のつべりして居つて、谷の出來方が誠に淺薄である、雨が度々降りますと雨の水が山を削つて谷が幾らも出來るが、雨の降らぬ所では谷が出來ない、ちよつと波斯とか、亞剌比亞とか云ふ地方の地圖を見ますと、其中にある所の谷と云ふものは……無論、谷が絶對的にないことはありませぬ幾分がありますが、其谷の系統と云ふものは誠に簡單であります、是れと同じ面積の日本の地圖を持つて來ますと。本流に支流があり、支流に又小枝があると云ふ風に谷の系統が非常に複雜して居る、谷の系統が複雜し

て居ると云ふことは、言葉を換へて言ひますと山が幾つにも切られて、山に綾が澤山出來て居ることである、山に奇景の多きも亦それから來ることが多い、是が假りに同じ硬い岩から出來て居るものであつても、雨量の多い所はそれだけ雨の力が働くことが多い爲めに地形が變化して居る、又岩石の性質に依つて、硬い岩から出來て居るのと軟かい岩から出來て居るのとではそれに付いて山の形が違ひます、軟かい岩とか、軟かい土でもさうでありますが、軟かい所は削られて仕舞つて、硬い所は高くなつて殘つて居る。

茲に一例を擧げて見ますと、こゝにこんな大きな皺が出來ました所で、段々上の方が削られて來て、この中で硬い岩もあり、軟かい岩もあると致して硬い岩の所は水がなか〳〵岩を削ることが出來ませぬから、こゝだけ高く殘つて、こゝに特に一の山脈が出來る、こちらにも又それに似寄つた山脈が出來る、硬い所だけで山脈を造ると云ふことが起る、されば山の形が變つて來ることにつきては氣候とか、或は其地盤の有樣とか云ふものが大に影響するのである。

猶其上に天水の作用する場合でも其の水が或は液體になり或は固體になつて、山に働く場合には又夫々其削磨の狀態が異り從て又山の形も亦變つて來る、即ち固體の水、固體の水と云ふのは即ち氷である、氷に依つて働かれる場合と流水に依つて働かれる場合とは山の形が異つて來る、再びアルプスを例に取りますが、アルプスの山は緯度から言ひますと、北緯四十餘度と云ふ所にあり且つ高さも日本の高山よりも高い、それ故にアルプスに於きましては雪が始終降つて居る、先づ其雪の降ります所も、所に依つて違ひますが、大抵三千「メートル」乃至二千八百「メートル」の所に參りますと、もう萬年雪が始終横はつて居ります、日本で言ひますと八ヶ嶽の頂上位の高さの所に參りますと、始終雪を戴いて、それから氷河が流れて居る、印ち雪が段々壓迫されて氷になり、之が一塊りの氷になつて山の斜面に沿うて流れて居る、其山の斜面に沿うて流れて居るものが多くは谷を傳つて流れます、

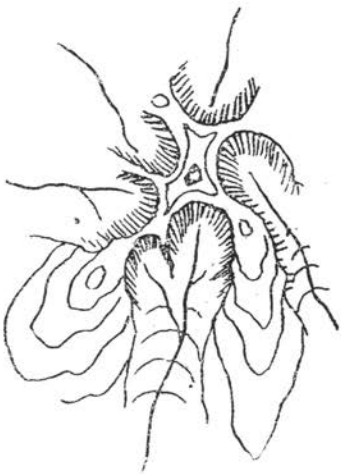
是がグリーンランドとか、南極洲地方に參りますと斯る氷が地面の上一面に氾濫して居りますが、併し斯う云ふ山でありますと谷に沿うて流れて居る、其氷河は隨分低い所にまで流れて來ます、アルプスの如きは海拔一千メートルの邊まで氷河の端が流れて來て居ります。

さう云ふ風に固體になつて流れる所の水、即ち氷河が浸蝕する所の谷と、それから流水の浸蝕する所の谷とは大變に谷の形が違ふ、谷の形が違ふばかりでなく、谷と谷に依つて挾まれて居る山の脊の部分も大變に形が違つて來る。

日本アルプスなどに御出でになつた方は所々で御覽になつて居りませうが、高山の高い所に參りますと、山の脊の所に、飛驒山脈ではマヤと云つて居る、即ちカールとかサーカスとか稱する所の谷が出來て居ります、其谷は雪や氷の浸蝕作用に因つて出來る谷であります、其山の高い所に雪が降りますと、其雪が餘り山の高い所に安んじて居ない、崩れて下に落ちる、先づ自分の落ち著き得る限りの範圍に於て或る所迄落ちて、其處で漸く止まる、所に依りますと、日本などは今其處にあると云ふのが見えませぬけれども、もう少し高い山に行きますと、雪が降つて、其雪が溜まつて小さな氷河も流れますし、大きな氷河も流れます、日本では雪が溜まつて氷河が流れて居ると云ふことは現在は見えませぬが、兎に角或る所では餘り高い所に雪が止まつて居ないで、段々崩れ落ちる所まで落ちる、谷を源にずつと上つて見ると或る所に雪が溜まつて居る、其溜まりはどうかと云ふと、其處はすつかり雪が覆ふて居りますから、直接に水が働くことが出來ない、比較的平らになつて居る、若し其處に雪が無かつたならばどん〳〵水が流れて急な谷を穿つのでありますが、雪で蓋をして居るから甚しく削れない、其雪が融けて流れるやうになると今度は著るしく浸蝕し始めますから其處の傾斜が急になる、さう云ふ樣に雪の覆うて居るときは傾斜が緩漫でありますが、其雪が一とたび融けて流れ出すと傾斜が急になる、其雪の溜まつて居る所は後ろは絕壁を回らして、盃を斷ち割つたやうな形になる、

それでサーカスと云ふ名前が付いて居ります、さう云ふやうな谷が雪の浸蝕作用の爲めに發達して居るのであります、雪のある所にはさう云ふ谷があるのであります、谷は山の裾に行くに從つて幅が廣く、段々上に行くほど幅が狹ばまつて錐のやうになるのが普通の日本で見る所の谷の形であります、併ながら氷河或は雪の作用のある所の山に行くと谷の源が廣がつて圓みを帶びて居ります、さう云ふやうな山でありますと形が變つて來まして、別に書いて見ますと。

斯う云ふ樣に谷の端が圓みを帶びて、上に行つて尖らぬで膨れた所の谷が山の脊の方に横はつて居ります、さうすると各の谷一番どん詰まりの所はどうかと云ふと急な崖があつてあちらに崖があつて居りました、一番大きいのが小西寫眞店から出て居つたが、其アルプスのマツターホルンと云ふ山は大變に突き出て居るのみならず、谷と谷の間に出來ます所の峯も是も非常に削られて急になつて來て、其上が鋸の刄を立てたやうな形のものが多く出來て居るのであります、アルプスの峰を見ますと峰が鋭い、如何にも鋸の刄のやうにぎざ〳〵になつたものが多い。



第三圖

もう一つ異つた所の特色はどう云ふ所に現はれて來るかと云ふと、唯今申しました通り、こゝにも*こちらにも崖があつて、其間に山が出來ますから丁度鑓ヶ嶽のやうな峰が出來ます、アルプスにある有名なる尖峯マツターホールンの圖が先達て地學協會で本會の展覽會を開きましたときに四つほど出て

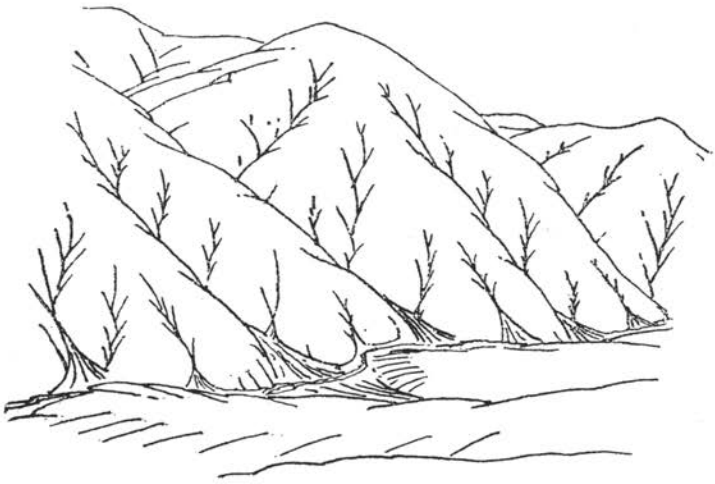
雪の溜まりが出來、そこにも雪の溜まりが出來、この雪から更に氷河が流れ出す、さうすると、この谷と云ふものが氷河でずつと覆はれて居る、斯うなつた場合に今度は山の形がどう變はつて來るかと云ふことを考へて見ると、先きほど申しました通りに雪を以て覆はれて居る、雪其ものは浸蝕作用がありますが、其下の所は流水の浸蝕作用が甚だ少くあります爲めに谷は鋭く切れて居ない、氷河で覆はれて居る所もそれと同樣であります、氷の非常な厚さのもので谷一面を覆うて居ります、それ故に素と氷河の下に浸み込んだ水などはそろ〳〵流れて居りますけれども、之は普通の川に比べて見れば、それほど大きなものではない、是はそろ〳〵流れて居るものであります、其浸蝕力は弱い、それで先づ谷の大部分がすつかり氷で塡められて居る、閉されて居るものとしますと、普通の流水が浸蝕するやうに鋭い谷を拵へないのであります、普通の流水が谷を拵へます時分には、多くの場合にはVと云ふ形をなして居る谷を拵へる、是が一番初めの働きであります、日本の高山などに登りまして深い谷に參りますと、兩方が絶壁になつて急傾斜をなして居る、一體の谷の形はV狀をして居る。

其一番どん底を水が削つては深くし削つては深くするのであります、ところが氷河の方はさうでない、多くの場合に於きまして、氷河は非常な厚さの重いものを以て地面を削つて行く、水が流れるほど速に流れませぬが、併ながら極めて頑强に下の地面を削つて行きます、氷河は下の地面を削ると共に谷の兩側をも削ります、是は大きな氷の力で削つて行きますから、大きいほど極徐々に力强く削つて行くのであります、それで氷河の流れて行く谷は普通Uの字の形に削られてあります、それのみならず谷が大變滑らかであります、今茲に一つの谷を想像しまして、こゝを水が流れる、水が流れます場合にはこちらに打つ突かり、あちらに打つ突かると屈曲して又所によりては汎濫もし自由に流れるのであります、ところが氷河でありますと、一塊の氷でありますから假りに其通路に山の角ばつた所が出て居れば切つて滑らかにして行く、谷の兩側をどん〳〵削つて滑らかなものにして、細かいぎざぎ

◎山の形に就て　山崎

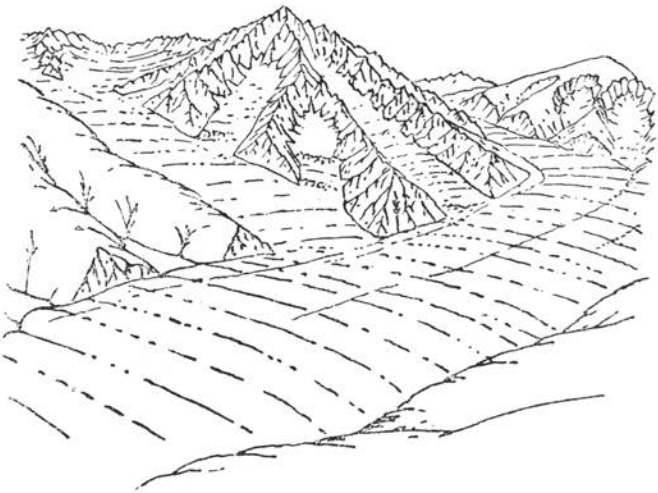
◎山の形に就て　山崎

ざなものでない、滑つこくして行きます、さう云ふ特色があります、此谷を見ますと、今氷河の覆うて居る所はU字形で、誠に滑らかな谷を造りますが、併し之に反して氷河のある處でも氷河の表面以上に露出して居る部分はどうかと云ふと、こゝの所は雪が被つて居らぬから、雪が落ちてもどん〳〵辷り落ちると云ふ樣に鋭くなつて居ります、雪が被つて居りませぬから雨水が其處で働きます、縱し雪が有つても崩れ落ちる、其上に高い山でありますから風の力も強いので、風の力の爲めに吹付けられ*て石の缺片が互に打つ突かり合ふこともあります、そこで地形が一層亂れて居る、極めて峨々たる鋸の刄のやうな尖つた形になつて居ります、是は丁度雪や或は氷河の發達して居る所の地形に於て見るのであります、日本の樣な唯、水蝕作用に因つて出來る所の山などとは大變に形が違つて居るのであります、是は唯地形圖を書いて示したのでありますが、之をもう少し分り易い爲に見取圖にして見ますと云ふと、幾分か分り易からうと存じます、先づ日本あたりのやうに唯水の作用のみに因つて働かれる所の山の形を見ますと、普通こんな樣な



第四圖

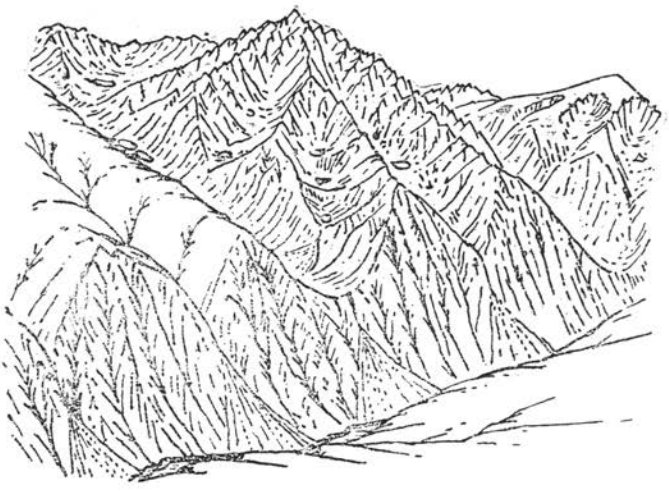
山の形になつて居ります、(第四圖) 縦し尖つて居つてもこの位の尖り、又谷が出來ても尖つてV字形に削られた谷である、小さな谷でも、又山と山との間の大きな谷でもVの形をして居る所の谷であります、ところが是が若しこの邊に大變に雪が降り、さうして氷河の作用がこゝに働いて來たと云ふ場合には、是はどう云ふ形のものになるかと云ふと――若し日本の氣候が大變變つて來て、今日よりも平均温度が假に十度も低くなつたとすると、今日位の雨量でありましても、日本「アルプス」で盛に氷河が出來べきもの*と思ひます、――こゝに氣候の變化の爲めに氷河が出來たとすると、どんな形の山になるかと云ふことを想像して見ますと、(第五圖) 先づこんなやうな形のものにならうかと想像されるのであります、斯う云ふ樣な山があつて、こゝにも、そこにも、段々に雪が溜まつて來て、さうして谷の源に彼の「カール」が發達して、それから氷河が出來る、この氷河がこちらから來た氷河と出會つて大きな氷河を造る、此場合にこゝにも氷河が出來、そこにも氷河が出來る、さうすると、氷河と氷河との間の山の脊は大變尖つたもの



第五圖

であります、こちらの氷河と向ふの氷河の間の峰は鑓ヶ嶽のやうな峰を拵へる、谷の側面と云ふものが大變に切立つて來る、こんなやうな地形に變つて仕舞ひます、若し尙ほ是が進みまして氣候がもう一層暖かくなつてこの邊の氷河が融け去つて仕舞ふ、さうすると今度跡にどんな地形が殘るかと云ふと、こゝに現らはれる地形の著るしいことは、第六圖のやうな有樣になる、今まで氷河の占めて居た所がUの字形になつて、大きな谷になつて殘るのであります、この本流の谷と支流の谷と出會ふ所が大變な崖をなして居ります、普通本流と支流と出會ふ所を見ますと、言葉を換へて言へば一方に大きな谷があり一方に小いさな谷があつて出會ふ所では、谷筋が斯く急變化をして居ない、しかし此處では本流から一つの支流に行くには大きな崖を上らぬければならぬ、斯う云ふ所をハンギングヴァレーと云ひ、日本語に譯して懸谷と云ふのである、普通の谷と違ひ谷の系統が自然々々と移り更らずに急に階段になつて居る、是が氷河などのありました地方に殊に著るしく發達して居るのであります、尤も普通の日本のやうな山にもハンギングヴァレーのないことはない、それならば此谷には元氷河があつたかと云ふと必ずしもさうでない、種々の原因もありますけれども、本流の方は浸蝕作用が働らいて、どん〳〵地面を削つ行くが、支流の方は水の量が少い爲めに削ることが遲い、一方はどん〳〵削り、一方は少ないと云ふ差があつて、其處にハンギング、ヴァレーが出來ることが屢ある、併し普通の流水の作用で出來る所のハンギング、ヴァレーと氷河の作用で出來るハンギング、ヴァレーと比較して見ると、氷河の作用で出來るハンギング、ヴァレーの方は規模が大きく谷が深く且つ廣い、最も細かく分けて申しますと種々の原因がございますが、流水の方のハンギング、ヴァレーでありますとハンギング、ヴァレーが短い、即ち本流は年々浸蝕して行きまして或る程度まで達しますと傾斜が緩るやかになつてくる、水流が弱くなる浸蝕が少くなる、さうすると支流の方が追付いて、懸谷の崖の高さが次第に減じいつか平面で出會ふと云ふ傾向があるのであります、ところが氷河の浸蝕に於ては其

傾向が少ないと云ふことも一つの重大なる原因になつて居りますが、アルプス地方の谷に參りまして、昨年歩るきましたハレスタールと云ふ谷に於きましてはハンギングヴアレーが到る所に能く發達して居ります、所に依ると大きな谷があつて、それに第二の谷があつて出會つて一つの大なるハンギングヴアレーを造つて居る、さうかと思ふと第三のものが來て、第二のものに出會ふ、さうすると第二と第三の間に小いさなハンギングヴアレーを拵へて居ると云ふやうな所があります、さうして谷と谷の間には尖つた峰が連つて居ります、或る所から下は大變滑らかの形になつて居る、即ちこは近き過去まで氷で塡められて居る、今は無論、氷がありませぬから水が流れる、こゝに持つて來て小さなVと云ふ形が出來て居る、今流水に依つて造られた所のVの字形の谷がUの字形の谷の底に出來て、こゝに瀧が落ちたりして居る、さう云ふやうな現象がある、即ち或る所までは全く外界の作用があり、或る所までは氷で覆はれて居る、今は氷が無くなつて居るが、其氷が無くなつてから時間が經たないから今も其處は滑らかの儘で



第六圖

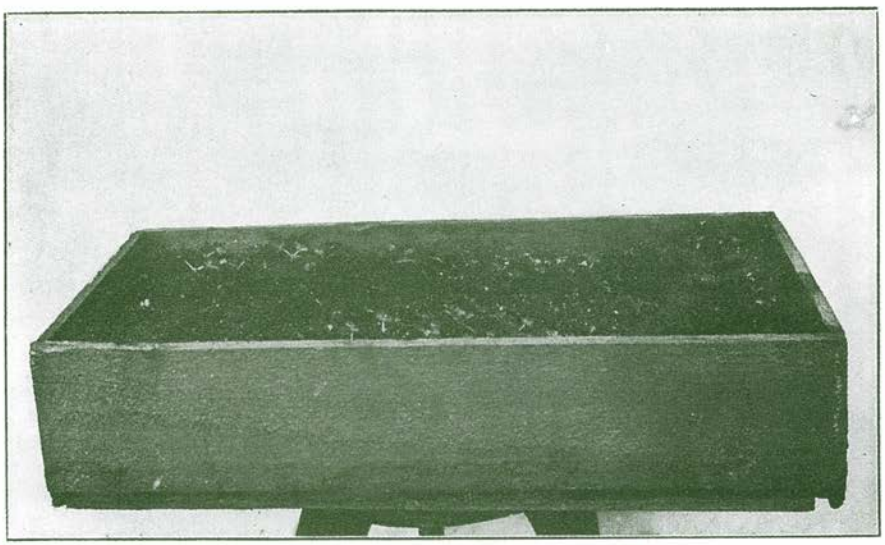
殘つて居る、併し大分流水の作用が働き出して普通の谷をこの中に拵へて居ると云ふやうな複雜した彫刻作用が所々に現はれて居るのが見受けられるのであります、斯う云ふものは今日日本の山などに於ては餘り無からうと思ひます。

併しながら日本アルプスも過去の時代に於ては氷河に依つて覆はれて居つた、少くとも其或る部分と云ふものは氷河に依つて覆はれて居つたと云ふことは確信する所でありますから、今でこそ氷河はありませぬが、嘗て氷河の爲めに拵へられたる高山性の地形は段々探檢の歩が進むに從つて發見されるのでありませう、又日本は先きほど申した通り雨量が多い所でありますから流水の作用が働いて居る所もありましようが、氷河の作用は偉大なる力を以て働いて居りますから、或る所に於ては其偉を見ることが出來やうと思ひます、それで日本の高山地方に行つて即ち日本アルプスの地方に行つて其地形を察せられる場合に於て、日本アルプスは大部分から云へば、皺から出來た所の大山脈であります、併ながら松本平に向ては大陷落が働いて居る、彫刻も働いて居るし、陷落も働いて居る、そこへ持つて行つて御嶽とか、乘鞍と云ふ火山も噴出して居る、原形其ものに大變複雜な作用が働いて居る、其形が出來てから或る部分は流水の作用、又氷河の作用も働いて居りませうし、今日は氷河こそ無いが、一年の半分くらゐ雪に覆はれて居る、夏の眞中頃にも雪に覆はれて居る所もありますから、さう云ふやうな流水或は氷雪に因つて出來た地形が少くはあるまいと思ひます、如何にも千仞の谷であるとか文人的の形容を用ゐても宜しうございますが、もう少し進んで解剖して、此谷はどうして出來たか、どう云ふ高山性を有つて居るか、どこまでも日本式であるとか、或は純アルプス式であるとか、或は折衷式であるとか、微妙の點に立入つて研究されたならば、一層趣味があらうかと思つて、甚だ短くありますが、單に見聞しました一部分を述べまして淸聽を煩はしました次第であります。

（編者曰、本編は、第五回本會大會の講演速記なり）

志村烏嶺氏撮影

いばんきろじらう



志村烏嶺氏撮影

高山植物播種發芽狀態

高山の植物に就きて

志村烏嶺

一、高山の標徴

萬年の雪と高嶺の花とは、實に高山の標徴（シンボル）たる事は何人も異論なかるべし、若し彼の高山より皚々たる、萬年の雪を融解し去らば、其の景象は頗る平凡化すべし、千紫萬紅、絢爛たる御花畑の百花凋萎せば、其の眺望は頗る殺風景たるを免かれざるべし、高山絶巓に於ける壯麗なる日出の光景も、偉觀なる雲海の眺望も、脚下に萬年の雪なく眼前に鮮麗なる百花の開くなくんば、其の壯麗も其の偉觀も、大半其の價値を失すべし、雪と花とは實に高山の標徴なり、本誌屢々萬年雪の記事を見る、未だ其の植物を記述せしものなし、之れ禿筆を弄する所以、淺學素より識者の一笑を請はんとにはあらず、未だ高山に登攀せざる人々に、唯其の一端を談るのみ。

二、植物分布

高山に產する特殊植物を記述する前に、植物分布に就て、聊か說明せざるべからず。

世界の陸地を蔽へる植物は、其の數實に夥しく、英國の植物學者「ベンザム」及び「フッカー」二氏が千八百八十三年に大成せし、植物自然科屬大全に擧げたるものは、顯花植物のみにて十萬二百二十種あり、其の後各地に於て發見記載せられたる植物、及隱花植物を加ふる時は、其の數實に莫大なるべし、此等の植物は、世界の各地に、一樣に分布する者にあらず、皆特殊のフロラを形作れり、彼

の有名なる地理學者アレキサンドル、フォン、フンボルト氏は、南北亞米利加及太西洋の各地を旅行し、各地の風景に特殊の色彩あるは、全く其の地に產する、固有植物による事を發見せり、之れ後來植物分布學の基礎を爲せり、其の後グリスバハ氏は、氣候と地質の關係より全世界の植物を、二十四の區系に分てり、デ、カンドル氏及エレグレル氏は、歷史的植物分布を研究せり、生態的植物分布の大家にはワルミング氏あり、生理的植物分布の大家にはシムペル氏あり、此等は皆世界各地の植物分布に就きて研究せしものなり、而して各地特殊植物の分布に就きて、至大の影響を及ぼす原因は、氣候の差異なり、特に其の要素たる溫度に關係せり。

三、水平及垂直植物分布

溫度の多少によりて、世界の氣候帶は、熱帶、溫帶、寒帶、等の五帶に分れたれば、植物も之れに從つて、熱帶植物、溫帶植物、寒帶植物の差異あり、斯く、南北緯度を異にするに從つて、植物分布に差異あるにより、植物學上、如斯を水平的植物分布と稱す、而して又空氣の溫度は地面に接せる、最下方は最も溫暖にして、次第に空際に上るに從つて、寒冷なるは恰も平地にありて、熱帶より兩極に近づくに從つて、溫度の低減すると異ることなし、緯度一度に於ける、公定溫度の差は、平均一度なり、而して高さに於ては、百米突を上る每に、溫度は平均〇・六度だけ低下する割合なり、如斯有樣なるによりて、平地の植物が、低緯度の地より兩極に進むに從つて、差異あるが如く、山地にありては山麓より頂上に登るに從つて、植物の分布に相違あり、故に之れを垂直的植物分布と呼ぶ。

植物の垂直的分布に就きては、今より既に二百餘年前、佛人トルヲフホー氏が小亞細亞なるアララット山に登りて、研究せしところなり。

千八百四十九年に、英人ウイリアム、フッカー氏がヒマラヤ山中六千米突の高峰に登りて、ヒマラ

ヤ日記と稱する、有名なる著書を爲せり。

四、山地植物分布

本洲中部の高山に就きて、垂直的植物分布の有樣を見るに、素より其の山の大小、位置、方面、其の他種々の狀態によりて、多少の差異あるを免かれずと雖も、海拔約千米突迄は、山麓帶と稱し、其の分布せる植物平地の者と大差なしと雖も、千米突乃至二千米突內外の地にありては、植物分布の狀態、山麓帶と全く異なり、鬱蒼たる喬木帶をなせり、二千米突乃至二千五百米突內外の地に至れば次第に植物矮小となり、幾多の灌木密生せるを以て、灌木帶と呼べり、二千五百米突乃至三千米突の地にありては、所謂高山御花畑の發達せるところにして、灌木も其の數を減じ、一面に鮮麗なる花を着けたる、矮性草本の密布せるを見る、之れ高山草本帶なり、三千米突以上の山巔にありては、分布せる植物は唯地衣あるのみ、故に地衣帶の稱あり、乃ち、山地植物の分布は

一、山麓帶　海拔　千米突以下
二、喬木帶　同　千米突乃至二千米突
三、灌木帶　同　二千米突乃至二千五百米突
四、草本帶　同　二千五百米突乃至三千米突
五、地衣帶　同　三千米突以上

此等の高さは、大體に於て略一致し、時に頗る精確なる事あり、故に植物分布の有樣を見て、其の高度を知ると難からず、今其の一例を以て之れを證せんに、信州有明山は、在來の地圖によれば皆八千尺以上の標高を誌せり、然るに登山の結果、山頂と雖も未だ喬木帶の地域を脫せず、由て、拙著「やま」にて有明山は植物分布上より見るときは、到底八千尺の高度を有せざることを記述せり、後日參

◎高山の植物に就きて　志村　二〇

謀本部の實測によりて、實に七千四百尺の高さを有するに過ぎざるとを知れり、而して爰に擧げたる各帶の高度は、日本アルプス地方を標準とせる者にて、漸々北方に進むに從て、低下すること勿論なり、實例に就て之れを云へば、鳥海山にありては吹濤口、鳥ノ海附近にて、既に、草本帶の植物を見る、標高千六百米突に過ぎず、又岩手山にありては、千七百米突にて、草本帶に達し、岩木山に於ては、千二百米突にて同帶を見る、如斯、草本帶の位置北方に進むに從ひて、低下し、北海道千島に至りては、平地海岸に於て既に草本帶の植物を見る、而して其の植物の種類も殆んど同樣なるを見る、本洲中部高山の植物中に

シコタンサウ(色丹草)　シコタンハコベ
チシマアマナ　チシマキヽヤウ
チシマゼキセウ　エゾゼキセウ
リシリシノブ　ウルップサウ
エゾノチヽコグサ　エゾムカシヨモギ

等呼ばるゝ者あり、此等は皆發見地の地方名を、冠せる者なり。

札幌農科大學教授遠藤博士の調査せる、占守島植物目錄によれば、總數三百二十餘種、内幾多の海岸性植物を含みたれども約百種は、皆内地高山に產する者なり、是に由て之れを觀れば、高山の植物は、寒帶の植物と同樣の者なることを知るべし、故に、熱帶及温帶の高山は、寒帶植物の島嶼の如し、と云へるシュレーテル氏の言の眞なるを見るべし。

五、山地植物の由來

何故に、高山に產する植物が寒帶植物と同樣なるか、今其の由來を根源に溯つて探究するに、彼の

地質時代なる、新世代第四紀の始めなる、洪積世（二萬五千年前と稱す）に於て北半球は、非常に寒冷、歐洲北米等の大部分は、氷を以て蔽はれたれば、氷河の時代と呼ばれたり、去れば現今温暖なる地方までも、一般に寒帶植物分布したり、然るに此の寒冷なる時代は漸々去りて、次第に温暖となるや、此等の寒帶植物は、平地にありては漸次北方に退却し、山地にありては、漸々上方に移りて、今や頂上附近なる、寒冷なるところに止まれるなり、之れ今日の如く高山頂に寒帶植物を見る所以なり。

六、高山植物とは何ぞや

以上述べたるところによりて、高山の植物が、如何なる者なるかを理解すべし、然れども猶ほ次に一問あり、即ち。

「高山植物とは何ぞや」

之れなり、高山植物を冠する書籍等も、數多あり、然れども、其の內容を、精査すれば、喬木帶或は山麓帶の植物をも包括せるものあり、然れども喬木帶附近に產するものは、決して、高山植物の特性を具せず、低地の者と殆んど、區別なし、されば特に高山植物と呼ぶべきにあらず、世人動もすれば、トガクシショウマ、シラネアフヒ等の珍種は、野草或は山草の名を以て呼ぶは、何となく物足らざる感あり、仍て徒らに、高山植物の名を冠せる者多し、喬木帶附近の者まで、之れを高山植物と呼ぶときは、高山植物の數は實に莫大の者となるべし。

歐洲アルプスの、高山植物を、記述せる二三の書を見るに、シュレーテル氏の著書には二百十七種を擧げ、皆草本帶の者のみを擧げたり、ホフマン氏の圖譜には二百十三種、ウエベル氏の圖譜は四百種を載す、歐洲アルプスにありても其の數如斯、又某書の高山植物の定義を見れば、

「高山に產する植物の總稱なり」

とあり隨分不完全なる定義と云はざるべからず、前に述べたる如く、本洲中部に於て、一萬尺内外の高山にある者も、千島附近にありては平地に產するを以て、產地の標高のみを以て標準と爲すこと能はず。

右の如くなるを以て、高山植物とは、山地草本帶に特產する植物を呼ぶを以て、適當なりと信ず、日本森林植物帶分布より云ふときは、偃松帶以上の植物を高山植物と云ふべきなり、特に特產と云ふは、假令高山草本帶にありても、ウメバチサウ、アキノキリンサウ、タンポゝの如く平原にある者は、之れを除くを適當と信ずればなり、即ち、

「高山植物とは、偃松帶以上の地に、特產する植物を云ふ」

とすべきなり、故に日本に產する高山植物は顯花植物のみにては二百數十種を有するに過ぎざるべし。

七、日本高山植物の種類

偃松帶以上の地に、產する高山植物中、主要なる者を左に揭げん(隱花植物を除く)

一、菊　科

1、タカネヤハズハゝコ、2エゾノチゝコグサ、3ウサギゞク、4ハゝコヨモギ、5サマニヨモギ 6、ミヤマオトコヨモギ、7タカネヨモギ、8イハインチン、9エゾムカシヨモギ、10ミヤマカウゾリナ、11ミヤマウスユキサウ、12ウスユキサウ、13ミヤマヒゴタイ、14ヤハズタウヒレン、15ヤハズヒゴタイ、16タカネカウリンクワ、17ミヤマタンポゝ　18タカネウスユキサウ、19ミヤマアヅマギク

二、桔梗科

20、ヒメシヤジン　21、ミヤマシヤジン　22、ホソバノミヤマシヤジン　23、チシマキヽヤウ　24、イハキキヤウ

三、敗醤科

25、マルバノキンレイクワ　26、タカネヲミナヘシ　27、ハクサンオミナヘシ

四、忍冬科

28、リンネサウ　29、クロバナヘウタンボク

五、茜草科

30、キバナノカハラマツバ

六、車前科

31、ハクサンオホバコ

七、狸藻科

32、カウシンサウ　33、ムシトリスミレ

八、玄参科

34、ウルツブサウ　35、ユキワリシホガマ　36、ミヤマシホガマ　37、ヨツバシホガマ　38、エゾヨツバシホガマ　39、セリバシホガマ　40、ヒメクワガタ　41、ミヤマトラノヲ　42、ミヤマクワガタ

九、唇形科

43、タテヤマウツボグサ　44、イブキジヤカウサウ

十、紫草科

45、イハムラサキ　46、ミヤマムラサキ

十一、龍膽科

47、イハイテフ 48、タウヤクリンダウ 49、ヲノヘリンダウ 50、チシマリンダウ 51、オヤマリンダウ 52、ミヤマリンダウ 53、コマガタケアケボノサウ 54、シマイケアケボノサウ 55、チシマセンブリ

十二、櫻草科

56、ナンキンコザクラ 57、チシマコザクラ 58、エゾコザクラ 59、ミチノクコザクラ 60、エンドウザクラ 61、ユキワリサウ 62、ユキワリコザクラ 63、ヒメコザクラ 64、オホサクラサウ 65、ヒナザクラ 66、コイハザクラ 67、ツマトリサウ

十三、岩梅科

68、イハウメ 69、イハカヾミ 70、コイハカヾミ 71、ヒメイハカヾミ

十四、石南科

72、ウラシマツヽジ 73、イハヒゲ 74、ヂムカデ 75、イハナン 76、アカモノ 77、シラタマノキ 78、イソツヽジ 79、イハナンテン 80、ミネズワウ 81、アヲノツガザクラ 82、ツガザクラ 83、コイバツガザクラ 84、キバナノシヤクナゲ 85、エゾツヽジ 86、アクシバ 87、イハツヽジ 88、コケモヽ

十五、山茱萸科

89、ゴゼンタチバナ

十六、繖形科

90、エゾニラ 91、イブキゼリ 92、ハクサンサイコ 93、ミヤマセントウサウ 94、シラネニンジン 95、ヤマウヰキヤウ 96、イハテトウキ 97、ハクサンボウフウ 98、イブキバウフウ

十七、柳葉菜科

99、ミヤマタニタデ 100、ミヤマアカバナ 101、イハアカバナ 102、チシマアカバナ 103、コアカバナ

104、エゾアカバナ 105、リシリアカバナ 106、シロウマアカバナ

十八、菫々菜科

107、キバナノコマノツメ 108、ウスバスミレ 109、タカネキスミレ 110、オホバキスミレ

十九、金絲桃科

111、ヤマオトギリ 112、ミヤマオトギリ 113、タカネオトギリ 114、フジオトギリ

二十、岩高蘭科

115、ガンカウラン

廿一、牻牛兒科

116、シロウマフウロ（アカヌマフウロ） 117、チシマフウロ 118、グンナイフウロ 119、ハクサンフウロ

廿二、荳科

120、ムラサキモメンヅル 121、タイツリワウギ（バウクワウワウギ） 122、リシリワウギ 123、シロウマワウギ 124、イハワウギ 125、タカネワウギ 126、オヤマノエンドウ

廿三、薔薇科

127、ハゴロモグサ 128、ミヤマヤマブキショウマ 129、チシマヤマブキショウマ 130、エゾヤマブキショウマ 131、チヨウノスケサウ 132、ノウゴイチゴ 133、チングルマ 134、イハキンバイ 135、チシマキンバイ 136、キンロバイ 137、ウラジロキンバイ 138、タカネバラ 139、コガネイチゴ 140、ベニバナイチゴ 141、エゾトウチサウ 142、チシマワレモカウ 143、カライトサウ 144、ナンブトウチサウ 145、シロバナトウチサウ 146、タテヤマンバイ 147、オホミヤマナ、カマド 148、タカネナ、カマド

廿四、虎耳草科

149、アラシグサ 150、ヒメウメバチサウ 151、シコタンサウ 152、ヒメクモマグサ 153、ムカゴユキノシタ

154、フキユキノシタ　155、クモマグサ　156、ミヤママンネングサ　157、イハベンケイ

廿五、十字科　158、イハハタザホ　159、ハクサンハタザホ　160、ミヤマハタザホ　161、ヤマハタザホ　162、フジハタザホ　163、ミヤマタネツケバナ　164、ナンブナヅナ　165、クモマナヅナ　166、タカネナヅナ　167、モイハナヅナ　168、ハクセンナヅナ　169、シロウマナヅナ　170、ミヤマナヅナ　181、ミヤマガラシ

廿六、罌粟科　182、コマクサ　183、チシマヒナゲシ

廿七、毛茛科　184、ヤマトリカブト　185、チシマトリカブト　186、カタオカサウ　187、ハクサンイチゲ　188、ツクモグサ　189、ミヤマオダマキ　190、ミヤマハンショウヅル　191、ミツバワウレン　192、ミヤマキンバウゲ　193、チシマキンバウゲ　194、ミヤマカラマツ　195、モミヂカラマツ　196、シナノキンバイサウ

廿八、石竹科　197、タカネツメクサ　198、ミヤマツメクサ　199、ホソバツメクサ　200、テウカイフスマ　201、カトウハコベ　202、タカネミミナグサ　203、オホバナノミミナグサ　204、ミヤマミミナグサ　205、ヲノエナデシコ　206、イハツメクサ　207、シコタンハコベ　208、シラオヒハコベ

廿九、蓼科　209、ナンブトラノヲ　210、ムガゴトラノヲ　211、ウラジロタデ　212、ジンエフスイバ

三十、樺木科　213、ミヤマハンノキ　214、シラカンバ

卅一、楊柳科

215、チシマヤナギ 216、ミヤマヤナギ 217、イハヤナギ

卅二、蘭科

218、キバナノアツモリサウ 219、アリドウシラン 220、ハクサンチドリ 221、ヲノヘラン 222、ニヨホウチドリ 223、テガタチドリ 224、シロウマチドリ

卅三、百合科

225、クロユリ 226、キバナノアマナ 227、クルマユリ 228、チシマアマナ 229、リシリサウ 230、チヤボゼキセウ 231、ヒメイハシヨウブ 232 コバイケイサウ

卅四、燈心草科

233、ミヤマ井 234、エゾホソ井 235、ミクリセキセウ 236、ミヤマスヽメノヒエ 237、ミヤマクロボン 238、ミヤマヌカボシサウ

卅五、莎草科

239、ハクサンスゲ 240、コタヌキラン 241、ミヤマクロスゲ 242、イトキンスゲ 243、ミヤマシラスゲ 244、タカネスゲ 245、タカネクロスゲ 246、ミネハリ井 247、シロウマスゲ 248、ミヤマスゲ

卅六、禾本科

249、タカネヌカボ 250、ミヤマヌカボ 251、ヤマアハ 252、ミヤマノガリヤス 253、ミヤマイチゴツナギ 254、リシリカニツリ 255、ミヤマアハガヘリ 256、タカネカウボウ

卅七、松柏科

257、ハヒマツ 258、ハヒビヤクシン

八、高山植物の培養

歐洲諸國にありては、高山植場の培養は、頗る進歩せるものあり、種苗の發賣せらるゝあり、規模宏大なる高山園あり、培養に關する、幾多の參考書等ありて、培養の方法も頗る巧妙を極む、之れに反して、我國にありては、高山植物の培養を試みしは、全く近來の事に屬す、勿論彼の本草家が、高山に產する藥草類を培養せし等の事は、多少之れ有りしなるべしと雖も、園藝的の目的を以て、其の培養を試みしは、明治二十八九年頃を以て始まれりと云ふべし、其の初めは近時流行を來せし、西洋草花の趣味の俗にして、日本的風韻に乏しきより、可憐なる野草を栽培せしに初まり、漸次深山幽谿を探ぐるに至り、高山草本草の草花の優雅高尙なるを歎稱し、之れを下界に採來して、培養せしなり、先鞭を着けしは法學士城數馬氏同木下友三郎氏日光の五百城文哉氏等なり、次で加藤松平兩子爵等なり、此等の人々は、各地の高山に登攀して、珍種異草を集めたり、培養法も次第に巧妙を極め、明治三十五年五月城氏及五百城氏會主となり、木下氏等の贊助の下に五日六日の兩日團子坂薫風園に、山草會を開き、衆庶の縱覽に供せり、鉢數約百四十、種類百二十餘種、就中九十餘種は花を着けたり、觀覽者は素より多數ならざりしも、同好者に多大の影響を及ぼせし者の如く、各種の新聞紙等も、幾多の寫生圖を加へて發表するに至れり、此會は爾來年々開會するに至れり、明治三十六年より七年に亘りて、前田曙山氏は得意の筆を揮て、園藝文庫十二卷を著はし、野草趣味を鼓吹せり、氏は又丸岡九華氏等と野草會を組織し、三十七年七月十二日丸岡氏方に其の第一會を催され、二百種以上を陳列せしよし、但し同好者のみの會合にて、一般に縱覽せしめしにあらず、第二回は同年十月五日に開會せり、同會の掟書に「花は野草に限れるにあらねど、幽趣あるを主とす、人は貴賤を選むにあらねど、鄙俗

ならぬを賓とす」と云ふ一條ありされば出陳せる種類は、皆山野草のみにあらざるべし、卅七年十月雜誌園藝界は前田氏の主幹にて、春陽堂書肆より顯はれたり、之れ殆んど山野草栽培家の機關雜誌とも云ふべきものなり、當時の日本園藝雜誌の如きも、其の記事の大部分は山草野草等の培養採集談を以て、埋められし有樣なりき、特に高山植物の記事の如きは、到處に歡迎せられ、高山植物の培養家も、都鄙各地に生じ、盆栽家と稱する者は、必ず二三の高山植物を持たざれば、恥とするが如き有樣なりき。

されば、利に敏き商人は、原產地より輸入して、販賣するに至れり、然れども多くは山地より、花蕾ある者を採集し來り、開花せしめし者なれば、日ならずして凋萎し、活着する者少なし、斯くて世人をして、一層高山植物培養の至難を感せしめぬ、近來に至りては自ら產地に至りて、採集する事を得る人々の外は、其の培養の困難なるより、一般に倦色あり、然れども、高山植物の培養は、全く絕望すべき者なりや、否や項を改めて、詳說せんとす。

九、高山植物の園藝的價値

高山植物は、一般に其の花色、形容、鮮麗優雅なる者多く、彼の西洋草花の如く爛美塗るが如く、艶麗燃ゆるが如き者なく、高雅なる日本人の風尙に適し、最も日本的風韻に富めり、高山植物と日本趣味の一致は、吾人の常に唱導するところ、都鄙高山植物栽培の流行を來たせるは、其の源全くこゝに存す、而して、將來に於ても、全然世人より遺棄せらるゝが如きことなかるべし、高山崇靈の地に產する植物は、寒暑の激變により、多年風雨霜雪に苦められ、僅かに數寸の高きにして、既に幾十年の星霜を經、枝は曲げずして、自ら雅、幹は、助けずして、自然に幽趣あり、而して、全體の形容亦自然の風致に富めるは、到底人工の及ばざるところなり、之れを彼の日本的盆栽の人爲を以て、其の自

然を抑壓し、強ひて天眞の風趣を作りし者とは、素より同日の談にあらず、高山植物の園藝的價値は、全くこゝに存す。

同じくこれ、高山植物と稱する者にても、園藝品として見るときは、花の愛すべきものあり、葉の見るべきものあり、花と葉と共に稱すべきものあり、今心に浮べるまゝ其の例を擧げん。

甲、花の愛すべきもの

一、タカネウスユキサウ　二、キングルマ　三、イハインチン　四、ミヤマアヅマギク　五、イハキヽヤウ　六、チシマキヽヤウ　七、リンネサウ　八、キバナノカハラマツバ　九、ムシトリスミレ　十、ミヤマシホガマ　十一、ユキワリシホガマ　十二、ミヤマクワガタ　十三、ヲノヘリンドウ　十四、ミヤマリンドウ　十五、オホサクラサウ　十六、ナンキンコザクラ　十七、ミチノクコザクラ　十八、ヒナザクラ　十九、コイハカヾミ　廿、ツガザクラ　廿一、アヲノツガザクラ　廿二、キバナノシヤクナゲ　廿三、ヒメアカバナ　廿四、イハアカバナ　廿五、タウヤクリンドウ　廿六、タカネスミレ　廿七、キバナノコマノツメ　廿八、オホバキスミレ　廿九、シロウマフウロ　三十、オヤマノエンドウ　卅一、ミヤマダイコンサウ　卅二、イハキンバイ　卅三、タカネイバラ　卅四、ヒメウメバチサウ　卅五、ミヤマハタザホ　卅六、フジハタザホ　卅七、ミヤマナヅナ　卅八、コマクサ　卅九、ヒメオダマキ　四十、ミヤマハンセウヅル　四十一、シナノキンバイ　四十二、ハクサンイチゲ　四十三、ツクモグサ　四十四、ムカゴトラノオ　四十五、チドリサウ　四十六、ニヨハウチドリ　四十七、ハクサンチドリ　四十八、チシマアマナ　四十九、クロユリ　五十、コバイケイサウ　五十一、タカネナデシコ　五十二、イハブクロ　五十三、ミツバワウレン　五十四、ウルツブサウ

乙、葉の見るべきもの

一、ウスユキサウ　二、ヤハズヒゴタヘ　三、ミネズワウ　四、コメツヽジ　五、ヂムカデ　六、イハヒゲ　七、ミヤマウ井キヤウ　八、ガンカウラン　九、ハゴロモグサ　十、ミヤママンネングサ　十一、イハベンケイ

十二、ヒメカラマツ　十三、ウラジロタデ、十四、ジンエフスイバ　十五、チシマヤナギ　十六、ヒメイハセウブ十七、チシマゼキセウ　十八、チヤボゼキセウ　十九、ハヒマツ　二十、タカネヒカゲノカツラ　廿四、ヒメハナワラビ　廿二、ウラジロキンバイ　廿三、シコタンサウ　廿四、チヨウカイフスマ　廿五、ミヤマウラボシ　廿六、ヒモカツラ　廿七、イハイテフ

丙、花と葉と共に見るべきもの

一、ミヤマウスユキサウ　二、タカネスミレ　三、ミヤマムラサキ　四、イハウメ　五、イハワウギ　六、チングルマ　七、チヤウノスケサウ　八、クモマグサ　九、シコタンハコベ　十、イハツメクサ　十一、コバノツメクサ　十二、ミヤマツメクサ　十三、ミヤマミヽナグサ　十四、タカネミヽナグサ　十五、ユキワリザクラ　十六、ユキワリコザクラ　十七、シナノオトギリ　十八、イハオトギリ　十九、コメバツガザクラ　二十、ミヤマアケボノサウ　廿一、エゾノチヽコグサ

以上は唯僅かに、一斑を示せしに過ぎず、又必ずしも、甲に擧げたる者も、葉の見るべき者なきにあらず、乙に擧げたる者の中にも、花の稱すべきもの亦多し、要は其の著しきを擧げたるのみ、爰に又園藝品として其の培養の難易をも考へざるべからず、如何に園藝的價値を有するも、活着せざるもの、開花せざる者等は、如何ともすべからず、然れどもこは吾人の培養法の拙劣か、經驗の足らざるによる事にて、全く活着開花せざる者ありや否は、疑問とすべき處、ロビンソン氏等の著書によるも、如何にしても活着せざる者ある由、見えたれば、多數の高山植物中には、容易に下界の氣候風土に馴致すること能はざるものあるが如し。

又現時に於ける、高山植物培養法は、用土其他人々によりて、方法を異にし、甲者の成功せる者も、乙者之れを學びて、必ずしも良果を得ず、乙者至難とするところの者も、丙者は容易なる者とするものなり、從つての其の方法の確實なる者少なし、故に高山植物の培養法は吾邦にありては未だ研究中

の問題たり。

十、高山植物の馴致

高山植物の培養の困難なるに、失望せる者多し、然れども絶對的に至難なりとは云ひ難し。

世人が、花戸等より採集不完全なる者、或は温室にて不自然に開花せしめし者等を、高價に購入し、其の培養に種々手を盡すも、遂に枯死の厄運に遭遇するを以て、早計にも高山植物の到底下界の氣候風土に馴致し難しと速斷するに至るは、無理ならぬ事なれども、採集不完全移植時を失し、不自然に開花せし者が、固着せざるは、啻に高山植物のみにあらざるなり。

花戸は、利を以て目的とするもの、其の山地より採集し來るや、直に開花すべき花蕾あるものを求め、採集の勞を多くせんが爲めに出來得る限り根部を切除し、殆んど活力なき者を鉢に移し、巧に土を押へ、苔を着け、恰も永年栽培せしが如き體裁を裝ひ、觀客を待つ、如斯ものは恰も、花蕾ある切り花と異ることなし、世人が、切花の早晩凋萎するを疑はずして、獨り此鉢挿の切花の凋萎を異とするは何ぞや。

又始めて、高山植物の培養に志す人の中には、往々高山植物培養の困難なるを聞き、各種の培養を爲すは容易ならざるを以て、自分は專門的に先づ蘭科、菫類の如き美花を着くる少數の種類を栽培せんと試むる者あり、而して意の如くならざるや、僅數の種類にして如斯、然るを況んや、其の全體をやと絶望する人あり、何ぞ知らん此等の種類は、高山植物中培養至難の者なり、經驗に富める人々も、至難とするところの者を、無經驗にて培養す、意の如くならざるは素より當然の事なり、高山植物の培養は却てあらゆる種類を集め、之れを培養する間に、云ふべからざる經驗を得、又多數中より活着せざる者を淘汰するの外途なし。

歐洲アルプスに產する、シクラメン、アルメリヤ等が、一般普通の園藝品となれるは、幾多の忍耐と、幾多の苦心とを要せしなるべし、本邦に產する高山植物も、相當の苦心と忍耐とを以てせば、其の或種の者は低地の氣候と風土とに馴致せしむる事を得べし。

從來培養し來れる、高山植物中、培養左程困難ならず、早晩下界の者と爲すことを得べしと信ずる、二三の種類に就きて其の狀況を記さん。

一、ウラジロキンバイ

白色の軟毛を密布せる、其の葉は確に高山植物の特性を發揮せる者、花は美なりと雖も、花期短かく花梗長きに過ぐるを缺點とす、余の有する親株は、八ヶ岳にて採集せしもの、既に八年培養せる老株なり實生によりて、年々三四十株の新株を得、本種の如きは十分下界の氣候に馴致し得たりと信ず、本種は最卑濕を忌む夏日も烈光の下に置き、常に排水に注意せば枯死すると少なし、播種後三年にして開花す。

二、シコタンサウ

本種の培養も、多濕と日蔭とを最も嫌忌す、排水に注意し、烈光の下に置くべし、戸隱產のヒメクモマグサは活着一層容易なり、然れども花は產地にありし時の如く多數開花せず、肥料は稀薄の者を屢々與ふべし。

三、タカネナデシコ

形容短少、花形大にして、頗る見るべきものあり、挿木と實生とによりてよく繁殖す、挿木或は實生によれるものは、山地より採集せし者に比すれば强健なり、只花の色彩は、現產地の者に比して劣れるは如何ともしがたし。

四、ミヤマクワガタ

本種も、挿木實生共に成効す、播種するときは、よく發芽す、發芽力の強盛なる他に比なし、能く開花すれども動もすれば、莖葉の別なく菌類の寄生を受け易し、種子によりて更新し、老株を長く培養せざるを可とす。

五、ハクサンフウロ（シロウマフウロ）

六、グンナイフウロ

兩種とも、よく種子を生じ發芽力も相當に強けれども、生長遲々として、容易に開花せず、何れも自生品を採集すべし、活着せざることなし、排水に注意し肥料を施すべし、秋季紅葉し其の美花時に勝る。

七、ジンエフスイバ

蓼料の小品珍奇と云ふの外、見所なけれど、秋季の紅葉は鮮紅色を呈す、繁殖は播種による、乾燥を忌むを忘るべからず。

八、クモマキンバウゲ

九、タカネキンバウゲ

クモマキンバウゲは、栽培比較的容易なる樣思はるれども、タカネキンバウゲは余の經驗によれば困難を感ず、クモマキンバウゲは實生を作り易し、何れも排水を可良にし、しかも乾燥せしむ可らず。

十、タウチサウ

十一、カライトサウ

タウチサウに二三の種類あり、何れも强健なれども花は面白からず、カライトサウは花頗る美なり、然れども開花することなく、徒に莖葉のみ、冗長となれり、開花せしむるには多少の工夫を要す。

十二、ノウゴウイチゴ

其の花は左程美ならざれども、其の果實の美味は忘るべからず、栽培最も容易、匐枝によりて盛に繁殖す、强健なれども開花すること尠し。

十三、ハクサンオミナヘシ

十四、マルバノキンレイクワ

兩者ともよく活着し、開花す花は原産地の者の如く密ならず、排水良好なる土壤を選び、半蔭地に置くべし、全く蔭地と烈光とを避くべし。

十五、シコタンハコベ

十六、ミヤマミヽナグサ

十七、オホバノミヽナグサ

十八、タカネミヽナグサ

何れも石竹科に屬する小草、活着開花容易なり、實生、挿木何れもよく成効す、秋末莖葉枯死するも、接芽或は頂芽のみにて繁殖す、接芽は秋末肥大となりて、枯死すること少なし、何れもよく開花す、石竹科にてもツメクサ類の栽培は至難なる者の如し。

十九、コマクサ

罌粟科の小品、細裂せる葉に白粉を被り、花はケマンサウに似て淡紅紫色、頗る美なり、活着容易なれども、小形の鉢にては開花せしめがたし、ロックガーテンの頂上乾燥するところに、多量の砂を混じたる用土にて栽植すべし。

二十、キバナノコマノツメ

黄花の堇々菜活着困難ならず、然れども梅雨中より夏季に際し、菌類の寄生の爲め、枯死すること多し、多雨の際は降雨に遇はしめざるを良しとす、播種して繁殖せしむることを得べし。

廿一、タカネスミレ

前種に酷似すれども、葉莖共に多肉質にして、花濃黄なり、純砂に赤土を混じ、烈光の下に置くべし、前種は半日蔭をよしとす。

廿二、イハヒゲ

何れかと云はゞ、活着困難なる者と云ふべし、産地にありては、多數の花を着けたる者あれども、培養品は少數の花を着くるのみ、而して夏季に於て突然枯死することあり、原産地にありても、頗る大株にて全く花を着けざる者多ければ、自生地の如く其の性質に好適せるところにありても、必ずしも年々花を着くることなきが如し、突然枯死することあるは、本種のみならず、ツガザクラ、カンカウラン等によく見るところなり、余案ずるに、如斯種類は、何れも其の根纖細にして、原産地の土を、多量に附着せり、而して其の土壤は、下界にある多數のバクテリヤに對し免疫性ならざるが故に、細菌の繁殖に遇ひ、枯死の厄運に遭遇するものならんと想像せらる。

廿三、コケモヽ

淺間山等にては、甘露梅と稱するもの、矮少、石南科の一種灌木帶以上に普通なり、密生せる者を切り抜き來り大形なる平鉢に植ゆべし、活着容易又開花結實し、美事なる盆栽を得べし。

廿四、タウヤクリンダウ

古來健胃劑として、藥用に用ひられしもの、到處高山に普通なり、活着開花すれども、菌類の寄生の爲めに斃るゝこと多し。

廿五、ムカゴユキノシタ

珍奇なる種類其の産稀少なり、活着容易よく開花し、葉掖に多數紅紫色の珠芽を生じ、之れによりて繁殖す、原産地にありては、濕氣多きところに産す、乾燥を忌むべし。

廿六、クロユリ

本種が御花畑に開花せる樣を見るときは、何人も之れを盆養せんことを思はざるものなかるべし、然れども採集の翌年開花すること殆んどなく、次第に矮少となるのみ。

廿七、リンネサウ

忍冬科に屬し、纖細なる蔓狀の莖を以て、ハヒマツの下に繁殖せり、故に盆養に際しても、半日蔭をよしとす、用土及置場にして、適當なるときは、意外に强健なり。

廿八、ハゴロモグサ

薔薇科に屬する者、花は殆んど見るに足らざれど、其の產稀少なり、本邦にありては、珍とすべきも、歐洲アルプス及北部平原には普通に其產あり、種子にて繁殖も、葉形稍見るべし、ノコギリサウの別名ハゴロモサウと混同すべからず。

廿九、チシマキヽヤウ

三十、イハキヽヤウ

兩種共開花至難と稱せらるゝもの、然れども秋季之れを採集するときは、翌年大概開花すべきも、三年目以後は開花すること尠なし、乾燥せしむべからず。

卅一、オヤマノエンドウ

荳科に屬し、其の花紫色にして頗る美なり、播種すれば發芽すれども、發育せず栽培至難の種なり、單に活着せしむる事だに容易ならざるを以て、開花等は勿論せしむる事能はざるなり。

卅二、イハワウギ

卅三、シロウマワウギ

兩種とも、亦荳科植物なれども、活着開花す、結實せし事なし、秋夏の交、一日落葉して秋季に至

り、翌年發着すべき芽の秋季發芽するを以て、翌年は大抵枯死する事多し、如斯は高山植物に多く見るところ頗る苦心を要す。

卅四、フジハタザホ

可憐なる、十字科植物、頗る强健種子にて、よく發芽し次年花を着く、春季融雪後直に開花す、花は純白高潔なり。

卅五、ミヤマオダマキ

産地にありては、莖短矮花形大にして頗る見るべしと雖も、余が實生にて培養せし者は、高さ一尺四五寸、然れども花は自生地の者よりも、一層深碧紫色種子發芽力乏しからず。

卅六、ムカゴトラノヲ

蓼科の植物、イブキトラノヲに比すれば花穗小なるを以て見どころ少なし、花穗の下方に、多數の珠芽を生じ繁殖す、下界にて栽培するときは、花を着けずして花穗全部珠芽に變ずること多し。

卅七、クルマユリ

高山草本帶に多しと雖も、各地高原に其の産あり、其の花鮮麗頗る美なり、採集の時季を誤らざれば活着せざる事なし、採集の次年開花せざる事多し。

卅八、チシマゼキセウ

余は各地の高山にて採集せしも、何れもよく活着す、然れども未だ開花せし事なきを以て、多少の研究を要す。

十一、雪と高山植物との關係

日本アルプス地方に、登山する人々は、必ずや山稜の各側に於て植物分布の狀態に著しき差異ある

を發見すべし、即ち信州方面にありては、寒帶地植物の種類に富み越中方面にありては、其の分布頗る單純なる事之れなり、素より概括的の言なれども、何人も必ず首肯せらるゝならん、其の然る所以を想像するに、全く雪と至大の關係ある者の如し。

信州方面に積雪多きは、登山に經驗ある人々は、何人も之れを知れり、而して冬季雪は、安全に冬眠せる植物を保護するが故に、積雪多き信州方面（降雪多き越中方面よりも信州方面の山側に積雪多きには相當の理由あり）は植物の種類に富むなり、斯く言ふときは、讀者必ず云はん前陳せる如く高山植物は、寒帶地植物なるが故に、何ぞ冬季の保護を要せんやと、之れ全々空論にして事實は、反對なり、如上の理由より、高山植物培養が、冬季高山植物を露地に放棄し置くときは、冬季中に殆んど、枯死せざる者稀なり、之れ高山植物は寒氣に堪ふる力强きも、其の激變ある温度に對しては、必ずしも然らざるなり、特に其の冬芽は僅の暖氣にてよく發芽す、故に冬季は出來得る限り、温度の激變を避けざるべからず、然らざれば數日の暖氣によつて發芽し、直に又温度の激變に遇ふときは生活作用を妨碍せらるゝ事多し。

植物の生活は、濕氣と至大の關係を有す、實際植物採集の際乾地は植物の群落單純にして、多濕の處程其の種類に富めるを見るべし、而して積雪多き處は、多濕なるが故に此點より見るも、積雪多き地方に高山植物の種類多きも怪しむに足らず、夏季登山の際殘雪多き地方には、常に美事なる御花畑の出現を見る、而して、殘雪附近にありては、雪より數間を隔てたるところにありては、新に結實せるに二三間の處は盛に開花し二三尺を隔てたるところは、花蕾猶ほ固く雪の融解するに從つて、發芽するを見るべし、此の現象は初めて高山に登りし人々は、頗る奇となすところなり、又殘雪の多少年によりて、一樣ならず、融解の量も夏季の天候によりて異同あり、故に積雪の下にある植物は雪漸く解けて僅に發芽するや否や、直に新雪を以て被はるゝ事あるべし、又或者は年々發芽すること能はずし

て、積雪少量なるか融雪多量なる年のみ發芽する事を得るのみなり。

十二、栽培至難なる高山植物

歐洲に於て、多年高山植物の培養に經驗ある人々の叢書を見るも、高山植物中の或種は下界に於て活着せざる事を記せり、本邦產高山植物中培養至難なる者は中々多し、即ち

1、イハウメ2、ユキワリシホガマ3、クモマグサ4、チョウノスケサウ5、ツクモグサ6、ハクサンイチゲ7、蘭の各種8、オヤマノエンドウ9、櫻草類（オホサクラサウを除く）10、ミヤマナヅナ

以上の各種及之れに類似の植物は、活着開花共に困難なり、勿論秋季其の根部を採集し、來るときは翌年は必ず開花せしむると容易なりと雖も、三年目までには多く枯死すべし、幸に枯死せざるも、早晩枯死の運命を免かるゝ能はざるなり。

十三、高山植物培養上考慮すべき件

高山植物培養上、吾人の經驗は、栽培容易なる種類は如何なる者なるか、培養至難なる種類は如何なる種類なるかを知ることを得たり、故に、今日以後は現在至難なりと目せらるゝ種類は如何にせば、之れを下界の氣候に馴致するを得るかを研究するにあり、栽培容易なる種類にありては、用土其の他の注意に關しては、他の盆栽と大差なき取扱ひにて少しも差支なく、用土或は給水法につきて特殊の方法を講ずるに及ばず。

爰に最も吾人の考慮を要する事實は、高山植物が外界適應性によりて、其の形態を變ずる事之れなり。

彼の有名なるガストンボンニー氏が、平地に生育する植物二百三種を選み、之れを高さ三千メートルの山地に移植せるに、其の中八十種は枯死したれども、殘餘の植物は、皆其の狀態を變じ、高山植物の特別なる姿勢となれり、即ち其の根は深く地中に入りて、强烈なる、高山頂の疾風に堪へ、莖は著しく短縮し葉も短少となれり、概して地下部特殊の發達をなし、地上部短矮となれりと云ふ、之れ植物の外界應化作用に由るものなり。

高山植物の高山にあることは、幾百千年の久しきに及べるなるべし、故に幾百千年の久しき間、外界の狀態に應化し、現在の如き一種の特性を生せし者なり、故に葉肉厚くクチクラ層の頗る發達せる葉を有せる石南科の各種の如きも、下界に來りては其の葉大形柔軟となり、特に節間伸長するを以て、盆栽として遠く自生地の者に及ばざるに至る、例へばコケモヽの如き最好適例なり。

乾燥に堪へんが爲め、其の葉短縮小形鱗片狀となれるイハヒゲ、デムカデ等の如きも、下界にて培養する間に、節間伸長冗長となりて、風韻に乏しきに至る、ユキワリサウ(櫻草科)ユキワリゴザクラの葉裏の粉狀體、コマクサの葉の粉狀體の如きも自生地の者に比すれば著しく、小量となるは普通吾人の熟知せるところなり。

高山爛砂の間にありて、頗る多肉の葉を有する、ウルップサウの如きは吸水盛んにして、蒸發作用之れに伴はざるによるか梅雨の節の如きは、葉面龜裂するに至れる事往々之れあり。

其の他ウラジロキンバイの如きも、葉裏に於ける、純白の毛茸漸く薄く、葉身濶大となり、葉柄も伸長して動もすれば、自生地の者の如き、風韻を缺くに至る、之れ等は皆下界に於ける四圍の狀態高山頂と著しく異なるにより、下界の風土に適應する必要より、如斯なる者なるが故に、高山植物培養者は啻に高山植物をして下界に馴致せるを以て滿足すること能はず、必ずや其の形態をして自生地の者と同一ならしめざるべからず、然れども如斯は可能なる事實なりや否や、大に考慮を費さゞるべから

す、或る種類にありては、決して難事にあらざる事實あり、又尙ほ花の變化之れなり、自生地に於て鮮麗なる花も培養者にありては、其の色稍褪色せるが如き者多し、如何にして之をを防ぐべきか此等も大に研究すべき問題たり。(完)

山岳寫眞(三)

高野鷹藏

レンズ

レンズの事は難解の事多し、本編は僅に其極小部分を述べしものにて、邦語の參考書としては、藤井光藏氏藤井龍藏氏著「寫眞鏡玉」最も良書なり。

本編を印刷する迄には出來る丈けの參考書に目を通しつゝあり、一々出所等を載せざるは、學者の論文に非ざればなり、而して出鱈目は書ぬつもりなり、然れども淺學卑才思はぬ、ウソを書ぬとも限らず、幸に讀者の叱正を得ば幸甚。

日本字に譯して鏡玉、透鏡などの文字を用ゐたり、然れども「レンズ」にて可なり、レンズの名一般に通せり、寫眞とは、或種のレンズの結ぶ畫像を、特種の感光性物質に投影して、或る化學的變化を起して、物の形狀を寫すものにして、即ちレンズは寫眞術の首腦にして、レンズの精粗は、直に成畫に關係すと云ふべし、去れば成るべく其用途に適したるレンズを使用したきものなり。

レンズの形式種類は、非常に多數なり、其組成に由り其用途に由り分類し種々なる名稱を付せり、或者は複雜に、或種は簡單に、使用の透光物質と球面の形狀に由り千差萬別、日に月に新なるもの續出しつゝあり。價格も亦或種のものは非常に高價なるに、類似のものにて安價なるものあり、必ずし

も高價なるもの最良なりと云ふべからず、各其用途に應じて、使用すべきなり、初めてレンズを購求せらるゝ士は、先輩に問ひ、又自から研究して、其用途に適したるものを求むべきなり、徒らに、外觀の佳美にのみ憧憬して、多額の金を拂ふを要せざるなり。

レンズの分類名稱は、普通の寫眞書を閲讀すれば知悉するを得べし、山岳用レンズとしては、普通一般景色用として用ゐらるゝものにて可なり、レンズの分類上の名稱としては所謂萬能鏡玉と稱せらるゝものなり、多くの場合に於て、山岳寫眞は、焦點の鮮明なるを要すれば、レンズも亦良好なるものを良しとす、即ち費用の許す範圍内に於ては、高等なるアナスチグマチックのレンズを望むべきなり、安價なるレンズと雖も使用の方法さへ良くば、決して悲觀すべきものに非ず、然れども天然色寫眞の如く特異のものに對しては、特に色に對して矯正せる高等のレンズならざるべからず。

○(レンズの寫度＝速さ＝明るさ)《畫面に於ける映像の明るさ》レンズの寫度とはレンズの光線を透過する量を云ふ者にて、或レンズの焦點距離を、其レンズの有効口徑(Effective aperture)(有効口徑とは、レンズの表面に一束の平行光線が射入し屈折せられて、絞を通過せりと考へたる時、此絞を通過する一束の光線の直徑を云ふ)にて除したる商を以て其量を示す然れども事實に於て、レンズを構成する物質を考慮せざる可らず、フホーゲル(H. C. Vögel)氏に由れば厚さ四センチメートルのレンズは31、%の光量を消耗する者なりと云ふ、又水晶にて作りしレンズは、他の硝子製のレンズより多量に紫色及び菫外線を通過さするものなれば同じ口徑を有するレンズよりは尙ほ寫度速きレンズなりと云ふべし。

寫度大なるレンズ又は速きレンズとは即ちより多量に光線の投射するレンズにて、(射入光線多ければ、即ち映像明るし)、前述の有効口徑にて其レンズの焦點距離を除したる商を以て寫度を顯す、此れを、關係的口徑(Relative Aperture)言葉を代て寫度、速さ、明るさと稱し得べし、即ち、レンズの寫度は、焦點距離に反比例し、有効口徑に正比例す、一つの光源より光を發散する時は、其光の强さは、

距離の自乘に反比例するものなれば、焦點距離同じレンズなれば、有効口徑の大なるもの程寫度大にして、有効口徑同じなれば、焦點距離短きもの寫度早し、此關係的口徑を以て、レンズの寫度を示せば、如何なる焦點距離のレンズに於ても、直ちに其速さを知るを得べし、然れども實用に於て、ピントガラスに映じたる明るさよりは其レンズの性質に由り多少の差異あるものにて、ゴール(ゴルツ)鏡玉は、比較的目に映じたる明るさより、寫度早き感あり。

○(絞)總てのレンズに於ては、此關係的口徑を示す爲めに、各種の符號を鏡胴に刻し置くものにて、F/9 F.9 F.9 など書けるは此關係的口徑が9なるを示すなり。

普通吾國に用ゐらるゝレンズの關係的口徑を示す樣式次の如し。

(一)ブレモ、コダック等に付着せる、速直鏡玉(Rapid Rectinea)は又比較的安價なるレンズには、關係的口徑が F.4 なるものを單位とし、1にて示し乾板上に於ける光線の量が單位の二分一なるものを2となし又其次の口徑が、再び二分一の光線の量となる如きものを3とし順次二分一づゝ遞減する如くせり、此れ英國の The Royal Photographic Society, の制定せるものにて Uniform Systens 略して U、S 式と稱せらるゝものなり。

關係的口徑	$\frac{F}{4}$	$\frac{F}{5,6}$	$\frac{F}{8}$	$\frac{F}{11}$	$\frac{F}{16}$	$\frac{F}{22}$	$\frac{F}{32}$	$\frac{F}{45}$
U. S. 式	1	2	4	8	16	32	64	128

U·S 式の1に於て標準的露出を得たりとせば2に於ては、關係的口徑が1の $\frac{1}{2}$ なるを以て露出は1の二倍ならざる可らず、即ち4は2の二倍の露出を要す、U·S 式に於ては、其數字は、露出の關係的倍數を示すものと云ふべし、普通U·S 式を採用せる、レンズにては、4を最小とせり即ち F.8 にして、安價なるレンズにして、特に F.4 と刻して恰も關係的口徑が F.4 なるかの如くせるものあ

れど、此れはU·S·式の4にして斯る安價なるレンズに於ては、構造上眞のF4如き速寫度を有する能はざるなり。

(二)ツァイス鏡玉に於ては、各種一定の鏡胴を作り、絞の直徑をミリ、メートルにて示せり、されば、レンズの有効口徑に由り、F數(關係的口徑)を異にするものにして、七類Aの如く、組合レンズに於ては、レンズの蓋の上に所用レンズの焦點距離と絞の直徑とのコンビネーションに由り、其にF數を種々に記入せり、又或ものには、一つの鏡胴に、絞の直徑をミリメートルにて記入し同時にF數を刻したるものあり。

(三)ゴルッ鏡玉に於ては、$\frac{F}{\sqrt{10}}$を單位と次表の如く用ゐたり。

$\frac{F}{3,16}$	$\frac{F}{4,5}$	$\frac{F}{5,5}$	$\frac{F}{6,3}$	$\frac{F}{6,8}$	$\frac{F}{7,7}$	$\frac{F}{3,5}$	$\frac{F}{1,1}$	$\frac{F}{15,5}$	$\frac{F}{21,9}$	$\frac{F}{31}$	$\frac{F}{4,38}$
1	2	3	4	4,6	6	9	12	24	48	96	192

此方式に於ても露出の割合は二倍(關係的口徑は$\frac{1}{2}$)と累進する樣制定せるものなれど、最も有名なる、第三類ダゴールはF6.8にして、中間數を示せり。

安價なる速直鏡玉には、F.8より小なるものなしと云へるは比較的安價なるレンズに於ては、其所用硝子及び其構造がF.8以上の口徑に作りては、各種の錯行(Aberation)甚だしきを以つてF.8に止むるものにて、此れとても、錯行なき能ざるなり、高等なるレンズに於ては、硝子に構造に特殊の方法を用ゐ錯行を少くしてF數を少なからしめたり、然れども、高速度のレンズは、口徑を大ならしむる爲めに或種の錯行を犧牲に供したるものあり、又レンズの弧面甚だしく、レンズ其ものゝ反射、吸收等の量多くレンズの保存上にも又價の點に於ても、寧ろ、比較的遲きレンズを選ぶべきなり。

特種の動體、又は高速度のシャッターを用ゐんとするには勢ひ、寫度の速きものを用ゐざる可らざ

れど、山岳寫眞の如く、被寫體が不動にして、高速度の露出を要せざる場合に於ては、成るべく速度の遲きものを可とす、普通行はるゝ、F6.3 F6.8 F.7 F.8 の高等レンズなれば適當なるものと云ふべし。

○(焦點面と被寫界の深度)同一焦點距離のレンズに於て寫度の遲きものは、速きものに比して、焦點面の深度大なり、此事はレンズを使用する上に於て甚だ重要なる事にして、初學者の忘るべからざる事なり、焦點面の深度(Depth of Focus.)と云ひ被寫界の深度(Depth of Field)と云ひ、何れも同一の事實を二方面より云ひしものにして、前者は或るレンズにて、一定せる物體に焦點を合せる時、實用上差支へなき程度に焦點を結ぶ點は、唯一の平面に非ずして、多少前後に立體的の焦點面を有する事を云ふものにして、後者は、焦點面とレンズの距離を一定不動としたる時に被寫體の前後に移動して、實用上差支へなき程度に焦點を結ぶ場合、其被寫體の移動せる距離を云ふものにして、兩者は、決して混同すべきものに非ず。

此焦點面の深度大なる事は次掲の過焦點距離(Hyperfocal Distance)《藤井氏に從ふ》大なる事を意味するものにて、山岳寫眞の如く、被寫體が、非常の遠距離より最近數間の所に横る如き場合には、此過焦點距離の大なる事は非常に有利なる事なり、即ち寫度遲きものは此過焦點距離大なり。

焦點面の深度を說明せる時に「實用上差支へなき程度に焦點を結ぶ」と說ける實用上差支へなき焦點とは或約束の存するものにて、或焦點の「精映さの單位」を定め此れを標準として論せり、種々なる理論と實驗に由りて、或物體の兩端より發する光線が吾人の目に於て眼に於て三分以上の角度をなさゞる時は、此物は一點として見らるゝものにして、此理由に由り普通の視力の人が、普通小形の寫眞畫を眺むる時は、明視の距離は普通十吋—十二吋—なり、然る時は、此距離に於て、眼に三分以内の角度をなすものは、直徑百分一吋以下たるべき事を要せり、故に普通の場合に於て小形寫眞に就て云へば、焦點の精映の單位は $\frac{1}{100}$ 吋なりと云ふべし、即ち或一點の映像が眞の點に非ずして $\frac{1}{100}$ 吋以下の大きさ

を有する時は、尙ほ點として、眺めらるゝものにして、或物體映像が眞の映像を結ばざるも、尙ほ其眞の映像の $\frac{1}{100}$ 吋以上に擴散せざる時は精密に映像の結ばれたるものと見て差支へなきものなり。

即ち焦點面の深度とは、或物體の映像を $\frac{1}{100}$ 吋（普通の場合に於て、若し引伸し又は他の特殊の場合には $\frac{1}{10}$ 又は $\frac{1}{100}$ m.m 等）以下のぼけ方にて焦點を結ぶ時の焦點面の移動し得る長さを云ふ

第一圖に於て2Eは一つの點の映像にして

$$E=\frac{1}{100}\text{吋}\ (\text{百分一吋を最大限とす})$$

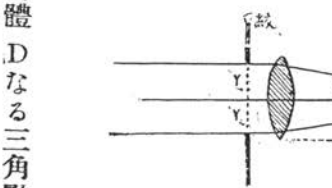
$$2E=\frac{1}{50}=\text{吋}$$

Fを其レンズの焦點距離Xを焦點面の深度の半分Yを絞の直徑の半分とすれば

$$\frac{X}{F}=\frac{E}{Y}\quad \text{故に}\quad X=\frac{EF}{Y}$$

Xは焦點面の深度の半分なれば。

$$2X=\frac{2EF}{Y}$$



第一圖

三角形AとA'とは相似形なればYと*eとは正比例をなす、即ちeを小ならしむるにはYを少ならしめざるべからず言ひ變れば同一のレンズに於て焦點面の深度は絞の直徑（寫度）に正比例す、而して同一焦點距離のレンズに於ては其寫度に正比例す。

○（過焦點距離 Hyperfocal distance）とは普通の場合に於ては、或レンズを無窮大の距離に焦點を合す時は、無窮大の遠方より或距離迄（レンズとの）の間は、焦點を精密に結ぶなるべし、此精密なる焦點を結ぶ最も手近の場所と、レンズとの距離を過焦點距離（藤井氏に從ふ）と稱す。

第二圖に於て、Aにレンズありて遠き物體Dなる三角點に焦點を合せたる時にCなる樹木迄精密なる焦點を結び、それより近き部分は不鮮明なりとせば、此樹木とレンズとの距離を過焦點距離と云ふ即ちCなる樹木は將に其焦點のぼけさが $\frac{1}{100}$ in にして其れより近き物體の焦點は $\frac{1}{100}$ in 以上のぼけ

さを有するものなり。

無窮大の遠方にある物體も云ふと雖も、實用上、或程度以上の距離にある物體は、無窮大として、差支へなきものにて、此實際の遠距離は、種々なる理論あれど、所用レンズの焦點距離の自乘を百倍せる距離と見て可なり、(藤井氏寫眞鏡玉三二九頁)。

精暎界の單位を E $\frac{1}{100}$ in とし F を焦點距離 D を絞の直徑とすれば過焦點距離は

$$H=\frac{FD}{E}\cdots\cdots\cdots\cdots(1)$$

D は絞の直徑なれば F/No (普通の場合に絞の大きさを表す數＝關係的口徑＝絞の直徑にて焦點距離を除したる商)は

$$*F/No=\frac{F}{D}\qquad D=\frac{F}{F/No}$$

$$H=\frac{FD}{E}=\frac{F\frac{F}{F/No}}{E}=\frac{F^2}{F/No\,E}\cdots\cdots\cdots(2)$$

呎にて示せば。

$$=\frac{F^2100}{12\times F/No}\cdots\cdots\cdots(3)$$

第二圖

即8吋の焦點距離にして F.8 のレンズは

$$H=\frac{8\times1}{\frac{1}{100}}=800\text{ in}=66\text{ 呎 }6\text{ となる}\cdots(1)\text{ より}$$

$$H=\frac{8^2\times100}{12\times8}=\frac{64\times100}{96}=66\text{ 呎 }6\cdots(3)\text{ より}$$

又總てを米突法にて計算すれば。

E を $\frac{1}{100}$ c. m. (=0.1 m. m.) F を 15. c. m. F/No を 8 即ち絞の直徑 1.87 c. m. とすれば

$$H=\frac{FD}{E}=\frac{15\times1.87}{\frac{1}{100}}=\frac{15\times1.87\times100}{100}=15\times1.87=2805\text{ c. m.}=28\text{ m.}$$

此の式に由り次の法則を知る。

「一ッのレンズの過焦點距離を知るには焦點距離及び絞の直徑を c.m. にて計りて相乘じ其積を米突にて現す時は、其數は其レンズの過焦點距離を示す」

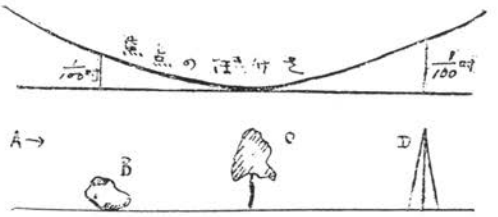
即 H＝F×D（米突法にて）

此式は、ツアイスレンズの如く、總てを米突制にて刻せるレンズには非常に便利なるものにして、焦點距離に絞の直徑（鏡胴に刻せる數字）を乘ずれば、其絞の時の過焦點距離なり。

今焦點を調節せる如く裝置せざる手提暗箱（Fixed focus）に於ては焦點面は必ず所用レンズの無窮大の焦點面に置かるゝものにして、斯くの如き裝置に於て、或所要の距離迄焦點を合さ*んとする時は（即ち $\frac{1}{100}$ in 以下のぼけさ）焦點を合す裝置なければ勢ひ、過焦點距離を成るべく少なからしめて所要の距離迄至らしめざるべからず。

即ち H＝FD に由り $D=\frac{H}{F}$

即ち所要の距離（米突法）を所用レンズの焦點距離（センチ米）にて除したるものは求むる所の絞の直徑なり、手提暗箱を使用する時に最も重要なる事なり。



第三圖

今同一レンズに於て無窮大なる D 三角點に焦點を合すよりは尙ほ手前に焦點を合せ D が丁度 $\frac{1}{100}$ in のぼけさにある樣になせば眞の焦點面は C なる事直に知るを得べし。（第三圖）

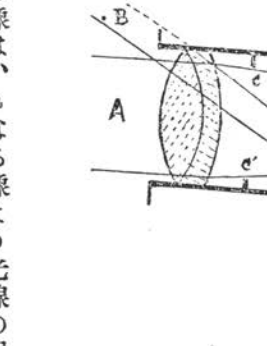
即ち過焦點距離にあるものが眞に精密なる焦點を結ぶ、而して或計算に由り、眞の焦點を結ぶ物體よ

り手前の物體にして$\frac{1}{100}$in のぼけさの限界は、過焦點距離の二分一なる事を知るなり、此れに由りて、「過焦點距離に在る物體に焦點を合す時は無窮大より、過焦點距離の中ばに至る物體に焦點を合す事を得べし」

手提暗箱等に於て、距離の度盛をなせる物は Infinitive は眞の Infinitive に非ずして、此過焦點距離に焦點を合する如くせるものあり、此れ被寫界の深度を增加するの利あればなり。

○(視角 Angle of View と畫像角 Angle fo Image)視角と畫像角とは、其意義確定せず、諸書其說を異にし、茲に云ふ視角と畫像角とを反對にせる如く說くものあり、邦語の書籍に於ても此二語を十分限定せるもの少し、茲には成るべく、穩當なるべき、其意義を述べんとす、總てレンズの結ぶ畫像は、無限に廣きものに非ずして、或一定の限度を有せり、レンズの構造上、其の限度は或圓をなすものにして、其畫像の明るさ(即ち光線の强さは)は、其各部分に由りて異り、中央最も强く、其邊端に至るに從ひて減ず。

第四圖に於て中央に結ぶAなる一束の光線は、何等妨害さるゝ事なくAに其像を結ぶべしと雖もBなる一束の傾なる光線は、鏡胴に遮ぎられてbなる像は、aなる像より光線の明るさ減少せり、此の減少の割合は次の表の如くにして、今CC′なる絞を縮少する時はAなる光線の一束は其太さ漸次Bに近くなるべく、即ちAの畫像の光り。



第四圖

今四つ切（十二吋×十吋）の大きさに於て、板の中央の照暎力を一とすれば、次の焦點距離のレンズに於て其線端に於て、減却する照暎力の割合は次の如し（W. K. Burton）

二四吋焦點距離……3/4
十六吋……1/2
十二吋……1/3

照暎力	レンズの軸線となす角度	照暎力	レンズの軸線となす角度
100	0°	56	30
98	5	45	35
94	10	34	40
87	15	25	45
78	20	17	50
67	25	11	55

此照暎力の不平均なる事は、レンズの構造上より起れる事にして、多少其構成に由りて異れりと雖も、如何なるレンズに於ても免かれぬ事にて、鏡胴の割合に長きものは斜入する光線、絞より以前に鏡胴に由りて遮らるゝ事多く、其の角度は少なり、鏡胴短きものに於ては、此遮らるゝ事は、長きものよりは少く、角度大なるべし、即ち廣角鏡玉は鏡胴の短少なる理由なり。此の照暎し得る面の何れの部分も、其暎像は鮮明なるものに非ずして、其周圍は常に朦朧たるを免れず、即ち鮮明なる部分とは精暎單位（被寫體の一點より發する光線が $\frac{1}{100}$ in 以内に焦點を結ぶ事）を越えざる部分を云ふものにして、近世の良鏡玉に於ては、F/6 に於て其焦點距離の一倍半の直徑を有するものあり、此鮮明に照暎する面を有効單面（Available Field of Image）と（照暎面 Feld of Illumination）云ひ其の包括し得る力を包括力（Converging Power）と云ふ。

即ち包括力大なるレンズとは、有効畫面の大なるものにして、焦點距離に比較して他より大なる有効畫面を有するレンズなりと云ふ事なり。

此包括力を、角度にて表示するは即ち視角 (Angle of View) なり、畫像角 (Angle of Image) とは使用乾板の對角線の兩端と其レンズの第二主焦點となす角を云ふ。

何れのレンズに於ても使用乾板の對角線は、常に其有効畫面の直徑より小ならざるべからず、即ち實際に於て、焦點硝子の中心は使用レンズの軸線にのみ置るゝものに非ずして、被寫體の狀況に由り上下左右に移動さるゝものなり。

斯る場合に使用乾板の對角線が有効畫面の有徑と同一ならば、少しの移動も、其乾板の一部分は有効畫面外に脱して、精鋭なる畫像を結ばざるに至るべし、故に、如何なる場合に於ても、所用乾板の對角線の長さは、其レンズの有効畫面の直徑より小ならざるべからざるなり。

普通、使用乾板を指示せるレンズは、其レンズに於て、普通の場合に上下、左右に移動しても有効畫面外に脱せざる程度にある乾板の大きさを指示せるものにして、有効畫面は、絞を縮少する事に由りて、增加さるゝものにして、或種の安價なるレンズに於ては、其レンズの全口徑を用ゐたる時の有効畫面に就て考察せず、より小なる絞を用ゐて撮影し得る乾板の大きさを記載せるものあり。

されば、或レンズの畫像角と、視角とは全く異れるものにして、或書には、茲に云ふ畫像角を視角 (Angle of View) と稱するものあり。

今實用上差支へなき程度の乾板を使用したる時に、包括する畫像角の大さに由り、便宜上

狹角	度のレンズ	畫像角	35度
中	度のレンズ	畫像角	35—60度
廣角	度のレンズ	畫像角	60—80度

特別廣角度のレンズ　畫像角　80—135度

に別てり。

此別ち方は、便宜上の事にて、吾人が普通山岳用として要求するレンズは、中度のレンズなりとす。使用乾板の長邊よりも長く、其對角線よりも短き焦點距離を有する、レンズは、普通の場合に最も便利なるものなり。

畫像角を求むる方式は（第五圖）$\tan\theta = \frac{AB}{AC}$ にて得べく AC は、焦點距離 AB は所用乾板の對角線の半分にして、三角函數表に由りて θ の値を知るを得べく、其値を二倍すれば、畫像角を得べし。

第五圖

以上の畫像角は、無窮大の遠方に焦點を合せたる時の角度にして、或レンズの一定の乾板に對する畫像角は一定不*變のものに非ずして近接せる物體を撮影する時は、暗箱の伸長は、增大さるゝを以て、此時の畫像角は、勢ひ少なからざるべからず、然れども單に畫像角と云へば、無窮大に焦點を合せたる時の場合、即ち其レンズの焦點距離を以て計算せるものを云ふ。

次表は、所用乾板の對角線、（第四圖の2AB）にて焦點距離を除したる値に一對する畫像角の表なり。

度角	商
16	.282
17	.300
18	.317
19	.335
20	.353
21	.370
22	.389
23	.407
24	.425
25	.443
26	.462
27	.480
28	.500
29	.517
30	.536
31	.555
32	.573
33	.532
34	.611
35	.631
36	.650
37	.670
38	.689
39	.708
40	.728

◎山岳寫眞(二)　高野　五四

商	角度	商	角度
1.300	66	.748	41
1.320	67	.768	42
1.360	68	.788	43
1.375	69	.808	44
1.400	70	.828	45
1.427	71	.846	46
1.450	72	.870	47
1.480	73	.890	48
1.500	74	.911	49
1.530	75	.933	50
1.560	76	.954	51
1.590	77	.975	52
1.620	78	1.000	53
1.649	79	1.020	54
1.678	80	1.041	55
1.700	81	1.063	56
1.739	82	1.086	57
1.769	83	1.108	58
1.800	84	1.132	59
1.833	85	1.155	60
1.865	86	1.178	61
1.898	87	1.200	62
1.931	88	1.225	63
1.965	89	1.250	64
2.000	90	1.274	65

乾板の對角線の長さは。

$3\frac{1}{4}\times3\frac{1}{4}$……4.6吋　$3\frac{1}{4}\times4\frac{1}{4}$……5.3吋

4 × 5 (二枚掛)……6.4吋　$4\frac{3}{4}\times6\frac{1}{2}$(カビネ)……8.0吋

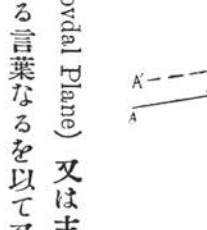
7 × 5 (亞米利加カビネ)……8.6吋　5 × $7\frac{1}{2}$……9.0吋

$6\frac{1}{2}\times8\frac{1}{2}$……10.7吋　10 × 8……1.4吋

12 × 10 (四ッ切)……15.6吋　15 × 12……19.4吋

同大の乾板に對して、畫像角大なる時は、包括せらるゝ被寫體は、より大となるべく、從つて、畫像の大きさは、より小となるべし。

○(焦點距離)レンズは、透明體の光の屈折を應用して作製せるものにして、今一つの光線がAがBCなる兩面平行せる、硝子に射入せる時は其內部に於て屈折せられ、再び空中に射出する時に屈折せらるべし、然して、此C.D.の射出せる光線の方向はA.B.と平行せるものにして、此硝子が、薄ければ薄き程、此二ッの平行線は近接し、絕對に厚みなきものとなれば(第六圖)射入光線と射出光線とは全く同一線上に至る、此れと同じく、今一ッのレンズに軸線に平行(軸線とは、レンズの二ッの球面の中心を結ぶ直線を云ふ)ならざる方向より光線來りたりとせば、屈折せられて、射入光線と射出光線とは、平行をなすものあるべし。



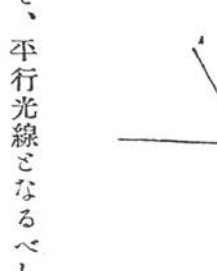
第六圖

此射入、及び射出光線を延長して軸線と會せしむる時は、此點を節點(Nrodal Point)又は主點(Principal Point)と稱す、而して此節點を通して軸線に垂直の面を節面(Novdal Plane)又は主面(Principal Plane)と稱す、此主點及び主面は、ガウス(C. F. Gauss)氏に用ゐたる言葉なるを以て又(Gauss)の點(Gauss)の面と稱する事あり、此の節點及び節面なる事は、甚だ重要なる事なり、而して此の光線射入する方の節點を射入節點(Node of Admission)と稱し射出する方のを射出節點(Norde of Emergence)と稱す。

今無窮大の遠くに焦點を合したる時に、焦點と其軸線上の合ひし一點と射出節點との距離を其レンズの同等焦點距離(Equivalent Focal Length)又は單に焦點距離(Focal Length)と稱す、而して、此焦點

に於て軸線に垂直なる平面を焦點面と(Focal Plane)稱す、焦點距離とは、射出節點と、焦點面の距離にして、絞、又はレンズの後面よりの距離に非ざるなり、然して、レンズの後面と焦點の距離を、背焦點距離(Backfocal Length)と稱せらる、而して或物を同大に撮影せんとするには、必ず其レンズの焦點距離の二倍の距離丈け、各節面と被寫體及び焦點面と相離れざるべからず、即ち被寫體より射入節點に至る距離も、射出節點に至る距離も相共に、焦點距離の二倍なる事を要す、即ち此二ッの節面より其レンズの焦點距離の二倍の距離にある面を(Symmetres Planes)と稱す。

今或一點より發したる光線がレンズに由りて其像を結びたる時に、其の焦點に或光源を置けば、其光源の像は、前の光源に至りて結ぶべし、即ち此二點は互に共軛の位置にあるものにし*て此れをレンズの共軛點と稱す、今此一方の光源を漸時、レンズより遠ざからしめて、所用レンズの焦點距離の五十倍に至らしむる時は、其光源より發する光線は實用上、殆ど平行線となるべく、其光源の共軛點は、其レンズの焦點面に相一致すべし、反對に主焦點上に光源を置けばレンズを通過して、平行光線となるべし、即ち無限大の遠距離(實用上焦點距離の五十倍)にあるものを撮影する時は、焦點は、其主焦點に合すべく漸時增長して、實物大に至つて、焦點距離の二倍を要す、而して其れ以上に增大さるゝ時は愈々、其距離を增大す。



第七圖

此れ即ち引伸し、縮寫の理にして次の式に由りて此二ッの共軛點を知るべし。

D ＝ レンズより被寫體迄の距離

d ＝ レンズより映像迄の距離
F ＝ 焦點距離
r ＝ 伸大又は縮小の割合（擴大又は縮大の割合は必ず線にて計算すべし）

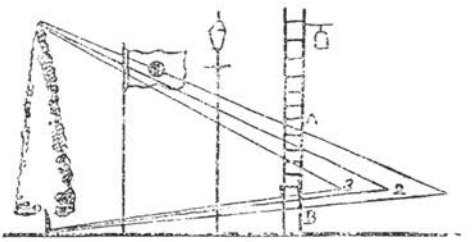
然るときは d 及び D は次式にて示す事を得。

$$d = F + \frac{F}{r}$$

$$D = F + F \times r$$

○（遠近觀 Perspective）畫の遠近觀と云ふ事は、重要なる事にして、成畫の良否の要素をなせり、所謂素人が、普通の短き焦點距離のレンズにて、大なる肖像畫を撮る時は、此遠近觀は、極端に破壞されて、全く美的の均衡を破るに至るべし。

畫像の遠近觀は、暗函の位置*に關係し、焦點距離に關係するものに非ず、或一定の場所より焦點を異にするレンズにて撮影せる時に、其畫像の大さは異れりと雖も、其遠近觀は異る事なし、然れども、今より短き焦點距離のレンズにて撮影する時、より長き焦點距離のレンズと同大の畫像を得んとする時は、勢ひ、被寫體に近よらざるべからず、然る時は、遠近觀は益々增大せらるべし、即ち短き焦點のものは遠近觀甚しと誤れる考を抱くものあるは此事なり。



第八圖

第八圖に於て1の所にカメラを置きて撮影せる場合に最も遠き樹木と其の中間の物體との畫像の割合は、樹木の兩端と、1となす角に含まる丶部分との比なり、今更にカメラを近接して寫す時は、樹木と其他との比は益々過大さる丶を圖に由りて知るべし。即ち遠近觀の過大となるを證するなり。（レ

ンズの項未完）

（本編は一種のノートなり、去れば、初學者諸君にして不明の事あらば、出來る丈け取調べ御答へすべし、成るべく多數の御質問を乞ふ。）

羽後田代山登山記

泉　茂　家

同行
大館中學校生徒　伊藤金一
同　同　藤垣敬治
同　同　齋藤作之助
同　同　伊藤勇太郎

一

岩木火山群中に岩木山と殆んど平行し、秋田と青森兩縣の界を直走する連峰がある。此連峰の内に十和田湖水もあり、その連峰の内に首座の位を占めて居るものは田代山である。

田代山と云ふ名はいづこにも見ゆるので羽後の二字を僕は冠したのであつて地方では無論惟に田代山と稱して居るのである。田代山と云ふ名は高頭氏の日本山嶽志の中に其の名を見ることが出來るが、その案内は餘りに簡單であつて其の高さも八〇〇米と記してある。不明と記さるゝ通り高度を誤つ

てる。又農商務省地質圖二十萬分の一には田代山と田代嶽と二箇の稱名がある田代山の高さは記してあるが、田代嶽の高さは記して居らぬ。さて此の近邊では田代山、田代嶽の稱號の二つを用ひずして盡く田代とのみ稱し、其の田代山と稱して居るのは農商務省地圖の田代嶽の方である。同地圖の田代嶽は即ち我々の登山せる田代山である。

二

七月二十九日。僕の家內の者等は三時頃から起きたが僕はずるく構へて寢て居る。四時の音が聞えたからむつくと起きて身仕度をするや御飯を食べるやら大急ぎ、約束の四時半がなつても齋藤生が參らぬ。朝は晴れてくれるのやら、雨になるのやら一向に判明せぬ。一雫、二雫は落ちて來さうな。どんな山に登山しても降られたことは無いもの今には晴れるだらうと樂觀してる。齋藤生が來たので急いで釋迦內に行く。伊藤生、藤垣生及同行伊藤氏が待つてる。出發は六時半、幸にも灰色の雲は一枚、一枚押し拂はれて行く。

さて田代山はこの北羽、南靑の一名山であつて、田植上りの農夫は必らず登山する。田代山上の山人の植うると云ふ苗代や綿を見て、一年の豐凶を卜するのである。一日に其の頃なれば三百人も登山するさうな。

登山の道は三方からである。第一に靑森縣の方面であつて弘前から山を經て來るらしい。第二は早口口であつて早口村から早口川を溯つて山麓まで四里位、第三は岩瀨村より岩瀨川を溯るのであつて、やはり山麓まで四里許り、麓から頂上まで二里許と見ゆる。

僕等の一行は釋迦內より山を越して、岩瀨澤に沿ふてる越山(コシヤマ)村に出で、その岩瀨口より上る豫定で

ある。

釋迦内より松峰村、神山村を經、花岡鑛山の毒烟を右にして花岡村を過ぐる。之からは越山村まで二里弱、一の村落もない。僕の豫期した通り灰色の雲の一角破れて熱い夏の銀光線はどつと投げかける。熱い事は熱いがしめたものだ。短冊形、正方形の山田や、トンマな顏に突き立つてる案山子將軍の守る痩せ果てた山畑の狹霧は地を匐ふて逃げて行く。鑛山の毒烟は後から追ふて來る。美はしい綠りの杉林や松の森は枯れかゝつてるのは明らかに見えて來る。自然と人の戰！自然と物質の戰！自然の女神は衣を挂くるべき森を汚さるゝので奥へ〳〵と御隱れ給ふ、僕等は其の御姿を田代山迄追ふて行かふ。

名もなき急峻な一峰を越えたら鑛山の烟も來ぬ。心がゆつくりする。溪流の音を立てゝあちらへ、こちらへ奔つてる。千年の萬年の杉は天に冲してる。山は恐ろしく急である。南から日光は直射せぬ。道は一本で細い、蔦や葛の蔓やが夏帽に蓋ひかゝる。晝顏の花の紅色や白百合の匂しい香が迎へる。それよりも葛の蔓に黑く鈴なりをしてる其の果實をなつかしく思つた。摘み食へば齒が黑くなる、其の甘い淡い味に少年時代に丘廻りをした事を思ひ出す。思ひ出の淡い味！。

越山へ來た。大舘から越山迄四里、釋迦内からは三里である。人の里には犬がすむ。僕等の洋服姿に驚異の眼付をして吠ゆる。村の清水に足を停むる。法で禁ずる、濁酒は德利の中に乳色をして匂しい香氣を放つて清水に冷されてる。この乳色の酒に野に山に疲れし働き人は晝寢前を甘露の舌打をするだらう。顏吹く高山的の風や畦の樣な群嶺はこの村人に治外法權を與へてるのか。

越山から大石渡まで二三の村を經て一里半許り。大石渡で村が盡きる。これから山までは村が途中にない。田代山は北に嶄然と大きな頸を擡げてる。白い雲は北へ〳〵と飛んでる。晴れてくれ！我等

は心中に冀ふ。時計は十時を報ずる。日光の直射に照されて中々熱い。

三

大石渡を上ると赤倉鑛山と稱する硫黄山がある。其が田代山の直下と云つてよい。鑛山で堀り割つた荷物運搬の途と、其の道の出來ない以前に登山者の通つた道とがある。我等は案内者伊藤(勇)氏に導かれて後者をとつた。雜木の處々に生えてる、芝の短い山路を辿り進む。進んでも思はしくないので草刈をしてる翁に田代行はときいたら、鑛山道の便利且つ誤り少いことを叮嚀に教へてくれたので、崖を下り鑛山道を歩むことにした。

其の道は一間位の坦々たる道路であつた、漸々田代山の方に登つて行く。硫黄を山程重さうにつけた牛や馬やが鈴を鳴らして下りて來る。到る處に清水は左方の崖から流れてる。或は杉皮を傳ひ、或は粗末な薄い板を傳つて。雜木は中々深く重りあつて、日光は容易に入らぬ涼しい事限りない。でも上りなので大分草疲れ且つ道路が單調な者だから休み場處をほしくなつた。遂に一里半も歩んだ頃鑛山の官舍についた。それから爪上に登つて工夫小屋に着した。官舍に宿泊を乞ふてはねつけらるゝよりもいぶせき工夫小屋に工夫の嘖き歡迎をうけ一夜を明さうと決心した。工夫等は草疲れたらうと慰めてくれたので有り難つた。一時近いので辨當をひろげる。シトロンを二本ぬいた。弛める筋肉、疲れし精神に新たなる元氣が張つてくる。拒絶されてもと官舍に宿泊を乞ひに伊藤生と藤垣生は行く、間もなく成功したと手を拍つて歸る。僕も心中に快哉を叫んだ。

二時出發。是處らは絶頂が直ちに仰視さるゝそして非常に急な、殆んど直線に類したる角度を以て聳立してる。溪川の跡を這ひ上る。今は水は何も流れて居らぬ。大きな流木の上を跨いで岩に攀ぢ這

ひ上るのは中々苦しい。岩木にも、鳥海にも上つたがこんな急峻な崖を上つた事はない。「一の上げ」と稱するさうな。眼鏡に汗は流れて用にたゝぬ。七八町も喘ぎに喘ぎ上つて漸く「流(ナガレ)」と稱する緩な坂に達した。ブナや雁皮は欝蒼として茂り涼しい山蟬は輕妙な樂を奏する。「流れ」から又「二の上げ」「三の上げ」と急坂をひた上りに登る。熊笹を六七町踏み別けて前嶽に達した。所謂山人の苗代や田と云ふ者を見る。すべて前嶽は濕地であつて小沼迄もある。苗代の苗は何と云ふ高山植物やら一寸判らぬ。岩の間を探つて漸く渇を癒やす。さて奥嶽に駈け足！

四

熊笹と云ふ青い蓐を布きて三角塔は風雨雲霧の間に跪座する樣は何と云ふ淸い景であらう。三角塔下の窪地に田代神社がある。諸生も我も淸き蠟燭を灯して拜する。三角塔上の人々となる。三角塔上は一間半四方と思はれる。(四時半)

西の方を探ぐると雲と霧の海の上に鳥海はその長い尾を曳いてる、其の後は山形縣であらう。椿鑛山のボツト昇る烟の奥は米代の落ち口らしい。白い雲の樣な海には滊船らしい者が動いてる。

風は急に東へ〳〵。鶯は鳴く。

I生は熱心に寫生をなし、S生T生は高山を探つてる　(四時四十分)　どうしても岩木火山帶は鋭角の山に富んでる。三角形の頂を有する峰々は熱血的孤立的の性質に人を走らするであらう。

笹原を飛ぶ雲は風にスイ〳〵と鳴る、鶯はなく。

シトロンは二本倒されバナヽは無くなつた。地圖は廣がつて展望の限界を與へてる。だがいやな雲だよ、鼻先に見ゆるべき岩木も見えぬ。腹が立つ。

見えんでもよい。僕は之の高山の氣分を愛する。いな憧憬する。人を高く〳〵と浮き上ぐる聖き高座！。（四時五十五分）

サイダーの澁い味が舌に殘つてる。水がほしい。雪があつたらば！

雲は飛ぶ、東へ〳〵。鶯は鳴く、笹がなる。

青嵐雲吹く笹の露濕り

山人の植う稻田青く五月晴れ

先きに立つて歸つた勇太郎君は山人の笹別け行く音をきいた、早く歸らうと青くなつて叫ぶ。

五

約束の官舍に達した時は七時の黃昏時であつた。希望を達し且つ宿舍については足を一歩も動かし度くない。榾火を焚いてる臺所にはうれしい晩餐の卓に坐る。飢を飽したる快を得る。風呂へと請ずる。案外であるが辭退すべきでないから僕は齋藤生と入る。溪水は淙々として杉の大樹の下を流れ、管は氷の樣な其の一部を我が風呂場に流す。餘れる水はザワ〳〵と又溪へ流れて行く。その月光は窓から流れて肌を照す。身振する程寒い。飢を飽した我は疲をいやした。其の外に何を望まう。若い男はこちらへと請ずる、單衣は其と、白いランプの下に初對面の禮と共に熱い茶をすゝめられた時の快は何とも云へなかつた。同氏は之の赤倉鑛山の役員であつて榎本義雄氏と名札に讀まれる。

氏は之の官舍を守る只一人の人であつて上の鑛山から下りて來る硫黃を檢査さるゝさうだ。我等は自然の淸さと雲際の景を探らうとして來たものであるが、同氏には坐にして松の大樹の月も見られ、高き山鶯も聞こゆる、其の境涯を一寸は羨しくも思はれるが、壓伏せんとして止まぬ自然の深谷に取

り殘さるゝ氏に同情の念が起つた。窓を白くして十六夜の月は差し怪禽は一となきをして飛び去つた。茶をすゝめ乍ら同君は寂寥の味を談り心から僕等を歡迎してくれる。十一時がなつても僕等を寢かさない程談られる。うれしい夢を温き蓐に求めた。

朝六時起床、七時出發。榎本氏に深く禮をして溪聲をきゝつゝ下る。歸路は全く前と同じ道をとつた。午後二時頃花岡村に着し、小學校を叩き從弟長山耕助君にあふた。始めて陛下崩御のことをきいて胸つぶれた。山上に得し興趣を一時に氷に化せられた思がした。

顧望

喪の國旗見るも哀れ五月晴るゝ峰

途中釋迦内村に夕食を喫し了り、七時頃大舘に入れば滿戸黑布をつけたる國旗をかざしてる。云ふ可からざる悲痛を感じた。

併記、山の高さ一一七七、八米突（三八八六、七尺）は今回二萬分之一作製の爲め陸地測量部の量れる由なるを榎本氏に聞いた。高意を謝す。（八月六日碇ヶ關旅舍にて）

小無間山と大無間山、駿州田代よりの登路

關口泰

一　田代

田代は靜岡縣安倍郡井川村に屬し其對岸小河内と共に大井川上流最奥の村落である。靜岡市から十

一里、三里、牛妻迄は馬車もあれば一日でも行けやうが、途中上落合邊で一泊するを可とする。

先づ田代からの交通を記せば。

一、井川を經大日峠を越えて靜岡市へ十一里。

二、大井川に沿ひ井川梅地を經て上川根村千頭へ九里。

三、小河内より笹山金山の北を(地質圖には井川嶺)安倍川奥梅ヶ島温泉(安倍嶺を越え身延へ四里)五里。

四、小河内谷又は牛ッ首(笹山より北走する尾根)をへて甲州硯島村長畑へ七里。

五、田代川を遡り途中二泊(山小屋あり)トクサ峠を越へ甲州新倉(アラクラ)(早川上流西山温泉南三里)へ。

六、信濃俣の入を西に途中二泊(一夜は伐採小屋)下伊那郡和田村へ。

七、上河内岳、聖岳、赤石岳、等へ二日乃至四日。

然して大無間山へは早曉發すれば一日で往復することを得ると思ふ、又、寸又川の日向へも一日で行けやう。

田代は三四十戸の村で宿屋は增屋(瀧浪增吉)外二三軒あり、案内者は瀧浪松次郎(五十三)同丑松等あり、宿で世話をして呉れる、宿料五十錢、案内料は辨當代を別に金一圓、伐採の人夫など入込んでる故風俗純朴敦厚と云ふわけには行かない。

二　大無間山

本誌五年第二號の記事の訂正をかねて稍重複の嫌ひはあるが此に大無間山の大體をのべる。

大無間山(二三二九米突)は遠州榛原郡と駿州安倍郡の境界線に立つてる、何れにせよ靜岡縣に屬する一高山である。赤石山脈が南走して聖、上河内、新田(ニッタ)、九千尺内外の諸岳を起して「イザル岳」に至つ

て二分し、西するものは池口嶽等をへて黑帽子山となり、南するものは信濃俣、大根澤、の岳を過ぎて大無間山となり、寸又川の谷を隔てゝ相對峙するものである。

大無間山は標高に於ても左程優れては居ず特別の興味を未發見しないけれども、赤石山脈從つて日本アルプス最南の一高峯として、赤石山脈を北に縱觀する觀望臺として多少の意義が無いでもない。實に高さに於ては赤石山より一峯一岳段々に低くすぐ北の大根澤岳よりもなほ低いのであるけれども、赤石山脈は此大無間の一突起を最後として再び隆起するの力も無い樣に大井川に沿つて遂に東海に入るのである。

登路は寸又川方面よりすれば日向、大井川方面よりすれば梅地か田代（又は井川）から七八時間で頂上に達※

大日峠より大無間山を西望す

※する、大間から朝日岳（一八二六米）をへて尾根傳ひにも行ける由なれど之は山中に一泊することを要する。道は一番日向から行くのが容易い樣に思ふ。（山岳五年二號參照）

山中は樅褥喬木多く獵師道が大體に於て附てをる、羚羊鹿は大分居る樣である、南方の山故雪は四月には融けて五月にならぬ内に山躑躅抔の花が開き十一月も遲くならなくては初雪は降らないと云ふ位、夏登ても殘雪は見られず高山植物も岩鏡、御前橘、舞鶴草の類が多い、然し鬱々たる喬木林の景觀は壯大雄偉である。

三　小無間山

小無間へは大島澤から登つてもいいが、田代から背後の山を六丁登ると雷ダン（平）といふ少し平な處を通つてイヅワ澤と大島澤の間の尾根を登る

事一里にしてイヅワ澤の三角點へ出る（大島澤の口に小屋あり）三角點からセギノ澤とトヤマ澤の間を大ギリバ（鋸齒）といふ急峻な上り下りがある、之を一里計り行くと小無間の三角點へ出る、此處から更に一里半、大ギリバがつゞいてミスマの池の傍へ達するのであるが、此方の大ギリバは前のより少し長いが上り下りは烈しくないといふ。ミスマの池から明神谷の入に伐採小屋が澤山あり、タテイシ澤の入にも小屋があり、一夜の雨露は凌げる。

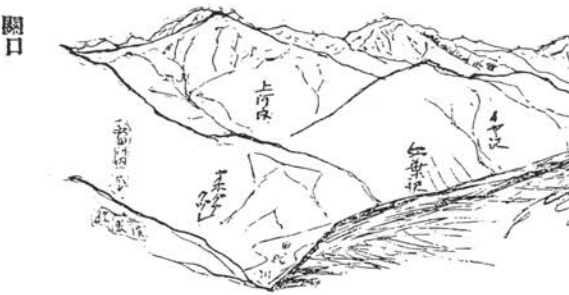
以上は前夜宿の主人に聞いた所の大體である、然し私は天候其他の故障で遺憾乍ら大無間迄は行かれなかつた。廿六日（大正元年九月）は三時から起きた*

白根連山

ツリ、モリ山

赤石岳

聖岳



◎小無間山と大無間山、駿州田代よりの登路　關口

*が雨が來たので案内者が來ない、此日は半日雨であつた。

廿七日。

松次郎は前日の荒れの爲に山から歸つて來てゐたが用があつて案内が出來ぬといふので望月右吉を頼んで貰つた、然し案内者は約束の五時になつてもやつて來ない宿の神サンに催促にいつて貰つたが要領を得ない内に到頭七時になる、仕方がないから大無間は斷念してせめて小無間迄と思つて宿の主人にいつて貰ふ事にして八時十分出發した。

後の山を登ること數十分で稷畑へ出で此處から雷ダンへは行かずに信濃俣の方へ行く道を行く、豫期してた事ではあるが前日の大荒れ（八拾歳

のオバアサンがこんな荒れにはまだ三度しか遇はないといつた。明神谷では木挽が倒木に壓されて慘死した）で道は非常に荒れてゐる、雜木の間や躑躅の茂みの中を上り下りして二つ程澤をこして稷畑から二時間で富山澤の大ハルキ澤の小屋へ着いた、此の上をツルシ山と云つて斷崖は何時頭上に崩落するかわからぬ處としてある、此で晝食した。

小屋から澤について少し登り急なカラ澤を攀ぢると一時間程で大ギリバの眞中程へ出る、右にガレ（薙、崩）の上や岩の狹い背を行くと又一時間で小無間の三角點へ達する、此間で例のトヤマの大ガレも見えるわけだが、此日は雲が兩方の谷に深く何も見えなかつた、遠くの山は無論である、かくて小無間へ着いたのは二時であつた。

小無間の頂は縱を三方に切り開いてあつてその中央に三角點が据へてある、萬一を僥倖してその萬一に當つて北から西にかけて雲は折善くも晴れて白根の諸山は遠く赤石から南は近く展開してゐる、上河内の岳は巖丈な裝に近く迫り、肩を張つた聖岳は後に雲の冠を冠つてゐる、上河内岳から左即ち西の方へ新田、イザル、中ノ又入、杓子澤、トザワ入の三角點から西河内（大根澤）の嶺が連り、その左にやゝ遠く池口岳かと思はれる形の整つた山が見える。然し大無間から黑帽子の方はまるきり見えない。小無間のトヤマ澤に向ふた方に「トヤマノ大ガレ」があり、關（セギ）の澤の方に雨垂ガレといふのがあるのであるが之も雲漠々でわからない。

三時に此處を發して南に下り大無間へゆく横道へ出る、さつき大ハルキ澤から上つた地點へついたのは三時卅五分、伐採の音が下に聞える、伐木と倒木が道を閉して參差長幹を交えてゐるので大にまゐつた。イヅワ澤の三角點へ着いたのは四時廿分、此處で一寸食事して下る、二十分程は急な下りでこつちから登つては可成ひどからうと思はれた。楢など濶葉樹の大木が多い、宿の主人は菌を探したがなかつた、三十分程平な道がつゞき又一下りすると雷ダンへ來る、昔雷樣の落ちて平になつたとか

いふ、こゝらは雜木が茂つて熊笹の道が小暗い、田代の後ろの山へ出たらば前方がスッカリ開けて、東河内の山々が薄く枯れた膚が夕方の色に暮れてゆく、畑の色も黄に、小河内の灯が薄暮の光になつかしい、大井川が默つて下の方を流れてゆく。田代の町へついたのが六時十五分、もうすつかり暗かつた。

四　小河内谷

二十八日、今日は松次郎が來て五時二十分日の出る少し前に發した、いゝ天氣である、小河内の吊橋（此間の荒で流れたのを作日開通）を渡り小河内の村のはづれを小河内の谷について上る、一昨年迄は材木を伐つてたので道はいゝ、然し所々棧道が落ち倒れた木折れた木が道に蔽さつてゐるのでナタで切開いて行かなくてはならない、豫定より遲れて小河内澤を右に涉つて飯場の跡へついたのは九時であつた。

谷の崖や瀑や景色もいゝが、太い木が見事に折れ、挫けてゐるのに過ぎし日の風の猛威を讃歎する。清澄の氣に秋の日が晴れて肉が引しまり胸が愉快に躍る。

十時過谷の分れる處を右に入る、膝を沒する水が冷い、此處迄は五萬分の一圖（南部）にも道がついてゐる、晝飯を石の河原でしたゝめる、日光が快い、仰ぐ空の色の濃きに峯は三方に圍んでゐる。少し左手の上に小屋の壞れたのがある、澤は一方は東を指し一方は北を指してゐる、東の方の澤を上る、やがて一本東の方に分れ古澤があつたのを本流の導く儘にだん〳〵と南へ向いたのが誤りであつた、カラ澤や熊笹の中を登攀する事一時間餘でやつと牛ッ首の道とも覺しきものに出る、東から南にかけて大きい廣い谷窪である、之は硯島の谷ではなくて梅島の谷である、左に荒蕩たる道を行くと、上河内や聖の岳が見える、目當にしてガレの下を通るべきを上を通つて二〇一三、七といふ三角點のある峯の背後を下つてやつと硯島へ下りる本當の道へ出た、此先は道あり只此澤を北に下つて行けば

いゝと教はつて松次郎と別れたのが二時。

三十分程横道を行き左へ下ると金山の廢屋がある、金ッ澤を左右に千鳥がけして行く、道なぞ無い所々に石など積んであるのでよいが一人ではかなり心細い谷だ、月に二人か三人位の通りがあるかなしかだといふ。長畑の人家を見たのが五時、硯島の本村迄はゆけずに室草里の望月新何とかいふ人の家に宿めて貰う、此主人は參謀本部の測量員について歩いて赤石山脈一帶の三角點を入れたと話した。

此處を朝七時に立つて大島に出で早川について切石の手前へ出たのは二時頃であつた、此から馬車へ乘り鰍澤へついたのは夕方だつた、感じのいゝ處で宿りたかつたが、(鐵道馬車はもう無かつた)甲府へ歸りの馬車があつたので、ポッンと一人で暗い畷道の樣なとこを寒さに身をちゞめて甲府へついたのが八時頃、雨がポッ〳〵と降つて來た、明朝は東京の人にならうと停車場へ急いだ。

甲斐駒ヶ岳及仙丈ヶ岳登山記

大槻禎郎

一

山岳五年二號で榎谷氏の甲州駒ヶ岳を讀んで以來、いつか一度は見參に入らうと心がけてはゐたが、何時も匆々として其麓を通るばかりで、今日まで此靈境に立入る光榮を得なかつた。

去る四十三年の七月、私は信州上高地に遊ぶ途上、滝車で山麓を通つて、小淵澤と日野春の間で、釜無川を隔てゝ一大鐵壁のやうな、此山の英姿に恍惚とした、翌年八月木曾に遊ぶ道すがら、再びこ

の山の麓を通つた時、日野春驛で列車に事故があつて、餘儀なくある小さいプラットホームに、次の列車を待合せてゐた、其時にも駒ヶ岳は雲表に自分を威喝してゐた。

その年の秋、東京で開かれた文部省の展覽會に行つて、山本森之助氏の甲斐駒ヶ岳を見て、雄大な姿に魅られた私は、同秋に横濱で催された水彩畫の展覽會に出た、田中太郎吉君の落日の駒ヶ岳に見たる、透明な、濃い桔梗色の印象を忘れることが出來なかつた。

忘れえぬ山！、魁偉の象徴！私の行く處は山を除いて他には何にもないのだ。

休暇になつたら直ぐに出掛ける豫定は今年も外れて、五十日の休みもいつか殘り尠になつた。一年一度の好登山期を對岸の火事と同じに見て、すましてはゐられない、用事はあとにして横濱を出た、八月三十日の朝甲州日野春で車をすてた私は、いつもながら氣の揃ふ影法師とふたり連の外に、今日は荷持の男に少しばかりの荷を持たせて、驛の前から右に曲り、釜無川の右岸を、川に沿つて歩んだ、目的地臺ヶ原はこゝから僅に二里、あまり早く着いても氣まりが惡いから、道草をたべながら、悠々お徒歩とある。

路は驛を出外れると間もなく松林に入る、林がつきて草原に出る、草原には桔梗、萩、女郎花、松蟲草などが咲き亂れて、山姫の衣の裳に、美しい秋草の刺繍をみせてゐる、草原が一寸途切れてまた林にうつる、赤松の林を透いて釜無の白い河原が眼下に見えだした、仰ぐと駒ヶ岳が、雲の間から白い顔を、出したり引込ませたりして遊んでゐる。

九時半過ぎ臺ヶ原の竹屋に荷を下した、早速主人に登山の豫定をざつと話して人夫の周旋を依頼した、間もなく一人の男が來た、山岸喜作と云つて先年榎谷氏の供をして、駒ヶ岳まで行つた男で、今年も今度で、お山へは二度目だと云ふ、少し耳の遠いのが缺點であるが、實直さうな男である、元來私が此度の旅行の豫定は、臺ヶ原から竹生に出て、駒ヶ岳に登り、尾根傳ひ（主峯の高度の關係上峯傳ひ

と云ふ感に乏しいにしろ）に仙丈ヶ岳に至り、引返して朝與から地藏鳳凰を縱走して、青木の湯に出やうと云ふ、自分ながら頗る慾の深い計劃であつた、殊に駒ヶ岳から仙丈ヶ岳への賽路は、山岳七年一號に登載の、辻本氏の甲斐駒ヶ岳山脈縱斷記中二頁のところに、「山脈は此峰から二つに分れる、西南の方仙丈ヶ岳に連るものは更に低い一峯を越して、池ノ平（甲信國境）に至つて俄然低下す」云々と、記されてある、路をゆくことに定めてゐたが、果して行き得るや、否やは、尙未定の問題で、內心幾分の心配なき能はずであつた。

喜作に行けまいかと聞くと、自分にはよくわからぬから、作さんをつれて來ませうと云つて歸つていた、ランプがともされてから、喜作は作さんをつれて相談に來た、作さんの本名は細田作藏と呼んで、昨年辻本氏の連れて行かれた、荷持の一人であつた、早速要件をうちあけると、其の場で承知した、案外話のわかる好い男だ、然し作藏とても此新登路を通つたことは、未だ無いと聞いては、いさゝか心細い、日本山岳志の高橋白山先生の白崩に登る記を見ると、此山に池ノ平から登つたらしくも考へられるが、それも符合せぬ節が多いので、明に此道と言ひきるわけにゆかないとか其他にこの登路のことを記されたものが、あつたかも知らないが、寡聞の私は、私共山岳會の諸君でさへ、嘗て此賽路を經たと云ふ、報告にも接しなければ、勿論それ以外の人が、この路を通つたと云ふ話も、聞いたことがない、登路のあると云ふことは知られてゐながら、未だ親しく踏んでみた人のない、駒ヶ岳の裏山道、山岳七年一號の雜錄に、梅澤、山川兩氏の信州の甲駿境の一部の白崩岳の項には、「少くとも四五十年前から白崩山の登路は、刀利權現を經て登るやうに知られてゐて、池ノ平からのは一向知られて居らぬ樣である」と書かれてある、それで一向知られて居らぬそれだけ、私の爲には、特にこの徑路が殘されてあつたとも思はれてうれしい、米味噌の仕度を二人に委せて寢に就いたが。樂しい想像はそれからそれへと飛んで、容易に眠られなかつた。

二

八月三十一日、薄暗いうちに起きて出發の準備を始める、朝食をすませたが、喜作も作藏も、今日は屏風どまりと知つてか、落付てまだ出て來ない、宿の女に催促させると間もなくやつて來た、風は無いが好天氣とはなり難い、昨日に似た曇り日である、荷の準備も出來て、草鞋の紐を結び了つて、庭に立つた時、私は二人の人夫を顧み、また自分の異樣な風采に眼をとめて、痛切に山に入る客であることを、自覺せずには居られなかつた。

宿の主人は庭の林檎を三つほど採つて私にくれた、まだ青い果で、食べられさうにも無いが、好意がうれしかつた、六時半に出發するのが後れて、七時三十分臺ヶ原を出た、町を出はづれると、すぐ路は分れて、左の田圃道にと入つてゆく、朝露にしつとりと濡れてゐる、路傍の小川のほとりに、可憐な野菊の花が、二つ三つ咲いてゐる、路は曲つて桑畑の間に出ると、先方から四五人の男女が、聲高く話しながらやつてくる、竹生の桑摘衆だと、喜作が云ふ、近づくと通りすがりに、其中の髭のある男が、喜作に前宮へ行つたら、登山帳に名をつけてくれよと、頼んでゐた、たま〳〵雲が切れて、日光がキラ〳〵直射してくる、間もなく竹生の部落を通る、家々ではどこも養蠶に忙しさうだが、背戸で鷄が長閑に鳴いてゐる、路はいつか尾白川に沿つた、赤松の並木の中に入つてゆく、嘗て誰れかの水彩畫で見た、そのあかるい、幹の色彩が忘れられなかつた。

前宮へ着いたのが八時三十分である、社務所は大分荒れはてゝ、神官も居なければ、番人も見えなかつた、拜殿に腰掛けて三十分程休憩する、喜作と作藏は、社務所前の桃の樹を搖つて、青い果を頰張るに餘念もない。

前宮の裏に出て、尾白川にかゝつてゐる吊橋を渡ると、路はすぐに急峻な登りとなる、所謂四十八

曲の阪道で、登り一方だから疲れはするが、心地はよい、息をもつがずに攀ぢ登つて、稍平になつた地點でひと休みする、振返つて見下すと前宮はいつかずつと下になつて、尾白川の磧が白く樹間に見えかくれする、尙登つて笹ノ平まで來ると、十一時十五分をすぎた、少し下の水のあると云ふ澤の傍まで降つて晝食の包を開いた、花崗の砂に濾されて滴る清い水で、不味な握飯もどうにか流しこんだ、鐵管の中を通つてくる、生ぬるい水とはわけが違つて、ひと口飲んだだけで骨まで滲み透るやうに冷たい、晶玉の水！水あたりのするやうな、怖れは毛頭ない、十五分間休憩して歩きはじめる、ざつと一時間を費して堀立上の、三方と呼ぶところまで來た、此邊から熊笹は少くなつて、路は幽寂な針葉樹の深林にと入つてゆく、踏んでゆく足下に横たはる朽木の幹にも、狼藉として起伏する石の上にも、一面に柔かい水苔がベッタリと、被ひかぶさつて針葉樹の老木には、長い松蘿が白い髪を、ユラ〳〵と風になびかせてゐる、遙に八ヶ岳は、雲の衣をぬぎすてゝ長揖する。

やがて樹立の中ではあるが、山梁の登り口に來た、非常に狹い、急峻な、角ばつた岩の連續してゐる處で、刀渡りと云ふてゐる、名まへは怖しいが、登つて見れば、それ程でもない難所である、前屏風を超すと、さすがに額に汗が滲んで來た、相變らず薄暗い林の中をスタ〳〵登つてゆくと、横の小高い所に、刀利天と刻り付けた石が立つてゐる、此邊から徑はやゝ平になつて、胸の動悸が次第に靜調に戻つて來た、少しゆくと、心もち降りとなる、間違はせまいかとあやしみながら、他に徑が無いので、其の徑を下つてゆくと、樹立が稍まばらになる、何處へ出ることかと、暫く話もせずに進むと、林はいつか途切れて、急に明るい平地に出た、大きな花崗岩に倚りかゝるやうにして、立つてゐるのが屏風の小舍で、今晩私等の泊る、豫定のホテルは此處である、午後一時四十分。

三

小舍には家主の伊三郎の外に、今年七十一歳になると云ふ、妙な婆さんが一人ゐた、これが里であつたらば、別にとりたてゝ斷はる必要もないが、處が駒ヶ岳の山小屋であるだけに面白いと思つた、今日の登山者を聞くと、小淵澤の役場の衆が三人登つてゐて、夕方この小舍に戻つて泊る他には、誰も登つて來ないと云ふ、伊三郎は自分だちが着いてから間もなく、米をとりに里へ下つた、久しく晴天つゞきで、小舍の附近には水が無いから、喜作と作藏は米を研ぎに谷にまで下りてゆく、後には婆さんが爐のはたで、焚火に薪をたしながら、私に蝦蟇の話を聞かせてくれる。

瀧夜叉姫の蝦蟇の術から說きはじめて、此山に昔から住んでゐると云ふ大蝦蟇の話にうつり、此山の主であるその大蝦蟇が、屢小舍の近くに姿をあらはして、婆さんを訪問するとまで、殘らず說きつづけて倦きさうにも見えない、婆さんの話はとう〳〵私を靜聽させた、私は幼い時分、村の鎭守樣のお祭禮に買つてもらつた、繪草紙中の印象を今も忘れない、私の頭は婆さんの話を聽きながら、大分鈍くなつて來た、駒ヶ岳の檜舞臺、このクラシカルな婆さんを中心に書いてみたら、定めて面白いものが出來るに相違ないが、其れは到底私のなし得る所でないから、好い加減に切上げて小舍の外へ出た、霧が深くて、あたりの山は何にも見えない、たゞ眼下の、暗い谷底の針葉樹にかゝつてゐる、松蘿がボウと薄白く、霧の底から浮び出されてゐるが見えるばかりで、風もない怖しい程靜かな夕べである、米を研ぎに行つた兩人が戻つて來たので小舍に歸る、しばらくすると鈴の音が聞えて、先達が三人登つて來た、頂上へ登つたと云ふ、小淵澤の衆はまだ下りて來ない、小舍にはいつか、うす暗いランプがともされた、霧はとう〳〵雨に變つて、屋根板をはじきはじめた、明日の天候が氣遣はれる。

九月一日、午前二時頃ふと眼をさますと、雨は幸に止んだ、昨夜早く寢てしまつたので、小淵澤の衆が戻つて來られたのも、私は知らなかつた、寒いので爐に薪をたしてあたゝまつてゐると、傍に寢てゐた先達も起きだして、火を中にして對側にうづくまる、戸の隙間から外を窺うと、霧の幕は厚い、

曇つてはゐるが、月の光で四邊は、朧げながら見分けがつく、靜かな夜である、三時すぎ小舍の外で、ふと人聲がした、明瞭な、底ぢからの籠つた、落付のある、太い聲がふた聲三聲連いた、私共は話をやめて入口を見た、婆さんは茶の用意をした、五分、十分、表の戸の開くを待つてみたが、誰も來ない、小舍から十間と、離れてはゐやうとも思はれぬ程近く、且つ分明と、皆の耳に聞えたのだ、二十分―三十分と待つたが、依然として誰も來るやうな樣子がない、私はまた、そつと、戸の隙間から外をのぞいて見た。

神秘の一夜は、何事もなくて明けたが、天候は不良である、この霧ではとても登つたとて、裏へ超されるものでないと、人夫が動きさうにもせぬので、絶念して霧の晴れるまで、こゝで待合せることにする、間もなく雨が降りだした、小淵澤の役場員三人は、九時頃發つて下山する、十時すぎ伊三郎が里から戻つて來た、麓は今日も霧れてゐたが、笹ノ平までくると雨にあつたと話す、二百十日の厄日が、この位ですめば、結構だと思つてゐると、正午頃から非常な暴風雨になつて來た、南北坊主の前にあたる、深い谷底から吹き上げてくる烈風に、雲は綿をむしつたやうに千切れて飛散する、ゴウーゴウーと云ふ山鳴りが斷續して、雨は斜に小舍の羽目板を叩いて、すさまじい勢で飛沫を吹き込んで來る、壯美と云ふ度を通り越して、いさゝか不氣味な程である、荒れにあれる自然の大威力の下に、人の子は何の權威もない、もうかうなると小舍の薄い板を、金城鐵壁と頼んで、籠居するより外に、策とてもないのだ、節孔から北坊主の斷崖が一寸見えたと思ふ瞬間、續いて吹上げる雲のひと刷毛にぬり消されて、何も見えなくなつてしまつた。

徒然のあまり登山者名簿を閲覽すると、計らず烏水先生のお名前が眼にとまつた、七月廿四日會員の岡野氏と共に、柳澤の水石春吉外二人の案内者をつれて、此處にとまられたのだ、私の爲に骨て山に登る道を開いて下さつた先生は今また此山に攀ることを敎へて下さつた、私は感謝に堪へないのだ、

雨はいよ〳〵はげしく風は益々強く、荒れにあれつゝ山の日は暮れた。

四

九月二日、三時頃寒いのでふと夢がさめた、雨は降り止んだが風はまだ強い、月の光が青白く戸の隙間からさし込んで來るのを見ては、おとなしく寢てなど居られないので、裏の木戸を明けて外へ出ると、晝間のやうにあかるい、昨日の名殘に、風は尙林の梢に鳴つてゐるが、雲は皆吹きはらはれて、嚴つい峯が屏風のやうに立ち列ぶ、雨後の空は淸く澄み渡つて、星がしきりに瞬いてゐる、三十分間程立つてゐたが果しがないので、切上げて小舍に戻り、またひと眠りする、二度目に眼をさますと最う朝飯が焚けてゐた、天氣は思つた通り好晴になつて來たので、直に出發する、さらば二日間滯在した屏風のホテルよ、伊三郎よ、蝦蟇の婆さんよ、種々とお世話になりました、また何時何處で逢はないものでもない、五時三十分。

小舍の前から路が少し下つたと思ふと、すぐに正面の大岩壁に打つかる、一寸登れさうにも見えぬが、近づくと其の痩せた胸には梯子が架けて、鐵鎖が垂れてある、其れを力に新來の英氣で林の中を、木の根岩かど厭ひなく、スタ〳〵登つてゆくと、少し坂がゆるくなつた、立ち停つてひと息入れる、振かへると東の空はバーミリオンに燃えて、遠い秩父の連山は美しい透きとほりたるコバルトに染められてゐる。

急峻な徑を登つてはまた一寸と降る、徑は相變らず千仞の谷に臨んだ山の背を傳ひ、うねりうねつて登るのだ、幾度か鐵鎖の厄介になつて、七丈まで來たのが六時三十分であつた、人夫は荷を持つてゐる爲、いつか落伍して容易に來さうもないので、一足先へ歩きはじめる、少し登ると木立は途切れて偃松の海が起る、昂ぶつて來る心をしづめて、這はんばかりにして登つてゆくと、谷から吹きあげ

て來る冷たい風が、遠慮もなく背中から吹きまくつて、身體が凍えてしまひさうだ。

雷鳥が一羽、こゝに恐いおぢさんがゐるとも知らずに、一間ばかり先を、チョコ〳〵と歩いてゆく、手がかじかんで、追ふのも面倒くさいから、默つて後からついてゐゆんだ、禿の石碑のある所まで來ると六時五十分である、日あたりの偃松の中に長々と横になつて、人夫共の來るのを待つた、見上げると白く禿げた頂上の一角が、二つ三つ小さい峯を前にして、奥からのぞいてゐる、地藏や鳳凰は谷を隔てゝ、遙か東方に長嘯する、その鳳凰の肩のあたりには、鼠色の不二が心地の好い斜線を曳いて、背景と立ちはだかるのも美しい。

二十分程待つて人夫が來た、水雨天で金明水を腹一つぱい飲んで、ひと息に頂上めがけて這ひ上る、ザラメのやうな花崗の砂が、ざく〳〵と音をたてゝ足下に崩れて散る、八時二十分やつと絶巓の風雨に曝された三角標櫓の下に達した、偉觀！まづ眼に入るは野呂川を隔てて直聳する南アルプスの大觀である、恐しい程痩せた巨人北ヶ岳は、めづらしく雲の衣をぬぎ捨てゝ近く見參に入る、間ノ岳の頭には雪の榮冠が旭に輝いてゐる、農鳥山は間ノ岳に隱れて見えぬが、惡澤岳や荒川岳など、何れ劣らぬ不遜の强者共が、遠く薄く桔梗色の端然たる不二に對つては長者の禮を學んで參禪する。西の方仙丈はさすがに近いそれだけ、明瞭に且つ大きく立ちはたかる、全身濃い灰色に染められて頂上に近いサーカスと云はれてゐる邊は、日光のあんばいで僅にクリムソンレーキを一刷毛塗つて、まさに曉の光に覺めやうとしてゐる、南の方はよく晴れてゐるが北の方には雲が多い、遠く々々穗高と槍ヶ岳が、太洋中の小島のやうに、厚い雲の上に頭だけを出して列ぶ、近い木曾駒ヶ岳は、半分以上灰白い幕に包まれて、殘念ながら何も見えない、眼を近く足下にとめると、重り合ふ樣に入りくんだ、山の裾から起つた三峯川の磧が、山の峽を電光形に走つて里へ來る、その極るあたりには天龍の流れが帶のやうに白く光つてゐる、一時間休憩九時四十分頂上を辭して、西南仙丈ヶ岳に連る尾根を目がけて

降りはじめた。

五

名にし負ふ駒ヶ岳の裏山、花崗石の白砂がザラメ砂糖のやうに崩れる、白崩の急坂、平素は人の通る路でないから、路と云ふ路があるわけでない、適宜の處を傳つて下つてゆくと、尾根にうつゝ鞍狀の地點に出た、大きい岩の積み重なつた上を、のり越し、飛び超えつゝ暫らくゆくと、花崗岩はいつか、古生層の赫つ茶けた岩にかはる、痩せこけた山背の岩づたひに、國界に就いて偃松の切り明けを辿つてゆくと、一ノ峯の頭へ出た、十一時五分すぎである、三角點の標石が建つてゐる、作藏に聞くと駒津岳だと云ふ、此處から左方へ斜に偃松の中を下つてゆくと、仙水峠へ出られるさうだが、自分等は尙眞直ぐに傳つて、縱走をつゞけやうとするのだ、振り返つて仰ぎ見ると、眞白い駒ヶ岳の頂上から、今自分等の下りて來た、その胸のあたりにかけて、偃松さへもない恐しい崩壞！、じつと見つめてゐると、嚴つい中に何處となく、寂しい思ひが胸に湧いてくる、表の日野春あたりで見るのとは、又異つた趣がある、休憩十分、これより先は嘗て陸地測量部員の外に、通過した人のあつたとも聞き及ばない、神秘の境である、高度が低いと云ふも高い處に比較しての話だ、尾根には切り明けがある、其れを傳つて行けば池ノ平に出ると、聽いただけでは無難だが、一口に言ふやうに樂な路ではない、尾根には偃松が盛に蔓延つて、行路を遮る外に、石楠花の木がそれに交つて處々で路を斷ち切つてゐるので、歩き惡いことはひと通でない、間もなく雜草の中に嘗て測量部の人等が、露營したと思はれる地點を過ぎると、また急な登りになる、此處を大荒れに荒れて、第二ノ峯の頂へ出た、駒津岳よりは少し高いやうに思はれる、此山にも三角標石が立てゝある、錫杖岳と作藏は敎へた、駒津岳から約四十分を費したのだ、北澤の溪が眼の下に見えだした、今晩泊るだと云ふ小舍の板屋根までが、手に取る

やうに近く見える、二十分程かゝつて見晴しの好い一支峯に出た、甲國界第五三號の木標がある、もう十二時だから此處で晝食を開いた、この山脈は此處を終に、俄に低下して池ノ平へ降るのだ、北澤まで何程位あらうかと尋ねると、まだ三時間餘かゝりませうと云ふ、話には少々おまけがあつてもよい、半分に聞いておく。

一時間休憩して、少し尾根さきより左側を、依然國界の切り明けを目じるしに降つてゆく、暫らく下ると徑は樅の深林にと入つてゆく、海綿のやうに柔かい水苔を蹈む心よさと、鳥さへ啼かない深山の靜寂が、シックリと胸に泌み入つてくる、二時半にやつと池ノ平に下りきつて小憩、三時十分前に北澤の小舍に着いた。小舍は富士製紙會社が伐木の爲に建てたもので、來年伐採する準備に、今年は二十人程の人夫がこの溪に入つてゐると、留守番の爺さんは話してくれた、一兩日泊めて貰らふやうに賴んで、附近の樣子を見に外へ出た、未だ四時を少しすぎた計りだのに、谷間には最う薄い暮色がせまつてゐる、小舍から五六間ゆくと、北澤の淸い水が匆々として流れてゆく、水のほとりにはトリカブトの紫や、虎の尾に似た白い花が咲き亂れて、谿間の美を誇り顏である、一時間ほどして小舍に戻る、六時半頃日は全く暮れた、自分は夕食前から惡寒を覺え頭痛がするので、食事をせず八時すぎから寢てしまつた。

六

九月三日、三時に眼がさめると、足が冷えて氷の樣だ、人夫を起して焚火を盛にする、頭痛はやゝ靜まつたが、相變らず食事が進まない、少々無理とは思つたが、天氣が好ささうなので五時三十分小舍を出て仙丈ヶ岳に向ふ、昨日來た道の池ノ平迄戻つて、左の山の肩をめがけて深林の中を、國界の刃り明けを辿つて、息をもつがずに登つてゆく、朝霧が深いので、腰から下はいつか濡れてしまつた。

喜作と作藏は今日はから身で、元氣の好いに引き換えて、自分は空腹で勢がないから、後れがちにスタ〳〵登つてゆくと、一歩は一歩より高く、徑は山の背を傳つて、極もないやうにつゞいて居る、もう池ノ平から餘程登つたやうに覺えるが、林は中々に終りさうにもない、相變らずジメ〳〵した薄暗い木立の中を曲りくねつて辿つてゆくと、急に頭の蓋が開いて偃松帶に飛び出した、林はやつと終つたのだ、偃松の中につけられた切り明けを登ると、その切りはらはれて幾年か雨雪に白けた、骨のやうに殘つてゐる枯枝が、眼を突きさうで危なくてならない、殊に下の方ではそれが好く生長して丈も高いから、たま〳〵幹の間へ足をふみ外して、難儀なことはひと通でない、小仙丈の肩まで來て振返ると、駒ヶ岳は乳色の雲に包まれて、朧に其の白い頂上が透いて見える、白峰山脈の後には、眞夏によく見るやうな夕立雲が立つて、雄大の姿に驚嘆せずにはゐられなかつた、白日の下に巨人の幾人かは、いづれも薄鼠色の淨衣を纏つて長揖してゐる、高山の强い日光が雲を洩れてチカリ〳〵と眩ゆく眼を射る、人夫は又も先になつて、向ふの岩角を登つてゆく。

こゝまで來て私は非常に疲れた、昨夜と今朝の絶食の報いは怖しいもので、暫らくは岩の蔭に横になつたまゝ、動かうともせなかつた、人夫の一人が戻つて迎ひに來たので、仕方なしに又登りはじめる、小仙丈の頂に出ると、山梁は大きな弧線を描いて大仙丈にと續く、前と同じ樣なサーカスがこゝにある、前のは小仙丈澤に、之れは平右衛門谷に面して、直下からは同名の流れが生聲をあげる、大仙丈の絶巓に立つたのが十一時三十分、今迄見えなかつたサーカスが尙一つ、平右衛門谷と裏表になつてあるに心付いた　大仙丈澤は實に此處を誕生の地とする、頂上の石の間に名刺がある、高頭氏が昨年の七月に登山せられた際殘されたものであつた、雲の爲に今日も北の方はさらに眺望が利かない、晝の辨當を開いたが、別に何も食べたくない、一時間程休んで、今朝來た道を下山の途につく、小仙丈を少し下りかけると、偃松の傍に鼠色の雷鳥が二羽仲好く遊んでゐる、喜作が石を投げたが當らな

い、二度目の石が羽根にふれたと見えて、今度は舞ひ上つて偃松の下へ逃げ込んでしまつた、尙下つてゆくと、谿から次第に霧が卷きあげて來て、其の霧が低く偃松の上にふりかゝると、彼處からも此處からも、偃松の蔭から雷鳥が頭を出す、もうそんな閑な方々にかゝりあつては居られないから、さつさと先をいそぐ、池ノ平まで降つてホット息をついた、三時四十分である、小舍に戻つて草鞋も脫かずに横になつて、前後不覺に眠つてしまつた、夕食にはやつと、粥を三つばかり代へたが、疲れは容易にぬけさうもない。

九月四日、身體の調子が一寸順調に戻りさうもないから、殘念だけれども豫定を變へて、高遠へ出ることに定める、七時三十五分北澤の小舍に別を告げて里に向つて下る、晴天で道傍の草には露が深い、峠を超えて黑川の磧へと出た、流れに沿つて三時間程下つたが、未だ人里へは遠い、顧みると山又山の奥に白崩の頂が明かに見える。

私は嘗て讀んだ僧海量の詩を思ひ出さずにはゐられなかつた。

甲峽連綿丘壑重　雲間獨秀鐵驪峰
五月雪消窮絕頂　青天削出碧芙蓉

時は五月でない、所は信州分である、碧芙蓉が白芙蓉に變つたとて不思議ではない、私は又冷たい石礫を蹈みつゝ河原を下つてゆく。（完）

神河内と常念山脈

辻村伊助

神河内の懷古—神河内溪—溫泉—德合峠—白骨路—平湯路—中尾峠—霞澤—田代ノ池—宮川ノ池—どぶ川—中ノ湯—千丈

ノ瀧―赤ノ谷―燒岳―遊覽の期節―神河内の四季―案内者―登山の準備。
常念山脈―主なる山岳―登山の時期―準備―案内者―〔中房登路〕―有明山―擂鉢山―東臺原岳―臺原岳(西)―燕岳―大天井岳―常念岳。―〔蝶科登路〕―常念岳―蝶ヶ岳―鍋冠山―〔島々方面登路〕―鍋冠山―霞ヶ岳―蝶ヶ岳―常念大天井―東鎌尾根―〔大町方面登路〕―瀧ノ澤―餓鬼岳―大天井―〔乳川の登路〕―全山脈縱走。

徳合の石高路を覆ひ茂げる青葉の蔭に踏んで、あゝ穗高なに生きすがり人の世のはやてをこゝに逃れ來し身ぞと、ほつと息をついたやうにつぶやいた時は、あの神ながら雪置く山を仰ぐ人は友の心のやうに美しく、その麓、今、見下ろす葉隱れの溪に、我等が喜びのひそめるとやうにいそ〳〵と、くの字なりの崖路を下りて來たが。

上高地はすでに神河内ではなかつた、桂、楢、落葉松、ことに思ひ出多い白樺はいつの間にか伐り盡されて、白く冷たい切り株が、僅かに昔を語つて居る丈であつた。伐り殘された小梨の幹に倚りかかつて、しんとした山の空氣を振はせて、地響をさせながら倒されてゆく森の木立を見つめた時、かうしなくては生きてゆかれないのかと、腹が立つよりも、なさけない心持になつてしまつた。

峠の途から見下ろしたとき、露を帶びた葉がくれに、柱の樣に靜かに立ち登る烟を眺めはしたが、それは梓の岩魚釣りが瀨のほとりに、化石のやうな烟管をくわへながら罪のない山の物語りに、干からびた兩手をかざして居るのか、又は洞のやうな森蔭に、焚火の音に靜かに耳を傾ける隱者の姿を思ひ起させるに過ぎなかつた。今こゝには堀立小屋のいくつが立てられて幾十人の人足は、諸君が想像せられるやうな卑しい顏をした元締めの監督の下に働らいて、日に幾本の森の木は、彼等がうたふ卑俗な謠の中に伐り倒されてしまふのだ。森の使命は簡單である、切り流されて梓の瀨のうちに搖られ搖られながら安曇の高原に出て、そこに、うめいて居る人間の垢を落とすために、こやし臭さい春戸の風呂釜にくすべられゝば足ると、あゝ此の穗高の神の河内に別れて。

わびしげに立つ烟、それは、きたない事をわめきながらあぶる干鱈の臭ひを交じへて穗高の空へ登

つてゆく、かくして神河内は林道が直線に貫かれてから、河童橋が、田舍臭い釣橋に變つてから、渡りものゝ人足が浴場で俗謠をうなるやうになつてから、交通が便利になつたと云ふ名のもとに、茶代の受取りが活字で組まれ、茶碗に温泉の名が燒きつけられ、手拭が間違ひだらけの横文字で染められて、温泉は「上高地」と云ふ名と共にしかく俗丁してしまつたのである。

小島君が初めてこゝを紹介せられた時、梓河畔に穂高を觀せられたその時には、山の景色のみか、住む人の心までが、こんなにひどく變らうとは決して思つて居られなかつたであらう。今、君の文を思ひ出して朝の河邊にたゝずんでも、穂高は墓原のやうな切株の上に、夕は火のやうな山の片頰は、醜きものゝひそめる溪を厭ふとやうに、夕闇の空に消えてゆくのだ。嘗て、高野君が紙上に書かれた景色は、今僅かに田代ノ池附近に見られるだけで、德合につゞく落葉松林と河に沿ふた白樺はもう見ることは出來ない。雨つゞきの夜毎に聞いた水鷄も、木挽きの聲に逃げたのやら、もうその寂しさを味ふことは出來なかつた。

初めて高野君に逢つた頃には、宿の側は一面の楊林で、幾群れの檀鳥が旅人の來る度に啼き騒いで居た。ある日の暮れ方、また、一しきりさわぎ出した鳥の群に、ふと外に出て行つた時、逢つたのが高野君である。今この楊は圍爐裏の灰になつたのやら、宿の周りは白砂の見えるまで草も木も絶えてしまつた。

余は主義として、こんな俗丁した「上高地」や、そこにある温泉の爲めに幾頁を費やしはせぬ、余の筆をとるのは、神河内の昔を憶ふ人の爲めに、或は山登りの途中已むを得ずそこに遊ぶ人々の爲めにしたので、又神河内の東を限る常念山脈の登路のついでにそへたのに過ぎぬ。くれ〴〵も云ふ、神河内ならぬ「上高地」は不快なところである。

神河内附近

神河内は長野縣南安曇郡安曇村に屬し、信濃川の源流、梓川の河畔にある。標高約五千七百尺、北には遠く槍ヶ岳、大天井、西は穂高、燒岳、東には蝶ヶ岳、霞ヶ岳を繞らした帶狀の溪谷であつて、南北は、河に沿うて數里にわたり、東西は山に接してその巾は半里に過ぎない。山岳溪流の美を集め、數年前までは、また森林の美をも集めて居つた、河畔に温泉の湧出するあつて、通常ならば、避暑地として絕好の處である、否、數年前までは多少の不便を忍びさへすればこの上もない樂しい溪であつたのだ、然し、今も、またこれからも、たとひその森の一部を失つても、附近の山岳、及び北アルプス主脈の縱走に對しては、根據地たるの資格は失はない。

神河内温泉

鹽類泉で溪の南部、穂高山と霞ヶ岳との中間、梓川の右岸に湧出し、浴舍一戸あつて例年五月から十一月初旬まで營業して居るが、その他の時期には戸を閉ぢて島々村に下るから、一般の登山者はこの期間を選ぶのが宜い。（宿料一日五十錢位）

通路

神河内に入る現存の通路は五つある。三つは信濃より、他の二つは飛驒に通ずる。通常東京方面からは德合峠を越え、または、白骨温泉に迂廻して行く。

〔德合峠〕—安曇村島々から德合峠を越えて神河内に行く、里程約六里、七時間を要す、東京方面から來るものは多く此の路による。迷ふやうな所が無く、且、路標があるから、夜になりさへしなけれ

ば案内者の必要はない。松本市から乘合馬車で約三時間（五里）で島々に至る、旅館清水屋は、神河内温泉の經營者で、人夫その他の依頼に應ずる、郵便物等はこゝの家にて、人夫の手に依つて神河内に屆けられて居る。

先づ島々郵便局前から高山街道に別れ、村を離れると右の崖下に德合澤が表はれて、路は始終此の激湍に浴うてその左岸又は右岸を上流に進んで行く。一時間半で路の左側に山林局の小屋があつて、こゝから數丁で北澤林道（後章鍋冠山參考）分岐點の路標がある。

尙、上流に進めば一時間半で「岩魚留めの小屋」につく、その側に桂の大樹がある。こゝから次第につまさき上りとなつて二時間ばかりで峠の頂上に出る、頂上までは、眺望はないが少し下ると、正面我々の前面には壯嚴な穗高山の全容と、その左方につゞく連脈の上に笠ヶ岳の頭が見えて、北には赤澤岳、二ノ股、大天井、常念岳などが見える。穗高山の、最近き小峯明神岳の直下には、帶のやうな白い梓川と、それをつゝむ一面の楊林を望む、それは神河内の一部であつて、耳をすませば、その間から、靜かな瀨の音を聞く事が出來る、尙注視すれば森の間に、古鏡を埋めたやうな明神ノ池（宮川ノ池）を望む。下ること一時間ばかりで槍ヶ岳林道の分岐から左に折れて小橋を渡れば數丁で牛番の小屋がある。この附近はまだ、暴らされて居ないから、葉漏りの光を影す小さな水溜りの周りに覆ひ茂つて居る楊の綠を思ふまゝ眺めることが出來る。路はこの美しい密林の間を出ると間もなく、伐り倒された林の跡を通つて、右には穗高山の一角明神岳、左には頭上に霞ヶ岳を仰ぎながら南に向へば約二十五丁で梓川にかけた、殺風景な釣橋の上に出る、こゝは河童淵と呼ばれてその橋の上からは右に穗高の南面、左には燒岳の全容を見て、霞ヶ岳は正に頭上を壓して屹えて居る。橋を渡つて左折、八丁で温泉場に着く。

〔白骨路〕—島々から白骨温泉を經て、阿房峠の途中から右折して神河内に出る迂廻せる通路である。

島々から高山街道を西に向ふと、一里で稻核に達す、(乘合馬車あり)更らに一里半で奈川渡にて高山街道に分れ、尙ほ、梓川の本流に沿うて上流に向ふ、此の邊は、川岸が絕壁をなして急流の景は中々面白ろい。こゝから一里二十餘丁で大野川村に達す、(旅店そばや)此の地は乘鞍登山の一基點になつてをるが、白骨の新道は村に出ないで、直接に温泉に行くやうになつて居る。大野川村から背後の丘を登つて進むこと二十丁、檜峠の茶店に着く、更らに山側の路を辿り、一里二十六丁で白骨に達する。温泉は硫黃泉で眞白に濁つて、銀などはすべて、黑色に變じてしまふ、浴舍五、元湯及び新湯が一番大きい。しかし温泉としては兎に角、遊び場としては決して愉快なところでは無い。

白骨温泉背後の急坂を攀ぢ、または檜峠から分岐して阿房峠にかゝる、約一時間で路の右側に一農家があつて茶屋を兼業して居る、路は次第に山腹に沿ひ、濶葉樹林の間を西に向ふ、その右側は梓の溪谷に臨んで、景色も中々面白ろい。白骨から二里强、峠頂上の東方に、神河内温泉の分岐路があつて路標がある、こゝから右に下りて燒岳の山腹を繞り、山毛欅、樺、桂などの密林の下を北に向ふと、所々に山崩れの跡がある、下堀、中堀、上堀は燒岳から押し出した泥流の爲めに、路が分らない位に暴らされてしまつた、更に栂と熊笹の間を穿てる一路を辿れば、白骨から五時間弱で神河内に着く、近年大分山暴れがあつて所々に地辷りのあとがあるが、急坂少く比較的容易である、特に案内者を雇ふ必要は無い。

〔平湯路〕—飛驒高山町附近から來るには此の路に依るのが便利である。高山から五里で旗鉾村に着く、此の間丈は人力車が通ふ、旗鉾から山路にかゝつて三里ばかりで平湯温泉に達する、此の間には平湯峠があるがさう急では無い、その頂に御堂がある。平湯は乘鞍北麓に位し、こゝからその頂上まで一日で往復が出來る。吉城郡上寶村に屬し、浴舍も多く、北に笠ヶ岳の雄姿を望む、村山と云ふ宿が大きい(無論比較的)やうである、浴室は、外にあつて共同であるから餘りいゝ氣持はしない。

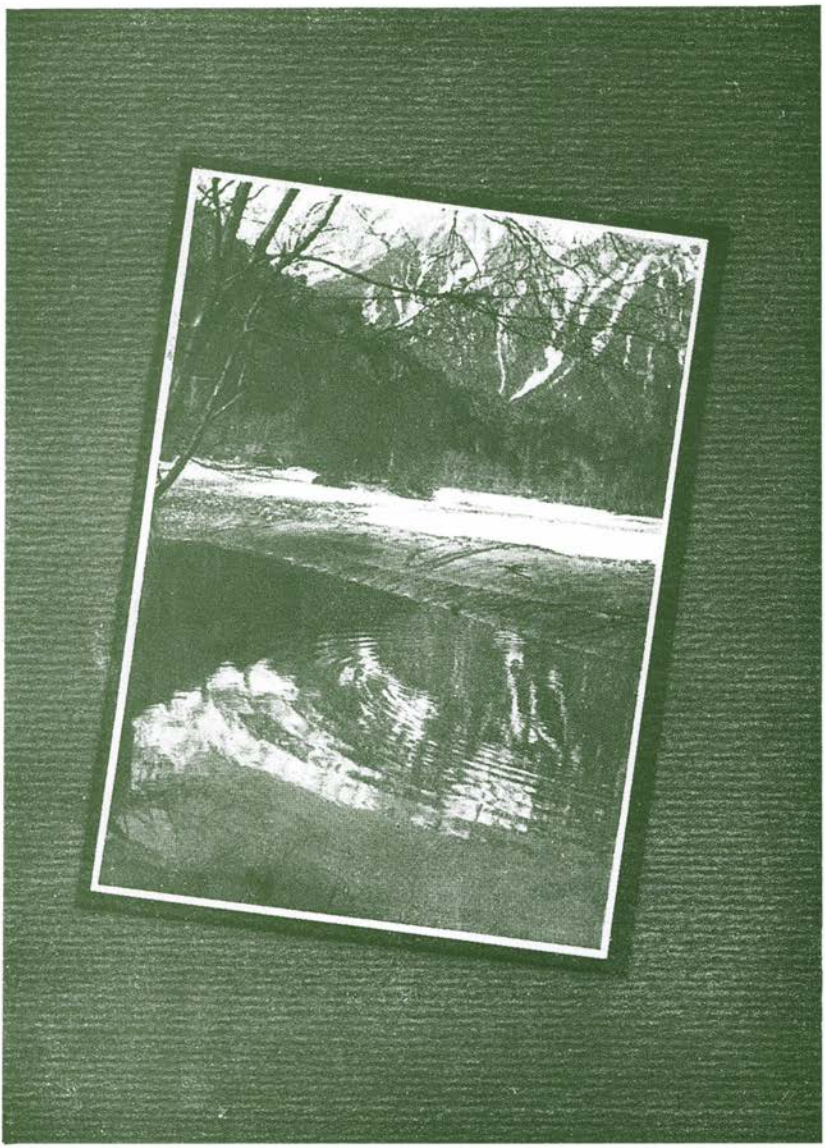
平湯から阿房峠の頂上に至る西側は、路を圍んで栂の大木が聳えて、實に立派な深林である、殊に秋冬雪に包まれた山の間に、眞黑な木立の屹えて居るのを想ふと、何とも云へぬ感じがする。神河内から阿房峠を越えて白骨に行く人は是非峠を西に戻つて此の美しい栂の森を見たらよからう。平湯から峠の頂上まで一里、更に東すること十丁ばかりで、前記神河内分岐點に出る。平湯から神河内温泉まで三里餘、四時間あれば充分である、案内者は無論要らない。

〔中尾峠〕—德合峠と中尾峠とは、神河内の東西にあつて、松本から飛驒船津への通路である。吉城那上寶村蒲田温泉は、船津を去る東方八里、笠ヶ岳の登山基點である。(旅店松下外二軒)然し宿の不潔と蠅の多いのには實に弱る。中尾峠に行くには、蒲田の硫氣孔附近から右に小坂を登り、狹い草原の間を進めば十丁餘りで中尾村に着く、用水の樋について行く坂は次第に急になつて、森林の間を屈曲して東に向ふ。峠の頂上は阿房峠と共に信濃飛驒兩國の國界をなして、南は近く燒岳に接し北は尾根つゞきに穗高山に連る。燒岳噴烟の爲めに樹木枯死し、その焦林の間から蒲田谷を距てゝ笠ヶ岳を望む。燒岳の登路はこの所である。峠を東に下れば北方に大障壁表はる、これを嘉門治翁は姥懷と呼んで居た。栂の密林と熊笹の間を下ると頂上から四十分で梓河畔の平地に達する、左すれば坦道二十分時で神河内温泉に着く、此の分岐點に路標があつて右すれば前記阿房峠の途中に出て、平湯または白骨へ行かれる。

〔稻核よりこの林道〕—稻核から霞澤を溯つて德合峠の西面で德合道に出合ふ、こゝまで四里八丁と稱せられて居る。

また此の他、梓川に浴うて下流に向ひ、阿房峠の路に會する林道があるが、途中大破して通過は困難である、此の途中に中ノ湯がある。(後章參考)

登山の途次。槍ヶ岳或は常念山脈から二ノ股川の分流點に下りて梓川を下り、または常念山脈を縱



辻村伊助氏撮影

山の影（穂高岳の倒影）

走して蝶ヶ岳附近から梓川に下り、または白骨から霞澤を溯り霞ヶ岳を横斷して其六百澤を下れば、何れも神河内に出られるが、溪流に沿ふの外別に路と云ふ路もないから、相當の準備と案内者とを要するは無論である。

神河内附近遊覽地

樹を失つた神河内にもはや昔日の面影はない。只伐り殘された對岸の森に、からくも、そのかみを忍ぶに止まる、しかし秀でた山と梓の瀨の音だけは、今も人間を知らなかつた昔のやうにこの溪をかこみ、この溪に響いて居る、森は無くとも、不快な人が住まうとも、此の瀨の音や、風の音を聞くだけで德合の汗はぬぐはれやう。

〔田代ノ池〕―梓川の東岸、霞ヶ岳の直下は展開せる綠野の間に、梅の森につゝまれた小湖がある、田代ノ池と呼ばれる。溫泉前の本流を徒涉し、またはその少し下流を涉りて半里、或は河童橋を迂廻して對岸の楊の密林を穿つて約一里で達する、小徑があるが初めて行くには案内者を伴ふ方がよい、行くつもりで池を見ず歸つた話は、しば〳〵耳にする所である。池邊は不規則な出入をなし、北方は梅の密林に覆はれ、南は一帶の濕原となる、池に數箇の小島がある、夏は小梨、躑躅が咲き、水に一面の梅花藻が開いてその間に穗高と燒岳の倒影を見る、冬も尙、全、凍氷せず、鴨の群が浮游し、夏は森蔭に岩魚を釣ることも出來る。池の北端梅の森林の間には轅形の古墳とそれを圍む半球形の塚がある、何物の遺跡か、その梅の幹に倚る時は此の仙境に眠むる塚の主の樂しさを羨むばかりである。もと、池は中々大きかつたが、霞ヶ岳から流れ落ちる埿の爲めに次第に淺くなり、且、濕原の水苔が盛んに繁茂して浮島のやうになつた爲め、池の領區は我々が知つてから後も、驚ろく程狹められてしまつた。穗高山と燒岳を眺めるのには尤も適した場所である。

〔宮川ノ池〕―徳合峠の頂に近い池見橋附近から見下ろすと、穂高の麓、密林の間に光る小湖を認めるであらう、それは宮川ノ池で、丁度、明神岳の直下に當つて居る。徳合の西麓なる牛番の小屋から西に、楊や白樺の森林を分けて梓川を渉れば嘉門治小屋に出る、その屋後數丁で池の畔に達する、池は中央がくびれて二つに分れ、その兩方は感じの上に非常の差がある、然し一般に小さな景色であるから、餘り印象の殘る池ではない。此の池の邊に穂高明神の奥社があるから、明神ノ池の稱がある。わが嘉門治は筏に乘つて此の池に岩魚を釣つて居る。

〔どぶ川〕―穂高山の南面、山麓の密林の間にある、スゲのやうな綠の草に覆はれた濕原で、その一部に、帶狀をなした川がある、こゝからは東に高く、霞ケ岳を望む、温泉からは、河童橋へ出て河の西岸の楊林を分けて岳川の方に向へば、半里ばかりで達せられる。

〔中の湯〕―梓河畔に湧出する温泉の一つであるが、別に温泉宿の設備は無く、こゝに行く林道も今は見るかげもなく荒れ果てゝしまつた。神河内温泉場からは、約二時間を要する、先づ宿を出て南に向ひ中尾峠分岐點附近から中尾路及び平湯路に離れ、梓川の右岸に沿うて下る。これはもと稻核に出る爲めの林道であつたが、數年つゞきの山暴れで、今は、路と云ふ名が辛らうじて與へられるばかりに荒廢してしまつた。約四十分で、右方、燒岳から來る崖崩れに出會す、是れは、平湯、白骨への林道の途中に見る上堀の下方で、こゝから尙ほ梓川に沿うて中堀、下堀を越えると徑はやゝ登りになつて、そこに二つの急な崖を行かねばならぬ、こゝで全く、川に離れて峠を越すと、再、河べりに下る、その下に湯瀧がある、中ノ湯と名付けられて、其附近には美事な霰石が澤山にあつた、温泉の量は隨分多いけれど、場所が極めて水邊にあつて、一方は直立した崖であるから、いろ〳〵の設備を施す餘地がない。温泉の側に流れて居る小瀧の水は酸味を含んで居つたが、温泉は殆んど無味無臭でまた丁度適温である。前記の林道は非常に荒廢して、場所によると人丈位の熊笹の中を分けて新に路を求めなけれ

ばならないから、むしろ、神河内から平湯路の林道を通つて、下堀の崖の下を左折して梓河畔に出れば、比較的容易に達せられる。

〔千丈ノ瀧〕—中ノ湯の少しく上流に於て梓川は狹い谷となつて、そこに一大瀑布をなして居る、千間ケ淵、釜ノ瀧などの名もあるけれど、川の右岸からは近づく事が出來ない、只、その響に瀑の大さを想像するに過ぎない。

また下流約一里の東岸にも温泉が湧き出て赤ノ谷と呼ばれて居るが、これもまた路らしい跡もなく、浴舍などは無論出來て居らぬ。

今、余は神河内についてその大畧を盡した、次にこゝから登られる山岳をあげて更に常念山脈の登路に移らうと思ふ。然し穗高、槍ケ岳などについては、今こゝに記載すべき餘白もなく、且、いろいろの精密な記事もすでに度々出て居るから、今は、たゞ、燒岳、穗高、槍ケ岳の全縱走の可能なる事を附記するに留めて置かう。中尾峠の上から北方所々に硫氣孔のある間を過ぎて、直ぐに穗高山に行けるが、雜木や偃松が多いのでその間に一日を要すると云ふ、さうして三等三角點なる岳川ノ岳を越えて、穗高の最高峯に登れると、嘉門治に敎へられた。

〔燒岳〕—硫黃岳とも云ふ。標高二四五五米を有する活火山で、乘鞍、穗高の中間に屹えて居る。神河内温泉からは、中尾峠の頂上に出て左折（燒岳登山路の路標あり）立枯れの栂の林を過ぎて、すぐに山頂の大岩石の右側を望んで登る。所々に小噴氣孔がある、注意さへすれば、別に案内者の必要は無い、また伴れて行つたところで、一定の路がないのだから餘り役には立たないやうである。頂上へは峠の上から半時間ばかりかゝる。三角標は山頂の南壁に立つてゐて、南には阿房峠を超えて乘鞍岳の雄姿を望み、西北には蒲田谷を距てゝ笠ケ岳、錫杖ケ岳、北には穗高、槍、鎌尾根、蓮華、鷲羽等の連峯を望む、東は近く霞ケ岳の障壁と、その麓を取り卷く帶のやうな神河内の溪谷を見る。

燒岳に登るのには、中尾峠の外、南側なる細池附近からも登ることが出來る、即ち、阿房峠の神河内分岐點の側にある、細池と云ふ熊笹に覆はれた低地から、頂上の南壁に登ることができるけれど、森林と熊笹を分ける爲め困難で、案内者を雇はなければならぬ。尤も燒岳の頂上は阿房峠からも望むことが出來るから、晴天ならば、大凡の見當だけはつけられる、然し密林のことであるから、山に馴れたものを伴はねばならぬ。

遊覽の期節

神河内に遊ぶには四季いづれも宜しい、しかし、十一月初めから四月下旬迄は、全、無住であるから、それ相當の用意が必要である。單に景色を見る爲めには、六月下旬、七月上旬の若葉の頃が一番いい、その頃なれば山にはまだ雪が多く、また登山者も殆んど無いから、山の靜けさを味ふには。尤、適してをると思ふ。積雪中の登山には、上條嘉門治父子を除いては殆んど、案内が出來ない、父子はその間も山の小屋に行く事が多いから、前以て清水屋あたりに交渉してよく打ち合はせをさせて置く必要がある。

春、三月下旬になると時には崩雪の恐れがあるから、雨後の通行は頗る危險である、四月上、中旬は、積雪軟く、六尺を超えた德合の雪をこすのに困難であるけれど、未明に發つて雪の表面の凍つて居る中に通過すれば安全で、且、峠路を屈曲して登る必要がなく、まつしぐらに峠の凹所を目がけて登るから、時間はむしろ夏よりも少くて達せられる。たゞ、峠の西方は積雪の下底に溪流があるから、これを避けて溪の右側の斜面について行かねばならぬ。梓河原にも雪があつて、餘り軟かい時には、輪カンジキも何等の効を奏さないから、むしろ雪上の通過をやめて水中を下流に下る方が安全である、當時は、水量比較的少く川の大部分は膝を沒する事は稀である。

此頃は澤にはミソサヾイが盛んに鳴いて、木立は冬のまゝながら、楊林等を遠く望むと梢だけがうす赤くなつて、どことなく春の氣分がたゞようて居る、山は無論黑い所が極、僅かでその積雪の間から無造作に杖でもさしたやうな樺の枝につかまつて、夏はとても行けない所を飛び廻るのは實に愉快だ。

夏、五月上旬は、まだ山の春である、否、德合などでは、七月になつて山櫻の咲くのさへ見受ける、もう德合峠の通行も樂になつて、温泉場でも遙る〳〵島々から峠越しにビール壜やら茶代の請取やらを脊負つて、神河内にやつて來る、然し溪はまだ僅かに見えるか見えぬ程の綠に彩られて、春はたゞ日の光りとミソサヾイの歌に僅かにそれと告げられるばかりである。

六月のこゝは春の世界である。山櫻、つゝじ小梨が溪を染めて、その間々は、軟かい綠で峯の果そこには暢氣さうにたゞようて居る雲の近くまでつゞいて居る、氷も解けてやさしい水の音は始めて、鳥の長閑やかな歌と共に溪のそこゝに律をなして響いて來る。此の時期に尤もうれしいのは、月夜に見る小梨の花である、あの錯雜した枝はクリーム色の花に包まれて、朧にかすむ月光を浴びてはこゝかしこに仄白く眺められる。また穗高には晩雪が來て、溪の小雨がしば〳〵峯の雪となる、余は前年六月十七、十九の二日、山の中腹以上が眞白ろになつたのを見た。

七、八月、及び九月上旬までは登山家の來遊するもの多く、森の中、トリカブトの紫の間に牛や馬の遊んで居るのも忘れ難い一つに數へられる。また田代ノ池の梅花藻も中々美しい。

秋、桂は九月初めに凋落し、その酸いやうな香りも山の秋にふさはしい、十月に入れば秋色ますます加はつて山はいろ〳〵な色に彩られるけれど、楓はこの溪には餘り多くはない、下旬には山に雪が來て、溪の雨も時には雪となる事がある、此の期節に忘るべからざるは、枯れた林の枝に朝毎につく樹氷の美しさである。

十一月は全、冬、そして温泉は戸を閉ぢて宿の者は、島々に下り、神河内は無人の境となつてたゞ

時々嘉門治が小屋に獵に來るついでに宿を見廻はるだけである。

冬の山の美しさは十二月か一月でなければならぬ。たゞくれ〴〵も天氣を選んで、相當の案内者を伴ふ必要がある。冬になれば温泉の噴量少くして入浴する事が出來ず、且、宿はかへつて寒いから嘉門治小屋に泊めてもらふ方が樂である、德合の溪は積雪が深いけれど、梓の河原は三四尺を超えることは無い。

これは今改めて述べる必要もないが、凡て積雪中の登山には雪の反射を除ける爲めの色眼鏡と、輪カンジキ（是は清水屋で借りられる）を携へなければならない、雪燒けの爲めにゼオゾンクリームを用ゐるのも宜しからう。此の時期に於ける案内者は上條嘉門治及び子息嘉與吉を推選する。

〔神河内附近の案内者〕—案内者は清水屋に依頼して雇ふが宜しい。然しこゝの案内者は賃金が非常に高く、しかも他の山脈までに精通して居るものが少ないから、余等はいつも大町や中房あたりから逆に此の方面に出るやうにして、此の地の人夫をなるべく用ゐない工風をして居る、無論こゝにはわが嘉門治翁がゐるが、今は老體の事とて前から知つたものゝ他は案内しないことにして居る、翁は遠く高瀨川筋から、黑部川、針木、藥師附近までもよく知つてをる、その子息嘉與吉、及び上條兼吉も良好な人夫である。此の他には精しい案内者は殆んど得られない、賃金は他の地に比らべると極めて高價で、神河内島々間に一圓四十錢、（しかもその何れより雇ふも往復の賃金を請求する）山の案内には、一日食料をこつち持ちで一圓五十錢又は一圓八十錢も取るやうである。案内者と荷運びとを分けてゐるけれど、案内者と云つても、たかゞ燒岳、霞ヶ岳、穗高、槍ヶ岳位で、しかも素人にでも出來さうな案内のしかたで、北アルプスの主脈、立山々脈の一部などゝ來たら、案内が出來ると稱する者でも、一回か二回人の後にくつついて通過した者に過ぎないから心細い、然し所謂「冒險」好きな人があるならば、斯う云ふ案内で山旅行を企てるのもよからう、「但し妻子のある方々やエンゲーヂ、せら

れた人にはおすゝめすることは出來ない」。然し、槍や穂高(一部分)の案内なら、これでも充分なのは申すまでもない。

登山の準備としての米、味噌、及びある程度の食料は神河内温泉場で求められる、ついでに云ふがこゝの草鞋は、大町邊のに比べて非常に弱く、岩山にかゝると、一日二足も要することが多い、丈夫な草鞋と稱して不當な高價なものを、余の知人で賣りつけられたのは此の夏の出來事である。

また外人に對しては、やゝもすると定價の改定をしたがるから、諸君も之等の知人に對しては、豫め我々に對する賃を示すやうにしたら宜しからう。此の夏、友人が愛すべき神河内と惡むべき温泉場と云つた、ある外人の言葉を聞いたさうだ。

今、余はこゝに神河内に別れて、愉快な常念山脈、そこはまだ此等の人々の手に渡つて居らぬその山の案内に移らう、余は神河内の美しかつた事を思ふと共に、この年々に荒らされてゆく森の木や、また變つてゆく人の心に對して限りなき寥しさが胸に湧く、あゝそれも已むを得ぬ。今は、あらず世を恨みず佗びずたゞひとり涙ある兒と我をほゝえむ外はあるまい、今さらに、嘆くてふ言の千萬つらぬともわが思ふ心あかしかねつも。あゝ。

常念山脈の登路

北、日本アルプスと云ふ名のもとに知らるゝ山は、その山稜の方向と河川の位置によつて、南北に連續せる三つの並行の山脈に分たれる、中央は東面に梓川、高瀬川、姫川、西面は黒部川に臨んだ大山脈で、南は木曾御岳から北は日本海の親不知に及ぶ。その西方のものは立山々脈で、東方に位するものが此の常念山脈である。その最南は鉢盛山附近に始まり、北端は餓鬼、唐澤岳に終つて居る、然し霞ヶ岳の南方は梓川の溪谷で限られて居るから、山脈は丁度信濃川の二つの源流、梓川と高瀬川とに

圍まれた楕圓形の長軸を形くつて居る。瀛車が松本平を走る時犀川を距てゝ西に、雪を戴いた山脈が是れで、その景、眼につき易い高岳の名によつて常念山脈と呼ばれてをる。

常念岳の片麻岩、その以南の古生層(上部秩父古生層で主に粘板岩と硅岩とより成る)を除いては殆んど全部、花崗岩より成るその間の主な山岳は、

霞ヶ岳(八右衛門(二六四六)六百(二四五〇))

蝶　ヶ　岳(二六六四)　常　念　岳(?)

大天井岳(二九二二)　燕　岳(二七六三)

東　澤　岳(二六八三)　有　明　山(二二六八)

擂　鉢　山(二四六〇)　餓　鬼　岳(二六二七)

唐　澤　岳(二六三二)

此等の登山は一般に容易で、一二の澤をのぞいては登攀に危險少く、また山上の景も惡くない。萬一、暴風雨などで危險な場合にも、東面に下れば比較的容易に人里に達せられる。また此の方面からの登路は極めて多く、その大部分は、人家から一日で山頂に達せられる便がある。

登山の時期

その目的によつて時期を異にするのは勿論であるが、一般の單に山を見る人の爲めには、雪の比較的多い時、即ち七月上旬をすゝめる、その頃でも常念山脈では雪がすでに大部分解けて雪溪などは少しも見ることは出來ぬ、只、こゝから見る北アルプス主脈の雪を浴びた景色が、たまらない程うれしいからである。眺望には秋晴れの頃がよい、また五月、丁度入梅前の天氣つゞきには雪がまだ多くて、しかも氣温が比較的高いので、登山に尤も都合がいゝと云ふ。常念大天井抔は、適當の案内者があれば、冬期、雪の多い頃にも登ることが出來る、但し山腹に露營して、翌日一日に往復するので、天候

辻村伊助氏撮影

雪の くま（徳本峠の春）

を見定める必要のあるのは無論である。

山脈の北部、餓鬼唐澤等は峯には水が無く、七月上中旬には尾根に近い處の雪が消えてしまふから、その頃に登るには飲料水をかなり下から携へなければならぬ、此邊にはむしろ四月下旬乃至六月中旬を以て登山の期節とする方がよからう、余は餓鬼岳の北面は知らないが、その東、南の方面は澤は尾根まで達してをるにかゝはらず、その上部は草や樺のやうなものに覆はれて、夕立の後でさへ、水は石礫の間をくゞつて流れるから、ずつと下まで下つて雪溪に達するまで水を見る事は出來なかつた、且、尾根は全、岩山であるから、ところ〴〵に栂の林などがあつても水は少しも見當らない。

登山の準備

準備は松本市或は、更らに山脈に接近した出發點でする事は出來る。即ち、南安曇郡では豐科、東穗高、中房、島々、北安曇郡では大町に於て、人夫及び食料等の準備が出來る、登山の日數は、山麓の出發點から、全山脈を縱走するも五六日で充分である、只一二の主な山に登るのならば、一二日を山中に費せば足る。

草鞋は、大町の「紙卷き草鞋」は他の地方のに比べると丈夫で、普通の山には一足で一日半位履ける、大天井。常念岳附近の岩山には、他よりも多く草鞋を携帶しなければならぬ。

案內者及び人夫

常念山脈は前に述べた如く人里に近いから、案內者や人夫を得るにも特に遠くから呼びよせる必要がなく、各地の出發點を求められる。こゝで注意すべきは彼等の間に二派があつて互に反目してをることである。從つて人夫を雇ふにも各の一派に屬するものばかりを選ばないと、旅中不快な目に逢ふ

とがある、その一方は牧村の永田、小林など、他は横澤、畠山などで、彼等は同一の村に居て、否、その大部分は、殆んど隣同士でありながら、少くも山のことにかけては常に反目しあつて居る。余は此等のすべてを一度づゝ伴つて見たが、その中で諸君に推選の出來るのは、牧村山崎の小林喜作である、永田小十郎も惡くはない。畠山菊一、その弟の善作も常念岳附近槍ヶ岳あたりはよく知つて居る。先づその主なるものゝ姓名をあげて置かう。

牧村山崎　小林喜作
同　草深　永田小十郎
同　同　畠　菊一
同　同　同　善作
同　同　同　新太
同　同　同　團衛
有明村竹ノ巢　横澤類藏

此等は常念山脈を、主に歩るいて居るので、永田、小林及び一部のものは北アルプス主脈にも行つたことがあるが、笠ヶ岳、藥師、立山、烏帽子岳、以北、黑部川筋には行つたことは無く、穗高山、霞ヶ岳の案内も難かしい。類藏は大きなことを云つて知つた振りをするが、彼の言葉の中、余の保證するのは大天井、常念附近、烏帽子、鷲羽間、槍ヶ岳、神河内、及び槍ヶ岳の蒲田の右股ぐらゐのもので、その他の山岳に對しては、大いに讓歩して假りに彼の行つたと云ふ言を信じたとしても、それは、霧の中を登つて來たのか、または、今、彼れの記憶に何ものをも留めぬ程の古い、古い、古い昔に登つたことであらう。余は彼れが主張すると假定してもこれ以上の讓歩は出來ない。

此の邊の人夫は、豫め中房溫泉に依賴して出發點に來るやうにしたらよからう、賃金は一日食料を別にして一圓以内である。中房は、神河内と異つて比較的人夫も安く、今年、神河内の人夫が高價であ

るから。中房でも人夫の値上げをして呉れとひそかにすゝめて來たのにも反對して、依然原價を保つて居るやうであるから、さう急に、島々の人足のやうに惡變する心配はあるまいと想像せられる。大町附近から山に行くには、對山館に交渉すれば宜い、人夫は一日七八十錢である。

登　路

常念山脈ほど登路の多い山は少い、その出發點によつて中房、豐科、島々、大町の四つに分けて順次に紹介しやう、但し、全山脈の縱走は、大町、島々或は豐科からしなくてはならないが、その大部分に精通して居る人夫は豐科(牧に近き故)でなくては求められぬ。先づ各方面からの登路を擧げて、最後に全山脈の縱走路に及ぼそう、但し、どの山でも同じことではあるが二三の登路の外は、多少人の足形がある丈で、本當の意味に於いての「通路」は無いので、殊に中房乘越以北は、殆んど人の通つた跡も見えぬ位で、單に通過し得ると云ふつもりで、讀んで頂きたい。

一、中房温泉よりの登路

中房温泉は南安曇郡の西北に當つて、犀川の支流なる中房川の溪畔にある。こゝから登るに便利なのは、有明山、摺鉢山、東臺原、西臺原、燕、大天井、常念岳等で、山脈の中央の登山に便である、地は狹い溪間にあつて、北には有明から摺鉢、臺原につゞく山稜、西は、燕、大天井の連嶺で圍まれてゐけれど、近い山の爲めに温泉からは此等の山々を仰ぐことは出來ない。

東京方面から行くには、明科停車場から犀川橋を渡り、糸魚川街道から左折し、三里で宮城(みやしろ)村に行く、こゝから更に三里ばかりで温泉場に着く。宮城には荷物の運搬所がある。こゝからは中房川を下に見下ろす新道が出來て、非常に景色がよく、路も舊道のやうに惡るい所が無い。

豐科東穗高等からも宮城に出て後、新道によるのが順である、牧から直接に中房へ通ずる栗尾道もあるけれど、道が急であるからかへつて損である。

温泉宿は一軒であるが、廣くてまた新築の室もあるし、いろ〳〵の設備も山にしては充分にとゝのつて居る。これから各山岳への登路を紹介しやう。

有明山(信濃富士)二二六八米

松本平から遠望する形によつて不二の名がある、山頂に神社があるから麓の宮城及び中房から路がついて居る、里數は、その何れよりも約三里で、充分に山頂に時を費やしても一日で樂に往復せられるし、注意すれば案内者の必要を感せない、山頂は二つに分れ、その一方を北岳と呼ぶ、北岳から尙ほ、尾根づたひに西にゆけば摺鉢山から東臺原岳に出られる。

有明山頂からは、西より南に向つて常念山脈の障壁を繞らし東は、直下に安曇野を、またそれにつづいて松本平を見渡して、眺望は中々いゝ、登るのは無論、極めて容易である。

摺鉢山(二二四九〇米)

別に有名な山ではない、中房から燕岳に行く途中、濁澤で背後に中房川を距てゝ見える名の示すやうな山で、有明山の北岳から尾根づたひに行かれる、更らにその山稜を西に進めば東臺原岳に出て、こゝから北に行けば餓鬼岳、南に下れば乘越(東澤乘越、または中房乘越と云ふ)に出られる。摺鉢山の頂上には木が少いけれど、その途中には偃松や低い針葉樹が多くて歩るき惡くい。

又直接に中房温泉から中房川を渉つて、約半日で山頂に達せられる。

燕（ツバクラ）岳

濁澤、カッセン澤の二つの路がある、兩方とも濁りの頭（アタマ）の三等三角點附近で一所になるが、カッセン澤の方はやゝ近いけれど、人が餘り通らないから路形もなく時間は殆んど違はない、多くは濁澤を登つて行く、三角點から燕ノ偃松小屋の跡を經て山稜へ出ると、北アルプス主脈は、高瀬川の深谷を距てゝ屏風のやうに連なつて居て、眼下は湯股水股の合流點で、水股は殆んど正面に糸のやうに見える。此の山稜の右方西北に突出した雪のやうな花崗岩の山が燕岳で、頂上の二等三角點に立てば北アルプス主脈の背後に立山山脈を望む、東には、摺鉢有明の山稜を超えて北安曇野の一部を、また南にふれて、松本平、南安曇の高原を望む、こゝから見た槍ヶ岳は高瀬の溪谷に臨んで非常にいかめしく見える。朝少し早やめに中房を發てば、午後二時には頂上に達せられる。大天井に行くには、同じ所を偃松小屋跡まで戻つてから更らに山稜を南進するのだから、荷物を小屋塲に殘して登るのがいゝ。燕頂上から北へつゞく尾根を下りて、再び登ると臺原岳と云ふ岩山がある、尙是れを越えて東澤の頭（三等三角點）の東側から、偃松を分けてひた下りに中房乘越まで下られる、今年の夏、地形測量の爲めに切り開けが出來たと云ふけれど、余の通過した頃は、全然人の通つた跡の無い急な斜面に、透き間もなく偃松が密生して居るので非常に苦しんでしまつた。尤も中房乘越に極接近してからはいくらか木を伐つた痕跡を留めて居たが、兎に角乘越が非常に低くいから、山脈の縱走には、南から北へ向つて進む方が遙かに容易である、そして余の通過した頃には、逆に乘越から燕の方面に進むのは、荷物があつてはとても登れない位な苦しみをしなければならなかつたらう。

大天井岳(二九二二米)

オテンシャウ或は中川のテンシャウと呼ばれて居る。梓川と高瀬川の分水嶺なる東鎌尾根（單に鎌尾根と呼ばるゝも、槍ヶ岳の北に連るそれと區別する爲め特に東鎌尾根と云へり）に依りて槍ヶ岳に續く（その縱斷路につきては、後章を參省せられたし）燕の偃松小屋より尾根を南進してゲーロ岩と云ふ奇岩の下を過ぎ中川の切通しを越えて急斜を下り、更に登ると大天井の三角點へ出る、こゝから南に下ると、左方に東天井と云ふ小高い山があつて、尙下れば二ノ股の岩小屋に着く、中房を朝早く發てば燕岳に登り、大天井を越えてこの小屋まで一日で着ける、但し小屋は大分荒れて殆んど周圍の石垣のみ殘つて居る。水はその附近の殘雪を用ゐる。燕ノ小屋跡から二ノ股までは約四時間あれば行かれる。

また中房から直接に中川切通しの鑛山の跡へ出る鑛山（カナヤマ）路もあるけれど、鑛山と云つても單に試堀したゞけで、その路は殆んど人が通らない。大天井から二ノ股小屋までは約四十分を要す。

二ノ股の小屋の南なる岩山から、その尾根をつたうて草野に下り、一丁ばかりで右に行けば中川とヌカ川の兩溪の間尾根に出る、是を下れば中房の一里程、宮城によつた處の科野坂へ出られるが、路は惡るいさうである。

常念岳

最高峯（奥常念）には三角標なく、その東の尾根なる前常念に三等三角標あり。此の山の最近き登路は烏川を溯るを便とす。（後章豐科方面登路參考）

二ノ股の小屋から東方の斜面を下りて一ノ股溪谷の上方を横ぎり横尾通り（當字）の三等三角標を左

の上に見てその斜面を行くと、また下りとなつて常念の乘越と呼ばれて居る凹所へ出る、横尾通りの二ノ股に對する斜面の偃松の間には凍死者の骸骨がある、ついでに訪れて、雲を仰ぎながら偃松の香に眠むつて居るその身を羨んで行くのもよからう。

常念の乘越は常念岳(南)と横尾道(北)との間にある凹所で、東は烏川、西は梓川の支流常念澤の源である。此の低地の低い唐檜の間に乘越の小屋がある、すぐ下に水もあるし、木の間で風が當てなくて、薪もまた充分あるから二ノ股の小屋よりもむしろ宿泊に便利である、然し景色は二ノ股の雄大なるに及ばない。秋、水が涸れた時には、常念澤に下りて求めなければならぬ。

二ノ股から乘越まで約二時間半、こゝから常念の頂上までは上り一時間ばかり歸りは約三十分を要する。常念は梓川の谷を距てゝ穗高山の御幣窪に對して居る、東は廣くひらけて安曇野や松本平、桔梗ヶ原などは眼の下に展開して居て、北には木崎湖東南には諏訪の湖を望む。頂上の東面に小さな石の祠がある、こゝから直ちに南に下りると、蝶ヶ岳迄山稜をつたうて行く事が出來る。(後章參考)

二、豐科方面よりの登路

豐科は南安曇郡役所の所在地で、松本市から三里、田澤停車場より一里、何れも乘合馬車が通つてをる。こゝから島々へは五里、北安曇の大町へは七里ある。旅館は豐科館と安曇館とあつて余は後者へ泊つたが、土地のものゝ評判は前者の方がよいやうである、然し、何れにしても登山の案内者などの交渉は出來ないから、これ等は直接、または、中房へ依頼して約束するより外はない。

豐科から登るに便利なのは鍋冠、蝶ヶ岳、常念等であるが、どれにしても烏川を溯るやうになるから、その爲めの位置から云へば、東穗高へ泊る方が便利である、然し登山用品の準備には豐科の方がいゝ。東穗高村は豐科から一里で乘合馬車がある、田澤からの馬車も豐科へ出てからそこへ行く。(旅

館とをしや)。

案内者は牧のものを伴はなければならぬ。牧は豐科から二里、東穗高からは一里、路は辛うじて荷車を通ずる丈で、旅館などはない、たゞ牧の南から栗尾に行く途の十三屋敷と云ふ處に、冷鑛泉があつて賴めば泊めて呉れるさうである。

常念岳登路

一、牧の南方烏川橋の側から川の左岸に沿うて上流に向ふ馬道がある、上に近く常念を仰ぐ位の所迄路がついて居て、其附近には馬の放牧地さへある、そこから烏川の澤の支流なる常念の一ノ澤を上れば常念の乘越へ出る、川原は急湍なく水量も少いから、極めて安全に一日で二ノ股の小屋迄も達せられる。然し常念に登るのならば、乘越の小屋に荷を殘して頂上迄行つて來てそこに泊るのがよい。

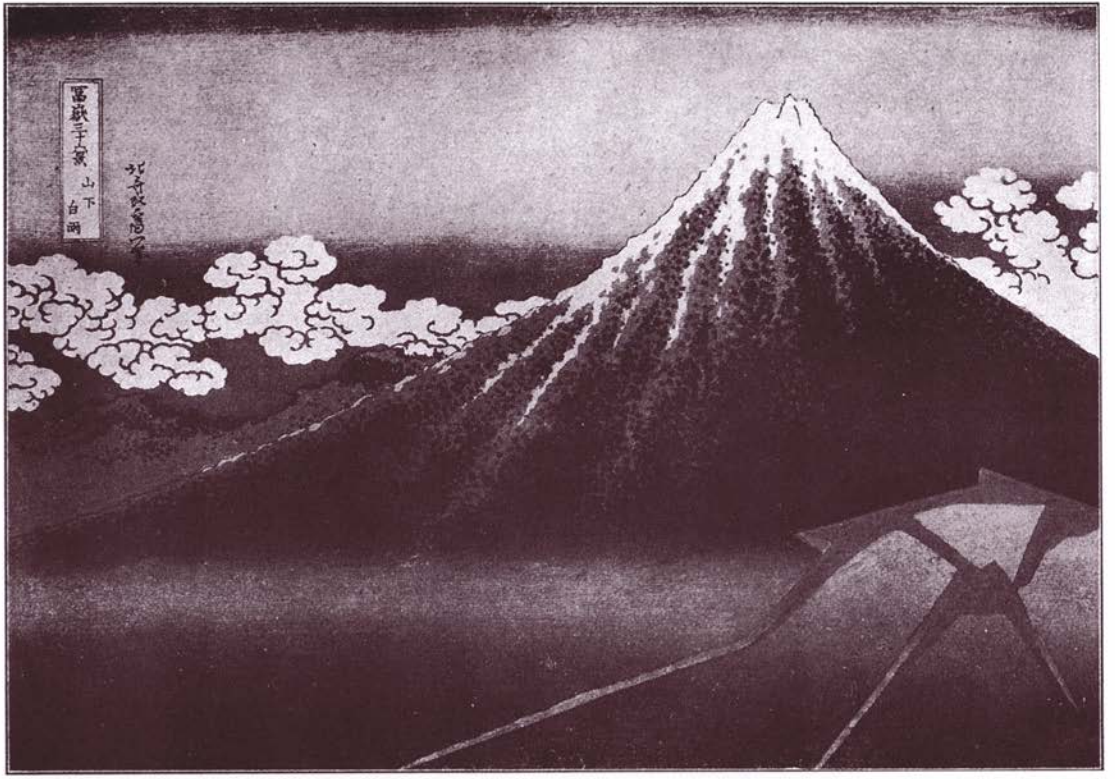
二、烏川を溯り常念の二ノ澤を上れば、前常念の頂上へ出られる、そこから、全、尾根づたひに奥常念へ登られる。此の路は一ノ澤に比べるとやゝ困難であるが、尙、登山には頗る容易である。

三、前記烏川の一ノ澤を登つて、左方から來る大きな澤（東常念澤）を上れば直ぐに前常念の三角點に達する。こゝからは尾根づたひに前と同樣にして行かれる。

四、烏川を溯つてオデラの原（小平ノ原？）を過ぎて澤について登ると、常念の南の尾根に出る、此の山稜を右すれば奥常念、左に行けば峯づたひに蝶ケ岳へ行かれる。

蝶ケ岳

一、常念岳頂上から南望すれば、低く蝶ケ岳の三角點が見える、この尾根を下りて、唐檜の密林の間をくゞつて行くと急な草原の上りになつて常念と蝶ケとの間の高所に達する、更らに尾根をつたうて



電光と夕立の富士（北齋）

下つてまた登ると、蝶ヶ岳のすぐ北の高峯に出る、そこの東南に低地があつて風を避けられ、餘り遲くない時期には雪があるから露營地に適してをる。此の低地からはすぐ南に蝶ヶ岳の三角標が見えて時間にしても十數分を要する丈である、こゝの尾根から見る穗高山は實に雄大で、正面に雪の多い横尾の溪を望み下に二ノ股の合流點や梓川河原を見る。

常念の頂上からこゝまで約三時間であるが、密林の間には切り開けが無いから、かなり困難を感ずる、そして無論、常念から下る方が比較的容易なのは云ふまでもない、此の間には尾根に所々小さな水溜りがあるが、濁つた腐葉に埋れた池で、ハンザキやハコネサウシャウウヲ等が居て、已を得ぬ場合の外は飲料に供することは出來ない。

二、烏川橋畔から右岸に沿へる林道を上流に向ふと、岩原の山神の祠があつて、その松林の間の一間巾の路を、右の崖に烏川を見ながら進むと左に小屋がある、橋から約、一時間半で烏川に渡した小橋をわたつて對岸（左岸）に移る、始めは一體に花崗岩であるが、此邊からは古生層となつて粘板岩を見る、林道には軌道があつて時に棧道のやうになつて居る、彼の橋から進むこと一時間餘（此の間に右方より落つる常念の二ノ澤を渡る）再、橋があつて路はまた川の右岸に移る、此の橋の少し下流に於て南から「崩れ澤」が分流して、路はその澤の左岸に沿うて南へ向ふ、時々丸木橋によつて或は左岸、または右岸に移る、分流點から登ること一時間で澤は二分する、その右から來るは「崩れの本澤」で左方の溪は「崩れの東澤」である、こゝに立派な小屋がある。「崩れの本澤」を溯れば蝶ヶ岳より南に位せる「崩れの頭」に出るから、それより尾根づたひに右に登れば蝶ヶ岳頂上に達する。

豐科を朝出れば小屋まで半日强で達せられるが、こゝに泊つて翌日蝶ヶ岳に出る方がいゝと思ふ。

三、崩れの東澤を登ると所々に小さな崖崩れの跡があるが、兎に角林道が出來て居て、三ヶ所に小屋もある、（內一ヶ所は全、荒廢せり）前記本澤と東澤との合流點から二時間ばかりで尾根に達する、そ

◎神河内と常念山脈　辻村

こから右に行くと笹の間に三等三角點が立つて居る、これが鍋冠山の頂上である。こゝから尾根づたひに栂の密林と根曲り笹の間を分けて西に進めば、時々かなり急な上りがあつて、遂に鍋冠頂上から四時間ばかりで、常念山脈の主脈と東に派出せる此の鍋冠山脈との交叉點に出る。その少し南方の主脈に三等三角點がある、此の交叉點には狹い低地があつて早い頃には雪解けの水も溜つて居る。こゝからは左に梓川の溪谷を見ながら常にそれを距てゝ穗高山を仰いで北に向へば、數ヶ所の登り下りがあつて或は偃松の間を或は尾根の石原を、或は低い栂や唐檜の密林を分けて、交叉點から三時間餘りで蝶ヶ岳頂上に着く、此の間に三ヶ所ばかり野營に適する所がある。

此の途は鍋冠山までは林道があるが、それから先の密林は餘り樂では無く、主脈の山稜に達するまでは殆んど眺望はない、只時々右に崩れ澤を超えて常念岳と蝶ヶ岳の尾根を仰ぐ丈であるが、栂の大森林の景色は何とも云ひやうがない程立派である。こゝに注意しなくてはならぬのは、蚋の多い事で、防蟲網を携帶しないと隨分不愉快な目に逢ふ。尾根には飲料水が無いから雪の消えた頃にはその注意をして途中で泊らない樣に日取りを定める必要がある、少しは早くとも「崩れの東澤」の小屋に泊つて、翌日蝶ヶ岳まで行く方が樂だ。

四、烏川本澤を溯つて蝶澤に入る事數丁にして右に切れ、その短澤（梓川の短澤と對す、故に便宜上特に東短澤と呼ぶ）を上つて蝶ヶ岳と常念の中間の凹所に出られる、そこから山稜を右すれば常念、左に登れば蝶ヶ岳に行かれる、西短澤を下れば梓川原まで出て、神河内に行かれる。烏川、牧附近から神河内に行く最近い通路であるが、路は餘り宜しくない、東短澤には瀧があるけれど、下流から向つて左に廻れば登攀せられる。西短澤には別に瀧などは無い。

五、前記烏川の本谷からその支流なる蝶澤を溯つても蝶ヶ岳に出られるさうである。

鍋冠山

一、烏川の「崩れの東澤」を登る。(前項)
二、蝶ヶ岳方面からの尾根をつたふ。(前項)
三、豐科から烏川村三田村を經て馬道がある、直接山にかゝる路であつて頂上まで小徑がある。
四、北澤林道による。(島々方面登路參照)

三、島々方面よりの登路

島々を起點としての常念山脈登路は極少い。霞ヶ岳は、神河内温泉からそこの人夫をつれて登る方がよいけれど、その他の山岳は、矢張り牧か烏川邊の案内者の方がよく知つて居るし、また前に述べた通り人夫の賃金も、遙かに廉價である。

鍋冠山

島々から德合峠へ向つて林道を進むこと約二時間、北澤林道分岐點(木標あり)にて德合道に分れて、右に川を渡つて支流北澤の上流に向へば、鍋冠頂上まで小徑がある、三角點の東の尾根で前記東澤の林道と合して居る。

霞ヶ岳

神河内温泉の對岸に屹えて居る、宿から見える三角點は六百岳と稱せられ、最高峯八右衛門の岳は右の前山に隱れて居るから梓川原からはその三角標を仰ぐことは出來ない。中央三つの岩が見えてそ

れを三本槍、または三つ石などゝ稱へて居る、温泉に對する正面の谷は八右衛門澤であつて、左するものを上八右衛門、右に入つて居るのを下八右衛門澤と云ふ、此の兩方は共に登ることが出來る。また河童橋の所に來る崖を劍薙ぎと云ふ、その形から稱へるさうである。

八右衛門岳に登るには、温泉の對岸の楊林を分け、下八右衛門澤をどこ迄も登つて障壁の上に出て、右に山稜をつたうてやゝ小高い所に出ると、前に三角標が見える、そこから一度下りて偃松の間を過ぎて草の斜面を登れば三角點である。温泉から約四時間で達せられる。山稜に出るまでは、谷が狹いのと、兩側の崖が急なので眺望は餘り無い、只、ふりかへると、脚下に綠の楊の間に帶のやうな河原と、燐寸箱ほどの温泉宿が見える丈である。谷は平日は水が無くて非常に崩れ易い。また山稜に近づけば偃松が多いので多少の不快をまぬかれない。

この山稜を三角點と反對の方向へ（北へ）進めば三本槍を過ぎて六百岳に行かれる。こゝから直ぐに田代ノ池に下りることも出來るけれど崖が急であるから、八右衛門澤よりも危險である、田代ノ池は山稜の一部から、眼の下に見下ろされて、その平地を距てゝ西に燒岳を望む、こゝからは、山荒れの時は噴烟の音響を聞く事が出來る位に近く相對して居る。

六百岳には、上八右衛門の澤を登つて山稜の一部、三本槍のすぐ北に出て、左に尾根をつたうて偃松の間を分けて達することが出來る。此の谷には少ないけれど數ヶ所の瀧があるから、登るには少し困難である、むしろ次の六百澤を登つて、歸りにこの澤を下りたらよからう、温泉からは約四時間を要する。

六百澤を登つて岳に行くには德合の牛番の小屋の南方から密林の間を過ぎ、花崗岩の漂石から成つて居る六百河を溯つて、暫くしてその支流なる、右から來る水無しの谷を、直ぐに山稜を目がけて登る、始終背後には、常念山脈の主脈と梓川の上流を木の間に望む、頂上に近づくと偃松が極めて繁茂

して少しも切り開けの跡が無いから、登るのに隨分苦しいけれど、温泉から三時間で頂上まで行かれる。

穂高山は正面に、其左には笠ヶ岳、錫杖ヶ岳、燒岳、右にはやゝ遠く常念山脈が眺められて、脚下は梓川とそれを包む綠の楊林が見える、温泉や河童橋、亦それを貫く林道などがはつきりと地圖を展げたやうに見える。穂高の麓には黑ずんだ栂の林の中に碧く、二つの池が見える。一つは明神の池で、一つはドブ川である、要するに六百岳は八右衛門岳に比して遙かに眺望がまさつて居る。何れに登るにしても案内者を伴ふ必要がある。

また六百岳から全く尾根づたひに德合峠までも、否、更らに縱走して蝶ヶ岳までも行けるさうではあるが、何しろ山は低く密林で少しも切り開けが無く、從つて眺望も少しもないやうであるから、余は、敬意を表して近よらなかつた、此の間の記事は、全く書くことが出來ない、只、熱心な方がその間を調査せられて、此のブランク、ページを埋められむ事を切望する。

蝶ケ岳

神河內温泉から德合の牛番小屋の前を過ぎて、梓川に浴うて槍ヶ岳に登る路を上流に向ふとその途中右の常念山脈から來る澤がある、その何れも瀧などなく、亦急な崖が無いから、やゝ、密林と能笹で苦しむ所はあつても、要するに樂に蝶ヶ岳の尾根に達せられる。その澤は木賊澤、熊裏澤、短澤等である。

一、梓の本流から右に折れてトクサ澤を溯り、その右の澤について登れば、烏川の「崩れの本澤の頭」に出る、その山稜を左、即ち北方に向つて行けば蝶ヶ岳に出る、神河內温泉から蝶ヶ岳まで一日で達せられる。

二、前記木賊澤の左りの俣を登れば蝶ヶ岳のすぐ近くに出ることが出來る。此等の澤の上流には方々に小さな水溜りがある、例によつて餘り好い水ではないが、野營する場所にも適して居る、此等の水溜りを木賊ノ池と稱してをる。

三、梓川を更らに溯つて矢張り右方から來る熊裏澤（すべて粘板岩の漂石）に沿うて密林の間を東に登れば、蝶ヶ岳のすぐ北の低い所に達する、それから常念岳の方へも、または、南に登つて蝶ヶ岳の方へも行かれる。

四、西短澤（土地の者は、單に短澤と呼んで居るが、東にも是と相對して同じ名の澤があるから西、東の名を冠して呼ぶ方が便利であらう、また牧の人夫小林は「東短澤」と云ふ名を用ゐて居つた）を上ると烏川の東短澤と向き合つた凹所に出る、こゝは常念と蝶ヶ岳との中間の低地で、蝶へは登り半時間强、常念へは三時間を要する。すべて蝶ヶ岳附近から西へ落ちる澤には大きな崖がないから極めて安全に下りられる。

五、德合峠の頂上から尾根づたひに栂の密林と根曲笹の中を分けて行けば蝶ヶ岳へ行かれる、途中に、二つ三角點があつて、二つ目の三角點の北方から低く東に分れた山稜が鍋冠につゞく支脈で、その支脈の左方は崩れの本澤、右は黑澤の上流である。

常念岳、大天井岳

一、槍ヶ岳登路、梓川と二ノ股川との分流點（落合と云ふ）から北に二ノ股川を溯つて右から來る二ノ股の澤を登り、暫くして山腹の針葉樹林の間を東に登ると二ノ股の小屋の南へ走つて居る赤く見える尾根の凹所へ達する、こゝから尾根づたひに左へ行けば二ノ股の小屋へ行かれるし、また凹所を東へ下つて一ノ股を左に溯れば横尾道の南へ出られる。或は常念澤を登つて直接に常念の乘越の小屋

へ行くことも出來る。常念澤は下流に瀧があるから、どうしても此の尾根まで來なくては梓の溪へ行かれない。

二、梓川を溯り、二ノ股川を北にその源まで登つて直接に大天井岳の南へ出られる、または源に近い右の斜面を登つて二ノ股の小屋のすぐ前に出ることも出來る。

三、槍ヶ岳と大天井とを連ねて、梓川、高瀨川の分水嶺となつて居る東鎌尾根を通る事が出來る、先づ槍ヶ岳の東南なる赤澤岳に登つて（梓川上流、槍ヶ岳の方へ出る所から右に小溪を登る、斜面は草に覆はれて辷り易いけれどミヤマハンノキやタケカンバが繁つて登ることが出來る）そこから尾根づたひに西岳に出て、窓岩の側を過ぎて大天井に出られる、陸地測量部で西岳の三角標を建設する時、牧の小林喜作、永田小十郎の二人とも此の尾根を通つたことがある、中房方面から槍ヶ岳に行くには比較的近い通路である。赤澤岳と槍ヶ岳との間は岩山で通過はかなり困難な事と察せられる。

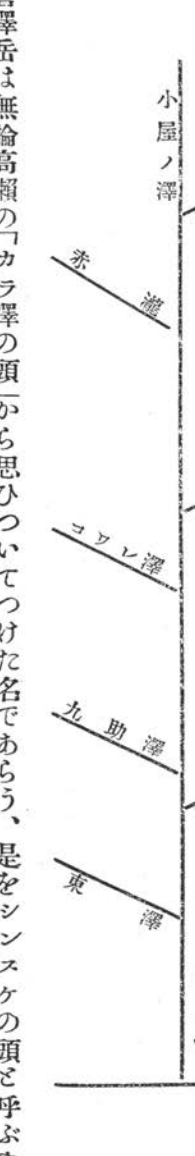
四、大町方面よりの登路

此の方面からは、常念山脈の北部の餓鬼岳、唐澤岳（空澤なるべし）等に登るに便利である、大町から蒡の湯へ出るのと、常磐村清水に出て乳川を溯るのとの二つある、何れにしても大町大出邊の人夫には充分に案内を知つてるものが少いから、やはり中房の方から雇ふ方が安全である、殊にひき續いて南走するには是非ともさうしなければならぬ。

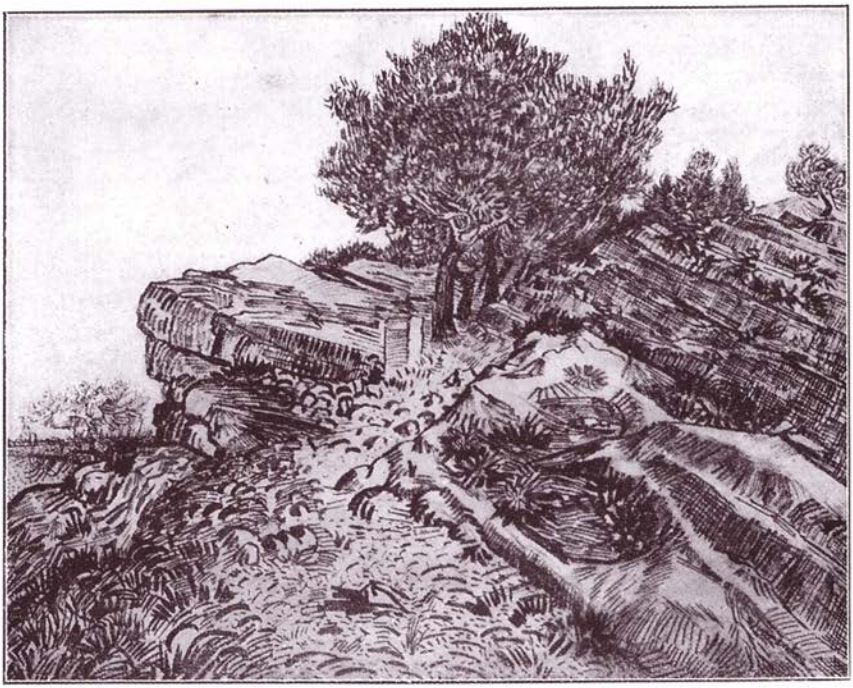
農商務省地質調査所で出版した四十萬分の一の圖その他いろ〳〵の地圖に、餓鬼岳の位置に五六岳の名が見える、それを何と發音するかは知らぬけれど、讀めさうな音に近い名を持つた山は此の山脈中には斷じて無い、只、天保年間の出版にかゝる不二見十三州輿地圖に、信濃の國の西側に澤山に山が畫いてあつてその中に餓鬼岳、五六岳の名が見える、推察する所、五六は野口のゴウラウのことで

漠然と信濃の國境近くに名を記したのを、陸地測量の部輯製二十萬分ノ一地圖にも相當な山の形を出鐫目に畫いて、南五六などゝ云ふ名を付けてしまつたのではあるまいか、尤も、あんな地圖は、一萬尺に近い山も無く、有りもしない山さへ製造するのだから、五六は愚か七八とでも九十とでも命名したとてあへて不思議な事はあるまいとも考へられる。

一、大町から野口村を經て大出に於て籠川入りと分れて左に高瀬川に沿うて上流に向ふと三里で葛ノ湯に達する、そこ迄は崖の途中に道がかゝつて中々面白い景色である、葛ノ湯には温泉宿が一軒あるけれど、米、味噌（辛うじて名の付けられる）の外は食料の準備は出來ない、葛ノ湯のすぐ南に東から落ちる澤が瀧ノ澤で是を登つて餓鬼岳に出られる、その上の方はかなり急な崖をなして居る、また小瀧が多いけれど水量は少い、ついでながら瀧ノ澤の小溪の名をあげて置かう、これは、四十二年に高瀬川を溯つた時、福島宗八と、倉科仲十から聞いたのであるが、關係的位置や、大きさを知らないから、前年の附錄地圖にも中村君に相談して特に省略したものである、地圖の價値のないのは余自身も承知であるが、只參考の爲めに記載する。



唐澤岳は無論高瀬の「カラ澤の頭」から思ひついてつけた名であらう、是をシンスケの頭と呼ぶやう



（ホツゴ、ンアヴ）陵　丘

（ホツゴ、ンアヴ）谷　峡

である。

二、葛ノ湯から高瀬川の左岸に沿へる林道を上流に向つて、一時右岸に移りまた不動瀧ノ前で釣橋を渡つて、濁りの小屋を過ぎ濁り澤ヒル澤を渉ると、再、釣橋で川の右岸に導かれる、こゝから間もなく、傳平の小屋がある、大町からこゝまで一日で達せられる、小屋の南方の東澤を溯つてその一ノ澤を左に登れば唐澤岳に達せられる。

三、前記東澤をどこまでも登ると、東澤と中房川との分水嶺なる「乘越」に達する、傳平の小屋から半日强（中房温泉よりも同樣）乘越の左方熊笹の間に小屋の廢跡があつて、その附近には非常に笹魚が多い、この斜面の梅と笹の間をくゞつて登ると一時間ばかりで、東臺原岳に出て、西北につゞく鋭い岩角を過ぎると三十分で乳川の中ノ澤の頭に下りる、こゝの山稜の梅林の間に小屋の全く壞れた跡があるが、附近には餘程下の溪まで下りなければ水は求められない。六月下旬まで雪のある頃ならば、此の林の中で狹いながら野營することが出來るが、その後なれば、飲料水を携へなければならぬから、むしろ乘越に夜營して、翌朝未明に登る方がよからう。此の中ノ澤の頭から見ると、餓鬼岳連脈は頭上につゞいて極めて壯觀である、三角點へはその連脈の西側に沿うて岩角をつたうて行くので、東は急な崖であるから通過することは出來ぬ。

四、高瀨川上流出合の小屋より少し手前のセバ澤を溯つて、途中から右に切れて前川九里澤に出て、更らに右に登つて川九里澤を上れば大天井に出られると云ふ、出合までの記事は前年の「高瀨入り」と重複するから畧す。

五、乳川よりの登路

大町から高瀨橋を渡つて穗高街道を南進して常磐村清水に行き、乳川を溯つて餓鬼岳に行かれる、

◎綱河内と常念山脈　辻村

大町邊にはかへつてその邊の地理を知つてるものは無いやうである。牧の小林喜作は、今年つれて行つたから此の邊をも詳かにして居る。

一、乳川の釣魚澤に沿ふ小徑を上つて左方の密林を尾根について登れば、餓鬼岳の三角點に達せられる。

二、乳川にそゝぐ南澤との合流點の左岸に二股（フタマタ）の岩小屋がある、乳川を前にして絶壁の下にある窟で數人位入ることが出來る、その南澤を溯つて左股を上れば摺鉢岳に達せられる、また左股の途中から左に切れて登ればバロウ岳に行かれる、また、南澤の右股の頭は、東臺原岳であるから、澤のまゝ溯ることも出來る。

「バロウ岳」へは、有明山の北岳または東臺原岳から摺鉢岳へ出て、その北へ曳く低い尾根を下つても達せられる。

三、乳の北澤を登つて右股の澤または尾根を上つても餓鬼岳に達せられる、然し木が茂つて居て頗る困難であると云ふ。

四、乳川の本澤（中ノ澤）を溯ると二つ大きな瀧がある、其左の崖を攀ぢ登ると雪溪の下に出てここから上を中ノ澤の「ダイモンアラシ」と呼んで居る。此の瀧の下の左岸に適當な野營地がある、ダイモンアラシを登りつめると中ノ澤の頭へ達せられる、こゝから右すれば餓鬼岳へ半日弱、左すれば東臺原を經て東澤に下りられる。

要するに乳川は、水量こそ少いが瀧が多くて餘り愉快な登路ではない、下の方には路らしい跡があつたり、炭燒竈があるけれど、路は全、草に覆はれてしまつて居る。

以上でほゞ常念山脈の案内を終つたつもりである。次に全山脈の縱走路に就いて一言したい。

常念山脈を北から來れば蝶ヶ岳、鍋冠山などは、中央の山岳から眼下に見下ろされる爲め、とても

行く氣がしなくなつて、つひ途中で止めにするやうな事になるから、またその上、東澤の頭(乘越)から登るのは非常に苦しいから、むしろ南から北へ尾根をつたうのが宜しい、即ち霞ヶ岳から、或は東の鍋冠山から蝶ヶ岳を越えて、常念、大天井、燕等に登つて餓鬼岳へ出て、大町方面へ下るので、その間には五六日を要するに過ぎぬ。今、參考の爲めに日程と、野宿の豫定地をあげて見やう。

一、豐科より崩れの東澤を溯りて小屋に泊る。(半日强)
二、鍋冠山より尾根づたひに主脈に出で蝶ヶ岳の北低地まで。
三、常念を越え二ノ股小屋まで。
四、大天井、燕、臺原岳を起えて中房乘越に夜營。
五、東臺原、餓鬼岳を經て葛ノ湯に至る。
六、大町まで約四時間。

日程に注意して、水のある所で野營し得らるゝやうに心掛けないと非常に苦しい目に合はなくてはならぬから、少くも以上の日數を要するやうになる。

以上の記事は締切りの時日が非常にせまつて居た爲め書き改める餘裕が無かつたので極めて亂雜であるのは何とも申し譯けがない。熱心な會員諸氏の手によつて充分に補つて頂いて尙外の登路などの御敎示を仰ぎたい。また此等の記事に御異論を有せられる方々は、紙上に、或は直接小生または事務所あてにして敎へて下さるやう御願ひします。(終)

(編者曰)神河内溫泉及び方々の人夫等に就いて不滿足に感じたる事はいろ〳〵ある此等の事項は大分、澤山手許に集めたからそれ等は一まとめにして號を改めて發表する事にした(蝶郎)

雜錄

「白峰三山に就いて」の異議を讀む

前號に續いて、白峰に就いての臆說を陳べる、農鳥山と農牛山とを同一に見たのは、「甲斐叢記」の外に、「大日本輿地便覽」や、『國郡全圖』や、「大日本輿地路程全圖」に、今日我々のいふ農鳥山で、其時代若しくは其前後に刊行された大地圖に、農鳥山とあるべき所に農牛山と記名してあるから、『甲斐國志』の鳳凰山の記事中に、『山梨鑑』と同意味のことが載つて居たが、前者に據つたのである、併し前三圖は、前號にも記載した、有名な長久保赤水先生の「日本輿地路程全圖」が基礎をなしてゐると想はれるから、『甲斐國志』の方が正確なのであらう。

二農の上といふことは、小島兄の解釋通りかも知らないが、我は甲府から見える間ノ岳は、農鳥山に「跨がるやうに、その上に拔け上がつて」とは、いくら注意して見ても、さうは思はれない、同一筆法だとして引かれた、峽中紀行の迦葉の上の所も、「芙蓉峰小く」(七年一號一〇八頁參照)では、

拔け上がつた、跨がるやうといふことが矛盾して來るやうで甚だ妙でないと考へられる。

次に享保中勅許八景の一、白根夕照の歌に就いて、小島兄は、「白峰は三山の總稱である限り、北岳が省かれてゐやうと、ゐまいとかまはない、況やこの歌は、甲斐八景の一で、今日で謂ふところの、甲府市に限られて、詠じた歌ではないのである」といはれたから、其辯解を試みる、前々號に甲府に許り重きを置いて、甲斐國を眼中に入れなかつた理由を說明しなかつたのは、實は、こんな事は誰れでも御承知と想つて居たからであつた、德川時代殊に其初期には、勳功があつて、將軍から國々へ封ぜられると、何々侯といふ大名になつて、其國の人民の生殺與奪の權や、其國の全收入の事實は其大名のものとなつて、何づれも或る點までは、大名が勝手にすることが出來た、そこで國に封ぜられて其國を治むるといふよりも、國を所持してゐる領主といふことになつて、大名の居る城下が、殆んど其國全體を代表したものである、今でも其風が遺つてゐるのは、老人の咄しを聞いて居ると、甲州へ行つて來た、信州へ行つて來たといふ、我々は聞くと漠としてゐるが、昔の人には夫れで解るのである、甲州といへば、今日の甲府の事を指すのであつて、信州と云へば、上田とか松代とか、松本とか、何づれ大名の居た城下をいふのである、若し城下でない處へ行つた、塲合には、信州在とか、甲州在とか、甲州の方、信州の方へ行つたと云ふてゐる、昔の人が城下を重んじた一例として、有名な谷文晁の『名山圖會』の卷尾に附してある、川村博が文晁に文句を云つた一文を揭げる。

向者、家君の名山圖を輯するや、南部の磐手山の如き、乃ち谷文晁其弟元旦の、東遊の途中にて、圖する所に據りて而して寫す焉、後、余家君に從ひて南部に遊ぶ、城下より之を望む、圖する所と頗る類せず、城下の人、亦圖の其眞にあらざるを疑ふ、蓋し元旦の圖する所は、郡山驛にして望む所なり、然れども磐手は、一邦の鎭たり、宜しく城下より望む所を以て正しと爲すべし、及び姫嶽も亦南部の名山なり、而して前圖之を逸す、因て又文晁に請ふて、更に之が爲めに圖し、以て卷末に附する爾。

大名といふものゝ殆んど全體は、艱難辛苦をしたことがなく、我儘氣儘に育てられたものである

から、虛榮心許り强い、平凡な殿樣が出來てくる名への贈品に使はれたやうな事は、決して珍らしい事でない、大名が他領はさて置き、自分の封內を遊覽すると云ふ事でも準備が大袈裟であつて、容易に企てることが出來ない、大抵

其殿樣達が江戶へ參勤して、大勢顏が合ふもんだから、御國自慢が燥んに出たものであるさうだ、御國自慢と云ふと、自分の領土の豐穰な事や、物產の饒多の事や、人民の溫良の事や風光絕美な事などである、備前侯が備前燒の別製とも云ふやうな、伊部燒の賣買を禁じて置いて、公卿や大仲々自身で親しく觀覽することが出來ない、大抵

第一圖

甲斐國全圖

一仙丈岳、二駒岳、三朝湯岳、四觀音岳、五鳳凰山、六地藏岳、七藥師岳、八御室山、九甘利山、十字デンツク峠、十一ザルケ岳、十二七面山
ナ、奈良田、ユ溫泉、カ上湯島、シ下湯島、ク黑桂、ニ西ノ宮、ホ保、ア蔵倉
中岳に「農鳥山と云」南岳に「別當代と云」と記入しあり
原圖は漫畫式也、今概略を示すものにして、曲線は山項を除きて、他は漫畫の間なる意なり

繪師に寫生させて、夫れを看て滿足して居たものである、そんな窮屈な思ひをして居るからでもあらうし、金に不足はなし、旁々閑暇なので、自分の邸内や、別墅に種々凝つた庭園を築いて、さうして何々何景といふ樣な命名して、其當時の諸名家に、繪や詩歌文章を需めて、嬉しがつて居たものである、其風が一種の流行となつて、士大夫、農家、町人に至るまで、少しく餘裕があつて、風流氣を持つて居た人は、多く其眞似をしたものと見える、鳥渡見當つた二三の例を擧げる。

第二圖

『羅山詩集』卷八、松平安藝牧君、別業を廣島百雉の畔に築く風景を此樓に聚め、海山を其地に縮む、其示諭する所を聞て、彼の佳麗たるを知る、方今、使侯をして余が其事を賦せんことを請ふ、遂に四韻を綴り、以て其に應

山梨縣新圖

こ、駒ヶ岳、ち地藏ヶ岳、な、苗ジキ山、ほ鳳凰山、し白根岳、の濃鳥山、さザルガ岳、し七面山、一奈良田、二湯島、三三里、四都川、五硯島、六平林、七秋山、八湯澤、九塚原、十野瀨、十一神林、十二芦安、十三源、十四旭、十五神山、十六清哲、十七園野、十八駒城、十九新富、二十臺ヶ原、廿一菅原、廿二下教來石、廿三風來

原圖は濃淡式なり、此圖の曲線は第一圖の說明に同じ

◎雜　錄　「白峰三山に就いて」の異議を讀む

す。(詩略す)

同卷九、松平式部大輔忠次別墅の十景、四品吏部大卿源君の別業、武州湯島に在り、頃者、新に茶寮を築き、吾儕を招て之を見せしむ、門に入りて點埃なし、以て俗骨を清すべし、且つ美景多々、其中十題を揄び、余が詩を作らんことを請ふ、是に於てか書す焉。(詩略す)

同卷、庚辰孟陬下浣、井上君河州太守の招に應じ、其經始する所の別業に赴く、望中の佳景、言を以て之を述べ難し、太守倭歌あり、其末字を摘み以て韻となし、絶句二章を賦して以て捧ぐ焉。(詩略す)

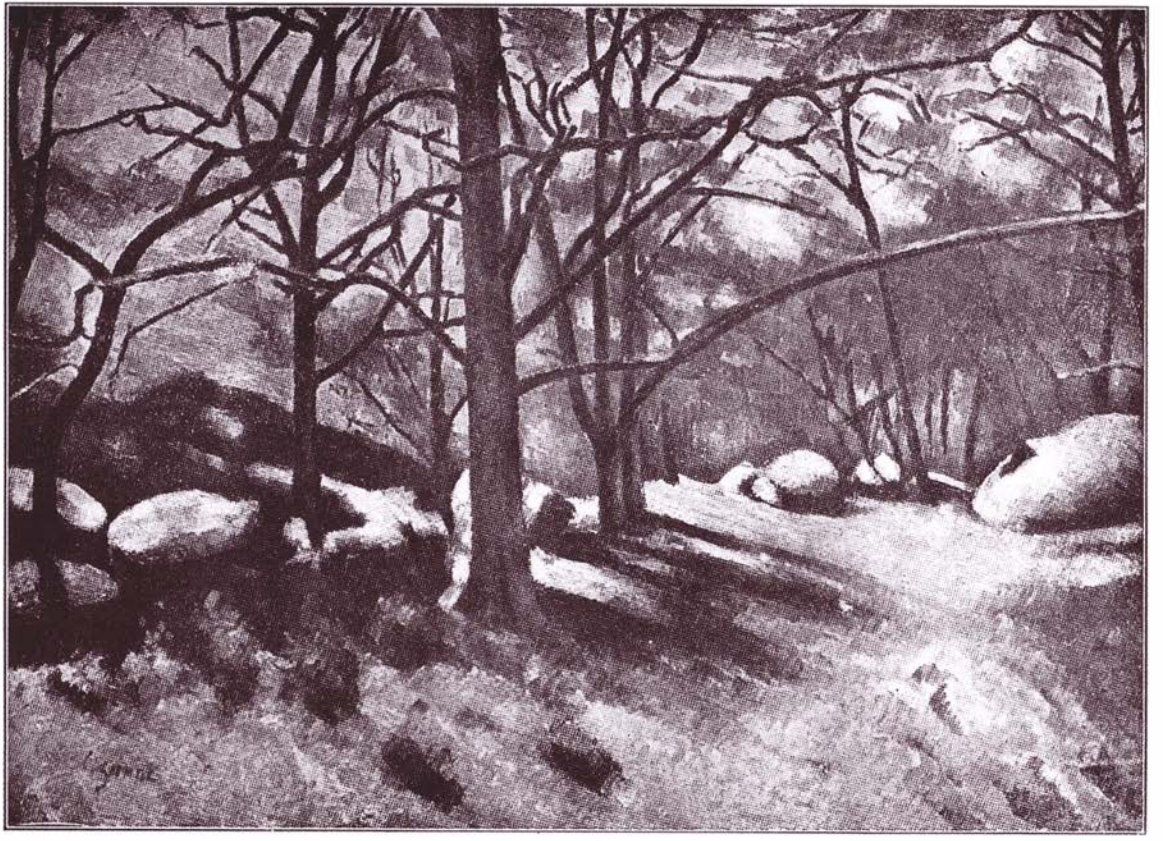
同十卷、武田道安別墅の六景、官醫、法印道安字は退、源は其姓、武田は其氏なり、別業を城北の市原の山中に營む、號して夕佳樓といふ、樓畔に景致多し矣、其勝を擇びて而して名を立つる六あり、詩を余に請ふこと甚だ懇なり、因て遐想して以て之を賦す。(詩略す)

『鵞峰林學士詩集』二十二卷、從四品吏部大卿源君、新に茶寮を別業内に營む、登覽諟を願み、滿目美を聚む、其中の尤なる者を標出して。十景を揭げ、余が郎罷(父を云ふ、羅山を指す)に請ふて、之を題詠せしむ、是に於て余も亦、其求に應じて以て俚語を賦する左の如し。(詩略す)

『紹述先生詩集』卷八、泉州垂裕堂八景の詩、梅所主人は泉南の土豪なり、世々日根縣の佐野に貫す、其居る所の正堂を垂裕といふ、山海邑里の勝、左右に接するもの、或は遠くして而して之を攬め、或は近くして而して之を領す、嘗て景目を設け、第し

て八題と爲す、客歲三韓の詞客來聘す、主人其學士、書記等に丐ひ、各序詩を求め、已に三數卷を得たり矣、亦來りて予に徵す、予未だ其居に造らずと雖も、嘗て紀、泉の間に遊び、畧ぼ其景勝の大概を得たり、因て題に就て詞を撰へて、以て其責を塞ぐ、後世、郡乘を修むる者あらば、必ず一故事に供へんことを知る、主人の好、何ぞ其れ雅なるや。(詩略す)

祖徠の文集にも「惟適園六景叙」が載つて居る、當時の諸大家の詩文集や、歌集を漁つたなら、隨分多く引用することが出來やうと思ふ、さうして何々何景と云ふものは、例外はあるでもあらうが、大多數は其場所から見聞の出來るものに限られて居るやうである、前記、林羅山の『羅山文集』や、其子春齋の『鵞峰林學士詩物』に載つて居る、松平忠次の十景は、「東叡山の櫻、聖堂の杏壇、房州の薫風、武野の暗月、菅祠の雪松、前池の白鳥、淺草の莽蒼、遠寺の塔影、檻外の征帆、江府の萬戸」であつて、泉州垂裕堂の八景は、「葛城の峰、淡路島、茅渟の海、武庫山、日根野、吉見の里、與津崎、佐野の浦」で何れも其別墅、正堂から見聞することが出來たものらしく想はるゝ、一體我國での何々何景と云ふことは、近江八景から起因



（ヌンザセ ルーポ）　森

第三圖

甲斐國全圖

十二、大武川
十一、芦倉
九、草鹽
八、保
七、早川
六、黒桂
五、四ノ宮
四、大原野
三、新倉
二、湯島
一、奈良田
ア、荒川岳
チ、地藏岳
マ、前岳
あ、雨畑山
七、七面山
さ、イサルケ山
の、濃鳥山
ほ、鳳凰山
ち、地藏岳
こ、駒ケ岳

山　岳

して居るらしい、『大日本地名辭書』四六九頁に。

湖上の八景は、明應九年、近衛關白閣下、江州に滯留の頃、瀟湘八景に擬して之を撰まれたるとぞ、世に近江八景と稱す、其題目、三井晩鐘、石山秋月、堅田落雁、粟津晴嵐、矢橋歸帆、比良暮雪、唐崎夜雨、勢田夕照等にして、本邦各地の八景名詩、皆之に因りて更に摸擬を爲す、微響の尤なる者歟、云々。

と記してあるが、『續日本史』の卷二十五、近衛信尹傳中には、「信尹文才經俊、筆力遒婉、世に著はる、嘗て、相國寺の樸長老、近江に謫せられ、湖畔に就いて。八勝を撰び、詠歌す、赦に遇ふて歸へる、之を信尹に視す、信尹詩之に和す、人々傳へて之を寫す、紙價爲に踊る、世に近江八景と唱ふる者、斯に權輿す」とある、併しこゝでは甲斐八景も、矢張り近江八景から摸倣したものであらうと云ふことにとゞめて置く。

當代の諸侯、士大夫が何景といふものを選擇されたから、柳澤吉里侯も、其例に漏れずに、殊に異數の立身であつたから、非常に驩ばれたらしく、其上に和歌が出來た人であつたから、猶ほ更ら八景といふやうなものが欲しかつたものであらうと想はれる、其の八景といふものを擧げて見ると、夢山春曙、龍華秋月、富士晴嵐、惠林晩鐘、石和流螢、金峰暮雪、酒折夜雨、白根夕照であつて、今の甲府市、それも甲府城から見えるとか、聞へるとか云ふ處に限られたものと見るのが、當然であらうと考へられる、決して小島兄が云はれるやうに、甲府の八景でなくて、甲斐の八景だから、甲斐全國の中から、最佳景を選定したと云ふ譯では無いのである、それは前に揭げた、甲斐と云ふのは、甲府と同意味であるといふ、城下本位や、諸侯や士大夫等の何々何景を選定された事情などに、考へ合して見ると、略ぼ推測することが出來やうと思はるゝ、甲府城から北岳が見えぬから、北岳が白根夕照に省かれて居ると云つたのは、畢竟城下本位を指した意であつたのである、夫れから白峰が今日の所謂白峰三山は扨て置き、猶ほ南の方までを含んで居ることは、私も陳べて置いた意であるから、其事はこゝには書かないことにした、八人の公卿の歌は、坐ながらにして名所を知つたものであらう、景色の詩歌文章を依頼する時には繪畫を添へるのが、殆んど例になつて居て

今でも寫眞を添へて、依頼して居る人を、實際に見たことが數々ある、古い所で例を引くと、『鵞峰林學士文集』卷七に、松村氏雲州別墅記に。

（上略）庚戌の秋、雲州の書生佐慶、其州の老、村松直賢が爲に、別業の景境の美を說て、之が記らんことを請ふ、謂らく記成らば則ち石に刻して、以て不朽に傳へん、是れ直賢の素望なりと、然れども地を隔つること千里、目の窮むべきにあらず、樓の望むべきにあらず、故に諾して而して果さず、辛亥の夏、慶又同僚黑澤弘忠と、同じく來りて、懇請甚だ切なり、且つ其地圖并に境景の目を示す、乃ち之を披き讀む、遠きを此に縮めて、其地に臨むが如し、聊か起筆の思ひ有りと雖も、然ども直賢に於ては、未だ一面の會あらず、則ち好事の慮なきにあらず、是を以て又延て周年を過ぐ、慶猶ほ屢々請ふて已まず、渠、余が門に出入すること二十餘年、弘忠も亦交を執ること半華なり、甲子途に默止すること能はざるに至る、是に於て地圖に據り、大概を記して曰く云々。

享保頃に公卿が八人も、京都から甲斐まで下向するといふことは、不可能の事であるから、圖を致して懇請したものと見て差支なからうと思ふ、前號一三五頁に引いた峽中紀行や、後に引用した『德川實紀』の文に照らして、思ひ半に過ぎると想ふ。

◎雜　錄　「白峰三山に就いて」の異議を讀む

白根夕照の歌を載せたのは、北岳、間ノ岳錯誤說に證歌とした譯ではない、勅許八景に入れらるる程、其時代の人が白峰連嶺を憧憬してゐたと云ふ意味と、甲府城から見えぬから、北岳が除かれて居ると附加したに過ぎないのであつた。

『野史』の柳澤吉保傳に據ると、吉里侯が享保元年に、大和の郡山へ移封されたとある、『甲斐名勝志』に、「甲斐八景、享保年中柳澤侯依奏聞勅許」とある、八景は移封以前に奏聞されて、移封の前後に勅許になつたものとも見えぬことはないが、併し同書に「龍華山永慶寺、享保年中柳澤侯所建也、在山梨郡岩窪村、今廢」とある、享保年中と云へば、何れ移封前の事であらうが、同じ年に、寺を建てゝ、其寺の秋月を八景の一に數へて奏問して、勅許を得たり、それから移封さるゝとは、餘り事が多過ぎて變だと思つたが、二書倶に誤謬があるのである、龍華山に寺を建てたのは、寶永年中か、元祿であつた事は、峽中紀行で知れる、吉里侯が移封されたのは、享保九年三月十一日であることは、『德川實紀』有德院殿御實紀卷十八、及び『藩翰譜續編』卷

十一に載つて居て明白である。

吉里侯が八景の勅許を得られた事情と、朝廷で御許可になつた、史料を得らるゝかと、萬一を僥倖して『續史愚抄』を繰つて見たが、見當らなかつた、『德川實紀』常憲院殿御實紀卷五十四、寶永三年九月五日の條に、「大納言殿松平美濃守吉保がもとにならせ給ふ、講書、猿樂等、御所ならせられしときにかはらず、これよりさき吉保が駒込の別墅に、上皇より十二勝八景の名を、えらばせ給ひ、その圖を畫がゝせ、親王達初め公卿の歌ども添て賜はりしを、五卷によそひ、御覽に備へしが、御所望によりて、献じ奉る、其外献賜ともに例のごとし」とあつて、徂徠先生が江戸を出立される前日の事である、享保勅許八景のことは、他日材料が見當ると再び執筆することゝする、吉里侯は吉保侯の長子で、四代將軍綱吉公の落胤だと云ふ噂さのあつた、有名な人である。

これから本題に入る、地圖を引用して證據品とするのであるから、白峰附近の記載されて居る地圖を、一應說明して置く必要がある、手元に無いものは他日追補することにする。

1「新刻日本輿地路程全圖」この圖は、恐らく我國での、最初の具體的地圖であらうと想ふ、此圖は我は所持して居ないから、何れ探索して白峰附近を掲載したいと思ふが、見當るまでは、殆んど同品と見らるゝものと考へるから、文化再刻の「新刻日本輿地路程全圖」を以て代理させる、此貴重なる新刻圖は、安永七年(紀元二四三八年)に上梓された、前號に安永四年としたるのは誤謬である、當代の碩儒にして、兼ねて日本有數な漢文章大家である、柴野栗山先生が序を書かれてあるから、同先生の文集から轉載する。

凡そ圖は其れ急なり、輿圖より急なる莫し、而して又其難きは、輿圖より難きはなし焉、其大を以てすれば、則ち體圖、經野、控御、攻守の政、其細は則ち讀書、考古、探勝、按蹟の學、蓋し一日も而して缺くべからざるものなり矣、而して山の背向、水之迂直、吾儕は孟浪にして、躬親しく其地を履み、猶ほ且つ轉回數歩の外、已に茫然として方位を失ふ、況や天下の大、山海の邈、苟も曠懷偉度、四海を領略するの量あり、而して縝密精細、毫釐を分析するの明あるにあらざれば、則ち焉ぞ能く其梗概を尺幅の上に約略して、而して差なけんや、長久保玄珠字

は子玉、常陸の赤濱の人なり、飽學にして而して富文、又地理を究むるを好み、西は肥より、東は奥に至る、躬略ぼ能く其地を涉り、圖居常を歩障に貼り、之を座側に置く、凡そ雲游の僧人、客商行旅、苟も其門に抵るあれば、必ず延て以て飲食せしめ、輿に障前に座し、其郷里、及び歴る所の山川、城邑、道里の險夷を指問し、其或は圖記を裝齎する者は、必ず請ふて之を出さしめ、證するに己の親しく覩る所、及び載籍の記する所を以てし、參伍考究、積んで二十餘年、以て此圖を成す、余嘗て試み叩くに、余が熟する所の地界を以てす、子玉爲に其の迂直背向、險易沃瘠と、風俗の清濁、舟車の通塞を訊き、歴々席上に指畫す、皆其委曲を盡して、毫釐を繆らざるなり、余因て益々其他の苟もせざるを信ずるなり焉、子玉長六尺に滿たず、眇然たる小丈夫のみ、而して其胸中藏する所此の如し、亦異るべきかな。

2、「重刻日本輿地全圖」前記長久保先生の地圖を縮圖したものである、天明三年（二四四三）浪華書房松村九兵衛外四人の合梓であつて、約一尺六寸の一尺七寸の大さで、着色が施されて居る、此圖にも栗山先生の序文がある。

赤水翁の輿地圖、余已に文して而して之を行ふ、未だ期年ならずして、殆んど海内に遍し、其精確たる世固より之を知る矣、但し方幅頗る濶し、是を以て旅途、學窓、人其展閲に艱なるを病ふ焉、頃、曾生聖に應じ、縮むるに九宮の法を以てし、尺幅の内に收入し、而して其方位、迂直毫も原圖を繆らざるなり。夫れ然る後、馬上、轎中に之を閲すべく、旅途、燈前、硯側に之を展ぶべく、學窓に於ても亦便ならずや、亦刻して而して人と之を共にすることを勸令す、皇天明癸卯十月、阿波國儒者柴邦彥題。

3、『甲斐勝志』前號にも、前々號にも掲載した、萩原元克の著書であつて、天明六年季冬の源昌綱の序文があるから、天明七（二四四七）年頃の出版と見るべきものであらう、其第一卷に「甲斐之國形」と云ふ略圖がある。

4、「甲斐四郡國繪圖並村々高附」約四尺の五尺である、淡彩を施したもの、私が白峰問題を解決する、唯一貴重の材料である、著者の序に據れば、寛政十一年（二四五九）に上梓したものらしい、其文は。

有政の君、圖を以て國するなり、實に謂あるかな、吾が邦其來るや素ありと雖も、然れども郡筋の村里、前後錯亂して、而して其地利を悉せず、剩へ片假名を以てす、却て見がたきのみ、適ま好事者ありて、之を校正すると雖も、他郷の遠境に至りては、則ち多くこれを詳かにせざるあり、且つ書寫訛謬も亦少なからず、頃、同好の需に應じて、其村邑の公貢の多少、幽村の微名を增補し、而して目下に瞭然たらしめ、以て後の君子を俟

つ云々、寛政十一未歳秋九月、山梨郡國府邑、若林周齋。

5、「新刻日本輿地路程全圖」安永七年の原圖を再版したものらしい、文化八（二四七一）辛未春正月再刻としてある、發行者は、東都須原茂兵衛、浪華松邑九兵衛外四人で、前掲の柴野先生の安永四年の序文、榊原隱士の海潮考證、赤水先生の凡例が載つて居て、大さは約三尺三寸の四尺六寸あつて、着色がしてある。

6、「甲斐國繪圖」鰍澤驛古久屋紋右衛門正之、藏版と記るして、左の上の隅に、青柳城山書、石川益守畫、熊本吉長刀とあつて、別に圖の左の隅に、賣買不許（今日で云ふ複製を禁ずるの意か）とある、着色した、約二尺二寸の二尺九寸大さのもので、序文がある、文政八年は、二四八五である。

鰍澤の依田生、摺帖を袖にして來り、余に示して曰く、是れ本州の地理圖にして、而して余の著す所なり、是より先き、地理圖ありと雖も、脫鈌疎漏の失なき能はざるなり、因て今四方に就いて、杳詢して之を正し、郡縣の部落を分ち、神祠佛寺を審にし、戶庭を出でずして、山川の融結を辨じ、跬步を企てずして、部里の遐阪を極むるもの、其れ此にあるか、冀ひ諸ふ一言を題せよと、遂に以て其後に書す、文政八年乙酉復月、峰城伴希眞誌併書。

7、表紙がなくて、圖名が知れない、6と同品であるが、彩色を省いた處がある、序文は同形同文であるが、只鰍澤の依田生を中込生に改めてある、左の上の隅の、書、畫、刀の三人も同名であるが、其傍に並べて不可賣買の四文字があつて、圖の左には此四文字が除かれて居る、6を竊取したものらしく見える、書肆は、鰍澤驛村田屋武兵衛由章藏版としてある。

8、表紙がなくて、圖名が知れない、全く6と同品であるが、後年增版したものと見える、左の上の隅は、7と同樣に改めてあつて、圖の左に、△印を付して、「清水樣御領地」と記して、其左右に「文政十三庚寅ヨリ、山梨郡ノ內三十ケ村」と記してある。

9、表紙がなくて、圖名が知れない、大畧は6と同じであるが、着色も6よりは疎であつて、7よりは精である、此圖の序文は漢文でない。

甲斐國繪圖、古よりありといへども、審なるは(?)まれ也、今此圖は、御城府中および町々神社佛閣、明細に記し、かつ神佛郡古跡溫泉驛宿とうは、夫々印をわけて見やすからん事をようす、

然といへども、地理山川委く歩をはこばざれば、少くは異變の處も有んか、四方の君子幸に免し玉わん事を希(?)而已、天保十三年(二五〇二)寅十月、擁(?)萬堂主人識。

と記してある、これは本屋が6や7の地圖を改めたものらしい、甲府の書林、魚町四丁目、村田屋孝太郎の發兌である、要するに、6、7、8、9は、同一品と見て差支へなからう。

10、「大日本輿地便覽」折本二冊の品である、大さは約六寸の八寸であつて、淡彩が施してある、天保五年(二四九四)の齋藤拙堂先生の序文と、著者の跋文が載つて居る。

松居老人、其輯する所の輿地便覽を携へて、來りて序を余に問ふ、余受けて而して之を閱す、首に七道の全圖を載せ、而して六十八國、次を以て相ひ承く、各々其詳を致す、凡そ七十餘紙、勒して二冊と爲す、蓋し各家の諸圖を網羅して、參酌校訂し、集めて之を大成する者なり、其擧も亦勤めたりと謂ふべし矣、(中略)、老人は山埼氏、名は義故、吾が津の人なり、年既に八十、耳目聰明、太平の賜を受くること、最も久しとなす、宜なるかな此擧ありて、以て之答ふること、余年未だ其半に及ばず、然れども亦是れ圖中に在りて、而して其樂を享くるもの、焉ぞ獨り默々たるを得んや、遂に此を書して以て自ら警しめ、且つ以て自ら賀す、天保五年歳在甲午夏四月、津藩、齋藤謙撰。

◎雜　錄　「白峰三山に就いて」の異議を駁む

輿地便覽のしりへに云。余山水を愛し、登覽をこのむ、はやく四方の志ありといへども、官事悒悒いま猶ほ塵細の中に蠢々として、生涯を終んとす、わづかに書圖間に優遊して、餘年を樂しむ、こゝにちか比、志を輿して、あまく地圖を繕寫し、或は摹縮する事としあり、つひに海内を盡して成れるもの七十五圖、分て乾坤の二局とす、はじめに全圖を揭て、皇邦の大體をしめし、終に地球を附して、萬國の方位をしらしむ、但疎らくは、測量に乏しくして、みづから繕なる事あたはず、粗ぼ人後につくのきらひありといへども、老て功をいそぐの止むをえざるにいづるのみ、しかしながらこれ昭代の餘化、吾人の幸ひならずや、(下略)、天保五甲午五月吉、津藩、松居、山埼義故七十九歳みづから書。

11、『國郡全圖』天保八年(二四九七)の出版であつて、着色された、大本二冊である、多數刊行されたものと見えて、私の手元にも三四部あるが、紙質などが異つて居る、10と同品の觀があるが、幾分か詳細である、享和三年(二四六三)秋九月の嘗原長親の序文、内田觀齋の序文、文政戊子(二四八八)仲秋の秦鼎の序文、同年の奥田叔建の跋文が載つてゐる、著者の自序を揭げる。

(上略)先師乾堂先生嘗て尾張全圖一幅を出し示して曰く、山川邑里、毫釐を爽らず、梓にして而して之を不朽に傳ふる、是れ

◎雜　錄　「白峰三山に就いて」の異議を讀む

吾が志なりと、余謂ふ、一國の全きを擧ぐ、各國の徴を具ふるの愈れりと爲に若かざるなりと、想ふに各國も亦必ず全圖あらん、是に於て遍く搜し遠く求めて、曠年彌久にして、五より二洲に逮ぶ、地圖粗ぼ具はる、然ども疎密相ひ間はり、配列錯午するもの少からず矣、志は之を方志に考へ、之を國人に證するにあり、然れども研究久しきに涉る、恐くば年命の吾と與にせざるなり、假ひ天下の山川、城邑を經歷し、道路の由る所を尋繹することを得るとも、疲駑の力、重遠に勝へず矣、恐く詳審に及ぶ能はずして、遽かに剖剔氏に命じ、標して國郡全圖と曰ふ、後來博該の君子、各國有識の人、就て補正を加へば、豈に啻に老夫の幸のみならや、抑も亦天下の徴益なり、文政戊子、尾張東谿青生元宣識。

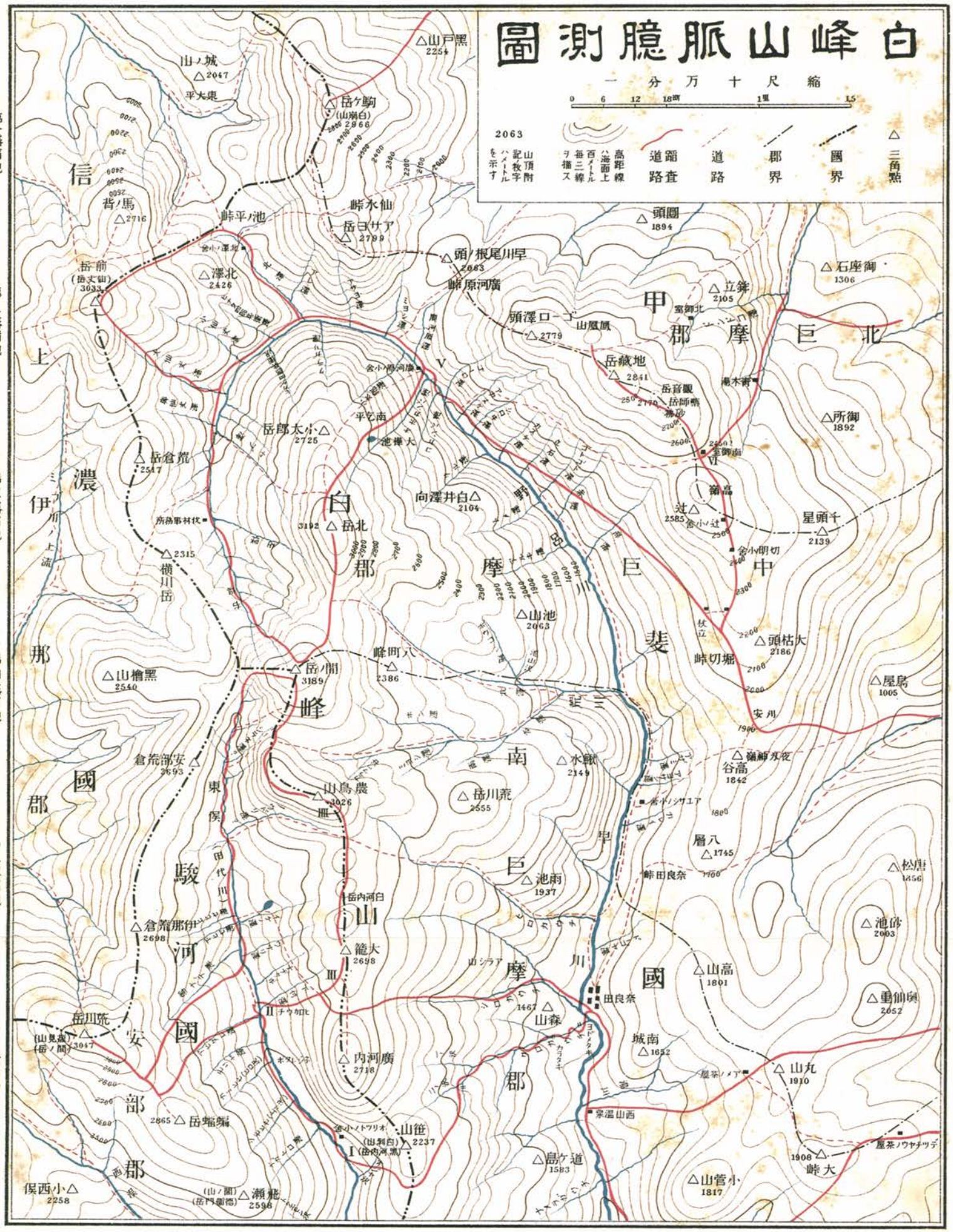
12、「富士見十三州輿地全圖」秋山永年の著作であつて、着色された、約五尺四方のものであつて、天保壬寅（二五〇二）の出版である。

13、「掌中甲斐國繪圖」大さ約一尺一寸の一尺六寸、着色がしてあつて、嘉永二年（二五〇九）新刻、甲府井筒屋豐兵衛藏版としてある、私の所藏して居る品は、文久三年（二五二三）の再版せられたものであるから、嚴格に云へば、まだ後に載すべきであるが、餘りたいした材料でもないから、こゝに掲げた。

14、『甲斐叢記』前輯第一卷に載せてある圖を指すのである、此書は明治四年に刻成るとしてあるが、嘉永二年に起業したものであるさうであるから、こゝに擧げる。

15、「大日本國郡輿地路程全圖」約六尺の三尺三寸ある、着色したもので、著者鈴木驥園が、赤水先生の原圖を國郡全圖や、關八州輿地路程全圖や、富士見十三州輿地全圖やに據つて、增訂したものださうで、嘉永壬子（二五一二）季春の出版である。

16、「大日本海陸全圖」約二尺四寸の三尺三寸ある、着色したものであつて、文久四年（二五二四）の刊行で、書肆は、東都、小舟町三丁目照降町惠比壽屋庄七としてある、序文に據れば、赤水先生の撰述であつて、未だ世に出でざるものを、增補して、海路の里數を詳記したやうに書いてあるが、文章が拙劣で、衒氣が多く、其上に赤水先生の地圖よりも粗雜であるから、多分赤水先生の地圖が賣行がよいから、書肆の姦策からして、此圖が出來たのであらう。


白峰山脈隠測圖
縮尺 一分万十
0 6 12 18粁 1里 1.5
2063 山頂附記数字ハメートルを示す
高距線 八海面上百メートル毎二線ヲ描ス
道路踏査
道路
郡界
國界
三角點
Ⅰ 第一露宿地
Ⅱ 第二露宿地
Ⅲ 第三露宿地
Ⅳ 第四露宿地
Ⅴ 第五露宿地
Ⅵ 第六露宿地
信濃國
伊那郡
駿河國
安部郡
巨摩郡
甲斐國
山ノ城 2047
平大東
△山戸黒 2254
△岳ケ駒 (山崩白) 2966
背ノ馬 2716
峠平ノ池
峠水仙
岳ヨサア 2799
△頭ノ根尾川早 2683
峠原河廣
△頭圓 1894
△石座御 1306
△立鉢 2105
室御北
頭澤口ノ 2779
山鳳凰
岳前 (岳丈仙) 3033
△澤北 2426
岳藏地 2841
岳音眼
岳師鞍
佛砂
△所御 1892
蓮木青
岳郎太小 2725
平乞南
池樺大
△岳倉荒 2547
向澤井白 2104
白峰山脈
△岳北 3192
所為事村代
△横川岳 2315
△辻 2585
倉小ノ辻
星頭千 2139
倉小朗切
△山池 2063
△頭枯大 2186
峠切堀
△屋鳥 1005
△山檜黒 2540
△岳ノ間 3189
峰町八 2386
安川
△水獄 2149
△鶴解双夜
谷高 1842
倉荒部安 2693
△岳川荒 2555
倉小ノシサエア
層八 1745
峠田良奈
△松唐 1456
△池雨 1937
△池砂 2003
△倉荒那伊 2698
岳内河白
△籠大 2698
山シラア
△山高 1801
田良奈
△亀仙興 2052
△山森 1467
岳川荒 (山見盛) (岳ノ間) 3047
城南 △1652
△内河廣 2718
屋茶ノメア
△山丸 1910
2865 △岳蝙蝠
倉小ノトワリオ
山笹 (出刺白) (岳内河黒) 2237
泉温山西
△島ケ道 1583
屋茶ノウヤチツデ
1908 △峠大
△山菅小 1817
俣西小 2258
(山ノ間) (岳内鶴徐) △瀬飛 2598

17、「新刻大日本全圖」約二尺四寸の三尺三寸ある、着色したもので、赤水先生の縮寫圖を、元治元年（二五二四）に刊行したもので、書肆は、江戸山城屋佐兵衛、大阪加賀屋善藏外五人である、左の下の隅に、摸寫筆耕、和州岡本竹藪、校合訂正、浪花松川半山と記してある。

18、『銅鐫大日本國細圖』約五寸五分の三寸五分ある、小形の折本二冊である、草間寛の序、菊亭順卿の序がある、元治二年（二五二五）二月の出版で、著者は玄々堂綠山としてある。

19、「甲斐國全圖」約三尺二寸の四尺あつて、着色がしてある、水戸の鶴峰彦一郎の作で、橋本玉蘭の圖するところである、東都書林出雲寺萬次郎外九人の刊行で、慶應四年、即ち明治元年の出版である。

20、「東北十五州之圖」約四尺四方の大さで、着色がしてある、富永晋齋の作で、慶應四年の出版である。

21、「大日本國海陸全圖」約二尺五寸の七尺二寸ある、着色がしてあつて、景山致恭翁の圖を縮寫して、尙ほ各家の諸說を涉獵して、參考訂正して大成したと書いてある、東京の葎窻貞雅といふ人の訂補で、明治四年の發行である。

22、「大日本地圖」約四尺四寸の四尺九寸ある、川上寛の作であつて、伊能先生の舊小圖に據て、更に縮小して、陸羽の改正區分を詳にして、北海道も添へてある、明治四年の出版である。

23、「山梨縣新圖」約二尺二寸の二尺九寸ある、着色がしてあつて、濕潤式を用ひてある、但し富士山は日本繪で記されて居る、著者は中川弘といふ人で、富士山を濕潤にするのが忍び兼ねたものらしい、出版は明治九年であつて、チョンマゲを切るのが惜しい時代であつた。

24、「大日本分國輿地全圖」約三尺の四尺位あるもの八枚から成つて居る、伊能先生の地圖を原圖として、諸國の材料を旁採したもので、宮脇通赫の作で、着色がしてある、甲斐國は、第一幅に收めてある、明治十年の發行である。

25、「甲斐國全圖」純然たる近世風の地圖である、約二尺一寸の二尺七寸ある、三色刷りで、森丈助

といふ人の著作で、明治十年十二月五日、板權免許、同十一年四月廿日出版と記してある、此圖に始めて北岳といふ記載がしてある、此圖が原圖となつて、陸地測量部の輯製圖や、地質調査所の諸地圖に、北岳なる文字を見るに至つたのらしい、私は同圖の明治十二年二月廿日出版の品も所藏して居る。

陸地測量部の輯製圖や、地質調査所の地圖は、こゝに說明する程の事もなからうから、省略することにした。

以上の諸地圖を根據として、一覽表を作つて、さうして私の臆說の結論を告げる。（以下次號。高頭式）

白峰山名の改稱に就いて

前々號に白峰三山中北ヶ岳、間ノ岳を改稱して甲斐ヶ根、東俣山とする意見が出て居た、其の理由は「北ヶ岳」の名は「甚だ平凡で小細工で面白く無いから」「間ノ岳」の名は「殆んど無法な屈從的な名」であると云ふのである、詰り相對的關係から生じた此等の名が二つの立派な峰の名稱として相應し無い。感じが惡いと云ふのが理由らしい、自分は此の位の理由で歷史的に（少くも甲斐國志からでも）權威のある山名を變化するのを無謀だと思ふのである。從來から混同されて固定した名稱を捉む事の出來無い山岳であつたら、無名の山岳に新たに命名するのと同樣、山岳會と云ふ團體の一事業として立派なものである。然し白峰の場合は全く違ふ。必要に迫られたので無く感じが元でゝある。感じは云ふ迄も無く主として個人的である。只此れが一般に通じた時初めて權威を生じ此れを知識の篩にかけて初めて確固たる立脚地が得られやう。「白峰」と「白根」何れを取る可きかも感じが比較的多數人に一致して「白峰」の方に定つたのだと思ふ、古人は「白峰」「白根」共に混同して用ひて居る。甲斐國志も「白峰」に「白根」の文字を平氣で混用して居る。古人がどちらを多く用ひたか抔は詮議立するもの馬鹿氣て居る。つまり知識の篩にかけられぬ物である。只「峰」が「根」を生

んだと云ふ事だけが漸く據り處であらう。

知識の篩と云ふのは此の場合は、「間ノ岳」「北ノ岳」の名が歴史的に固定して後世に幾たびか其の對象を誤られて語られ又地圖にも記されもしたが兎も角立派に今日に傳つて居る名稱であると云ふ事を主とする。

して又感じの上から如何であらう。感じを語るのは愚であらう。然し「無法に屈從的」「平凡、小細工、面白く無い」と云ふ矢張「感じ」の上の非難に對しては一言し無ければ成らぬ。

「北ヶ岳」の名を「甲斐ヶ根」と改める事に就いて云へば「北ヶ岳」はそんなに平凡、小細工な、面白く無い名だらうか。僕には「北」と云ふ字の有する種々の感じから兎も角蕭條として沈默獨坐して居る樣な、あの山に相應しい感じを抱かして居る、歴史の權威を踏み破つても別の名に改めやうとさせる丈の詰らぬものぢや無い。しかも此を變へるとしても其の名稱を「甲斐ヶ根」とするのは殆んど無法である。甲斐ヶ根は成程富士や赤石の事を指した事もあつたらうが、主としては甲斐を代表する山の別稱と見、高頭氏の云はれた如く白峰三山の總稱と見る可きである。標高に重きを置くよりは、よし高さは此れ以上の物が他にあつても甲斐の國で一番目にも付き特色もある名山たるを要する。白峰三山はどう見ても、あれだけで一つの纒まつた感じを與へ、外の山々の奥に又上に眞白に連なつて見える上からも、完全な甲斐の代表者で其最高峰北ヶ岳のみを引離して甲斐ヶ根と呼ぶのは穩當で無いし、古人にしても甲斐ヶ根を白峰の總稱として用ひたに相違無いとは、大丈夫斷定が出來る。且高頭氏の說を牽起した樣に、北ヶ岳が甲斐の可成りの部分から見えぬ（殊に南に寄るほど）事實は、又甲斐ヶ根の名を獨占させるを許すまい。甲斐の中に限らず、何處からでも間ノ岳だけが見えやうが、農鳥の片割だけが見えやうが夫れは白峰で又甲斐を代表する山即ち「甲斐ヶ根」と昔通りに呼んだ方が當然だと思ふ。

「間ノ岳」は北ヶ岳に比すれば一層相對的である又「屈從的」でもあらう。然し「東俣山」は此れに比して一層屈從的であるまいか、平凡で。小さ

山　岳

きに過ぎて居まいか、一體山岳の名は漠として捉へ處の無いもの程大きい感じを與へられる。具體的になるほど小い感じがする、「東俣山」の名は「間ノ岳」よりも具體的である。しかも其の名の來る處は白峰の裏面（矢張り甲州方面を正面だと思つて差支へあるまい）で、駿河國大井川の上流の一支流に過ぎ無い、大井川がそこで井川と呼ばれる小さい又輪をかけた小い感じの流名である、其名を一萬餘尺の山の名に與ふ可き事か、しかも主としては甲斐に籍を置く山に駿河方面に緣のある名を與へるのも可笑しなものである。前岳が仙丈ヶ岳の副稱を有する如く、東俣山を駿州又は信州方面より見た時の副稱とするならば當然かも知らぬが、此中の小い名稱を以て此れに比すればもつと大きい「間ノ岳」しかも歷史的に權威ある名稱を破滅し去らうとするのは無殘である。止む無くんば多數人の經驗から甲斐の野呂川は間ノ岳の西側から流れ出て居ると云ふ理由から、「間ノ岳」を野呂川岳と新たに命名す可きでもあらう。東俣山の名が舊から存して居ても歷史的の威嚴を保つには餘りに偏し過ぎて餘りに耳遠い上からは、此の新名稱の方が努力せずに「間ノ岳」に代り得るだらう。然し「北ノ岳」と等しく從來立派に人口に上り、筆にも扱はれた名を少しの理由から打ち破す事には贊成出來ぬし、赤石に類似の山名があつても「白峰の」「赤石の」の冠詞を付すれば足りるので此位の不便は、改稱から起る不便に比すれば遙かに堪へ得られやう。

朝夕此等の山々を仰いで其の歷史的の山名に種々の實感を搦めて幾百年に及んで居る其の國の人々は「屈從的」の名と云ふ樣な感じは此れを起した處で、此の山々の名を改められるのを有難がるまい。又其の不便を受け入れまい。況んや新しい山名に非難を免れ無いのである。（N生）

日本南アルプス南半登山雜談

日本南アルプスの驚ろくべき壯觀は、白峰赤石兩大山脈が、大井川の深谷を挾んで、蜿蜒相對峙して、並走するところに存する。而して白峰山脈

も、赤石山脈も、從來比較的知られてゐる所は、概ね其の北半であるらしい、白峰でいへば、白峰三山から新澤峠あたり、赤石でいへば、赤石岳から惡澤、荒川岳あたりである。尤も赤石山脈の極南部には大無間、黒法師など有名ではあるが之は又餘りに偏り過ぎて南半の大部分はやはり甚だ著はれてゐないらしい。又北半の部分でも、小河内岳や蝙蝠岳のやうに、不遇の山もあるけれども、之は前述の恰度反對の例になる許りである。

固より、其の原因は、實に於て此の南半諸峯が——特に白峰山脈北半に比べて高度からも、其の他アルプス的風格からも二三を除いては(聖ヶ岳、上河内岳、笊ヶ岳——白峰、等)多少劣るからであらうが、併し其著はれて居ない程、それ程不問に付して可いやうな、價値の無い山々であるかといふに、私は否と答へ度いのである。そこで先づ知らるゝことの遲かつた原因として第一に擧げ度いのは、やはり多くの此種の山の例に洩れない如く遠望の不便である、それに又北半が有名になつた爲めに壓倒されて注意を其方へ集中されてしまつた觀がある。又南半といふものゝ、極南の低山脈が殆んど支離滅裂に錯綜してゐるので、或點からいへば中心ともなる位で、地が甚だ僻幽であるから、交通の不便が餘程妨害する、その爲めもあるであらう。

誠に赤石岳から、聖、上河内以南の赤石山脈、生木割、笊ヶ岳、千挺木山(これ等の山名は後述)以南の白峰山脈が東西に並立する處は南半赤石山系の偉觀なのである、而して其の赤石山脈が、白峰山脈より高いこと、北半に於ける白峰山脈が、赤石山脈を凌ぐのと、大勢上齊對をなして、これあり て始めて、南アルプスは甚だしく醜い跛足に陷ることを、免れたのである。

私は僅かに兩度、此の方に足を踏み入れた許りで。最初は昨年十一月下旬から白峰山脈の方を少し歩いた、靜岡から安倍川に沿ふて北へ進む間、先づ川の西岸に白峰山脈の末派安倍山脈が低く奥深く出る、此時も二度目も、共に天氣が餘り好くなかつたので、赤石山脈の高峯も或は見えるのかも知れないが、見參に入らなかつた。辻本氏が賤

機山から望まれた時に、雪のある峯を見られたさうだが、その何であるかは判然しない。右手には身延山脈の龍爪、文珠の山々が近く見える。安倍川の一支流中河内川を溯つて大日峠で安倍山脈を越すと大井川谷へ入る。峠の頂上から始めて、惡澤、魚無河内、赤石、聖、上河内、大無間、黑法師(?)等の山々が眼に入る。

大井川を溯つて田代へ來る、此處がこの方面の登山の唯一の根據地である。對岸に大井川谷最奥の村、小河内があるが、甚だしい寒村で準備は是非、田代でやる必要がある、私の泊つた宿は瀧浪益吉氏といふので、主人も中々の奥山通である(大無間以北の赤石山脈の高峯をこの邊では奥山(オクザン)といつてゐる)登山の準備には便宜がある。田代迄は靜岡から、先づ二日路である、十三里乃至十四里はある、馬車が通ずるのは牛妻迄三里、大日峠は上下二里といふが、實はもう少し近いやうだ。二日目に大日峠からの眺望を欲するなら、上落合か、口阪本へ泊るのを便とする。何れにも宿屋がある。

田代の村では、高い山は何も見えない、やつと村外れの諏訪山へ登ると、上河内岳が見える許りだ、否耳元を流れる大井川すら、さう容易くは眺められない。西山温泉新湯から、農鳥山を仰ぎ早川を瞰る程の眺めも得られぬ。

此の時はもう奥山は雪で登れないので、雪のない白峰山脈の一峯、大崩山(二〇一四米)へ登つた。田代から三里半。此處からは、雪山は餘程近くなるが眼の前の白峰山脈が、餘り近く高いので胸から上が見えるのは少ない位だ。此の山は山勢三分の衝に當つて居る、即ち北するものは水無峠(二〇七六米)、青枯山(二二〇九米)、虎杖山(二四〇七米)、稻又山(二四〇五米)千挺木山(二五八四米)、笊ヶ岳(二六二九米)、から生木割(二五三九米)、上之切(二三七九米)デンック峠、新澤峠(二二一五米)、と北半白峰山脈へ連なり、(これ等の山名は、土地の稱呼と測量部の三角點名と又甲斐郡村誌、甲斐國志等をも參酌して假定したもので、踏査を經なければ勿論確としたことは判明せぬ)。東へは、行田山(二〇〇〇米)、白崩山(一

九一八米）から一方は安倍峠へ伸びて身延山脈に連なり、一方は椹森（一九六四米）、七面山（一九八二米）、を起し、又南へは安倍山脈を走らしてゐる。

此處から大崩越えといつて、甲州長畠へ出られる道があるのだが、私は梅ヶ島温泉へ下りた。温泉は安倍川上流の一軒屋で、村里から一里も離れた僻地にある。田代から此處へ三尺峠を越して一日とは掛からない、四里半位なもの、峠頂迄二里半、峠より温泉迄二里強と稱す、大崩へ行くには峠頂から、山背傳ひにやるので、大部分小徑がある、案内は小河内の望月寅吉。

梅ヶ島温泉から、甲州へ拔けるには安倍嶺といふのがあるが、もう一つは獵師の通路で、雨畑谷へ越す無名の峠だ、雨畑谷方面には幽かな道があるが、梅ヶ島方面は、荒れ谷の底を行くのである。私は峠の上迄、折よく通る獵師に案内して貰つて甲州へ出た。始終案内があるわけでないから、之は必ず越せるとはいへない、岐谷があつて、案内無しでは危險である。梅ヶ島温泉は、一軒屋としては整つてゐるが、登山の根據には地が餘りに不便である。靜岡への道は、安倍川本流大河内に沿ひ、中河内合流點迄七里、惡道の由。

峠から室草里（ムロザワリ）に下り、硯島本村（ホンムラ）へ泊る、温泉、峠頂間一里強、峠より室草里二里弱、室草里本村間一里強であらう。本村はこの谷筋最大の部落だが、宿屋といふものは先づ無い。私は中畑玉太郎氏といふ農家へ、泊めて貰つた。笠ヶ岳へ登るには此處が比較的よさゝうだ。併し土地の者でその頂上迄知つてゐるものは殆んど無いさうで、無暗に恐ろしがつて、中々案内を肯んじなかつたが、漸く一人望月重吉といふ獵師を得て登つた、頂上迄三里半か四里とは無い位であるのに、途中二泊を要するといふ。私はそんな筈は無いと思つて注意して行つたが、出發が遲れたのに加へて惡路と日の短かいのとで、遂に山腹へ一泊、二日充分に費やしてしまつた。惡路といふのは千挺木山の山腹に懸つた、數條の惡絶なるカレ（薙のこと）を横斷するのに存する。但し迂廻をいとはず、千挺木山の頂上を掛け越しにすれば此困難は避け得ら

るゝらしい。

笠ケ岳の頂上は白檜帶を僅かに脱して、偃松、磊岩あり、兎も角も高山的である。眺望に至つては雄大の極、南アルプス諸山は駒ケ岳を除き尤物悉く眼眸に入る。本村からは七面を裏山道で登れる。白峰山脈を望むに宜い。私は此處から大島飯富を經て歸京した。此邊、白峰山脈横斷通路は、前記大崩越、無名峠の外、未だ靑枯から大井川東河内方面へ越えるもの、稻又谷から同じ川の上流へ越えるものなどがある、何れも惡路らしい。室草里の獵師、望月藤定はこの方面の好案内であらう。

次は赤石山脈の方の話しに移る。今年七月上旬、田代へ入つた。案内の獵師瀧浪松次郎それに獵師同姓茂作、菊太郎（之は杣）の二人が荷持。併し此處にも眞に奥山をよく知つたものは、やはり殆んど無いやうだ。偶あつても局部的で、大概山腹以下の地理に通ずるに過ぎぬ。之は信濃俣に十何年も捿むといふ松次郎さへ雷鳥を始めて見たといふのでもわかる、而して該鳥は山上毎日見た所だ。併し今度の登山で、奥山の地理は一通り呑み込めたといつてゐるから、先づ幾分かよからう。松は齡寄り故案内は好まないかも知れぬが茂作は喜んでする由。又安竹圓吉といふ若者も山に通じてゐるさうだ。

今回登つた山は、南から、光岳（チカリ）（二五九一米）イザルケ岳、ガッチ河内岳（二五二四米）、仁田河内岳（凡二六〇〇米？）、上河内岳（二八〇三米）、聖ケ岳（凡三〇〇〇米餘）、兎岳（二七九九米）、大澤岳（二八一九米）、赤石岳等。赤石、聖等を除いては、何れも耳遠い名であるが、土地の稱呼や、參謀三角點名や自分の考へを取捨して、先づ此位に定めて置く。

大井川の道は先づ普通、信濃俣へ入ると俄然、險惡になる、大ヨキの松次の小舍迄七里と稱するが、夏の一日で辛く達し得らるゝ位である。此處に雨の一日を滯在。大ヨキからは尾根傳ひにガッチ河内岳へ登れるが、私は先づ光岳南方の山背に登つた。大ヨキより信濃俣の一支流百俣澤の上流迄一日を費やす。同處よりイザルケ岳迄又一日。尤も天氣が惡いので、大に時間を空費した。霧の爲

めイザルヶ岳附近の偃松原に二泊。附近大に高山的である、イザルヶ岳よりガッチ河内岳へは、二千米突内外の低い山脈で、信濃俣の源頭を半環狀に周るのである。その間を信州へ越す幽かな通路が横切る、信濃俣から、和田谷のイロウ澤(?)へ出るのださうだ。ガッチ河内岳腹迄一日。之は道を誤つて一時間半位は餘計にかゝつてゐる。

ガッチ河内岳から又甚だアルプス的になる。仁田河内岳に到ると烏帽子形の尖峯だ。上河内岳は主脈を離れて大井川へ獨立の大ピラミッドを据えてゐる。主脈とは低い一支を派して結びついてゐる計りで、此邊尾根の連なり方、多くは此類、大なる尾根は往々谷へ落ちてしまひ、低小なるもの主脈の却て樞軸となる奇觀を呈する、之は北アルプス一寸類の無い所である、一時問題の種であつた、白峰間ノ岳からの山脈の岐れ方など、決して偶然でないことがわかる。上河内岳南腹迄一日。上河内、聖問は又大に低下して、白檜帶に陷る、且信州和田谷へは到る處凄絶なるガレを懸けて、山河は壞滅を極める。和田川は廣大な谷で、支流の澤は幾十となく岐れてゐる、下手に八重河内の名があるが、上流はどうして、十重廿重の河内である。

聖ヶ岳は、山脈の走向と殆んど直角に、山勢を展開してゐるので、連嶺傳ひに登ると、どちらからも其の急な薄い山腹を攀ぢなければならない、且つ夫れ迄取り付く山稜が、細く又鋸齒を刻んでゐて。更に一層の困難を加へてゐる。頂上迄一日を費やし、惡天氣の爲め、頂上附近の窪地に三泊。此處に長之助草を見たが、恐らくは該草最南の產地であらう。二九七八米の三角點は遙か大井川向きの低い一角にあるので、頂上は三千米突を越えると思はれる。凡ての點に於て日本アルプス第一流の山岳である。聖より兎岳へは、赤石澤の一澤へ觸れん許り下つて又上るので、兎岳（三角點よりも頂上の方稍高し）から無名の數峯を經て、長大な大澤岳を縱斷して、赤石澤源頭迄優に一日を要する。

夫れより赤石岳へ登つて北方の山稜に一泊。之は大井川への下り口が分からなかつた爲で、元來赤石澤、奥西河内の間尾根を下る積りの處、霧の

爲め終にそれを發見し得ず、誤つて奥西河内へ下りてしまつた。之は嘗て甲州から赤石へ來た折、(五年一號白峰及赤石山脈縱横記參照)西河内と聞いたものである。瀑の連續で徒渉廿六回を餘儀なくされて、一日を費やして大井川谷の木賊へ出る。之は開墾場で、大倉山林部の伐採事務所といふものもある。此處から田代へ出るに又二日で辛い位ある。道は大井川の西岸を通じ、中々の惡路、且つ一時は赤石澤の下流へ入るので、險難な峽谷の阻路續きである。居谷の山畑小舍に一泊。之より下流、上内出合に喜作の小舍を始め信濃俣出合の土平(ダイラ)、下(シタ)の島、下草里(シモザワリ)、寺島等に畑小舍がある。東河内より下流は、兩岸共路があるが、東岸のものが近く且つ廣い、但し、夫れを取つて奥山へ入るには、是非大井川を一度、腰迄入つて徒渉しなければならぬ。

聖岳、上河内岳、仁田河内岳等へは大井川から直接登り得る由、勿論大部分路はないものと覺悟しなければなるまい。大無間山へは田代から日歸りが出來る、小無間を越えて行くのださうだ。田代から歸京した。

深い——之がこの地方山谷の特色である。又林が欝蒼と高く頂迄山を蔽つてゐるのも、日本アルプス中恐らく此右に出るものはあるまい、白峰山脈では笊ケ岳頂上を除き、一帶赤石山脈では光岳北方及び南方の一峯以南、頂上迄白檜帶に沒入してゐる。併しこの廣大な森林も、逐年斧鉞が加はる樣子であるから、終には今日の有樣は見られなくなる恐れがある。森林が多いから從て獸——熊、本鹿、ニク(羚羊)、猿、兎、猪等——の多いこと驚ろく計りである。又森林の間にカレの口を開けてゐるのも一つの特色で、登山の目標になり面白いものだが、同時に登山の困難はそんな所を通過するに至つて極まる。前述の如く山脈の連なり方奇拔にて、壞滅甚だしき故、一山一山の間凸凹甚だしく、困苦、大部分の北アルプス及び北半南アルプス僻幽の比に非ず。雪の少ないのは南方だけに致方がない(新雪は別として)信濃俣に少し、上河内から聖にかけて殘雪を見た、聖の北腹、赤石の東腹には中々多い。

登山者の利用出來る小舍といふやうなものは山上には至つて少ない、前記大ヨキのと聖ヶ岳、上河內岳間の低所に一箇所、奧西河內の下流（上ス澤の少し下手）に一箇所ある限り也、尤も赤石岳項上には磊岩を積みて壁となせる室あり、屋根を蔽へば稍完全なる小舍となるであらう。路らしい路のあるのは信濃俣の百又澤の中途迄、赤石岳頂上より少しく北方迄、奧西河內の極く下流より大井川筋だけである。他の山上傳ひは唯一の不完全なる「切り開け」によるの外は無い、之は御料局のと參謀本部のと兩方ある。前者のは8印のある小杭が打つてある。併し古くて往々之を探るのに時を費やすことがある。尤も好晴の際はその點は餘程樂だが。赤石山脈の横斷路は、前記信濃俣源流を越するもの先づ一つである。農商務の地圖には赤石澤から小澁川へ越すものがあるが、元は兎に角、今は中々通行出來るものでないと松次が言つてゐた。

田代方面では、有名な大井川の上流田代川の名を決して呼ばないやうである、之は專ら甲州方面の稱呼であらうと思ふ。椹山といふ名がこの地方にある事は、古い地圖を見た人は知つてゐやうが、之は位置が判然せぬ、上河內の上流に椹澤といふ小支流があるさうだから、上河內岳の事かとも思ふが、田代の人々は此の名を呼ばないらしい。三隅岳といふのも同樣の名であるが、之は三國の境といふ意味を持つたものとすれば、イザルヶ岳、光岳間の低い三叉の地點を指すことゝなる、其處は特に傑出した峯ではないのである。松次が持つてゐた參謀測量部員に貰つたといふ圖を見ると、上河內岳らしいものに燕岳、ガッチ河內附近に茶臼山の名がある、之は信州の方の稱呼らしい。其の方面からの登路と共にそつちを知らぬ自分には判斷がつき兼ねる。茲に困るのは、笠ヶ岳の名を持つた山が幾つもあることである。光岳の北に一つ、白峰山脈に一つ（之は古い書物には淘羅ヶ岳の字を用ひてある、頂上双峯に岐れ高い方を大笠、低い方を小笠といふ）又湯島の中村宗義は生木割と假りに稱して置いた一峯を保（ホウ）のザルといつた、（そして前者をば雨畑のザルと唱へる）由を白峰へ

遊んだ人に聞いた、イザルもザルも共に笊の義である。而して皆多少、見所に依つて圓い形を具へてゐるので、一々尤もな稱呼にちがひない、併し書物にも出、最多く知られてゐるのは雨畑の笊故、赤石の方を何とか別の名が無いかと思つて聞いて見たが無い、新命名には適當なのが見當らぬので、そのまゝ假名で書いて置いた。それはこの方はイザルと「イ」の字と付して言ふが雨畑の方は普通それを付けないやうだからである。

前に遠望の不便が、此の山々の著はれない一つの原因だと言つた、私がこれ迄、明瞭に遠望し得た場所は僅かのもので、富士裾野十里木峠から惡澤岳以南大無間附近、愛鷹山越前岳南方の山背から北岳以南、鹽山停車場から惡澤岳、(?)赤石山(?)、と共に聖岳甲府附近から、笊ケ岳、生木割等(之は共に尖峯を抽き出してゐる)などである。信州和田方面は、未遊地故何とも言へないが、伊那山脈の爲めに、やはり充分ではあるまいと思はれる。又東海道の沼津から富士川を渡る邊では往々高い峯が望まれる由だが、私はまだ確と見定め得ない、一部分は見える筈である。山川君は修繕寺附近の高地から望まれた由である。又山の中へ入つては笊ケ岳の眺望は、蓋し南アルプス中無二であらう。其れはこの山の高度が、南アルプス山の中庸を得るに近く、甚だしく仰ぐにも非ず、甚だしく瞰下ろすにも非ず、觀者は面と向つて、飽く迄周圍の山々を正視するを得るからである。特に雪を被むれる時期に於て壯觀を極める。尤も晩秋から初冬でも、登山は中々困難なる事を覺悟しなければならぬ。冬から春先きへかけては絶對に不可能といつてもいゝであらう。

田代でも甲州の或處と同じく、岳と山の區別を嚴重につけてゐる、黑木が頂上迄あるやうな峯は決して岳とはいはない、大無間山の如し。

地圖は農商務廿萬、四十萬共に不可、參謀五萬が宜しけれども、井川、和田、南部等迄にて、肝腎の以北は未だ發行せられず、「井川」には信濃俣は大部分あれども、其源流の三角點ある高處に信濃俣と記し、谷は信濃俣河內と重ねて區別したなぞ、無意味の極である。三角點ある所は、土地の者

の「小澤の入り」と稱してゐる所である。(中村)

北アルプス瑣談に就て

七年一號に載せてた私の「北アルプス瑣談」が、圖らずも多數の有益な御説を誘導することになりまして、七年二號で色々と示教を賜りました。その中でお詫やら申譯やらお答をし度いことなどに就て、少しく述べさせて頂きます。

一、割物岳のこと

この名稱は撤回する方が宜しいといふ多數の御意見らしく、私も亦初めからして、どこ迄もと意地張るつもりでは無いのですが、唯あれを提供した動機とでもいふやうなものを記るしますと、丁度野口五郎から赤岳へ向つて脊梁を傳つて行く途々、鷲羽の北に並んで、偉大な一峻峰が聳えてゐるのを認めたものですから、あれは何といふ岳かと云つて尋ねた所が、大西又吉は「あれや、わりもの丶頭だらず」。と應へました。勿論「……の頭といふ名稱の山」といふ意味では無くつて、「……の頭に當る岳であるから、仲間ではそんなことを云つて通用する」。といふ意味であつたらうと思ひます。尚彼が道々語りました所の獵獸談の多くの斷片や、澤や岳の地形、位置等に關する實物對照談抔に據りますと、此岳に就いては、少くも野口、大出、大町附近に於て、從來確定不易の名稱といつては無かつたやうですが、想像する所、高瀨の奥あたりへ獵に入り込む連中が、「わりもの丶頭迄追ふてつた」とか、「し丶がわりもの丶頭から赤岳の方へへつ丶た」。とかいふやうな會話によつて、自然わりもの丶頭といつたらば、彼等仲間では、あの岳だといふことが解るやうになつたんだらうといふ所から、その所謂わりものなる語を採つて、當字で割物岳と假稱し、先般御詮議に與つた次第で御座います。勿論信州側の山稼連中は、鷲、小鷲、前赤などの名稱を存して居りませんやうでした。

(一人宛に聞いた譯ではありませんが)尚本年あの脊梁を縱走なさいました青木忠次郎氏に據りましても、同行人夫の兵三郎からは「わりもの丶頭」

玉作からは「わりもの岳」とより外、聞かれた所が無かつたさうです。又同じく本年、立山から大町へ拔けられました岩村圓氏に據りますと、御伴の越中人夫は、鷲と云つたら立山のつい南の方にある岳だと話したさうです。これは多分あの附錄地圖に載つてある奥大鳶山の北の大鷲岳を指したものに違ひあるまいと存ぜられます。氏も亦さう仰つしやいました。

それで私の考へまするに、あの岳には名稱の必要が無いとならば、それ迄ですが、矢張りその必要を生じまする以上、紛れの無い、そしてよし信州側の一部にせよ、幾分でも通用範圍を有つて居る「わりもの」の語を採ることは、何處迄も不當として消除せねばならないで御座いませうか。現今私の貧弱な頭には、次のやうなものが浮んで居ります。

鷲羽岳＝鷲岳（信州　大鷲岳＝鷲岳（越中）
小鷲岳（志村氏）＝前赤岳（小島氏）？＝割物岳＝鷲岳（越中）

然し既に大勢の定まりましたものを、兎や角申すのは下らないことで御座いませう。

序に小島氏の前赤岳は、同氏著「日本アルプス」二卷一頁に「前赤岳の横つ腹を行くのは、この紅い砂が、どこまでも續くので、赤く高い峰が二座ばかりある」。と仰せられましたが、察しまする所、その一座は、この岳のことで、も一つのは、赤岳から西南に續いた、同じく國境脊梁中の一角のことではあるまいかと存ぜられますが、この岳を「赤く高い」は聊どうかと思はれますけれども、横つ腹を行乍ら仰いだ感じの模寫では、そんな具合かも知れませず、前後の文の關係、及び同卷一四〇頁の「前赤岳は鋭く尖つて……」とある所などからして、多分違ひなからうかと想察しまして、疑問を附けて、右に記るした次第です。元より二座ばかりある峰の總括的名稱を、一座しかないこの岳の名稱と Equal で繋ぐのは不當ですけれど、一覽の便宜上假りに書いて見た迄のことです。

尙、七年二號一六二頁に「……槍岳からは、とても見えまいと思ふ」とありますが、あれは如何で御座いませう。四十四年八月十七日午前十時卅五

分、私が此岳の最高點、足の踏み場も無い程巨巖の亂雜に起伏して居りまする所から眺めました時、眼近に聳える鷲羽の左肩から、遠く東穗高（鵜殿氏）以北槍に連る大連脈の上半を際やかに望見することが出來ましたので、この工合ならば、屹度槍からは此邊一帶の地貌を見渡すことが出來るだらうと樂しみまして、その翌日午前十時五十分、槍の最高點に達しました時は、特にこの方面の觀察に注意致しましたが、晝前にも拘はらず、三岳から左へは、まことに麗らかに晴れ亘つて居りまして、山岳の鮮明な展列を眺望することが出來ました。そして期待して居つた山岳は、鷲羽の右に隣つて、確に眸裡に入りました。無論背後には藥師續きの、多分岩井谷の頭だらうと思はれる大きい山袖が高く連つて居るものですから、決して著しい聳え方ではありません。鷲羽からして既にこの大連嶺の輪廓内に入れられて、思ひ切り威壓された形勢に見えるんですから、況してこの山岳は、餘程注意をしないと、視界に入り難く思はれますが、しかし見えることは事實で御座います。

二、不動堀澤岳のこと附舟窪岳

七年二號一五八頁に、從來の名といふのは何うした材料から得たか疑はしいとありますが、一體私が七年一號一四八頁で「從來……」などの文字を使つたが爲めに、さうした御疑ひを惹き起こしましたので、あれは六年一號附錄地圖に記るされてあつた所から、よし同號三四頁、一九五頁に註釋がありましても、多分從來は不動と堀澤とをくつ附けた一語が、兎に角これといふ具體的一山岳の稱呼となつて居たんだらうといふ想像で書いた迄のことでして「榎谷氏があゝ書かれた處を以て察するに、此名は從來廣く行はれた名で……」は甚だ痛み入ります。所で六年一號、七年二號の各所で散見致しました事によりますと、つまり確定不易の稱呼といふものが、未に如何はしい狀態であるといふことになります。そして不動を先きに持つて來るか、堀澤を初めに付けるかと云ふことも、まだ決まつて居らんやうですが、「岳」は不當で、「の頭」が正當だといふことだけは、動かすことの

出來ん大勢の樣に存じます。私は例の御詮議を願ふといふ主旨なんですから、既に正當で無いと御認め下さいましたとを、無理にもとは申しませんが、有體に云へば、決して或る山の一角や、「某山某岳といふべき程度ならぬ」隆起ではなくつて、當然何々岳として扱はるべきものゝやうに存じて居りました。しかし若し何故にさうかと仰つしやれば、現今では命名の法則がまた決まつて居りませんやうですから、確かな理由書の箇條を提出することの覺束ないのは言ふ迄も御座いませんが、唯常念山脈の方から見た等の小く思はれる貌でも、針木岳以南、黑岳邊迄の脊梁の各方面から種々に觀察した工合では、よし標高は左程でなくとも、如何にも立派だからですと申す位のことより致方が御座いません。さうなりますと、何處から見ては小いから可けない、何處からでは大きいから正當だなどゝ云ふ、取り止めのないやうな話だと云つてのけられるでせうから、前申しました通り、決して意地張るつもりではありません。舟窪岳も同樣の次第です。

それから不動堀澤は、机上の議論だといふ斷り付きで、大町から見えさうにも思はれぬと、七年二號一五九頁にありますが、私は確實に見えることを斷言致し度う御座います。四十四年八月二日午後五時過、對山館の三階で、山岳の横長なスケッチを致して居りました時、鍬峯から右(北)へ伸びた尾根の向方へ、七倉の左(南)へ張つた尾根が落ち込んで居ますその又奥に、嶺の極めて大きく平つたい峯が、その上半を顯はして居りましたので、當時は左程深い注意も考へることもなしに、唯見えた通り描いて置きましたが、後に實地を踏みましてから、初めて此岳のことだといふことを知りました。同行の人夫大西又吉も「これや大町から見える頭のでつけえ岳だに」と申しました。尙拙いスケッチでゝはありますが、針木岳、七倉、烏帽子、野口五郎、黑などから試みましたのと引合はしますに。見る方面は種々に違ひましても、輪廓の特徵は充分明らかに一致する所が御座いましたから、もうどんなとがあつても、對山館の三階から見えたのは、これに違ひないと思ひました。

餘談ですが、この岳は針木峠の頂から見ますと、特殊な外廓を呈はしまして、大町から見る七倉とそつくりの貌を致します。

三、赤牛岳のこと

七年一號一四九頁「赤手岳」の項に書きましたのは、昨年山行の際伴ひました人夫勝野玉作（大町の人明治十年生）が話しましたことを、そつくり御報道致しましたばかりで、私自身には初めから何んとも判斷の出來なかつたもので御座います。それが同年二號の各所で、有益な材料を提供されることになりましたのは、甚だ喜ばしいことと存じます。唯あれは私の主張ではなくつて、あんなことを言つてゐる人々が、玉作の外にまだ有るかも知れないといふことは、萬々一にも後年再びこの問題が持ち上るやうなことのある時、或は資料の一部になるかも測り知り難いなどゝ思ひます。但し私をして、負惜しみの强い男と採られては恐れます。

尙同年二號一五六頁及五年一號一一頁に芦峅寺の人夫佐伯平藏其他同村民は赤牛のことを赤牛三吉といつてゐるやうに記るしてありましたが、今夏岩村圓氏の御伴を仕つた越中の人夫やら、品右衛門翁などは、赤牛と三吉とは全然別な山岳だと明言致しましたさうに聞き及んで居ります。地方によつて左樣に違ふので御座いませう。尤もこのことは、又聞きですから、ほんの筆の序に、話の種として述べて置く迄です。

四、池の平のこと

七年二號一六三頁に「池の平」とは何處で用ゐる稱呼か承知し度いものだとありますが、これは昨年八月三日籠川の谷に入り込みまして、白澤の「どう」の少し下流にある草刈小舍で、折からの荒天を凌いで居ります際、聞き及んだことでして、話は遇「雲の平」に及びましたが、當時植林事業に從ふ爲め、この小舍と畠山小舍とに遣はされた十一名の人夫中、三名は此處に起臥して居る容子でして、それ等の人達と、私の連れました人夫村西作太郎、勝野玉作、姓不詳藤吉（以上三人大町の人）などは連りに「池の平」といふことを申しま

す。これ等の人々のうちには、測量當時に雇はれたものも交つて居る具合でして、つゞまり雲の平とも池の平とも呼ぶんだといふことでした。そのうちの一人が申しますに、まあ行つて見なさりや分ることだが、あすこには澤山の池がある。それだから池の平と云ふのだとのことでした。それから同じ月の十五日正午少し過ぎ、赤岳の肩へ這ひ登りました時、甫めて雲の平の大高原を眼前近く瞰下ろしましたが、成る程白澤の小舍で聞いた通り、澤山の小い池が、ぽちり〳〵とその水面を白く輝かせて居りました。けれども歳によつて、志村氏が御覽になつたやうに（三年二號一七頁）あれが雪であつたり、又は全く涸竭して了ふやうなことがあるだらうと思はれますが、地形上、多くの小池が湛へられ得るといふことは、一見すぐ首肯かれることゝ存じます。

五、不動澤濁澤源流臆測圖のこと

七年二號一五九頁には、一號一五〇頁の地圖の御注意が出て居りますが、私は元よりその道の素養のないもので、その上唯一回丈けしか、あの脊梁を通つて居りませず、又何等の器具を使用することも致しませんでしたが、それでも澤や峯頭の位置などの概畧位を見る資料にでもなりはせんかと存じまして、ほんの看取の儘を提供したばかりです。そして原圖との比較等もないので全で分らんとの仰せは御尤ですから、茲で至つて不充分とは存じ乍ら、少しく言葉で説明の補ひ旁、小刀細工的な斷片的所感を述べさせて頂きます。目測の結果は確實を缺くといふことゝ、仄かに聞く所によつて原圖、（附錄地圖）の三角點の位置は、割合に正確なものだといふことゝを前置に致しまして、その所謂頼りない私の目測では、どういふものか原圖の七倉岳の△の印が、も少し（何米突といふことは遺憾ながら申す材料を有ちませんが）東の方か又は東北に倚りはせんかと思ひました。その理由は、針木岳の最高點（△點）から見ました時に、これが燕岳の筋より餘程左へ倚つて居りましたからです。それなら燕か針木かをもつと西へ倚せても宜いぢやないかといふ理屈が出るか知れませんけ

れども、それは宜しくないこと丶存じます。祖父（鹿島槍の南）の最高點（測量部△點）から望見しました針木、赤牛の絶巓の位置が、丁度地圖通りになつて居りますし、岩小屋澤の△點からでは針木、野口五郎、針木峠の位置が矢張りあの通りですし、殊に大スバリに曳いた指向線と、赤牛に曳いた指向線との關係などから見ますと、東へこそ倚つてもよろしい位で、決してあれより西へは倚せられないもの丶やうに考へられました。又鳴澤からでは、針木の左肩突角に隱される槍との關係上、赤澤からでは針木對不動以南の位置の關係上、その他脊梁中の色々の位置から觀望した模樣によつても、つまり針木は、もう烏渡もあれより西へは倚せられないこと丶存じます。さうして針木、七倉を動かさずに、燕を右二岳に對する指向線の關係通りに西へ倚せることにしますと、大分澤山移さねばなりませず、さうすると、あの附近一帶が、ひどく崩れ出すことになりますから、燕も亦針木同樣のことで御座います。それ故矢張り七倉の三角點は、前申しましたやうになるのが至當ではなからうかと思はれます。

次に原圖の不動堀澤ノ頭とある所の、楕圓形をした二千二百米線は、多分この邊に不動堀澤の最高點が有るんだらうといふ所から、御作成になつたので御座いませうが、私の目測では、最高點はもつとうんと東の方へ倚つて居るやうに思はれました。その譯は、針木最高點から燕最高點へ結んだ指向線より、まだちつとばかり東へ倚つて居つたからで御座います。それで私の心持を申せば、原圖で七倉△點の印のある所より西へ$\frac{1}{16}$吋餘りの所が不動堀澤の最高點で、この點から垂直約百八十米許り低下した七倉乘越の鞍部を挾んで、七倉の巓が東北に聳えて居りますから、兩岳を繫ぐ脊梁線は可なり長く伸びて居ります。そして七倉の高瀨に落とした大い尾根の一つは、七倉澤と山の神澤（神澤とも申します）との間に張つて居るのですから、この二つの澤の、少くも源流近くは、もつと北の方へ振つて居りはすまいかと思ひます。

今度は一號一五〇頁の臆測圖に移りまして、不動堀澤岳とした黑點から南の方へ引きました點線

は、脊梁を現はしたつもりです。そして若し尾根の稜としたならば、澤との關係上甚だ不可思議な地形になるやうだとありましたが、如何にも私の描き方が惡くて、點線と堀澤との距離が近寄り過ぎましたやうですけれども、あれを非常に勾配の急な家の屋根の形をした峯のやうに想像して下さいましたら、多少了解が出來ようかと存じます。

それから同圖の不動岳の東面に描きました西澤、大薙澤は、どちらも、も少し北へ倚せるので御座いましたが、不注意で、ついあんなことにして了ひまして濟みません。大薙澤は不動岳の頂邊、南倚りの肩先から、その名の示す通り。淡赭色の巨大な懸崖を削り落として居ります。

六、天上澤推測圖のこと

七年一號一四八頁に推測圖を提出して、「兎に角改めて置いた」などゝ隨分口廣なことを申しましたのを、同年二號一五四、一五五頁で、精緻な證明のもとに、御否定相成りましたが、如何にもあれは、御說通りに相違なからうと信じます。所で私は實地に踏査したのでは御座いませんから、愈あの推測圖を取消さねばならぬ譯ではありますが、しかし品右衛門の姻族にして、永年この方面の獵に經驗ある大西又吉（慶應元年生）ともあらうものが、どうしてあんなことを敎へて呉れたんだらうかと、訝しく思はれてなりません。そして無論誤謬であつて無價値には違ひありますまいが、彼れから聞き取りました概略を述べますと、新越乘越で蟄居の際、私があの六年一號附錄地圖を披げて見て居りますと、又吉はちよつと見せて呉れと云つて、手に取て大分長い間熟視して居ましたが、天上澤の所を指して、茲に赤澤とあるが、赤澤はこんな風に水俣へは直ぐに這入り込まないで、なかひ澤へ這入るのだと云つて、鉛筆で描いて呉れました。それから唐松窪（當字）と云ふのが、赤澤の「どう」の少し上で、矢張りなかひ澤へ這入る。この澤は上で、ずつと川九里澤に近づいて居るといふ說明から、一帶びんぼう澤といふのが三筋ある。この圖の赤澤としたのが、口元びんぼうのことらしく、唯、びんぼう澤としたのは、多分奥びんぼ

うのつもりだらう。さうすると、も一本この間に中びんぼうが描いてなけれやならんといつて、又鉛筆で指して呉れました。こんな具合で、實地も確めずに、私があんな圖を提出したのは甚だ早計でしたから、茲にお詫を致します。

尙黑岳の肩に蟄居の際、彼は湯俣の奥にやすけ澤とありますのを見て、これはどうも違ふ樣だと云つて、樅澤岳から北方へ、二五一九米とした三角點に曳いた尾根の直ぐ西側にある澤の線を指し、これがやすけ澤だと思ふと云ひましたが、そしたら地圖にあるやすけ澤を、御前は何と呼ぶかと尋ねようと思ひ乍ら、どうした具合でしたか、ついその儘になつて了ひましたやうな譯で、これは確實に突き止めて尋ねませんでしたから、甚だ賴りないと思つて居ます。(榎谷徹藏)

鉢伏山に就て

前號一四七頁に一寸諏訪の鉢伏と云ふ名が立科山にあると書ておいたが、それは嘗て自分等が甲斐駒へ登つた折、道案内をしてくれた高遠町の篠田與市と云ふ老人が、立科山を指して「あれは諏訪の鉢伏だ」と敎へて呉れたのを記憶して居たからである、其時指さした山が立科山に相違なかつた事は確言が出來るが、高遠邊の人が皆この名を呼ぶか如何かは全く知らぬ事である、然し其時には立科の形が如何にも鉢伏の名に相應しいので、如何にもどうなづいて、立科の一異名として面白い名だと思つて居たのだ、處が震災豫防の八ヶ岳の報文の圖版の内『杖突峠より諏訪湖を臨む』とある第十五版を見ると、鉢伏山なる山がある、これは下諏訪の北方にある山で、地圖にも其名を記されてある一座に相違ない、而して其形は該圖に依るに如何にも其名に相應しい樣に思はれる、斯く立派に鉢伏山なるものがあるのに、大して離れても居ない立科山を同樣の名で呼ぶのは如何も妙なので、或は篠田老人が其形から思ひ違へて立科を此鉢伏山の氣で自分等に指示したのか、又は前に老人に鉢伏山を敎へたものが誤つてそれを傳へたのかではあるまいかとも思はれるので、老人は甲

斐駒だけは甚詳しいが、其他の山にはどうもあまり敬意を拂はない樣である事から推して、其言は深く考へずともよからうと思う、それ故立科山を諏訪の鉢伏と呼ぶと云ふ事を一先づ取消しをする事を許して頂きたいのである、外から何か有力な理由がつけばよいが、自分等の理由はあまり薄弱だからである、それ故前號で「第五年三六一頁にある鉢伏山は立科山の事ではあるまいか」と書た句も自然抹殺せねばならぬ事となるわけだ。

然らば其鉢伏山は下諏訪の北方にあるそれであるかと云ふにどうも左樣は考へられぬ、何となれば第五年一一七頁には立科山とならべて鉢伏山があげてある、其鉢伏は左右の關係から考へて、下諏訪の北方にある、今其名で呼ばれる前にあげた座である事確かだと思はれる事前號にも書た如くだが、それは該記事によれば淺間山より左に當つて居る、然るに三六一頁の鉢伏山は淺間山の右に當つて居る、これが此鉢伏が立科山を指したものではあるまいかと自分等に思はせた一つの理由なのだが、それとても斷言をさせる力は少しもない弱い理由と云ふ外はない、するとこの三六一頁鉢伏山は何を指すのであらうと云ふ事になる。

偖、日本山岳志二一〇頁を見ると「鉢伏山（別稱雨乞岳）信濃國上伊那郡ノ北方ニアリ、登路未詳」なるものがあつて其記載に、「（信實）藤澤村の西南隅にありて、高さ二百五十丈餘、山頂に雨乞の祠あり、里人雨を祈るに必ず驗ありと云ふ、依りて、亦雨乞岳の稱あり……」とある、此山はと思つて考へて見た處、前に書た下諏訪の北のものは諏訪、東筑摩の二郡に跨るのみで上伊那にはまるで緣がないから、それとは別座であること明かで、日本山岳志にも赤石山系に屬させてあるから確かに前記のとは違ふものである、ところで地圖をしらべて見ると諏訪から杖突峠を經て高遠へ行く途の御堂垣外（ミダウカイド）の南に藤澤とある、それが藤澤村と信實にあるものであらうと思う、然し其西南にはどうも相當する山はなく却つて其東南の諏訪郡との境に佛平峠の北に當つて雨乞岳と云ふ一座が書てある、東西が違つて居るのは甚困るが、どうも日本山岳志の雨乞岳はこれに當るに相違な

いらしく思はれる、信實が絶對に眞を語るとも云へまいし誤記誤植等もあり得ない事でないから、等と云はずとも非常にやかましい記載でもない事故、其近所の處でさがし得られゝばよいのだらうと思ふ、この地圖の雨乞岳が鉢伏山なる名の山の異名であるとすれば、第五年三六一頁の鉢伏山はこれを指して居ると考へては如何であらうか、方向に於ては大して不都合はない樣にも思はれるのである。

然し自分等は見ないから知らないが此山は可なり低いものであらうと思ふ、それ故遠望して顯著ではなさゝうに思へる、この點は一寸都合が惡い樣であるが、雨乞に驗があつて雨乞岳とまで呼ばれて居るからには、其附近のみならず大して離れて居ない高遠あたりまで其名は、可なり有名であつたと思う事は左して無理のない考へだと思ふ、其れ故山は著しくなくとも方角記には目安として書かれたものとも思へぬ事はあるまい、尙又第五年一一七頁の分には芝平山なる座がある、それも何だか分らぬが、地圖を見ると該雨乞岳の西麓に芝平（シビラ）と云ふ村がある、而して方向付の見當も其邊で差支へのない事故、雨乞岳か又は其附近に芝平山なる一座があつたものと考へて宜しからうと思う、其邊とすれば矢張り左して著しい山では有り得ないから、恐らく高遠邊へ名が聞えて居るが故に、目安になつたものかと思はれる、左すれば三六一頁の鉢伏山は雨乞岳と稱ばれるそれである、（山岳第七年一二四頁に記てある雨乞岳と云ふのは全然甲州の山で茲に云ふものとは全く別のものである、云ふまでもない事だが念の爲一言しておく）。と考へて宜しからうと思ふのである。

以上は前號に書た事の訂正と追加と云ふべきもの故、甚取るに足らぬ地名の事ではあるが重荷に小附と惡しからず御見流しにあづかりたい、其土地へ行て調査をする程の値がある山でもあるまいと思ふので例に依つて臆測推斷で萬事をきめた事故、御示敎下さる方があれば甚幸甚に存じます、而して間違も少くない事と思いますが取敢へず自分等のした事の後始末を以て筆を擱く事といたしませう。（梅澤親光、山川默）

赤城山と尾瀨沼

○こう題しても別に新しい紀文或は案内記を書くわけでは無く、前號及び前々號の拙稿に付て訂正增補を行はんとするのである。便宜の爲順序も無く斷片的に羅列する。

○上野私記に「大同、今奥の院といふ沼あり、大同年中出現」とある、此大同年間は此處のみならず猪苗代湖の出現を初め東北地方にかけていろ〳〵の事に付て古いものは大同年間に其起原を有してゐる。田中子爵の「湖沼の研究」には同年代に此地方の地理上の發見ありし爲かとある。

○前號一〇四頁九行に山吹日記の「赤城明神は小沼の東にまします」といふのを今は小沼の東に何もそれらしき處は無い故小沼は大沼の間違ではないかと書いてをいたが、小沼の西に今實際小祠の跡がある、稻荷祠が明治の初め迄ましましたといふ、今も五間四方位の築地の跡と石塔籠の倒れたのや手洗石の壞れたのが殘つてゐる、山吹日記の赤城明神が之だとはいはない、然し此稻荷祠は諸社根源記の「小沼御父高野邊大將今小沼明神御本地虛空藏菩薩也」とあるのを照しあはせて見ると關係あるらしい、御稻荷樣と虛空藏菩薩は本地垂跡の關係があると聞いた樣に思ふ。

○駒ヶ嶽下の千手ヶ澤ではないかといつた千日ヶ澤にはかういふ傳說がある、昔旱魃のつゞいた或年柏山の方の村から雨乞ひに來て百日の願が滿ちると降るは〳〵一年たつても二年たつても雨がやまない、とう〳〵千日の雨續き、こんなに靈驗いやちこであつてはたまらないと以後此村からは日照り祭りには來るけれども決して雨乞には來ないといふ事である。

○小沼龍女の項に今でも小沼へ毎年春御赤飯をあげに來る村のある由を書いたが、之は赤城山の南麓の板橋といふ村だといふ事である。

○上野國志に赤堀鄕今井村の寶珠寺に小菅氏の古墳ある由を書いてあるので、今夏寶珠寺へ寄つて見たらば古墳は前には寺門の傍老松の下にあつたが今は赤堀の後裔板野氏の邸內に移されてゐると聞いた、寺には位牌がある。

武光院殿籌山文勝大居士　慶長十八丑年十月十九日

○赤堀は兩毛線國定の停車場から二里北の桑畑の中にある、寶珠寺の邊は赤松の林で壘の跡と思はれる樣に地面が他より高く壕らしき姿さへ見える小沼から流れ出る粕川は寺の東を流れてゐる。寺には赤堀氏代々の墳墓がある、一々墓面を模索したがそれらしきはない、「靑松院妙法貞榮大姉　文化元甲子年五月廿九日　行年十八歳」

とあるのに胸が轟いた、朦朧とした白い姿が頭から消え去つた時、夕暮は杉の樹間に迫つて藪蚊にさゝれた方々がかゆかつた。

○赤城山の古名が久呂保であり今の赤城は或は支那の赤城と關係がありはしないかと疑を存して置いたが、其後續群書類從の或活字本を見ると赤城大明神緣起とは無くて赤城山大明神緣起となつてゐる、調べても見ないが今の處赤城の名は支那の赤城山と關係があるとは云へない、又アイヌ語でもなさゝう故日本語の「あかぎ」として取扱つておく方が穩當であらう。

◎雜　錄　赤城山と尾瀨沼

然し赤城山者天台山也石皆赤色壁立如城といふ支那の赤城山は支那の浙江省台州天台縣にある事がわかつた。

大學圖書館の藏書中に台州叢書といふのがありその中に乙集一として嘉定赤城志六冊四十卷、及び赤城集十八卷四冊がある。嘉定赤城志といつても四川省の嘉定府にあるといふ意味ではなく嘉定年間（西紀一二〇八—二二三）の作なのである。其二十一卷山水門の中に赤城山といふのが出てくる。台州は浙江省の寧波と温州との丁度眞中位にある府で又臨海ともいふ。其台州の內北によつて天台縣がありそこに赤城山といふのがあるのである。讀者諸君には御氣の毒であるが此に少々ばかり引用する。

天台山在縣北三里、按陶宏景眞誥高一萬八千丈周回八百里山有八重四面如一。中略顧野王輿地志云天台山一名桐柏衆嶽之最秀者中略也諸山不可錬金丹以其皆有木石之精惟太華少室縉雲罹浮大小台正神主之可以修錬審此則其靈敞詭異出仙人佛爲天下偉觀宜哉

孫綽、賦云天台者蓋山嶽之神秀也涉海則有方丈

蓬萊登陸則有四明天台皆元聖之所游化靈仙之所窟宅夫其峻極之狀嘉祥之美窮山海之瓌富盡人神之壯麗矣。

そして赤城山はその北につながつてゐるらしい。

赤城山在縣北六里一名燒山又消山石皆霞色望之如雉堞因以爲名孫綽賦所謂赤城霞起以建標是也。中略大抵皆峭壁不可登上有仙人井飛流噴沫冬夏不竭

山の麓に崇善寺といふ寺がある。又地圖によれば丹霞潭といふのが傍にあり、赤城溪といふのもあるのを見れば此邊は地質上石が赤いのであらう

寒石山在縣西北七十里寒山子嘗居之、今呼爲寒巖前有盤石曰宴坐峯上有拊石洞世傳赤城山神避曇猷徙居此。

といふ樣な傳說もある。

よく讀めば山に關する名文もあり、寺觀門といふのでも見れば案外何かの材料が出てくるかもしれないが、何にしろ送假名も反點も句讀も無いので我々にはとても通讀する事が出來ないから此位で我慢する。これ丈でも既に好意ある讀者諸兄の堪忍袋の緒をきつた事と察せられる。

○前掲「湖沼の研究」に尾瀨沼のことが詳しく記述してある中に、沼の主が赤牛であるといふ傳說は前號に引いた（一〇二頁三行）新編會津風土記の「土人牛（手と誤植）と舟とを云ふ事を忌む、此を犯せば怪異あり」といふ記事の說明として面白いと思ふ。

○其他同書には菅沼や檜原湖などの事が書いてある、燧嶽の事に關して何か書くことがある樣に思つたが、之で切上げて置く。（關口泰）

信州駒ヶ岳、御岳、白山の良地圖出版さる

陸地測量部の實測圖なる、二十萬分帝國圖、二萬、五萬等の地形圖は從來、山岳地方のもの斷えて、出版さるゝ事なかりしが、本年九月に至り、前提の諸山を包含せる五萬分一地形圖出版されたり、何れも實測圖にして、輯製圖ならざれば、精密な

る事は勿論、比較的確實なるものなり、此等は何れも假製版なれば、圖版の鮮明は多少缺きたりと雖も、吾人年來の渴望を醫し得たるものと云ふべし。

駒ヶ岳　五萬分一地形圖飯田二號「赤穗」號に在り
御嶽山　同上飯田九號「御嶽山」號に在り
白　山　同上金澤號の內「白山」號に在り

以上其四周は多少連接して發行されたり、各販賣店（山岳四ノ一に在り）に就て購求さるれば可なり、價一枚七錢五厘宛なり。（蝶郎）

山民の暴狀

今一寸思ひ出したから會員諸君の注意迄に一二の事を記す。

日本山岳志に「越中の劍ヶ岳へは、中新川郡白萩村字伊折より凡五里にして其山頂に達す」とある、私は昨年の夏劍ヶ岳登山を思ひ立て、早速白萩村伊折へ照會狀を出して見ると、酒井長作と云ふ人より返書が來て夫には「伊折より約五里案內者もあり、又立山へは相當の道ありて六里ぐらゐなり」とあつた。

その故に八月の十三日に伊折へ行つて、（北陸線水橋驛より上市町迄二里夫より伊折迄四里、參謀本部廿萬分の地圖に伊折に溫泉のマークがあるが夫は多分白萩村の內の釋泉寺冷泉との間違であらう）酒井と云ふ人に會つて劍ヶ岳案內者の事を賴んだ處何ぞはからん次の樣な答へを得た。

「當地よりは直接に劍ヶ岳へは登れず、又登つた人もないから、案內する人もなく、又登るにしても、別山の後の劍澤邊から登れば行けない事はあるまいと思ふ、夫にしても劍澤迄行くには、人夫四五人も雇つて道をつけながら進まなければ、到底行けない、又立山へも今年は登つた人もなく、又先日の荒れで崖のくづれた所もあるかも知れぬ故やはり、人夫を四五人つれて道を開きながら行かなければ、行かれぬ、劍澤迄五里ぐらゐ、立山の室堂へは六里ぐらゐある」。

先の返書との相違の著しいのに驚かざるを得ない、登つた人もないのに、案內者ありとの返事には、驚いた、こんな、無責任なる返事なら、むし

ろ來ない方がましである、而し茲よりは立山へ登る人も年々少しはあるとの話を聞いたが、八月の十三日にもなつて、「今年は未だ登つた人もない」と云ふのであるから、此道を登る者は狩人ぐらゐの者かも知れない。

兎に角費用と準備とを充分にすれば此道より劍ヶ岳へ登れるにしても、夫より立山を經て、劍澤より登つた方がよからうかと信ずる。

ついでにも一つ思ひ出した事を書く、北海道の蝦夷富士に登らんとする諸君は、可成倶知安で泊らぬ樣されたい、倶知安の宿の者は頗るずるく、私が登山事務所迄の案內者の賃金は如何程だと聞くと、貳圓だと云つた而も其道たるや、たつた六十二丁（比羅夫驛より三十二丁）で而も坦々たる道路で大してまぎらはしくもない、又朝四時に立つと云ふたら、いくら早く行つても事務所では、八時にならなければ、登らせないなど出鱈目の事を云ふて、頗る不愉快である、事務所で聞けば、倶知安の大抵の宿は斯の如きであるとの事、事務所には泊る事も出來る故、成る可く、倶知安で泊るより事務所で泊つた方がよい、倶知安より一時間半で達する事が出來る、事務所より頂上迄は健脚者なれば四時間、弱き者は六時間、最も早いレコードを造つた人は二時間四十分との事、私は不幸にして嵐の爲に羽仙亭趾迄しか行けなかつたが、夫より上は廿丁とかの話そこ迄は約一時間と五分で達した、そこからが最も嶮しくなるのである、事務所で聞けば來年邊より山神を祭つて內地の山の如く白衣の信者を登る樣にしようとの話し、私が倶知安で泊つた宿は驛前の旭館である。（濱谷泰次郎）

愛鷹山の土鼠おつ立

古い山岳を引出して見て居ると、不圖目に止つたのは愛鷹山の寫眞である（一年二號沼津方面の山腹より見たる愛鷹山）、山の右の肩の所に樹木のない草地がある、其形が土鼠が山に走り登つて居る樣に見える、沼津方面では此れを「モグラオツタチ」（土鼠おつ立？）と稱して居る、愛鷹山の登路を聞くと此土鼠を標準にして敎へてくれる事が

多い、土鼠の毛色は夏は綠に冬は黃に變る、正體は葉の非常に些かな愛らしい熊笹である。

土崩は沼津、三島驛の間でよく見える、僕は汽車で此邊を通る度に、種蒔爺さんや、農鳥の如く直接山名に關係はないが、一種の面白味を以て此土鼠を車窓に望むのである。(八代生)

白峰山脈臆測圖解說

本圖は小島兄の『日本アルプス』第一卷の再版に揭載する目的を以て、同書の初版及び本誌第五年第二號に附したるものを、殆んど全部訂正したるものにして、初め小島兄の著書にのみ挿入する筈なりしが、都合に依りて本誌にも揭ぐることゝせり、本圖は三角點の位置と、其標高とは、參謀本部陸地測量部の最近の調査にかゝりたる、網圖及び成果表に據り、其他は本誌に記載されたる、紀行、地圖、寫眞、スケッチと、余等が通過して得たる材料とを採りて製作したるものにして、今日までに刊行せられたる、同地方の地圖としては、最も實際に近きものなりと確信す。

此地方の地形は、從來出版せられたる諸地圖、悉く其眞を失し、何等の用をなさず、比較的正確なるものと稱せられたる、農商務省地質調査所出版の二十萬分一「甲府圖幅」に在りても、鳳凰山を二千九百米突以上として、地藏岳より高きものと見たるが如き、白峰の間ノ岳と、同じく農鳥山の支峰なる荒川岳とを、混同合一して、荒川嶽となせるが如き、甲、駿、信三國界に、三峰嶽なる實際に於て存在せざる山岳を、空想明記したるが如き、異名同山なる甲州駒ヶ岳と、白崩山を二山に分ち、三峰川の支流なる黑川の上流を挾んで對立せしめ、同じく異名同山なる赤石主系に位する間ノ岳と、荒川岳とを、間ノ山、及び荒川嶽の二山に分ちて、田代川の上流を隔てゝ並記したる等は、未だ山岳趣味の全く知られざる時代にありて、製作されたるものなるが故に、恕して問はざるとするも、富士川、大井川の分水嶺なる、即ち甲、駿、信の三國境を誤りたるが如き、殊に信州領たる黑川の上流を、甲州領となして、信、甲國境なる駒ヶ岳を、

純然たる甲州の地籍に移したるが如きに至りては、責任ある官廳の編纂刊行としては、實に杜撰と云ふべきものにして、其弊日本の地學界を謬り、現今の模範地理書とも云ふべき、山崎、佐藤兩學士の『大日本地誌』、矢津昌永氏の『內外地誌』、吉田博士の『大日本地名辭書』、及び三省堂の『日本百科大辭典』等、皆其謬りを傳へ、滔々として極まる所なく、陸地測量部の同地方地形圖の出版刊行までは、少數なる余等山岳狂と、陸地測量部の一部人員の外は、絕えて其眞を知る者なきに至りたるは、頗る學界の恨事と云ふべきなり。

輯製圖なるが故に、信ずる者の無理なるは勿論なれども、「所謂參謀本部の地圖」なるもの、即ち「輯製二十萬分一圖」の「甲府圖幅」は、白峰三山の稱呼と、甲、駿、信の三國堺は、地質調査所の地圖と同じくして、更に白峰の異名とも見るべき、白根山と西山（甲州芦安村の人は、白峰連嶺を、地藏、鳳凰山塊のの東に蟠蜒せるに對して、ニシノタケと呼べり、西山は西の岳より誤解せるものならん）の二山を、白峰の前方なる芦安の南に復記し、甲州にて仙丈岳と呼び、信州にて前岳と呼ぶ大山岳を二山に分ち、信、甲境の、約四五里の距離もあらんと想はるゝ處に別記し、北なるもの即ち現今の前岳一名仙丈岳に、仙丈岳なる記名をなし、南なるもの即ち現今の赤石主系の間ノ岳一名荒川岳に、前岳なる新名を與へて記錄を破り、駒ヶ岳を甲州に入れたること地質調査所の地圖に均しく、甲州領なる釜無川の上流を、信州領なる黑川の上流と混同合一して、釜無川と記し、此川を以て甲、信兩國の國界を劃せり、此圖は地學的知識を缺ける人士間に珍重されたるが如く、今日普通店頭に販賣せられある、各縣全圖の根柢をなしたるものにして、山岳地方はさて置き、平地にありても、用をなさゞる所あり、畢竟參謀本部の名に誤まられて、同所の「二萬分一地形圖」、「五萬分一地形圖」、「二十萬分一帝國圖」の如き、正確なるものと、輯製圖とを玉石混淆したるより生じたるものならん。

前陳の如く官廳より出版せられたる地圖にして既に信ずるに足らずとせば、地形踏査、地圖製作

等の頭腦を有せざる、余の略記したるもの、誤謬多きは、蓋し當然なるものと云ふべし、乃ち臆測圖と名づけ、大方の叱正を仰ぐ所以なり。

此地方の通路に就きては、本誌既に數々其紀行を載せたるを以て、茲に贅言を要せざれども、初めて本誌を讀まるゝ人もあらんかと、其大略を記することゝせり、元來此邊の山岳に登攀せんと企圖するものは、數日の間、殆んど野獸的生活をなし、激流、深林、嶮崖、崩石、强風、豪雨、濃霧と奮鬪するの覺悟なからざるべからず、決して富士山に登るが如き、頗る安全にして、且つ容易なるものにあらざるなり、故に好案内者を得て、野營の用意をなすにあらざれば、斷念して出發せざんことを切言す、通路の大部分は、左右の山岳群起聳立して、老樹古木繁茂し、兩山の間、極めて狹まりたる處を、屈曲して流るゝ溪流を溯るものにして、偶々大雨に會し、溪流氾濫する時は、進退谷まり、野營地に滯在して、減水を待たざるべからず、而して出水毎に、溪流の變更、山側の崩壞等に依りて、通路を異にするを以て、精細詳密なる登路案内地圖を作るが如き、到底不可能の事に屬す、諸地理書記して人跡未到となすもの、所以なきにあらざるなり、『大日本地誌』富士川の上流なる早川を記して曰く、「殊に其上流地方の如きは、峻峰群起して、交通頗る嶮難を極め、榛莽蕪穢人跡未達の地少からず」(田代川上流の記文同意味なれば略す)、『大日本地名辭書』は曰く、「凡奈良田より市之瀨、(信州上伊那郡)まで七八里、横絶の徑なしと云ふ」、(早川の記事)、「高遠より南の山谷を入之谷と稱す、林木陰森として、猪鹿の栖窟する處なるが斧斤銃火も之に入ること稀なれば、太古無人の境致とや謂はん、今伊那里村(市之瀨)の管内とす」(三峰川上流の記事)、其通過の困難なる察するに足るべし、昨年までは、富士製紙會社の伐材の爲め、數多の人夫、野呂、田代兩川の上流に、入込み居りて、人夫の宿泊小屋多く、比較的便利なりしが、今年より同地方の伐材を廢止したれば、以後の白峰登攀者は、一層不便を感せざるべからず。

普通白峰三山に登るには、西山溫泉より奈良田

を過ぎ、猶ほ早川を溯りて、ヒロカウチに至りて左折して溪流を上り、白河內岳の北方に出で、夫れより右折して甲、駿兩國界の山稜を北進し、農鳥山に登り、北岳より大樺澤を下り、堀切峠を踰えて芦安に出づるを便なりとすべし、天候不良にあらざれば、四日にして足る。

『日本アルプス』第一卷初版に載せたる地圖を、訂正したる要點を擧ぐれば、明治四十四年の通路即ち西山溫泉よりシロカウチを迂りて、駿州田代川上流の東俣に下り、赤石主系の間ノ岳に登り、更に東俣を溯りて、其水源を極め、白峰の間ノ岳に上り、再び野呂川の水源を下り、前岳を上下し堀切峠を下りて芦安に出でたる踏査道路（道路の文字は當らず、踏査線と云ふべきならんも、踏査せざる通路の文字に窮し、暫く道路の文字を使用せり）を增加したること、仙丈岳を前岳に改めたること、信州上伊那郡の黑檜山を獨立山となさずして、間ノ岳（白峰）の支峰とせしこと、駒ヶ岳の南にアサヨ岳なる一峻岳を加へ、其鞍部に仙水峠なる通路あること、駒ヶ岳より地藏岳への通路、野呂川上流の廣河原を下りて、直に北巨摩郡へ出づる通路、地藏、鳳凰附近の大訂正、野呂川と荒川と合して早川と呼ばるゝこと、農鳥山の支峰に荒川岳を加へたること、ヒコカウチ溪及び其通路の記載、笹川通路の變更、露宿地の脫漏を補ひたること等なりとす、三角標は一昨年破壞せられて、現今存在せざるを以て、其黑色を削れり。

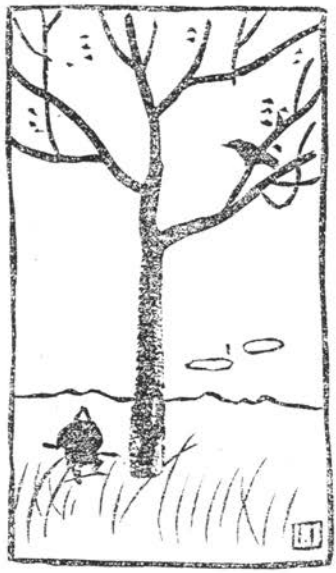
四十四年の通路は、小島兄の紀行と關係なきを以て、露宿地を記載せず、若し之を知らんと欲するものは、本誌第六年第三號所載の「野呂、田代分水嶺問題」を見らるべし、野呂川上流の人夫小舍は、既に無人の小舍にして、且つ廢滅せるもの多ければ、事務所と北澤の小舍を除きて、他は悉く省略せり、今夏、西山溫泉よりヒロカウチを迂り、北澤を經て信州高遠に出でし折、北澤の小舍に休憩せり、小舍は全く破壞せられて、荷物運搬婦人の宿泊所たりし、東方の小舍のみ、纔に出入するを得たりき。

本圖製作の後誤謬發見せしものを擧ぐ、仙水峠は二千米突位にして、池ノ平峠は二千米突以下な

ること、ヒロカウチ溪を上れば、白河内岳と農鳥山の支峰と見るべき、一小峰との間に出づること、ゴーロ澤はゴーロ澤頭の頂上附近より、南西に直下し居ること、シロ井澤は地藏岳の頂上附近より、南方に直下し、西南に廻りて野呂川に入る、廣河内（白河内岳の南にあり、標高二千七百十八米突）は土人シャクシと呼ぶ、深澤（高嶺より出でゝ野呂川に入る）は土人コザハと云ふよし。

本圖を製作するに當り、辻本氏の高敎を仰げること最も大なり、梅澤氏之に次ぎ、高野、三枝、山川、鵜殿、濱谷の諸氏も亦忠言を賜ふ、而して該圖に記入されたる一切の文字は、佐々木氏を勞せり、記して深謝す。

大正元年十月十日　　北越にて　高頭式



雜報

燒ヶ岳の變狀

去月廿日以來燒ヶ岳に登山し觀測中なりし松本測候所大久保技手歸來の談話に依れば燒ヶ岳は先年登山の際より山嶺一體著しき變狀を認め即ち噴煙最も壯んなる大火口は四五あり其大なるものは巾四十間長さ百四五十間にも及ぶべきが其他無數の小火口ありて恰かも蜂の巣の如し又連峯草木の噴煙の爲め枯死し居るは勿論山腹迄も大噴火の際大石を吐出し居るを目擊し濃色或は淡色の噴煙は堪へず天に沖し居るの奇觀を呈し風向は西北若くは西なり大森博士は十五六日頃登山すと。(六ノ一二、信、毎)

降灰時と施設

燒ヶ岳の噴火と其降灰とは幾何の時間を有するやに就て三十分間位を隔つるに過ぎずとの說あるも上層と下層とは空氣の流動に非常に遲速あり淺間噴火の如き約三十分にして東京に達するの例あるも开は上層なるが爲めにて燒ヶ岳を中心として東京に達するの例あるも开は上層なるが爲めにて燒ヶ岳を中心として五六里地方の降灰は下層によるものなれば早くも一時間平均一時間半を要すべければ噴火を知つて後防灰の施設をなし得べし然して縣の施設としては既報の如く電話電報により各地へ速報すべき豫定なるが電線架設に就ては上高地島々約六里間中一里半は無立木地なるも其他は縣國有林の立木を利用し得べければ經費は大に輕減し得べしと也。

燒岳の活動に就て

東京理科大學地震學教室理學博士大森房吉氏は過日來信州燒岳の活動に就て調査中なりしが此程本社に宛て左の報告を寄せられたり。

▲緒言　燒岳は今より三百二十餘年前に當り天正十三年に大破裂をなしたりと云ふ爾來格別の異變無かりしに近年に至り再び活動を開始し明治四十年十二月八日の第一回破裂より現時迄で四ヶ年半の間に噴火若しくは降灰せしこと約四十一回に及べり而して其回數の最も多かりしは五月六月七月なりとす燒岳噴火の性質は爆發的にして地下に欝積せる蒸汽瓦斯が時々破裂して岩石土砂を拋射するにあり灰と稱するは岩石の細粉に外ならずして噴煙には二種あり其の純白なるは蒸汽瓦斯のみを噴出するものにして灰を混ずること少なく暗黑なるは大小爆發の結果として灰を多く混ずるものなり白烟の噴出盛なるときは爆發なきを常とす。

▲降灰　燒岳より降灰するに二種あり(甲)降灰量の著大なるは強き爆發をなせる時にのみ限る但し全く爆發の無き時と雖も(乙)白烟の噴出盛なる時は多少灰を誘出するとあれども此場合には降灰の量は甚しからずとす而して降灰の方向は地面上の風にのみ關せず却て主として上層氣流に支配さるゝ物なるが上層の風は西手の風なるを以て燒岳の灰は東手即ち東北、東、若くは東々南へ降下するを尤も燒岳は比較的低くして乘鞍、鎗岳、穂高岳等の諸高峯に圍繞せらるゝを以て(乙)の場合は特に地形の影響を受くる事少なからず從て降灰の時間にも遲速あり(乙)小降灰は割合に長き時間を要すべきなり(噴出灰進行の速度方向降下量等に付き精密に調査するは極めて肝要とする所なり)灰の降下する最も屢々なるは燒岳より六七里の距離にあるものゝ如し而して灰が同距離を進行するには三十分乃至二時間の時を要すること多しとす。

▲噴火の順序　明治四十年十二月舊噴孔底の東隅より噴火せる勢力微弱なりき四十二年三月廿三日に至りて始めて強き爆發あり深き噴孔を生じ多量の熔岩を射出せり爾後同噴孔は次第に鎭靜したりしに昨年明治四十四年六七月に於ては燒岳の噴火甚だしく頻繁となり其結果として舊孔壁の北樣を爆破し東西に並行し深さ六十間幅約四十間にして長さ百間なる狹き深孔を新に生成し東方の一端より目下盛に白煙を噴出しつゝあり要するに近年燒岳噴火の勢力は昨年六、七月に於て最盛の時期に達したりと認むべく七月十二日の爆發初發以來最激のものなりき先年噴火せる福嶋縣の吾妻山、安達太郎山の例に依るも燒岳噴火は今後次第に其勢力を弱むべく更に新しく大噴孔を生ずるが如きことはなくして寧ろ現時の噴孔が一部閉塞せらるゝに及びて小程度に爆發するものならんか即ち時々微量の降灰は免れざるも昨年六、七月の如き甚大なる降灰は無かるべしと思はる又た爆發現象の性質並に他の火山の例より推すも燒岳の爆發は永久に繼續すべきものにあらず數年後には殆んど鎭靜の狀態に歸するならんか。

▲今年は如何　今年の夏期に於て燒岳が顯著なる降灰をなすや否やを知らんことは不可能なれども從來の噴火降灰の時日を調査するに左の如し。

(一)明治四十年十一月八日、十一日、廿三日
(二)四十一年三月八日
(三)同七月廿八日
(四)四十二年一月廿日(×)
(五)同三月十三日、廿三日(×)廿九日、四月十六日、五月七日、十三日、十五日、廿八日

◎雜　報　燒ヶ岳の變狀

(六)四十三年十一月十一日(×)

(七)四十四年五月六日、十一日、六月十二日(×)十四日、十六日(二回)十七日、廿二日、廿四日、七月七日、八日、十日(×)十二日(×)十六日、十七日(二回)八月十八日

(八)四十五年二月十一日、十三日、十八日、十九日、廿三日(×)

(九)四月一日、五月六日、八日

此の如く燒岳の噴火降灰は(一)乃至(八)組に別つべく即ち多少の群をなして一時期に相接して起るの傾向あり(×)印を附せるは噴火が比較的强かりし爲而して各活動期間順次の時差即ち噴出なかりし時期の長サは三ヶ月五ヶ月六ヶ月、一年六ヶ月、六ヶ月六ヶ月にして初發の小噴出を除けば時差は約六ヶ月を單位となすが如くなれば若し從前と同一の例を繰返す者と假定すれば本年二月廿三日の噴出後より八月中は少なくも格別著しき降灰なきを得んか此は素より正しき議論には非ずして寧ろ單に冀望に止まるもとす。

△降灰豫知の法　降灰問題に先だち爆發を豫知し得べきや否やを究めざるべからず或種の火山に於ては强き爆發の前に非噴出的變動即ち局發の火山性微震鳴動等を夥しく發して前兆を示すことあれども燒岳の爆發は如何なるべきかは從來よりの調査なければ今後の觀測結果に俟つの外なし、次に降灰を豫知せんには燒岳が噴煙せる時刻を直に認めて夫れより各地に降灰するや否やを推定するにあれども第(二)節の甲乙兩種地動の關係上相異なり(甲)多量の降灰を催ほすべきか爆發は幾分の地響即ち噴火地震を伴ふを以て銳敏なる微動計に由りて多少遠距の場所とても之を觀測するを得べきも(乙)白烟の噴火して少量の降灰を誘致することあるも此は全然爆發に非ざれば噴火孔壁側に於けるよりは地響を感ずることを不可能なり換言すれば微動計を以てすれば多量降灰の爆發を知り得べきも少量降灰の場合は多くは知り得べからずとす、手近き方法としては人をして燒ヶ岳附近の地にて噴烟、鳴響、震動等を注意して觀察せしめ降灰あらんと思はるゝときは直ちに電話にて其筋に報告するが如きも幾多の効果あるべく今日の如き際には降灰問題に就きても有らゆる手段を講ずるを可とすべきなり。

△附記　燒岳の如き活火山の近傍にては平常より微動計を以て地動を不斷に觀測し置くは噴火勢力の消長、爆發の起れる時刻の測定、噴火地震の觀測其他諸種の調査問題に就きて有益なる材料を與ふるものなれば松本測候所にても今後は微動計を据へ付けんこと必要なりとす又た各郡町村役場、警察署駐在所等より忠實に降灰、鳴動等に關する報告を其向に附送せられんことを希望に堪へざるなり。(七月一日時事)

燒岳山麓大崩壞

去月上旬の大降雨以來南安地方に於ける梓川の水が數日間濁り居る故沿岸の人々は不思議に思ひ居たるに二三日前漸く松本工區の手にて山崩れありたることを發見せり、今回の崩壞地は燒岳の山麓にして下堀澤と云ひ流失土砂は巾約百二三十間、長さ一里餘、厚さ三十餘間に及べり、又同所の對岩なる霞岳の山麓も長さ四十間巾約百間厚さ十間、缺潰し居り兩所とも今後出水毎に崩壞の模樣あるのみならず同所は保安林編入地なれば目下土木 林務の兩課に於て善後策攻究中なりといふ。

福嶋王瀧間電鐵

木曾福嶋町より王瀧村上嶋迄の私設鐵道敷設は昨秋東京方面より立川雲平、小川平吉數氏發起人となり出願したるが未だ認可にもならざる處更に大阪名古屋方面と地元の大澤辰次郎、武居午之助氏等數十人發起として電氣鐵道を計畫しつゝありし處へ帝室林野管理局木曾支廳にては同線と比較線もとりしか上松驛より王瀧迄十四哩の森林鐵道を計畫しどしどし測量も初めしより若しも此森林鐵道が出來上りて旅客貨物の運搬を混營の曉には民業線の大影響を蒙るのみならず現今は御嶽登山の一手專斷的の利益を得つゝある福嶋町の死活問題也と云ふ者もあり町民大會を開催せんとの噂も弗々あり廿日夜は大阪方の進藤嘉一郎氏來福發起人の相談を爲し敷設認可を出願の筈の處偶然にか故意にか東京方より渡邊某何時の間にか王瀧に登り居り王瀧郵便局長家高鍋吉氏と福嶋町兒野喜一氏とを新たに發起人に加へ王瀧より電話にて廿日福嶋町有志へ會見を申込めるが東京方へは更に横濱の平沼專藏氏を加へ株式等の募集は更に平沼氏一人にて引受けて事業は爲す筈なりとの噂もあれり。（六ノ二二、信濃毎日）

駒ケ岳撮影隊

日本アルプスの南端に聳ゆる木曾の駒ケ岳は未だ存外世間に紹介せられ居らざるは遺憾なりしが二十四日名古屋愛山會員中小林松僊氏外十九名は西上松日より登山したるが同日東巳義口よりは駒ケ岳かけゝ道改修熱心者野田藤松氏が東京宮内寫眞師外計十一名と全山風光撮影の爲め登山したるが野田氏一行は駒石を指して下山し愛山會員は三山より下山したるもの思ひもかけず岩華觀音附近にて遭遇したり兩隊共奇遇を喜び同地平栃捨次郎氏方にて茶菓の饗應を受け原野林昌寺庭前に於て合同紀念撮影をなし廿五日午後五時四十分宮越驛にて西と東に別れたりと。（七ノ廿九）

駒ケ岳降雪

十三日より木曾は非常の寒氣にて十四日夕方迄駒ケ岳山麓迄降雪白く皆々結霜を愛びつゝあり。

駒ケ岳近道開き

木曾の御嶽山は夏でも寒いと木曾節と共に世上に喧傳せらるゝ處なるが木曾にはもう一つ駒ケ岳があり風光及び特に高山植物の豐富なる御嶽山とは全く趣きを異にするなれど山勢至つて嶮峻の爲め勢ひ登山者も少數なるべく殊に其登山路の所謂掛け拔けならざるを遺憾とし北麓日義村原野區にては一路開通を企劃し數日前數十名にて測量を爲し田植濟み次第數を斫り幾分の鍬入れを區全部協力にて從事する筈なるが同路に依る時は宮ノ越停車場より東頂上三山迄三里それより西頂上に至りて四里弱にて割合に登山は容易にて且それより上松道又は福嶋道へ下る時は全山の風光を探尋するに好都合なりと。

木曾の御嶽山

木曾節と共に天下に名高き御嶽山は矢張大日本々州第二の高山たるを失はゞ然かも中央線一と度び全通して不便、偏鄙の代名詞的の木曾も天下の觀光地として世間に喧傳される樣になつて御嶽登山者も昨年度は約三萬に增加した譯ではあるが然し以前に比べると道者の足は急がれ氣昧の浮ついて昵

◎雜　報　木曾の御嶽山

と神を祈る親みは淡々しくなつたそれは皆滝車の時間に壓迫される結果だ故に登山者の數は多くても落して行く金は少ないとは旅舍飲食店の異口同音に語る處だ然し今年の景況は一體初めは王瀧口が賑つてそれが引かゝる頃から黑澤口は賑ふのださうだが兩口共諸中の人數三割程增して來るが三人五人の登山者は少くて合せて王瀧口はそれでも一割の增加黑澤口は例年の通りださうだ▼其處で御嶽山の諸物價は各山上の小屋の分は王瀧黑澤相談の上決定して順次下降する運賃の割合で安くなる譯だが。

○項上諸物價▽小屋代一人五錢▽布團一枚六錢▽飯一杯六錢▽汁同三錢▽赤飯六錢五厘▽草鞋一足六錢▽宿料七十錢▽一食料廿八錢▽酒一本廿五錢▽甘酒一杯四錢▽ビール四十錢▽サイダー廿三錢▽鷄卵六錢。

○田の原、金剛童子▽宿料六十八錢▽一食料廿七錢▽飯一杯五錢五厘▽汁同二錢五厘▽赤飯同六錢▽酒一合十一錢▽甘酒一杯三錢五厘。

○王瀧上鳴▽宿料五十錢より五十五錢講員は一割引▽二日掛强力賃一圓五十錢▽日戻り同九十錢▽提飯辨當九錢▽割子同十一錢▽煮〆十三錢▽燒酎一合十五錢▽酒一本十五錢▽駕屋宿料辨當共三十八錢▽商人同五十五錢▽田の原行强力五十八錢▽中小屋同二十二錢▽黑石同三十八錢▽神戸同二十五錢▽大人十六錢▽代參四十五錢、宿料は、原方持▽福嶋行强力九十錢▽黑澤へ打越一圓九十五錢▽黑澤へ下廻り五十八錢▽金剛杖一本十二錢▽草鞋一足五錢▽鼻紙一折一錢五厘▽白紙一帖四錢五厘▽半天損料四錢▽蠟燭二錢五厘▽白米一合三錢▽餅一升三十五錢▽蕎麥粉一升二十錢▽酒一尺二錢五厘▽ビール三十五錢▽サイダー五錢▽ビール一杯三錢五厘。

○黑澤口▽項上迄强力賃一圓二十錢王瀧へ打越一圓七十錢だ。

▲參詣者の分布は愛知縣を最多として岐阜、埼玉、靜岡、群馬、東京、千葉、茨城、栃木の近縣が多くて關東は王瀧口より關西は黑澤口より各開山者の故郷の緣故にて登山し又た其道を下るのが七分で何方からなりの駈拔け者は三分には過ぎぬさうだそれで遠くは篠原源覺の關東州教會は昨年十二人登山して燈籠を寄進したが猶遠くは菅友彌は東部教會でもう三ケ年米國ボストン府に滯在して傳道して居るが其内には外國人の御嶽講社が出來さうだ然し外國人のは神と云ふ觀念より地質學者的なのが多い樣だ、それから又内地では越後長岡の渡邊六松氏は其初め御嶽山へのぼり東山を堀つて見るとの暗示を受け堀つた處が石油が湧出した其謝恩の爲め先達谷口新作をして最早數年間の月參を續けさして居るさうだ。

▲項上郵便局の狀況は去月廿一日開始後二十一日の午後七時頃と二十二日朝五時頃の二度降雪があり霜柱二寸結氷二分が最も寒く此時は郵便遞送も一日止つて暑かつたは八月四、五兩日の最高攝氏十七度であるが四日の最低は四度五日の最低は二度半と云ふ次第で郵便物は七月末日迄の受付總數書簡二十九普通ハガキ三百廿三繪ハガキは九百二十交附では多い日で信書八小包三少い日は信書四小包一との事で八月に入つては遞增して四五の兩日は受付數共に三百卅八六日は五百三十五と云ふ勢ひだ(八ノ十一、信、每)

淺間危險告知

淺間山の登山者は年々加はり活動はいよ〳〵多からんとして危險限りなきを以て本縣にては特に巡査駐在所を設け警察電話を架設したること既記の如くなるが尙今回小諸警察署にては左記方法により危險を豫知するとせり尙岩村田、輕井澤兩署にても同樣の方法を執ることゝなる筈登山者は特に注意すべし。

一、日々の地動狀況を警察部へ上申する外岩村田、輕井澤兩警察官署及小諸町役場へ電話にて報ずる事。

二、日々の地動狀況を小諸分署掲示場及小諸字荒町淺間登山入口に掲示す。

三、特に登山危險と思料する時は前項掲示に注意を引くの措置を爲し尙小諸町役場をして小諸商工學校淺間登山口庭に赤旗を掲揚せしむる事。

四、登山を危險と思料する夜間は滊車發着毎に取締巡査をして特に注意せしむる事。

富士山の近況

富士山は十五日頂上より麓なる御殿場警察分署及び大宮警察分署に通ずる電話の架設を終り頂上には例年の如く郵便局出張所を設け郵便物の取扱ひを開始したるが電話は警察用なれども一般公衆の便にも供すべしと又日本赤十字社にては四合目及び六合目の二ヶ所に救護所を設置し十五日菅野監督醫師外一、二名の看護婦を引率して夫れ〳〵赴任せり同日山麓各警察署長は、宿屋主、及び雇人等を召集して登山者に關する訓諭を與へ同時に健康診斷を爲したるが本年の富士山は例年より降雪少なかりし爲めか殘雪極めて少なく只だ萬年雪を留むるのみにて氣溫は五十度を上下し例年より暖氣なれば濃霧時々襲來せり而して十五日の登山者は約七十名あり十六日は早朝より百二三十名の登山者ありたるも四合目にて何れも濃霧に閉ぢ籠められ室に避難せり。（靜岡十六日電話七月十七日時事）

◎雜報　淺間危險告知　富士山の近況

富士山の大降雹

富士山六合目附近には三日午後一時頃大降雹あり爲めに登山者は何れも石室に避難し其歇むを待ちて登山又は下山せりと但し本日は天候回復せり。（御殿場四日發）

富士山の降雪

十四日午後二時より五時頃まで富士福野地方に暴風雨襲來し氣溫俄に降下し雹さへ降り落雷數ヶ所に及びたるが富士山頂九合目以上には約三寸の降雪ありたり。（甲府十五日電話八月十七日、時事）

昨今の富士山

十五日の富士山は頂上晴天にして北風強く溫度三十六度、須走六合目にて北東風強く溫度五十八度、午後六時に至り更に風強かりしも何事もなし此日の登山者は男四百二十五、女三十九、外國人男四、女九、下山者は男四百九十九女三十六、外人男四、女四、十三四兩日の頂上は雷鳴降雨降雹降雪ありし事とて同日は救護を受けし者男十六名女五名あり尙ほ十六日午前六時の天候は頂上晴天にして西風あり氣溫四十七度須走口六合目は晴天西の風あり氣溫五十四度同日の登山者は約六百名ありしと。（靜岡十六日電話）

◎雜　報　初夏の降雪　諸高山の晩雪と融雪

初夏の降雪

▼淺間山　十三日より十四日朝へかけ降雪ありたり（十四日午前小諸電話）▼八ヶ岳　十二日午後二時頃八ヶ岳一帶に多量の降雪ありたり▼日本アルプス　南安日本アルプス一帶には十四日朝降雪を見たり。（十四日午後豐科電話）

諸高山の晩雪と融雪

本年に於ける淺間連山西方より武石岩東方より望みたる晩雪と融雪とを列記すれば左の如し但し括弧を附したるは前年のものなり。

山名	晩雪	融雪
淺間山	五月廿三日（五月十八日）	五月廿三日（五月十八日）
三ッ尾根山 同	（五月一日）	同　（五月十日）
籠塔山 同	（同　）	同　（五月十日）
烏帽子岳 同	（同　）	同　（五月五日）
四阿山 同	（五月十日）	五月卅一日（六月五日）
武石岩 同	（同　）	五月廿八日（五月十八日）

會報

本會幹事の改選と新任

會則第五條に由り、左記の通り選出せられたり。

山川默氏　高頭仁兵衛氏
高野鷹藏氏　工學士辻本滿丸氏
(新任)農學士辻村伊助氏　中村清太郎氏
理學士梅澤親光氏　小島久太氏
三枝威之助氏　法學士城數馬氏

在朝鮮　武田久吉氏
在英國

◎會報　會員登山報

會員登山報

▲(前略)七月九日北京發新開嶺を越へて古北口城に達し萬里長城外に達し夫れより青石樑安子嶺廣仁嶺を經て熱河に着引き返して別路を取り青松嶺黑溝樑の嶮を越へ黑谷關にて萬里長城を横切り家路城に着し此地より五龍山登山を試み更に長城外に出で板谷嶺分水嶺啦嗚嶺行開嶺分水嶺(別山)等の一角を越へて馬闌峪東陵に着夫れより直隸の平野を横切りて八月二日歸着致候旅行には二名の支那人を伴ひ主として徒步にて參り申候猶暑中休暇暫くある事なれば其間に他方面の高山へ登攀致すべく計劃中に御座候何れ其

◎會　報　會員登山報

中少閑を得れば委細御報知可申上候草々不一。(支那北京にて三宅市郎)

▲同行一名、人夫三人にて八月七日信州大町を發し鹿島冷澤より鹿島槍ヶ岳に登り後立山々脈を南に針木峠まで縱走致し候、露營地は下の如くに候。

1冷澤2冷池3新越池、マヤクボ。五日目午前針木峠にて人夫を大町に歸し、蓮華頂上にて、陸地測量部員中村政雄氏の五萬分之一地形圖測量に從事せらるゝに會す、針木峠を西に黑部川に下り平の小屋に二泊、但し一日は岩魚を食ふて休養す、次で溫谷峠より、中の谷を越え、御山澤を登り立山の室堂に至る、會員岩村圓氏に會し、人夫を交換し、翌山雄山に登りて、下山、富山市より歸京の途につく。(中村孝二郎)

▲俗用にて此の夏は全く出ぬ積の處愚弟に誘ひ出され立山丈けといふ約束に無理をして出かけ候處室堂にて大町より來れる會員中村氏に出會人夫を大町に歸さるゝを聞き遂に針木を越すとと相成申候昨日正午室堂を發し御足跡を踏み一の越より御山澤を下り平小屋着本日一日休養昨日針木を越へ大急にて歸阪致候御山澤の光景は眼を驚し申候寫眞の時間なきを殘念に思ひ候貴兄の手に必らず見事なる者出來しならん機を得て拜見を樂み居候八月十五日。(平の小屋にて岩村圓)

▲八月十八日東京發大町より針の木を越ゑ、立山溫泉に至り夏に立山に登山廿八日歸京仕候。(木村鎭吉)

▲小生は八日東京發葛の湯より上高地へ下り申候烏帽子、三ツ岳、眞砂、野口五郎、赤岳、鷲羽、蓮華、双六、もみ澤、槍を極め十八日東京へ歸り候。

晴天續にてまことに御陸樣にて萬事愉快に登山を致候三枝君は雨天の爲途中より御もどりの由人夫より聞き露營地の跡など見候時は定めて御殘念の事と御察申上候。

御尊君も御承知に候得共該山脈の縱走はなか〳〵愉快に有之候寫眞も少し計り取り候得共途中鷲羽裏は人夫の者黑部の溪谷に落ち悉く水泡に歸し申候いづれ參上拜眉御話も承り度また申上度もあり何れ參上可仕先は右御通知まで早々。(加藤竹三郎)

▲去十一日鬚山舘の令息と同行にて大町を發し濁澤より烏帽子、三ツ岳、五郎岳、赤岳、黑岳、赤牛岳、鷲羽岳、蓮華岳、鎗岳(第二回)を經て上高地下山尙本日同地より島々へ出づる間にて一外人に出會候處何だか寫眞にて見覺えある樣思はれ候へ共其誰なるやは後に至りて「ウルルター、ウエストン」氏なる事を承知致し候十七八年振の槍や上高地高原等變化せるに驚かるゝならんと存候。(八月十九日、淺間溫泉西石川にて青木忠次郎)

▲小生七月廿日より廿一日にかけ江州伊吹山に登り少しばかり植物を採り申し候此夏は御岳か何かへ登る考へなりしも此度の御不幸のありし爲め遂に御遠慮致さゞる可らざる義と存居候。(岐阜縣警察部南部洋)

▲七月二十五日より信州八ツ岳に登山致し赤岳中岳阿彌陀岳横岳硫黃岳根石岳へ登山致し候尙硫黃岳の西南なる澤を下り從來餘り登岳者なき阿彌陀岳を西北の方面より登岳致し候其節三丈餘の谷に墮落致し其際山岳會々員章何れへか紛失致し候幸小生は僅の負にす傷てみたるは幸甚の至に候阿彌陀より出る澤はなか〳〵に急

して危險の個所甚だ多く珍しき花も多く愉快に候ひき八月三日歸京、右の山岳會々員章は到底發見困難なるべく番號九十一號と記憶致し候間此段御屆仕候也。(小高秀一)

▲殘暑嚴しく候處愈々御雄健大賀に存候本夏登山道すぢを餌單に御報申上候八月初旬信州宮城より有明山に登りて中房温泉に下り準備を整へて燕岳に登り大天井嵩念を經て、槍ヶ岳を極め下高地に下り、燒岳を越えて蒲田に泊り更に笠ヶ岳に攀ぢ平湯に出で乘鞍岳を越えて白骨温泉に浴し松本を經て歸京仕候。(高橋政次郎)

▲七月廿八日一行七名は案内上條槌吉大井正吉他人夫四名を率ゐて穗高山より槍ヶ岳に日本北アルプスの縱走を試む午前七時上高地發、岳川を溯て花崗岩を攀ぢ前穗高を右に眺めつゝ中穗高の三角點下に達して宿營の準備をなす今正に二時半、天曇りて僅に梓川下流方面を望み得たるに過ぎず、廿九日七時同所發、天晴れたりと雖雲霧の來往激しく眺望を缺く、中穗高を下りて岩塊落々たる所謂チヂをつたひ、十一時奥穗高に至る、雷鳥の遊べるを見ること多し、北穗高に達する途中一大雪渓道を遮り横斷頗る危險、人夫等時期早きに失し、雪渓大にして行路の危險なるを說き寧ろ横尾澤を下りて槍ヶ岳に至らんことを勸むること切なり、遂に衆議一決、雪渓を下りて横尾の空澤に出でその横尾の本谷と合する所まで下りて更に瀧の如く奔流せる本谷を攀ぢ數多の小山脈、雪渓を横ぎりて七時坊主小屋に着す、三十日早朝槍ヶ岳登山、天幸に晴れて四方の眺望壯觀極りなく、白扇逆に立つ芙蓉峯を認め得たる時は思はず快を叫びぬ、九時下山、雪渓を滑走して正午赤澤の小屋にて晝食深さ四尺を超ゆる梓川の急流を横ぎる數回にして六時上高地に歸着、畏くも陛下崩御の報を受け翌日早々行李を整へ歸京の途に着く。(甲藤新)

▲拜啓小生儀去る八月廿日別府附近龜川温泉場より由布登山を企て同日は山麓湯の坪温泉に一泊翌廿一日登山東西兩峯をきはめ北麓塚原温泉を經て龜川に歸着仕候間右御通知申上候。又小生宿所左に轉じ候間御承知被下度候。(第一高等學校寄宿寮日高信六郎)

▲久しく御無音致し失禮仕候本夏は七月中旬に榛名を越へて草津より草津白根山に登り万度温泉に出で信州山田温泉に出でし準備旅行のみであとは御不例にてそれなりけりと相成り昨日秋の赤城を見んと登山仕候湖畔紅葉は盛にはまだ旬日を要すと存じ候も湖畔に立ちならぶ木々のこずゑに紅葉して白樺の黄なると共にすでに秋景色に御座候、湖畔の盛は十月七八日の頃と存じ候。(赤城湖畔にて黑木三次)

▲元年八月十五日山岳會員石谷讓二氏案内同日白馬頂上宿り十六日鑓ヶ岳へ行十七日午前七時發落合へ午後二時四十分着祖母谷温泉へ六時四十五分着富温泉は豪水の爲破られ營業出來ず又祖母谷川昨年より大に破損し大に困却仕り候富地十時十分發にて鑓釣へ午後一時半着富地八時發愛本へ午後一時半着餘後便。(白馬山案内人丸山廣太郎)

▲第一便廿四日伊勢松阪出發名古屋一泊、本日名古屋發水曾福島に下車仕り御嶽に向つて發足仕り合渡峠の茶屋に來ると二人の御嶽登山らしき人を見受け候誰ならんと近寄れば志村寛高頭仁兵衛の兩氏に候意外々々之より黑澤に向つて共に下り候明日は俱に登山仕るべく候七月廿五日黑澤口にて。

◎會　報　會員登山報

第二便廿六日志村氏身體少く和と違ふとて歸らるゝ事となり午前六時半高頭氏と共に黒澤を出發仕り候終日雨登るに從つて風强く午後三時半二の池室堂に一泊廿七日山頂に達し候當日又雨霧に混り風激しく午前七時攝氏十一度を示し候。(御岳山頂にて)

第三便廿七日午前十一時五十五分高頭氏と共に北西に向つて下山二里にして濁川溫泉着高頭氏荷物運搬の都合上茲に投宿せらるる事となり別を告げて小生は其より四里にして枯桃島に出で尙一里にして一の宿に至り一泊廿八日午前九時半一の宿發足東に向つて一里半之峠を越へ中の宿に於て野麥街道に出で其より四里半峠を越ゆる事二度午後四時四十五分野麥に着奥原方に投宿仕候明日は間道より白骨に出で上高地に至るべく候彼の地には誰か會員中の知人も居る事と存じ其れを樂みに蚤の來襲も辛棒して床に就くべく候。(廿八日野麥にて)

第四信本日は近道にて大野川に出る心組にて案内者を伴ひ野麥出發仕り候近道とて別に道あるにあらず溪流を溯る事一里半許乘鞍岳の東方を越へ又溪流を下り始めて山道に出で野麥より四里半にして大野川に着案内者を返し其より一里にして檜峠に達し直に上高地に至る筈なりしも道破壞して迂廻せざる可らずといふにより峠より一里廿町にして白骨に來り候。(廿九日白骨溫泉にて)

第五信七月卅日白骨出發上高地に來り當日松本より來られし南日氏と同宿八月一日は氏と共に燒岳に登山仕り二日又共に鎗ヶ岳に上り三日上高地に歸り四日近藤氏と穗高岳に登り氏は鎗ヶ岳を縱走せらるゝにつき氏と山頂に別れて下山仕り候五日南日氏は飛驒平湯に小生は松本に相別れ申候七日歸國仕るべく候。(松本にて六日大北聽彦)

▲拜啓小生事七月十七日東京出發、午後二時半福島縣庭坂驛に下車し、須川にそうて福島の高湯に上りて一宿、翌日同所より家形山、五色沼をよぎりて一切經山に登り候、多少の風雨ありしが大したることもなく候、シャクナギのうるはしきに驚き候、歸路は硫黃山に下り、吾妻富士、福沼の火口をそこよりみ、ぬる湯にをれて、夕方高湯にかへり候、たゞ一切經の頂上を極めんとならば、ぬる湯を根據地とする方、路も近く、坦らに候、趣味は遙かに高湯よりの路におとり候。農商務省の地形圖には家形山を經て姥湯方面に出でらるゝやう記しあれども、陸地測量部の五萬分一のには左る路あらず、土地のものもなきやう申しをり候。案内者一日九十錢。翌日高湯より米澤にむかひ候。

七月二十三日朝、米澤發、上ノ山にて瀧車をすて、金瓶にて人力車にも別れ、十二時最上の高湯につき候。午後龍山に上りて山形平野と高湯爆裂火口とを見候。廿五日高湯出發、藏王山にのぼり、お釜のほとりに駒草をつみ、賽の河原を經、宮城縣峨々に下り、轉じて青根にむかひ、そこにとまり候。頂上を過ぐるころより霧かゝり眺望を失ひ候。雪の谷間も與なきにあらず候ひき。案内料壹圓ほど。

八月廿二日上諏訪出發。木曾の福島に下車し、同日は王瀧ごまり、廿三日御岳にのぼり、即日黒澤に下山し、廿四日黒澤發歸京いたし候。御岳の俗氣には隨分閉口いたし候。たゞ王瀧川はいかにも美しく候。案内者日當壹圓三十錢、滿二日にも足らざりしが數へ日の三日として四圓とられ候。

一切經及び藏王權の紀行は開拓者といふ雜誌にのせ候約束いたし候まゝ、發行の上はお笑ひにそなへんと存じ候。御嶽の紀行もそのうちなにかに載せ候はんと存じ候。(八月廿九日別所梅之助)

▲小生一昨々日 D·O·A·V·(獨、墺山岳會)に入會致し候間日本山岳會へ御通知仕り候。

獨乙に於ける最高峯 Zugspize は Alpen の分類より云へば Bayerisch-Tiroler Kalkalpen に屬し Garnusch-Partenki rchen (當地より急行二時間にして達す) より登攀の道三條これあり當地の Bergsseizer は先づ必ず一度は登る山と存じ候。

小生は一獨乙學生と共に一昨々日(七月十三日)午後當地を發し Partenkirchen より徒歩 Reintal の Hospitz に夕方到着し、こゝに一泊致し翌十四日三條の登路中最も易き Partnackklam を經て頂上に達する(此道は最も長く頂上迄九時間を要する由)計畫の所誤りて道を失し一峯を超えて他の登路即ち Höllental に出でこゝにて二人の連れを得て、同日午後一時半此谷の Augerhütte を發し頂上に向ひ申し候此小屋より頂上迄は五時間乃至五時間半にして達するを得べく道は先づ少しく谷底(小生は術語を知されば御推察を乞ふ)を過ぎて直ちに所謂 Killerjartia に至り山壁に沿ふて登る狀は別のハガキを一見して知るべく、一時間餘にして、壁を離れ Gletscher に移りこれを登る事又一時間半にして再び同側の山に沿ひ時に Grat を攀ぢ又壁を登りて漸く七時半頂上の Munchenerhaud に到着仕候 Hetscher にては割れ目少く歩行左迄困難ならざりしが山壁にては每々右手にて鋼線(徑十五、ミメ)をつかまざるを得ざりしかば是よりも手の疲勞甚しく、しば〳〵しゐて、左手を用ゐ申候、此日朝五時より歩み初め道など失ひて無理を致し候まゝ友は頗る疲勞し、しば〳〵此山壁をよぎる時眠り初め、其度に小生が注意するなど、なか〳〵今より考ふれば滑稽に候ひき。

Baedeker の案內記には nur für Geübteñ Schwindelfrei とあり、小生自身は已に熟練者なるや又 Schwindelfrei なるや知り申さざりしが、兎に角も下を見ても別に眩暈もせず死なずに歸つて來たのを見れば、先づ條件にあてはまつたのかも知れざれど、元來壁を登る時には、梯子が打ちつけあり、横によぎる時は、鎖に御覽の如く、綱も足がゝりもあり、別にあぶない事はこれなく、宜なるかな、途中山壁にて一婦人に會しよく見れば、每日講義にて顏を合はす、女學生なりけり、總して男の行く所として、女の行かぬ所なく、歐洲に女が多い爲に何處にても見られるのかも知れざれど兎に角日本よりは女に不自由のなき國と云ふべきか、笑談はさておき此六時間の登攀中に殊に氷河附近にて、渴と空腹を甚しく感じ候は溫度氣壓等新陳代謝の干係の平常に異る爲と存じ候。日本にて常に草鞋を用ゐたりし爲め此登路中には、氷河の他は每々 Klettersehule を用ゐ度々ひやゝされ申候皆 Bergstufel を用ゐ候へ共小生には何だかすべりさうな氣が致して前者を用ゐ候。

Munchenerhaud は D. O. A. V. の Sekt, München の造營にかゝり先づ設備は完全なものと存じ候ベッドは十八有之候。

こゝに一泊 D. O. A. V. の會員は一泊二マルク、非會員は四マルクに御座候、其他御存じの如く會員は每々便利を得ること、假令ば Zuhver は割引をなし、宿泊には先取權を有する等に候。

◎會　報　會員登山報

十六日七時こゝを辭し Kuorrhirtte に向ひ候ふが此道は大して危險の事なく前述の最も易しとするものに候ひしが、途中小生杖を落したるに四十米迄下にすべり、とる事危險なりしかば放棄せんとせしに一學生これを見て「とつてやる」と云ふて、小生等の止むるをきかず下らんとせしかば小生等は所持の繩（二十米）を與へて漸く安全にとり、加之彼れは更に一本をえ申し候もと彼は一本の杖も有せざりしに候厚く禮を述ぶるや彼はこれより、三條の道中最も困難にして頂上より Qisee に向つて降ると云ひ、Zulrer もなく Klellerschuhe もなく繩もなく加之普通の不完全なる Bergstxefel 樣のものをはき拾ひたる杖を以て單身降り行き候。

かくて小生等 Kuorchutte に到着致し候ひしこゝに Wiener neustadterhutte より電話あり一青年墜落して、即死せりと、友と小生とは眼を見合はして或は先の學生ならざりしやを思ひ此事を語りしに、皆其人ならんと輕卒なる事を批難仕り候 Zuglprige にては毎夏必ず一人の墜落者ある由に候或る雜誌上墜落者の多くは平均年齢十九—二十一にして、天候や用意に無頓着なるもの多しとこれあり候。

實際此所謂 Alpestürzt には悲慘なるもの多く兄が妹の落つるを見乍ら助けるを得ず妹が兄の上より墜落し來るを望む等の事ありし由に候。

Knorritte よりは道は非常によく瀧あり池あり牧場には Alrpenschafen の人を恐れずに參るなど誠に愉快にして、殊に Partnachklaln と云ふ所は或人の云ふには耶馬溪に勝るとか云ひ獨逸にても有名な勝地に候こゝを過ぎ再び Prtenkurchen に歸り夕方當地に歸着致し候。（München にて片平重次）

▲……小生二週間餘以前ロンドンを出發、エディンバラに參り同地に一週間許り滯在附近の諸所見物それよりスコットの湖上の美人及びロブローイにて有名なるトゥロサックス地方に向ひスターリングを經てカランダーに赴き同地よりベンレディに登りそれよりロホヴェナハールに沿ひてトゥヨナックスをすぎロホトカトゥリンを渡り更に馬車を驅りてストローナハラハールよりインヴァースネドに出で復び舟にてロホローモントを半ば下りロワルデナンに滯在 此邊よりベンローモントに登りそれより舟にてバロッホに出でダンバートン、グラスゴーを經てエディンバラの北一哩半の長橋フェースブリッヂを渡りてセントアンドルースに着同地の臨海實驗場にて有益なる半月を送り本日ダンディに出で同地見物の後夕刻アバディーンに到着致し候餘は後便にて申上候。（アバディーンにて八月二十二日武田久吉）

▲拜啓アバディーンより一書差上候以來アバディーンに流るゝディー川を溯り先づディネットにて同川の稍上流的の趣を呈せるを見更にバラターに向ひ附近の小丘クリゲンドロッホ及びコイルに登りて展望を擅にしこゝより十八哩を自動車にてブレマールに達し同地よりマローン（二千八百餘呎）に上りディー川上流の諸山を眺め翌日は馬車を驅りてロホカラターと申す小湖に到り此處より有名なるロホナガール山（三千七百餘呎）に登り「カール」を下りてロホナガール湖を極めバルモーラル森林に下り再びブレマールに歸着ディー川の上流の探濕の記は畧し登山談のみを申上ぐれば ブレマールより蘇國第一の荒寥を極めたるラリックグルー峠をこ

えディー川の源流 Wells of Dee を見三千三百餘呎のカルナメーム山に登りアヴェモーアに着同地より更に馬車を驅りてロホニーナッハと云ふ山中の一湖三方は「カール」にてかこまれたる仙境に遊びこゝより四千餘呎のブレリアッハ山塊を蹈破し「カール」を下りて復同湖にかへり約十哩を馬車にてロシムルハス森林を過ぎてアヴェモーアに歸着此の村より瀛車にて高原高山の間を通過してインヴァーネスに到り昨日六十哩のカレドーニアンカナールを下りてフォートウイリアムに着本月蘇國第一の高山ベンネヴィスに上り候同山頂の觀測所は數年間閉鎖されて今はホテル一ツあるのみ明日キリンに向ひ申すべくそれよりベンロワースに登り數日以内にエディンバラに歸る豫定に候。（八月三十日武田生）

拜啓過日辻本兄の足跡を追ひ藥師岳登攀を思ひ立ち八月廿七日出發富山より飛驒茂住に至り一泊（笹津より上流は國道を離れ右岸に沿ひて上り横山にて本道に合し候道も先づ平坦と申すべく景色は國道よりも遙に宜しく候特に寺津吉野間の景は豪壯を極め候）翌日土、跡津、左古、大多和を經て有峰に至り一泊、此の間は道よろしく格別苦を覺え不申候有峰之宿は長、岩段、などよりも山口がよろしき樣に候小生は岩段に泊し稗飯に大閉口仕候山口の主人長次郎は日清日露之兩戰役に從事し金鵄勳章年金を受領し居る村内にての開化人にて話もよく分り萬事好都合なるべく、人物もよろしく、且つ常に白米を貯藏し居る由に候、小生は此男を案内者として藥師に登山致候處途々同人が軍隊内就中戰地にありて能く忠實に働きし爲長官に愛せられし事實を話し候、兎に角有峰には好案内者なけれど先づ〳〵此男が最良の案内者なるべく察候、いつでも喜で御泊め申し且つ御案内をするから『山岳會』の方々へ吹聽致しくれよとの事に候。

廿九日藥師岳登山（四時五十分發、十一時卅五分絶頂着）雲の爲遠山は見えざりしも黑部溪谷の近山は大概見え申候、其夜眞川畔の側師久太郎の小屋に一泊非常に歡迎せられ候翌朝川を下りて眞川大橋に出で立山溫泉に着し一泊、此眞川下りは辻本兄御旅行之時よりも甚だラクに相成居候久太郎小屋より向河原之小屋迄二里餘の間は道なく稍困難なれ共それより下流溫泉道に合する所迄は此頃柚の業隆盛となりし爲路甚だ判然、岩井谷川には橋も出來そこなる事務所の樣な者には酒も賣り居り候有樣にて單身にても途に迷ふの憂更に無之候、卅一日立山に第二回の登山を行ひ五時五十分溫泉發九時半室堂着、此頃客少き爲中語も居らず、已を得ず單獨にて別山登山を企て能く道を聞き置きて十一時出發〇時四十二分別山、雄山間の鞍部着、一時廿二分別山絶頂着、少々は雲ありしも黑部溪谷の山々は八分通り相見え會員諸君の御紀行の御蔭にて大概山名をアイデンチファイすることを得候、別山絶頂より當面の劍岳を見る景は其壯嚴の點に於て斷じて日本一なるべく人をして恍惚たらしめ候、それより前路をとりて歸らんかと思ひしも登山家の何よりも恐るゝ濃霧の襲來する模樣絶てなきに幾度か躊躇の後遂に山稜傳ひに雄山の頂に出づることゝ決し二時十七分前の鞍部出發四時十三分目的の雄山絶頂に達し候、此山稜傳ひの事は室堂出發の際其意なかりし爲道もよく聞き置かず甚無氣味に感じたるが特に富士の折立といふ所は甚危險にして小生は此處で怪我でもしては此儘死するの外なしと幾分か柄にもなき冒險をなせしを

◎會報　會員登山報

悔ゆる心も起りしが幸に怪我もせず霧も左しての事なく距離も意外に近かりしは何よりも嬉しく感じ候、雄山絶頂に着する少し前より風頗る強く相成寒さ堪へ難く且つ今日は遠望出來ざれば明早朝ゆつくり眺望する積りにて少休の上下山し室堂着、此夜風猛烈七人の同宿者と共に殆んど安眠出來ず朝に至りて風は少しく和ぎたるも遂に雨となり再登山の勇氣も出ず、同宿者を後に殘して出發溫泉に下り更に川に沿ひて下ること六里半、原、本宮に達し村民二人を傭ひて常願寺川の急流を徒渉し芦峅寺佐伯忠胤氏（山岳會員）宅に着し申候。（九月三日林亜木）

▲辻本満丸氏　は高頭仁兵衛氏と其に七月十八日甲州西山湯泉を出發早川の支流廣河内を溯り大モン澤の下方に一泊、十九日農鳥山を越え同山と中岳との間の鞍部に野營し二十日天候不良の爲同上滯在二十一日疾風濃霧を冒して中岳及北岳を縱斷し大樺池附近に一泊、二十二日廣河原にて高頭氏と別れ五葉根の廢屋に一泊、二十三日蘆安を經て甲府に出で歸京せられたり。

▲關口泰氏は七月山川默、黑木三次兩氏は九月上野赤城山に遊ばれたり。

▲那須皓氏は八月、妙高、八ヶ岳兩山に登られたり。

▲百瀨信太郎氏は八月十二日大町より葛湯、濁、烏帽子、赤岳、鷲羽、蓮華、槍ヶ岳等を縱走して上高地に出でられたり。

▲中村清太郎氏は赤石山脈南部諸峯登攀を志し、七月九日東京發靜岡より安倍川を溯り、大日峠を越えて大井川谷の田代に到り、準備を整へ、信濃俣の上流より光岳、イザルケ岳、ガッチ河内岳、仁田河内岳、上河内岳等を經て聖ヶ岳に登り頂上附近に三泊、兎岳、大澤岳を越えて赤石岳に達し、奥西河内の荒谿を下りて大井川畔の木賊に出で、峽谷を穿行して再び田代に歸着、八月一日歸京せられたり、連日天候不良困難甚だしかりし由。

▲辻村伊助氏は七月十二日東京發、豐科より鍋冠山に登り蝶ヶ岳を經て常念山脈の山稜を縱走して餓鬼岳南に至り乳川の谷を下りて大町に出で更に針木峠より針木岳に登り黑部川平ノ小屋より御山澤を登りて立山に至り二日間同山に滯在して淨土、龍王、雄山、大汝、別山に遊び、直接、山稜を下りて佐良峠に出で五色ヶ原、大鷲、奥大鳶、越中澤、藥師の諸岳を縱走して藥師峠に下り有峯村より高山町を經て平湯に遊び乘鞍に登山し後、神河内に一週を送りて八月十七日歸京せられたり。

▲近藤茂吉、高野鷹藏兩氏は、七月十九日東京發、廿日富山より上瀧を經て芦峅寺、佐伯忠胤（會員）氏方に投じ翌々廿二日立山登山、途中暴風雨の爲め柳小屋に一泊し、廿三日室堂着、三泊して、立山諸峯を極め、廿六日雨中一越より御山澤を下り中ノ澤より中澤峠を越へて、黑部川畔の平ノ小屋に着、計らずも、辻村伊助氏と會遇し廿七日雨の爲め滯在廿八日針木澤にて、大井冷光、蒲生俊武氏の一行と出逢ひ翌廿九日大町着、高野氏は急用の爲め、翌三十日歸鄕せらる。

▲近藤茂吉氏は、立山針木越へを了り島々より上高地に入り、燒岳に登り八月四日穗高に登り、槍ヶ岳に向つて縱走せられ、途中種々の困難に遭遇したれども、遂に當初の目的を達して下山、九日歸京せられたり。

英國より

拜啓其後は御無沙汰致し候最早盆もすぎて地獄の釜の蓋もあきたれば大兄方もそろ〳〵と例の天幕等ひきからげられ信越甲飛抔の深山高嶽に分け入らるゝ事と私に羨望の至り小生など當地にありては是ぞと云ふ山らしき山もなければ徒らに脛をさすつて三嘆又三嘆スヰッツルへでも行て見やうかと思へども其機なくこれも來年の話、先づ今年はスコットランド位に止めて置かうかと思案中こゝ數日はデボンに滯在殆んど數日丘陵森林又は海岸の斷崖など十哩位な近足に甘んじ居り候。

小生の住所は何となり居り候か存ぜず候へ共次の三つの内何れにても安全に候まゝ場合によりては雜誌上に御掲載願度候。

Botanical Department, Imperial College of Science & Technology, South Kensington, London, S. W.

Herbarium, Royal Botanic Gardens, Ken, London, W.

Beaumont, Ottery st, Mary, England.

「山岳」に何か原稿をと存じ候も別段面白き種子もなく候只最近暑中にて氣づきたる事一つ有之候へば以下申述べ候適宜御剪截被下て誌上へ御掲げ被下ても差支無之と存じ候、即ち榎谷氏の「山語」の項中一六一頁に「へつる」と云ふ語ありこれは「所」の誤ならんと釋かれたれど小生の考へは「はひずる」の轉と存じ候山中の民此の如く訛る事敢て珍らしからず天神平、寺平の平をテラと發音する事有名な者に候、小生先年白馬登山の節山麓の「タキゾレ」なる地名は其前々年かに登山せる一新聞記者の「瀧反れ」ならんと漢字をあて候も小生等の聞きし所によれば「タキゾレ」とは「瀧揃ひ」の意の由これは河田君と共に記し候記事中に述べ候樣存じ候（但し確言は致しかね候）大兄も御通行御承知の事と存じ候、これに就き思ひ起し候は白馬の葱平に二つある事にて一つは「ビラ」一つは「タヒラ」にて殊に前者は急坂なるは名は體をあらはす定則にはづる事甚しく候、これはアイヌ語のピラ即ち崖より出しとすれば面白けれどこはあまりに附會の說と存じ候、或はヒシを誤りしか又はタヒラの平をヒラと讀みしにや小生には合點參らず

候、日光の女峰にアザミダヒラと云ふ所有之これは頗る急坂に候、これは凹凸のない平面と云ふ譯にて傾斜については一向にかまはずに名づけ候樣に候、若し此の平をヒラと讀まばヲブカビラと同じ樣な事になり候。

同號鵜殿氏の「地藏岳及凰凰山」記事中「コンバ」と云ふ甲州語に「木場」の文字をあてられ候が、これは如何にや、小生未だ嘗て詮窄したとは無之候へ共先年駒ヶ岳登山の節「ビワのコンバ」「テラのコンバ」等申す小平坦地を過ぎて「コンバ」とは「小場」の意かと心に思ひ候ことあり、但しこれは今一段の詮議を要し候と存じ候。下畧（武田生）

第十回有志晩餐會記事

九月廿九日午後五時から第十回を日本橋區龜島町の偕樂園と云ふ支那料理で開かれた。六時半頃から食卓が揃へられて酒が漸く回つてきて諸君の氣焔が大分高くなつて來る何處の頂上の眺めが雄大だらうなど云ふ問題が出て立山だいや槍だ鷲羽だなんて色々な所が出る。又今年の天狗話などがあり小人數であつたが仲々盛會であつた。

出席會

高野鷹藏、小島久太、辻村伊助、高頭仁兵衛、近藤茂吉、三枝威之介、Hermann Baumfeld 木村鑛吉、梅澤親光、酒井忠一、冠松次郎、岡野德之助、服部鍈太郎、黑木三次、（順序不同）豐田金之助、川島錄郎、濱名增雄（以上當番幹事）猶次會幹事は辻村伊助氏、木村鑛吉氏、岡野德之助氏の三君が指名せられた。

「高山深谷」第四輯の發行

高山深谷は、本邦唯一の山岳寫眞集として、多大の注意を受けつゝあり、年一年と其內容外裝共に進歩しつゝあるは、等しく世間の認めらるゝ事にして、今や第四輯編纂なり、明春を以て、發行されんとす、內容の完備、裝釘の美は、第三輯を凌駕せんとす、本輯も亦精巧なる、寫眞原紙に印畫するものにして、發行部數は、僅々百部に滿ず、多數の出版

は粗製を恐れてなさず、詳細廣告欄を見られよ。

參考圖書の寄贈

在横濱の飯室　氏は、本會の事業を賛せられ、地學雜誌、地質學雜誌、震災豫防調査會報告等數十冊を寄贈されたり。本會は茲に深謝の意を表す。

寄贈、交換圖書

旅行　一ノ二、一ノ三、一ノ四　旅行社

地質學雜誌十八卷二一七—二二八　東京地質學會

歷史地理十八卷第五號十九卷六號　日本歷史地理學會

地學雜誌二七五、二八六　東京地學協會

信濃博物學雜誌第三號—第六號　信濃博物學會

三重縣史談會志　大西源一氏

三重新報　同上

飛驒山川　住廣造氏

寫生畫の研究　大下藤次郎氏

大橋圖書館第九年報、第十年報　大橋圖書館

地學雜誌、地質學雜誌、震災豫防調査會報告數十冊　飯室氏

飛驒氣候一斑　高山測候所

地質調査所報告三十四號　地質調査所

開拓者　別所梅之助氏

鐵道案内　鐵道院營業課

Butlleti del Centre Excursionisle de Catalunya　197……207

La Montagne　7—8……8—7

Alpine Journal　Vol XXV—193……196

Oesterreichisher Alpenzeitung　842……865

The Scotish Mountaineering Club Journal　66……68

Les Sports'd Hiver et L'Alpinisme 13—
Mitterlingen des D. u. O. Alpenvereins
19……24
Index to the Scotish Mountainerring Club
Journal 1912—1……16
The Cape Town Mountain Club Anual
1911—No. 4
Zeitshrift des D. u. O. Alpenverein 1911
The Canadian Alpine Journal 1911
Svenska turist föreningens 1912
Climber'sClub Lules. List of Member
Jahrbuch des Schweizer Alpenclub 1911
Mededeelingen der Nederlandish
Alpen Vereninging No. 1. 1912

新入會員

1

本號の挿繪に就いて

私は本號で「浮世繪及び歐洲印象派の山岳畫を論ず」といふやうな題で（尤も名などは前から考へてなかつたのだ）書くつもりでゐたところ、宅に病人が多くて、氣がクサ〳〵して、一日延ばしにしてゐるうち、本欄には間に合はなくなつたので、私のだけを、附錄にして貰ふやうに話を決めた、そこで文中の挿畫として、北齋の富士二枚、後期印象派（ポストインプレッショニスト）のセザンヌが一枚（森といふ題は勝手に私がつけたのだ、原題を思ひ出せないため）同派のヴィセント、ヴァン、ゴッホを二枚、印刷の方を早手廻しにして置いて、扨本文にかゝつて、二十枚ばかり書き上げたが、自分ながら段々不安心になつて來たといふのは、博物學者が至つて少數、又は不完全の標本を檢定したゞけで、學說を立てたり、決論を急いだりするのが、不安心なる如く、私も數量の至つて多い浮世繪の中から、十二

三枚の繪を見たり、又はあやしい印刷で、原畫の色彩は、勿論恐らくかたちをも傳へまいと思はれる複製畫から、原畫を論じやうとするのが、危險に思はれて來た、愈よ筆が動かない、他の印刷は、ドシドシ進行する、尻は突ッかれても、足が出ないといふ風になつて來た、尤も私には、有らゆる浮世繪を見たり、歐洲まで往つて、印象派の原畫を見て來たりする事は、到底出來ないことだから、さういふと、いつまで經つても、出來ない相談になるわけだが、それでも、もう少し研究の時日を貸してもらへば、今よりは、多少自信のあるものが出來得られやうかと思ふ、少なくとも現今の自分では、これ以上には行かれないといふ程度までは、突き當ることが出來やうかと思ふ、そんなこんなで、本號に繪だけ出して、本文を他日に廻すことにしたのは、まことに申譯のない次第である。

そこで、せめては挿繪の解說をと思つたが、それは本文に密接の關係があるので、本文から引き離して、出すわけにもゆかず、たゞ題と作者の名だけを附記して、置いたにとゞめたのは、不精と懶惰のほゞ、恐縮の次第である。

因にいふ。浮世繪等の日本美術が、歐洲印象派、新印象派、後期印象派等に著るしく影響を及ぼした事實、又はその事實に對する評論は近頃倫敦の John Murray から出版された Binyon 氏の "The Flight of the Dragon に依つて、精細に覗ふことが出來るから、この道の研究者に、一讀をお奬めをする、尤もこの本は、山岳畫のことを書いてあるわけではないが。（烏水生）

校正者〈梅澤憲親　高野光藏〉

附錄（山岳第七年第三號）

日本山名錄初稿（一）

高頭式

日本山名錄初稿小引

明治三十九年二月『日本山嶽志』の製本成り、同年五月より其第一增補を作りて、雜誌『山岳』の附錄とせしも、材料に乏しくして、中止せり、當時は、精確なる實測圖の刊行せられたるもの、極めて少なく、地圖に記入されたる山名に據りて、書籍に記載されたる說明を求めたるにあらずして、多くは古書の記文に據りて、地圖の解說を試みんとなしたりき、現今にありては、陸地測量部の五萬分一圖着々出版せられ、既に九州、中國の全部と四國の過半は完成し、本州の全部も、亦數年を出でずして結了せられんとす、乃ち是等精確なる地圖に記載されたる山嶽を拔き、之れに現時の說明を付して其山容を明にし、之れに舊記を錄して其歷史を攷ふるが如きも、亦徒事にあらずと云ふべし、然れども是れ豈に容易の業ならんや、余今夏白峰、木曾御嶽の諸山に登る、皆濃霧密雨に妨げられて、其大觀を縱にするを得ず、本月二日私に國西の高峰を蹈まんと欲せしも、細雨連日に亘り、又其目的を達するを得ず、鬱勃の情、禁ぜんと欲して禁ずる能はず、乃ち『日本山名錄』を作る、其初稿と名づくるものは、漸次訂正して、其誤謬を去らんと欲するの意のみ、幸に諒せよ。

大正元年九月十五日

高頭式謹識

凡例

一　本書編纂の理由　本書は現存せる山嶽を説明し、之れが歴史を談るを以て目的とすれども、容易の業にあらざるを以て、暫く余の蒐集せる材料に據り、山名を列記し、同好者の其誤謬脱漏を指示せられんことを希望懇請するものなり。

一　本書記載の山嶽　主として陸地測量部の五萬分一圖に據り、同所の二萬分一圖、輯製二十萬分一圖其他、地質調査所二十萬分一圖、四十萬分一圖其他を以て其不足を補ひたり。城址、神社、寺院等の存在せる、山嶽、丘陵等を掲げたる時は、此等の説明を略したり、何となれば、山嶽として記載せるものなると、城址、神社、寺院の歴史を詳記するが如きは、容易の業にあらざればなり、此等の山嶽、丘陵にして、地圖に記載されざるもの、例へば名所山の如きは、多く省略せり。

一　引用文の説明　引用文の片假名、平假名交り文は、原書の儘に引用す、但し句點、倭假名等は、必しも原書と同一ならず、漢文は片假名交り文に改めたれども、嚴格なる譯文にあらず、要は大略を知らしむるにあり。

編纂者の意見は、本文の外は、必ず「式曰」又は「式按ずるに」の冠字を下せり、故に引用文中に之れ無きものは、總て引用書の儘なるものと知るべし。

一　本書の山嶽區劃　標高三千米突以上の山嶽には、其山名上に◎符を冠し、二千米突以上のものには、◎符を冠し、千米突以上のものには、○符を冠し、千米突以下のものには、△符を冠す。

一　本書の山系區劃　大日本地誌に據れり、故に其説明には、悉く同書を引用せり、其多少の文字を異にしたるものは、余の習慣によりて用ひたるものにして、勿論深意あるものにあらず、然れども同書に逆く罪大なり、此に深謝す。

本書の參考とせらるべき地圖は、完成せるものには、地質調査所編輯、東京神田通新石町東陽堂にて發賣する、百萬分一地質全圖、代價四圓五拾錢を、最良なるものとす。

一　筑紫山脈より起稿せる所以、材料の都合のみ。

一　以上の外、引用地圖略號、本書本文の出處、符號の説明等は總て山岳第一年第二號に附したる、日本山嶽志第一增補に載せたる凡例を適用す。

破窓閑漸々楓葉一枝紅　北越の敗屋にて

編纂者識す

凡例　終

日本山名錄初稿

高頭式編纂

九州

式曰、(大日本地誌)卷八、二頁以下ヲ錄シテ、九州ノ山嶽ノ總說ニ代フ、曰ク、「九州島の地形を案するに、其水平肢節の著しく發達して、半島、島嶼に富み、從て又自然の港灣に乏しからざること、本邦に於て他に其比を見ざる所、而して垂直肢節亦之と共に多岐に渉り、地貌の變化を極むるものあり、九州島の骨格をなすもの、一を九州山系と云ひ、一を筑紫山脈となす、前者は島の東南半面に連亘し、山高く、谷低く、其地形正に成熟の時代にあること、蓋に四國山系に於て見たる所と異ならざるのみならず、其地層の序列排置、亦整然として彼と撰を一にし、其全く異身同體共に本邦南彎の一大山系をなすものたるを明かにし、後者は島の北部に横はりて、其地質の錯雜なる、地形の老境に入れる、共に亦蓋に中國山系に於て見たると等くして、其地塊の一部、爰に延亘せるものなることを示し、九州島は、今は孤立して一大島をなすも、其地體の構造は、北隣の二大島と密接なる關係を有せるものたるを知らしむるものあり、吾人は蓋に前卷に於て。四國島の地形を說くに當り、其主要なる部分が、四國山系より成り、唯北部の幾分は、對岸にある中國山系の斷片となり、之に癒著せるものなるとを述べたりき、我が九州島亦之と同じく、九州山系と中國山系の斷片たる筑紫山脈とを以て、其骨格となせるものなり、然かも九州島に於ては、筑紫山脈は略ぼ中國山系と同じく、西微南の方向を指して走るも、九州山系は西南の走向を取りて延亘せるが故に、兩者の間自から楔形をなして開き、而して阿蘇の大火山を盟主に戴ける同名の火山脈は、恰も此間に噴出して、數多の火山嶋起し、又一方に於ては、島の南部に於て、斜に九州山系に交錯して起れる一大地溝に沿うて、霧島火山脈を噴出し、其餘脈連りて、南方海中に延び、薩南諸島の火山島となれり、されば本島は、概して山岳に富み、其高峻、本邦中部に於けるが如く、著るしきものなしと雖も、豐後、日向と、肥後の國境附近に於て、九州山系の中樞をなせる部分にありては、祖母山、三方山、市房山等屹立して、其高距、四國山系の諸峰と相伯仲し、殊に火山にありては、島の北半に、「世界第一の火口を有するものと稱せらるゝ、阿蘇山を始めとして、九重山、由布岳、溫泉岳、多良岳等あり、南半には、數多の圓錐峰より成れる、霧島火山群を始めとして、櫻島、開聞岳の聳ゆるあり」。

◎附錄　九州、筑紫山脈

筑紫山脈

式曰、(大日本地誌)第八、一二頁以下ヲ錄シテ、筑紫山脈ノ說明ニ代フ、曰ク、「筑紫山脈は、九州島の半部を占めて、端を島の北端なる企救半島に起し、主として此山脈の骨髓をなせる古生層、中生層の走向は、東北より西南を指し、古き時代に成れる山脈は、寛に此軸線に沿うて延亘せるものなるを示せり、而して此山

◎附　錄　九州、筑紫山脈

脈に於ては、花崗岩の迸發甚だ著るしかりしと、更に其後に於て、或は土地の陷落、或は流水波浪等の浸蝕等により、此連亘せし山脈は、分かれて幾個の山塊、或は支脈となり、其間に生ぜし淺海は、深く灣入して山脈を横斷し、第三紀層其中に沈積して、後に次第に隆起し、多少其層位を褶曲し、水蝕亦之に働きて今は低卑なる丘陵を造り、舊山脈の間に介在し、或は之に沿ひて延亘せるを見る、彼の九州の大富源として有名なる石炭は、實に此淺海中に生ぜしものにして、筑豐の遠賀川流域、其他三池、肥前各地の炭田は、皆悉く此種の第三紀丘陵中に存在せるものに外ならず、筑紫山脈は、斯くの如く地質構造上より之を察するの外は、今は整然たる一條の大山脈として、之を捕捉すること容易ならずして、其分かれて區々の山脈、若しくは山塊となれるものは、企救半島を造れる企救山脈を始とし、其西南に隣りて、遠賀川を挾み、其東西兩側に沿ひ、筑紫山脈の軸線に、略ぼ直交して走れる、福智山脈、孔大寺山脈、並に遠賀川の二大支流間に介在せる、關ノ山脈等あり、更に此等に隣りて、三郡山脈、背振山塊等ありて。此等は古生層の外に、其大部分を占めて花崗岩の露出するありて、素と一塊の大山塊をなせしものなるも、福岡灣と、筑後川平野を連結せる御笠川陷落地の生ぜるによりて、分かれて、東に三郡山脈を西に背振山塊を造り、前者は略ぼ南北の方向に延亘するも、後者は略ぼ楕圓形をなして、其長軸は東西の方向に延亘せり、而して筑紫山脈の基礎をなせる諸山は、前述せる如く、其地形老衰に傾き、後世の噴出に係る火山を除きては、著るしき峻峰の聳ゆるものなく、山形低山性を呈し、其最高峯と稱すべきものは、背振山塊の背振山（一〇五五米）、三郡山脈の三郡山（九三七米）を推し、福智山脈の福智山亦漸く九百米に達せるに過ぎずして、一千米突を超ゆるもの實に唯だ一の背振山あるに過ぎざるなり、以上の諸に山次ぎて、筑紫山脈の尙ほ好く發展せるは、筑後の中部より筑後、肥後兩國の國境附近に蟠まれる山塊にして、此山塊は、素と三郡、背振の諸山と共に、一大山塊をなせしものなるも、筑後川平野の陷落により、今は斷絶して分離せるものに外ならずして、此山塊の北端、筑後川平野に面する所は、截然急斜して、耳納山脈なる斷層山脈をなし、其の背たるより、一に屏風山脈の名を獲たるを見る、更に筑紫山脈の西部、肥前半島を見るに、其基盤をなせる原始代の剝岩層は、纔かに西端の彼杵半島、長崎半島に塊片をなして殘留し、自餘の部分は、主として第三紀の不規則なる丘陵より成り、且つ之を貫きて火山岩の噴出頻繁にして、此等の火山岩は、時に多良岳の如き、嚴然たる一座の火山體を造るものあるも、區々の小噴出をなせるも、少なからずして、此等の火山岩中には、北松浦半島に於て、其特色を顯はせるが如く、玄武岩の卓狀臺地を造り、中國地方に於て特有なる岩石と、地貌とを再び爰に現はして、中國、筑紫兩山脈の因緣淺からざるの實を示せり、松浦半島の北方、玄界灘にある壹岐島、亦第三紀層と火山岩とより成る低き丘陵性の島にして、要するに肥前地方と同體なりしものなるを示し、又其西北北にある双子島なる對馬は、中世層の丘陵起伏して、韓半島南部、及び我が中國の西端、九州の北端に於ける中生層の間に立ちて、一連鎖をなすものゝ如し。」

企救半島

式曰、(大日本地誌) 第八、六〇頁、企救山脈ヲ載セテ、企救半島ノ説明ニ代フ、曰ク「企救山脈は、企救半島の全部の骨軸をなして、東北より西南に延び、其西南は、小倉附近の平野によつて、明らかに他の山嶽と區分せられ、主もに中生層に屬する凝灰岩、礫岩、砂岩、粘板岩、石灰岩等より成れり、之れに屬する山嶽は、海拔概れ三百五十乃至六百米にして、其の兩南端にある、足立山(五九五米)最も高く、其の東地には、扇杖山(四三四米)、桐ヶ谷山(三六〇米)、戸上山(五一八米)等相連なり、尙ほ門司の南に風頭山、北に城山(一七二米)等あり」。

式曰、企救島ハ、要塞地ナルヲ以テ、陸地測量部ノ「五萬分一地形圖」ヲ得ル能ハズ、故ニ主トシテ地質調査所ノ「二十萬分一圖」ニ據ル。

△鳶ケ巢山　豐前國企救郡ノ北端ニアリ、中世層ヨリ成ル、標高三百二十三尺。

「地質廿周防洋圖」記名98ニ據ル、「輯製廿中津圖」記名ナシ。

△城山　豐前國企救郡ノ北部ナル門司市ノ北端ニアリ、鳶ケ巢山ノ西方ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高五百六十八尺、古ノ門司城址ナリ。

「地質廿福岡圖」、「輯製廿小倉圖」記名172ニ據ル。

(大日本地名辭書) 一四三八頁、「門司城址。門司市街の北に在り、今城山と曰ふ、豐州古城考云、門司城は若王寺、妙見山、三隅山の三要害ありて、西海の要路にあたる」。

△笠頭山(別稱挿頂花山、挿頭山、福岡、小倉ノ二圖、風頭山ニ作ル)　豐前國企救郡ノ北端ナル門司市の南方ニアリ、中世層ヨリ成ル、標高千二百一尺。

「地質廿福岡圖」、「輯製廿小倉圖」記名364ニ據ル。

(大日本地名辭書) 一四三九頁、「笠頭山。又挿項花山と曰ふ、門司市街の南にして、大字小森江の東に峙つ、高三百六十米突」、(豐前志) 三之卷二三頁、「挿頭山。小森江、文字關より、内裏へ通ふ道の上にあり、今はカザガシラと云ふ、山上の巖の形、笠をかざしたるが如し、麓に葛指明神の祠あり、夫木集云、

春の日のかざしの山の櫻花
散りかふごとに面影にたつ　　俊綱

△戸上山　豐前國企救郡ノ北部ニアリ、笠頭山ノ南方ニ位ス、中世層ヨリ成ル、標高千七百九尺。

「地質廿福岡圖」、「輯製廿小倉圖」記名518ニ據ル。

△桐ケ谷山(小倉圖、△桐谷山ニ作ル)　豐

前國企救郡ノ北部ニアリ、戸上山ノ南方ニ位ス、中世層ヨリ成ル、標高千百八十八尺。

「地質廿福岡圖」記名360ニ據ル、「輯製廿小倉圖」米突ヲ記セズ。

△扇杖山　豐前國企救郡ノ北部ニアリ、桐ケ谷山ノ南方ニ位ス、中世層ヨリ成ル、標高千四百三十二尺。

「地質廿福岡圖」記名464ニ據ル、小倉圖記名ナシ。

△露嶽　（式按ズルニ、福岡圖ニハ、桐ケ谷山ト足立山トノ間ニ、扇杖山アリテ、露嶽ナシ、小倉圖ニハ、露嶽アリテ、扇杖山ナシ、或ハ二山、同山異名ニアラザルカ）豐前國企救郡ノ北部ニアリ、桐ケ谷山ノ西南方ニ位ス、中世層ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡千二百尺。

「輯製廿小倉圖」記名ニ據ル、地質、標高ハ、地質圖ニ據リテ臆斷セリ。

△足立山　（別稱妙見山、紫山、浮島山）豐前國企救郡ノ北部ニアリ、小倉市ノ南方ニ聳エ、扇杖山ノ西方ニ位シ、企救半島第一ノ高峰ナリ、中世層ヨリ成ル、標高千九百六十四尺、山上ニ妙見ノ祠アリ。

「地質廿福岡圖」、「輯製廿小倉圖」記名595ニ據ル、但シ小倉幅ニハ、妙見山ト記セリ。

（大日本地名大辭書）一四四〇頁「足立、大里の西南なる今足立村と云ふ、其東南に足立山あり、標高六百米突、上に妙見祠あるを以て、妙見山とも呼ぶ、小倉市街の上を壓し、企救郡の高山と謂ふべし、集古十種に、足立山に發見せる古鏡九面を摸寫し、其銘に、安立妙見大菩薩、承安四年、宇佐山と刻す、俗說足立八幡宮は、（今南霧嶽村に屬す）和氣清麿大隅配流の時、脚痿れ起つ能はざりしに、大神の冥助により、此地に至りしに、足立ちぬ、故に足立の名始むと、信據し難し、抑妙見山の號は、妙見菩薩にも因るべけれど、此地は本來、湊碕屯倉の在りし所なれば、屯倉より轉じて妙見と爲り、菩薩を祭れるにや、屯倉（三宅に同じ）に妙見を祀ること、諸國に其例多し、〇國志云、足立山を紫山、又浮島山と唱ふることあり、昔は潮水到津より東南へさし、曾根の方にも入江あり、潮の通ばぬ路とて、いさふか七八町に過ぎざりければ、全く島の如く見えし故に、名づけたるならん」。（豐前志）三之卷一八頁「足立山妙見權現。梅州語錄、足立山妙見記云、豐城山門東ノ南三里餘皆山也、巍然トシテ地ヲ拔キ、壁立萬仞、高ク霄漢ニ聳ユル者ハ、足立山也、（中略）、其頂、崔高ク、地窪キ處ニ、足立權現祠ヲ構フ、是レ和氣清麿ノ廟ト曰フ、（中略）、孝謙天皇ノ御宇、天平寶字ノ間、弓削ノ道鏡、清麿ノ官爵ヲ解キ、足筋ヲ斷チ、隅州ニ竄ス、舟豐前ノ長洲（重春云、長州ト云ふは誤なり、此の鄕の事は、

宇佐郡の卷に云ふを見るべし）ニ着ス、再ビ宇佐宮ニ詣リ告訴ス、大神復出現シ、而シテ之レニ告ゲテ曰ク、爾已ニ率ナシ、而シテ此厄ニ罹ル、我レ爾ノ爲ニ、此ヨリ西、企救ノ山下ニ於テ、温泉ヲ作ラン、爾往キテ而シテ焉ニ浴セヨ、則チ癒フル所、立チドコロニ愈ヘン、清麿來リテ而シテ此温湯ニ浴ス、未ダ幾クモナクシテ、兩足故ノ如ク平復ス、既ニシテ而シテ温泉モ亦乾涸ス、其跡今尚ホ存ス焉、此ヨリ斯所ヲ名ヅケテ、湯川ト爲ス也、是ニ於テ、清麿廬ヲ此山麓ニ結ビ、而シテ屢ク星霜ヲ歷タリ云々、足立ハ木、竹和ト名ヅク、此ヨリ今名ニ更ムト云フ、弘仁年中、清麿ノ子、參議眞綱ナル者、旨ヲ承ケテ宇佐ニ詣リ、尋デ道ヲ取リテ此山ニ登リ、新ニ神祠ヲ剏メ、始メテ、清麿ノ神靈ヲ祀リ、特ニ命ズルニ足立妙見ヲ以テスル也、（下略）、ト有ルニテ、祠ノ由來ハ知ルベシ」。

貫山脈

式曰、（大日本地誌）第八、六一頁、貫山脈ノ説明ヲ揭ゲ、曰ク、「貫山脈とは、企救、田川二郡の東部、及び京都郡の西部地方に跨りて、重疊起伏せる山群を稱するものにして、主もに巖岩、角閃岩と、花崗岩とより成り、多少南北に連亘すれども、決して、一條の山脈をなすものにあらず、其北部は、蒲生川の東方に於て、企救、京都二郡の界に蹯踞し、貫山（七百十二米）最も高く、これより脈は一方東北に延びて、城山（百二十八米）の岬角となり、一方西南に連亘して、龍が鼻、（六百六十七米）、障子岳（四二七米）等となる、これより以南は、山勢稍低く、七曲嶺等、東方行橋地方より、西方香春地方に至る山路を通じ。其南に飯嶽（一名猪の嶽）、大阪山（五七三米）あり、猪の嶽の餘脈は東西に亘れる連嶺をなし、西は香春附近に及び、東は今川の岸に延き、川に臨みて、馬が嶽（七〇七米）あり、更に南方に至れば、山嶽は添田川（赤池川上流）今川、拔川の間に挾まりて、南北に連亘し、特立せる秀峰に乏しけれども、今川の左岸にある、岩石山（四四〇米）、今川、拔川間にある、帝釋山（三〇四米）、藏持山（四七八米）、特手嶽（一六九一米）等は、稍著るしきものとす」。

△貫山（別稱芝津山、廣野臺、磯津山）

此山ハ要塞地帶ニアルヲ以テ、其山容ヲ詳ニスル能ハズ、概略ハ（日本山嶽志）四三一頁ニ載セタリ、貫山脈第一ノ高峰ニシテ、山中ニ白山權現、靑龍窟、鈴窟、速見ケ瀑アリ。

（大日本地名辭書）一四三六頁、式曰、上文山嶽志ニ載ス、故ニ略ス。「○國志云、芝津山は、古歌によめる四極山にして、山中に白山權現あり、古鐘銘曰、貫山大權現洪鐘一口、正平二十年歲次乙巳、四月廿二日」。「磯津山。芝津山は、古歌に讀めど、攝津にも、豐後にも其名所を傳ふ、攝津の方實にちかからん、然れども景行紀に、磯津山あり、今の芝津は、磯津の訛なるべしと云ふ、一説磯津山は、宇佐郡清水村ならんとも云ふ」、（同書）一四三四頁「等覺寺。白川村大字山口に在り、國志云、（式曰、中略）其奥院、生龍大權現寶窟は、東向き、穴の入口

◎附　錄　九州、貫山脈

高さ四間、横八間、入口より上の口に拔出るまで、百三十間、窟中に石佛あり、岩石の下底に穴あり、明松を燃して入、三四間程行けば、次第に地下にして、廣き處あり、底に川流れ、穴深さ二町半許あり、速見が瀧は、青龍窟の上四五町許にあり、鈴窟は、青龍窟に次げる大洞なり、(此洞窟をば、豐前志に、景行天皇紀なる、鼠石窟にひきあてたり)。(豐前志)四之卷、三〇頁。「鼠石窟。等覺寺山の上にあり、今は青龍窟と云ふ、是は、鼠龍窟を訛れるなり、(事は、碩田國の下に出しつ)、法雲壽山の遊青龍窟詩の序に云、山ハ、豐州京都三十里ノ所ニアリ、山半ニ等覺寺アリ、寺ノ南、石徑ニ緣リテ、紆曲シテ翠微ニ至ル、妙覺寺ト爲ス、其上ニ石窟アリ、洞門ニ由リテ而シテ入ル、深サ七十尺、横十五丈、中ニ釋迦、文殊、普賢ノ石像、及ビ四天王ヲ安ンジ、護法善神、左右ニ竪立ス、彫鐫巧妙、神工ノ如シ、其傍ニ龍岩アリ、鱗甲紋ヲ作シ、形龍ノ蟠ルガ如ク、觀者悚慄ス、上ニ小孔アリ、泉涓々ト下注シテ珠ノ如シ、又南ニ折レ、石ニ緣ツテ而シテ上ル數十歩、西ニ轉ジテ洞戸アリ、夕陽影ヲ倒シ、窟中ヲ射、光怪日ヲ零フ、壁間ニ藥師、觀音ノ像アリ、崖下竅アリ、投ズルニ石ヲ以テスレバ、則チ圓轉聲アリ、其止マル所ヲ知ルナシ、相傳フ、昔人松火ヲ燃シ、行クコト六七里、一谿アリ、渡ルベカラズシテ而シテ歸ヘル、其中諸處ニ石牀アリ、各佛像ヲ安ンズ、阿羅漢宴座ノ所ト爲ス也、惜ムラクハ寺ト碑ト俱ニ廢シテ、考フベカラズ、凡ソ、窟ノ四周皆壁屏ノ如シ、上蓋ヒ、下平カナリ、自然ノ天造、人力ヲ假ルニアラズ、誠ニ勝特ノ境也、(下略)、とあるにて、其の石窟の景況の大概を知るべし、但、寺與碑俱廢不可考とは、佛の事にのみ關係らひて云へるにて、上古の事實を毫も沙汰せぬは如何ぞや、土蜘蛛の住りしと云ふ事、土人の口碑にも殘りたるをや。」

△城山　豐前國京都郡ノ北端ニアリ、貫山ノ山脈東北ニ延ビテ、周防洋ニ盡クル處ニ位シ、要塞地帶ニ屬ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高四百二十二尺、古城址ナリ。

「地質廿福岡圖」記名128ニ據ル、小倉圖記名ナク、單ニ米突ノミヲ載ス。

△塔ケ峰　豐前國企救、京都ノ二郡ニ跨リ、貫山ノ南方ニ位ス、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千三百七尺。

「陸五地行橋圖」記名836,1ニ據ル、福岡圖、小倉圖記名ナシ、地質ハ臆斷ニカヽル。

△幸山　豐前國京都郡ノ北部ナル椿市村ニアリ、大字入覺ノ村落ヲ隔テヽ、塔ケ峰ヲ約十五町ノ西北方ニ仰グ、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡五百九十四尺。

「陸五地行橋圖」記名ニ據ル、福岡、小倉ノ二圖記名ナシ、地質ハ臆斷ニカヽル。

△龍ケ鼻　(福岡圖669ニ作リ、小倉圖龍鼻岳

ニ作リ、米突ハ福岡圖ニ同ジ式按ズルニ、此山ハ、山嶽志四三一頁ニ載セタル、平狹野山ニアラザルカ）豐前國企救、田川（タガハ）、京都ノ三郡ニ跨リ、塔ケ峰ノ西方約三十町ニ位ス、石灰岩、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高二千百十二尺。

（陸五地行橋圖）記名 640、地質、福岡圖ニ據ル。

△障子ケ嶽（福岡圖障子嶽 399 ニ作ル）豐前國京都、田川ノ二郡ニ跨リ、龍ケ鼻ノ南方約一里十町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千四百九尺、古城址ナリ。

「陸五地行橋圖」記名1269、地質、福岡圖ニ據ル、但シ福岡圖 399 ニ作ル、小倉圖記名ナシ。

△七曲峠　豐前國京都、田川ノ二郡ニ跨リ、障子ケ岳ノ南方約十町ニ位ス、花崗岩、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高凡九百九十尺、モト京都郡久保（クボ）村ヨリ、田川郡香春（カハラ）町ニ通ズル道路ナリシモ、今ハ其南ニ新道開鑿セラレ、仲哀隧道ト云フ。

「陸五地行橋圖」記名、地質、福岡圖ニ據ル、小倉圖 424 ニ作ル。

△飯嶽（別稱大坂山、福岡圖猪ノ嶽ニ作ル）豐前國京都、田川ノ二郡ニ跨リ、七曲峠ノ南方約二十五町ニ位ス、花崗岩輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千八百九十一尺。

「陸五地後藤寺圖」記名 573、地質、福岡圖ニ據ル、但シ福岡圖ハ 568 ニ作ル、小倉圖　名ナク、單ニ福岡圖ト同ジキ米突ヲ載ス。

△馬ケ嶽（小倉圖、馬岳ニ作リ、福岡圖ト同ジク 211 ト記セリ、（大日本地誌）707 ニ作ルモノ、恐ラクハ誤記ナラン）豐前國京都（ミヤコ）郡ノ中央部ニアリ、飯嶽ノ東北方約一里二十五町ニ位ス、花崗岩、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高六百八十三尺、古城址ナリ。

「陸五地行橋圖」記名 207、地質、福岡圖ニ據ル。

（大日本地名辭書）一四三三頁。「犀川村、稗田村の間なる横嶺にして京都郡の平野に隆起す、高二百米突と雖、善く人目を引く、陣營址あり」、

九日登馬嶽　村上佛山

清世恩波及邊民、　優游半讀半畊間、　秋風又醉黃花酒、
多少英雄戰殁山。

登馬嶽、次韻　同

片々寒雲出岫飛、　依稀城上動旌旗、　血流當日應漂杵、
鬼餒千秋雖建祠、　澗菊孤穿疎蕊亂、　崖松鷄坐大枝垂、
吟人固有悲秋感、　況是荒山弔古時、

△八景山　豐前國京都郡ノ中央部ニアリ、今川ヲ隔テ、馬ケ嶽ヲ西南方約二十五町ニ仰グ、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡二百六十尺ノ丘陵ニ過ギズ、神社アリ。

「陸五地行橋圖」記名ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、福岡、小倉ノ二圖記名ナシ。

△覗山　豐前國京都郡ノ東部ニアリ、周防洋ニ臨ミ、八景山ノ東北方約一里ニ位ス、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高三百九十九尺ノ丘陵ニ過ギズ。

「陸五地裏島圖」記名121ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、「地質廿周防洋圖」、「輯製廿中津圖」記名ナシ。

△戸城山　豐前國田川郡ノ東部、赤村大字油須原ノ東北ニ聳エ、飯嶽ノ南方約一里ニ位ス、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ。標高千四十八尺。

「陸五地後藤寺圖」記名317.6ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、福岡、小倉ノ二圖記名ナシ。

△岩石山（ガンセキヤク）（福岡圖岩雀山452ニ作ル、小倉圖記名ナク、單ニ福岡圖ト同ジキ米突ヲ載ス）豐前國田川郡ノ中央部ニアリ、今川ト彦山川ノ間ニ介在シ、戸城山ノ南方約一里十五町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高凡千四百五十二尺。

「陸五地後藤寺圖」記名、地質、福岡圖に據る。

△戸立峠　豐前國田川郡ノ南部ニアリ、岩石山ノ南方約一里ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千四十三尺、添田（ソヘダ）村ヨリ津野（ツノ）村ニ通ズル道路ニ當ル。

「陸五地後藤寺圖」記名316ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、福岡、小倉二圖ノ記名ナシ。

△火嶽　豐前國田川郡ノ南部ニアリ、戸立峠ノ南方約二十町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千九百四十五尺。

「陸五地後藤寺圖」記名589.4ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、福岡、小倉ノ二圖記名ナシ。

△雁（ガン）田峠　豐前國田川郡ノ南部ニアリ、火嶽ノ西方約二十町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡九百九十尺、彦山（ヒコサン）村ヨリ津野村ニ通ズル道路ニ當ル。

「陸五地後藤寺圖」記名ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、福岡、小倉ノ二圖記名ナシ。

△帝釋山　豐前國京都郡ノ中部ニアリ、今川ト拔川トノ間ニ介在シ、藏持山ノ北方ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高九百八十七尺。

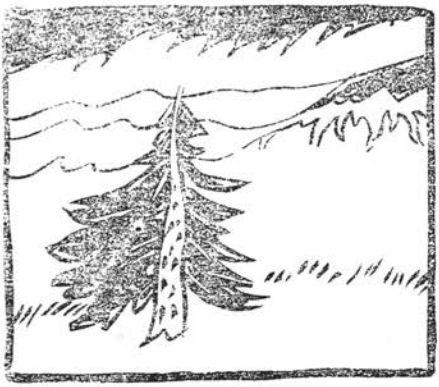
「地質廿福岡圖」記名299ニ據ル、小倉圖記名ナシ。大日本地誌304ハ出處テ知ラシ、「陸五地後藤寺圖」記名セズ、式按ズルニ、同圖、藏持山ノ北西方約十町ニ位スル、382,3ニアラザルカ、或ハ藏持山ト同山異名ナルモノカ、後考ヲ待ツ。

△藏持山　豐前國京都郡ノ中部ニアリ、拔川ノ西岸ニ聳エ、戸城山ノ東南方約一里二十町、岩石山ノ東北方約一里三十町ニ位ス、花崗岩、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千五百七十七尺、山上ニ神社アリ。

「陸五地後藤寺圖」記名478、地質、福岡圖ニ據ル、但シ福岡圖ハ470ニ作ル、小倉圖記名ナク、福岡圖ト同ジキ米突ト、神社ノ符號ヲ載ス。

△牴牛嶽（コットイ）（福岡圖）下津野山　696ト記セルモノカ）豐前國田川郡ノ東部ニアリ、藏持山ノ西南方約一里五町岩石山ノ東南方約一里ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高二千二百七十九尺、北麓ニ彈琴瀑アリ。

「陸五地後藤寺圖」記名690,6ニ據ル、地質ハ臆斷ニカヽル、小倉圖記名ナク、單ニ福岡圖ト同ジキ米突ヲ載ス、前掲貫山脈ニ引用セル大日本地誌ノ記事ハ誤謬ナリ。



宮川水源泝行大臺ヶ原山登山記

大北聰彦

大臺ヶ原山は我縣下で第一の高山であるが標高は僅か七千尺足らずである、高山として價値は無いが深山としては相當の位置に坐るであらう。

こわや恐ろしや大臺ヶ原は
　奥にや蛇も捿む鹿もすむ

と唱へられてゐる大臺ヶ原山から水源を發する宮川上流大杉谷は八百八瀑と稱へられてゐる、果して八百八瀑あるかどうかは知らぬが、此春其本流を泝行して三十有餘の瀑布に逢ひ、十餘の絶壁を踰へ、三度綱を使用して登降した、全く大杉谷の奥は瀑布と斷崖との連續であると言つても敢て過言であるまい。

大臺ヶ原山の記事は、既に山岳第二年第二號に白井光太郎氏に依つて書かれてあるが、氏の登られたのは、今から十七年も以前大和國からである、其當時とは山頂も餘程文明が侵入してゐる、余は伊勢から大部分は宮川上流を泝つて山頂に達したのであるから氏の記載あるにも拘らず重ねて之を書く事とした。

此山の地圖に關しては農商務省二十萬分一地形圖のみでは詳しく知る事が出來ぬから、御料林局の地圖を參考として、實地蹈査の上から杜撰ながらも地圖を挿入する事とした、伊勢方面は比較的謬りも少からうと思ふが其他の方面に至つては殊に杜撰を免がれぬから諸君の御訂正を得れば幸甚の至りである。

伊勢方面からの登山には多氣郡の西南端大杉谷村からするのである、交通機關に關しては參宮線相可驛から佐原に至る六里の間は大部分熊野街道であるから馬車、俥の便がある、　俥代一圓　馬車代五十錢。

佐原には旅舍岡村屋、角屋等がある、佐原以西は道が惡いが天ヶ瀨迄は常に俥は往來してゐる、二里餘であるが、一里三十錢の割である、茲には

二見屋といふ旅舍がある、天ヶ瀬から以西、岩井まで四里弱の間は、俥が通じない事はないが極めて高價である、荷車は尙其から一里半久豆(クヅ)まで通ずる、久豆から半里許で最奥の部落、大杉である、大杉には高木勘七郎といふ殆んど木賃宿のやうな旅舍がある。

一　松坂——瀧谷

四十五年五月十四日松坂驛から乘車し相可驛に下車茲で會員大西源一氏と會して栃原まで三里を俥に乘つた其から互に荷物を負ふて佐原まで歩いた、途中雨に逢ふた、終日雲が晴れないので、宮川沂行が氣づかはれた、其日の午後六時頃瀧谷へ着いて、大西嘉藏氏の宅に泊つた。

二　瀧谷——桑ノ木谷

十五日瀧谷の青年中村米二郎氏を加へて三人、午前七時半出發、常に宮川の左岸に沿ふて、十一時半奥大杉に着、此行程四里、直に大杉の區長淺井八右衛門氏を訪ふて山中の地理を確め、氏の盡力で田中安次郎を案内者として傭ふた、此部落の對岸山中に杉の巨木がある土俗「大杉サン」と言つて祀つてゐる、大杉谷の名は之から起つたのである、九町で達する事が出來るといふので大西中村の兩氏は是を見物に行つて來た、周回二丈一尺であつたといふ事である。

午後一時五十分奥大杉を出發した、路は漸次に細くなつてゐる、本流と父ヶ谷との會合點を渉つて、尙本流の左岸に沿ふて行くと、路は愈々狹隘で岩角や磧を蹈む處もある。

大地から凡一里來た處に小舍がある、入つて茶を乞ふた、其から一二町で長古須(ナカコウヅ)谷を渉つて本流に沿ふて東に曲ると程なくヲシコウヅ谷の空澤がある、是を下ると渡舟場がある、自ら綱を曳て右岸へ渡つて多氣郡有林事務所の上から右岸に沿ふて倉元(クラモト)谷、橋立(ハシダテ)谷を渉つて三時四十五分桑ノ木谷に出た、此附近は一面に新殖林である、其昔は桑樹が澤山あつたといふ事であるが、今は一本も無い、谷に沿ふて緩かに上ると七八町で神野殖林事務所に達した、大西氏の知己の紹介狀によつて茲

に一泊する事を得た、時に午後四時、大杉から行程二里。

三　桑ノ木谷——嘉茂助谷

十六日午前七時廿分神野事務所を出發して昨日來た路を戻つて橋を渡つて谷の左岸へ移り程なく本流に出た、其對岸に注でゐるのが美濃ヶ谷である、斷崖蒼樹の間に口の六十尋といふ瀑が見へる、尙も奥には中ノ三十尋奥の六十尋等の瀑があるといふ事である。

本流の右岸に沿ふて南へ進むとゴーレ淵谷の細溪を渉る、對岸には鰓谷(ウクイ)が注でゐる、かくて神野の殖林地を過ぎて雜木の間を下ると路は河畔に沿ふて岩石が多い、口オウガイ、中オウガイ、奥オウガイの三細溪を渉つて少しく上ると奥佐田祠の舊跡がある、茲に暫く休憩した、之から下る事十分で再び川畔へ出る、稍下流に、ヌケ瀑對岸に大日倉の絶崖が削つたやうになつて其涯が急湍である、是から上流は路らしいものは幾んどない、磧を行く事暫く對岸に能谷(ノウ)、地獄谷、の二溪水が注でゐる。

此處で本流を徒渉して左岸の磧をつたふて再び右岸に徒渉して磧を歩むと此あたりは兩岸三四丈の崖をなしてゐる、三度渡つて左岸に達して暫草木の叢中を穿つて奥カサギ谷を踰へて叢中を出で、又磧を歩み流に從ふて稍西に曲ると其對岸曲り角に注ぐものが京良谷である、普通大臺ヶ原山へ登る者は京良谷を泝つて林道を行くのであるが、吾等は出來得る限り本流泝行を望むのであるから此路をとらなかつた。

行手の方を仰ぐと宮女の襟のやうに重つた山々の彼方には千尋(センヒロ)谷の殖林（御料林）が頭角を現してゐる。

磧に凡十五分休息の後又徒渉して右岸に移り次で左岸に渡つて十時頃前方高く飛泉が絶壁から落ちてゐるのを觀た、是が音に聞いて居た千尋(センヒロ)ノ瀑の上部である。

左岸を行く事暫時、小崖を踰へて磧を辿つて程なく奔湍を渉つて右岸に注ぐ水越谷へ着いた、時に十時二十分、嚮の事務所から約二里、三時間を

費した。

一行は尙も本流を泝つて嘉茂筋谷の小屋へ達しようと思つたが、本流によつて達する事は不可能で水越谷を上つて迂廻しなければならぬといふから案内者の言に從ふ事として、時間はまだ早いが腹が許さぬから辨當を喫して千尋瀑を觀る爲に携帶品を此處に殘し置いて本流右岸を辿つた、危崖を蹈んで一町許で千尋谷の落ち口に達した、仰いで見ると千尋谷の全水を聚めて懸崖から落つる四段の瀑布は千尋ならずとも蓋百尋は確である、其上部のものが最も長い、危險を冒して余と中村氏とは此上部の瀑下迄攀ぢ上つて見たが、瀑の巾は十數間に及んでゐる、高さに於ては恐らく宮川諸瀑中第一であらう、大西氏は其間に案内者を伴ふて本流を泝つて斷崖の彼方に嘉茂助瀑を見屆けて歸つて來た、綱の準備をして行つたならば、彼の斷崖を踰へて嘉茂助谷の小屋に達する事は左程難事でないやうである。

午後一時十五分一行は水越谷會合點を出發して此谷を泝つた、崖は低いが頗る惱まされた、七八町程の處に一時間も費した位である、其から細い空澤を左に上つて嚮の京良谷から通じてゐる林道に出でゝ山腹を辿つてやがて製板所の廢屋の處で右に移て谷を左に瞰ながら漸次に谷を離れて中腹を辿る事半里許で谷が再び近づいて午後三時頃谷を挾む彼方の山稜が低下してゐる處に達して東南に熊野灘を望むだ、此稜は紀勢の國境である稜の最も低い處は谷の水面からの距離が六七間である、此處を「水越し」と言つて往年堰を造つて溪水を湛へて稜を越さしめて水を紀伊の大河内川へ落し伐採材木を之に流して紀伊へ運搬した、水越谷の名は之に依つてゞある、其少し上流に水越の瀑がある、高サ十二間許二級に落ちて下瀑が三條に分かれてゐる、羊腸のやうな林道を上ると三時半、尾根へ達した、之を越ゆると林道は山腹に通じて高低大差ない、右手には千尋の全溪を瞰下し溪を隔てゝ西南には嘉茂助谷に通ずる、トロッコ道（製板運搬軌道）が殖林地の中腹を吾等が今歩む道と殆んど等高點に於て一直線に横斷してゐる、大杉谷の奥は大部分は御料林であるが、目下の處では

◎附　錄　宮川水源泝行大臺ヶ原登山記

水越谷と千尋谷は殖林が終つたのである、此兩谷の面積は御料林全面積の十分ノ一位であらう。

午後四時千尋谷頭にある紀伊の船津に通ずる峠に達した、是から西に至るものはトロッコ道によつて嘉茂助谷へ通じてゐる、東に下るものは約二十町で紀伊から大和へ大臺ヶ原山を貫く土倉道（大和の材木商土倉庄三郎氏の造りし道）に出る、此道を左に上るものが大和及大臺山頂に達する、伊勢方面からの登路といふのは即ち此道をとるのである、又右に下るものは船津に通じてゐる、吾等は嘉茂助谷に向つてトロッコ道を進むだ、山皺に從ふて迂曲幾折の後、峠から三十町でトロッコ道は絶へて嘉茂助谷を瞰下した、之から木馬道を十四町下つて嘉茂助谷畔の嘉茂助小屋、即ち山口製板所事務所に着いて一泊を求めた、時に五時半、水越谷會合點から約二里である。

案内者田中安次郎は是から奥の本流泝行の案を知らぬから當所に於て是を能する者を尋ねたが、幸に樵夫北村文六（三十七歳）同周次郎（三十三歳）の兄弟があつて冬期は熊獵を業としてゐるから山中の事情に明るいといふ事であつた、此兩人を除いては他に案内の出來る者はないのである、早速文六を喚で此事を謀ると、自分は差支があるから弟周次郎を遣はすといふ、於是田中を解傭して明日大杉に歸らしむる事とした。（案内料二圓）

軈て周次郎が來たから溪流の模樣、行程、難易等を問ふた周次郎の言は即ちかうである、「此處から本流を泝つて本流と土倉道との交叉點に架つてゐる引本橋に出るには、凡四里で一日の内に達する事は出來るが、途中險阻が多いから數條の麻綱を携帶せなければならぬ、最も難所といふのは七ツ釜、と光ルノ瀑である、西谷（支流土倉谷を分ちてより以上の本流をいふ）に入つてからは左程でもないが、諸君が果して此等の險所を通過する事が出來るかどうかゞ氣づかはるゝだけである、よし又通過が出來るとしても進行の遲速によつて引本橋に達する時刻も定めがたい、何れにしても澤山携帶品が有つては泝行は出來ぬから荷物は別に人夫に持たせて土倉道から運搬してもらひたい、」引本橋の五六町先には土倉詰所（土倉氏當山

伐採の際出張せし處）の廢屋が有るから、其處で會合して露營する事と定めた、そこで人夫を僱ふた處が此若者臆病者で、獨り行くのは恐ろしいといふ、中村氏を同行せしむる事とした。

其夜は樵夫等と爐火を圍むで山中の怪談、傳說等を聞いて十時頃床に就いた。

四　嘉茂助谷――大臺山頂

十七日午前七時中村氏人夫等と、別れて出發、直ちに嘉茂助谷の左岸に沿ふて下つた、十町許も來ると溪水は瀉下して脚下にニコ〳〵の瀑となつてゐる、四級に落下して上部から順次に五間二十間三十間と言つてゐる、最下部のものは昨日大西氏が見た嘉茂助瀑である、最も長いのであるが此處からは觀へなかつた、各瀑は圓形の瀑壺がある、周圍の巖壁が滑かであるから一度之に墜落すると攀ぢ上る事が出來ずにニコ〳〵笑ひながら死ぬといふので名づけたのである。

第三瀑の處から路は左に曲つて粗末な梯子や岩角を登降して右に足下十數丈の處に本流を見ながら行くと對岸に一大奇峯が屹立してゐる、平等岩と言つて水底から千仞の絶壁を爲して、其附近には土俗カリガネと稱へてゐる小鳥が縱横に飛んでゐる、岩燕の一種であらう、本流は岩壁に因つて北に曲つて更に西に曲つてゐる、路は次第に低下して七時三十五分本流に出た、是から岩上を迂ると川は南へ曲つて對岸に稍大きな支流不動谷が注いでゐる、此附近を「桃ノ木」と云つて大蝦蟆が棲むで居つたといふ桃ノ木岩窟がある、吾等は此窟前に暫時の休憩をなした。

是からは路が無いと言つて差支ない、丸木の橋を渡つて左岸に移つた、川は此あたりになると岩石が多くて小屋の樣な巨岩大石が幾つとなく川床から生へぬいてゐる、石から石へ飛躍して泝ると足を濡す必要がない、やがて七ッ釜の第一の釜なるものを見た、岩の壺である水の深サは測り知られぬが、案内者の言によると是から以上數町の間に七ヶ所の釜がある、其の多くは瀑壺で其形も種々である、其に從つて數ヶ所の瀑があるといふ事である。

◎附　錄　宮川水源泝行大臺ヶ原登山記

八時五分には其第一瀑を觀た二條に落下して高サ三間許次で八時二十分第二瀑を觀た、之も三間許で三條に分かれてゐる、左岸を攀ぢ登つて、最も難所と聞いて居た七ッ釜の瀑の左肩を踰える事となつた、其途中斷崖に臨んで崖樹の間から第三第四第五の三瀑が連なつて落てゐるのを望んだ、目測約上瀑が八丈、中瀑が十五丈、下瀑が五丈、巾各々三丈許、千尋瀑以來の壯觀なものである、尙も登つて絶壁の中途をつたふた、行人一歩を過る時は谷底の鬼となるのである、やつと無事に通過すると此方の崖から彼方の崖へ半朽ちかゝつた四五本の丸木橋が架してある、明治二十四年土倉谷伐採の際に木材流下の必要上作つたもので其後二十年絶へて通つた人も無い位であるから渡るに稍薄氣味が惡るい、大西氏や案内者よりも體量の多い余は一層氣持が惡るかつた、案内者は此の橋が朽ちて落てゐはせぬかと心懸りにしてゐたのである、是が無いと綱を使用して非常な危險を冒さなければならなかつたのである。

八時五十分瀑上に出て暫く右岸を沿ふて二間許の瀑がある、是が七ッ釜の終で有る、之から凡一時間も石を飛んで泝ると韃靼の響が聞へて程なく光ルノ瀑が眼前に現はれた、瀑下四間の處まで接近して巨岸に踞して休憩した時に九時四十分であつた。

余は千尋と光ルノ瀑の名を聞いて憧がるゝ事茲に幾春秋、大臺ヶ原登山の目的半ば是である、高サ凡四十丈、千尋瀑には及ばぬが本流が斷崖に會して直瀉し一大斜面磐石に激して巾十數間に擴がり飛沫空に散じて其壯觀快絶は恐らく宮川第一であらう、日光是に反映すると銀光を發するやうであるといふて名づけたものである。

光リノ瀑と言はずに光ルノ瀑といふのが如何にも活動的に聞へて嬉しい。

吾等は光ルノ瀑の右肩を踰す爲に少しく戻つて右岸の水涸れた添谷口から登つた、全く路が無い、唯熊笹を押し分けて攀ぢて十時二十五分再び流に下りた、光ルノ瀑から此處に來るまでに脚下に二瀑あるのを欝樹の間から窺ふたが其全容は知る事が出來なかつた、泝行する事暫く右岸に與八谷が

注いで二條二級にあつて斜面岩上を下つて與八ノ瀑を爲してゐる、上級は十間下級は十二間許である、本流は此處から少し上流は、兩崖劃然として中間に淵を湛へ泝る事が出來ぬから、與八瀑の岩面を攀ぢ上つて瀑上を渉ると、尙其上に七八間の瀑があるのを認めた、又熊笹を押し分けて登降凡一時間の後、崖を下つて岸へ出でると是は本流でなくて支流の土倉谷の溪谷であつた、全く案内者が過つたものである。

此上流二十間許隔つた處には約二十丈の瀑布がある、又下流は四五間磐石をつたふて溪水一時に瀉下して物凄い響を爲してゐる、身は瀑上に立つて居るのであるから瀑は見へないが、瀑壺を俯瞰すると龍でも潜んでゐさうな深潭で五百坪許の一大圓形をなして丁度大盤の樣である、其三方は絶壁に取りかこまれて一方が開いて深潭の水は又磐石の上を流れて淙々本流に合してゐる、時に十一時半であつたから溪流に臨んで握飯を喫した、さて是から本流へ出なければならぬから、少しく土倉谷を泝つて上瀑の下部奔瀨を渉つて下瀑の左肩の險阻を越えて、十二時三十七分本流西谷に下つて下瀑を觀る爲に半町許流を下つて土倉谷へ入つた、土倉谷は本流よりも水量が稍多い、響の下瀑を仰ぐに高サは之も二十丈許巾五間、あたりの景が鮮かで崔樹の嫩葉は綠、滴るばかりで滴つた綠が此やうに淵を碧色に染めたのではなからうかと思はれた。

上下の瀑名を尋ねたが、昔土倉谷伐採の時は名もあつたのであらうが自分は知らぬといふ、其後案内者は余に書を寄せて上瀑を「トエダキ」(樋瀑なり)、下瀑を「奥ノ七ッ釜」と言ひ傳へてゐる事を言つて來たから一時吾等が命名したのを取消した。

西谷を泝ると既に幾多の大小支流を分つた爲に水量も餘程減じて石は益々大きく水愈々激してゐる、午後一時十五分流が左右に岐れてゐる處に着いた、左に入るものは粟谷で右に入るものは西谷である、粟谷を分つてからは河床の傾斜が著しく急になつてゐる、分岐點から少しく泝ると流は急に西に曲つて五間許の瀑布となつてゐる、其左肩の崖を攀ぢながら、粟谷上流に白布を垂したやう

◎附　錄　宮川水源泝行大臺ヶ原登山記

な細長い瀑を觀た、崖を越へて流に下ると尙其上流に三四間の瀑が二ッある、人が殆んど來た事のない深谷の事とて名も無いから、是を西谷三瀑と土俗が言ひ傳へよい樣に平凡な命名をした、下瀑の落口を左に涉つて中瀑の落口を右に涉つて上瀑の左肩の崖を危く熊笹等に取り縋つて越へて泝ると又八九間の曲折した瀑がある、是を折れ瀑と命名した、蹊を其右肩に索めて絕崖を攀ぢ登つて瀑上に下り暫時の間泝ると流が右に曲つて三百坪許の深潭となつて巾四五間高サ十數間の極めて美しい瀑が滔々此深潭に投じてゐる、案內者は瀑名を知らぬが、吾等が嘗て聞いて居た巴ノ瀑であらう、あたりは何れを見ても極めて高い斷崖である、暫くは躊躇したが兎も角も此まで來たものである、踰ゆる事が出來るか出來ぬかわからぬが、行ける處迄行かうといふので、右肩の崖を攀ぢ上り始めたが甚だ危險である、始めは熊笹を把つて身を支へたが、後には岩皺に指先をかけて上つた、すると嶄立一丈餘り、手足の取り付く處も無い峭壁に逢ふた、幸に其處に一本の枯木があつたので案內者は是を壁に立掛けてやつと上つて崖樹へ綱を結んで垂してくれたから之を賴に上る事が出來た、下る時には傾斜も幾分か緩であるのと熊笹が簇生してゐるのであるから、其さへ把つて下れば足を辷らしても墜落するやうな事もなく二時五十五分瀑の半町程上流へ下り着いた、險阻は到底七ッ釜や光ルノ瀑の肩を踰ゆるの比でない。

是から十町許も泝ると、又も斷崖が行手を遮つて其下に淵がある、右の方から六七間の瀑が漑いでゐるから橫見の瀑と命名した。

吾等始の頃は瀑に遭ふ度に壯快を叫むだが、其度に斷崖絕壁の險を冒して越えなければならぬから、遂には成る可く瀑の無い事を願ふた。

又しても此瀑の左右何れかの崖を越へなければならぬが左は岩壁で手のかける處もない、右は崖が流に從ふて直角に曲つてゐる、樹も疎らに生へてゐるから右方の崖を橫截して直角に曲つてゐる稜へ崖樹から綱を垂れて之を便に瀑の落ち口へ下つた、茲から十二三間も岩の上を行くと流が又直角に曲つて泐黑の深潭である渚から、神鑿を以て

斷つたやうに深くなつてゐる處は一寸奇妙である、余は未だ川に於て是程深い淵を見た事がない「其深さ幾尋なるを知らず」とは全く是等の事であらう、其四周には磨いたやうな滑かな數丈の巖壁が頭上を覆ふて半洞の形になつて、奥の方は僅かに三四尺の間隙から溪水が壓迫せられて、淘々奔出瀑を爲して此無底の深潭に投じてゐる、幾百年來曾て人跡を許さなかつた深壑も、遂に世に紹介さるゝ事となつたのである、是を綾ヶ淵と命名した。

吾等も茲に至つては全く進退が谷つて止むなく少しく戻つて嚮に下つた對崖を攀ぢ上つたが、やがて罅裂があつて彼方の崖が三間許り高く切り立つて四肢の取り縋る處もない、巴の瀑の右肩と能く似てゐるが危險は其以上である、下を窺ふと身の毛も竦立つ絶壁であるからよくも攀ぢ上つたものかなと自分ながら驚かざるを得なかつた、案内者は綱の端に岩片を縛つて數回投げ上げてやつと崖上の檜の幹へ綱を懸けてくれたから之を手繰つて上つたが尚も其上には三四個所の難所がある、

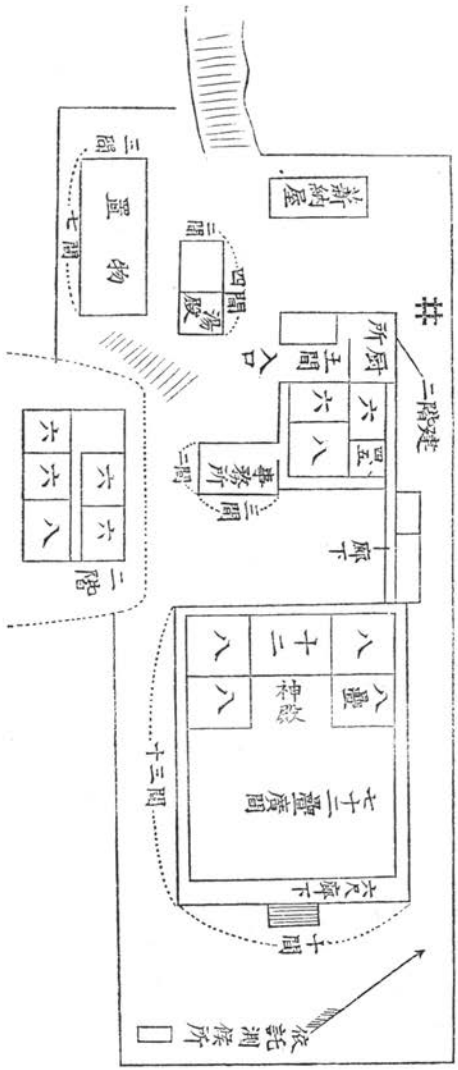
果して能く踰ゆる事が出來るのであらうかと常に懸念して居たが、其後は綱を使用する程の事もなくて越へた、又熊笹を便に辷り落ちるやうにして午後四時溪流へ下つた。

昨夜案内者は西谷に入つてからは泝行容易であるかのやうに言つたが、反つて西谷へ入つてからの方が非常なる險難に遇ふた、案内者自身も今更のやうに土倉谷會合點以下の比で無い事を感じて居たやうである。

西谷へ入つてからは如何なる瀑が幾つ位有るかといふ事さへも知らなかつた處を察すると、彼は此谷を通過した事があるかどうかは頗る疑問である、恐く行けるであらう位に思つて來たやうである、而し如何なる絶壁に遭遇しても吾等に不安の念を懷かしめなかつたのは慥に剛の者である。

泝行數町で右に添谷を分つてからは水量愈々減じて河床の高低も少なく、今までの奔流は潺流となつて兩崖も低く峯は近く見へて雲足が速いから引本橋も遠くはなからうと思はれた、かくて午後四時半には引本橋へ着た、嘉茂助小屋から此處ま

で水流は約四里であるが登降が甚だしかつたから實際の行程は五里許であらう、凡九時間半を費したのである。



也から土倉道を行くと西谷は之に並行してゐる、橋から十五分で土倉詰所に着いた、詰所は今は廢屋となつて屋根も半破れて床もなければ四壁も無い、先着の中村氏等は已に露營の準備をして居たが、此から山頂までは二里餘である、まだ時間もあるから山頂まで行く事として暫時休憩して五時十五分出發した、約二十町で大臺辻に着いた、即ち峠である、此から西へ土倉道を下ると三里で大和の入之波（シホノハ）に達する。

山頂へは左に折れて喬木帶の間を漸次に上るのである、道は修築せられて巾一間許もあるが、泝行の疲勞が一時に發して歩行が困難であつた、六時半西谷水源に架つてゐる安心橋を渡つた、大西氏は歩行餘程苦しい樣であるから中村氏及人夫と三人だけ後に殘して、余と周次郎とは急行して針葉樹林に春の漸く暮れんとする頃大臺敎會へ到着した、時に午後七時二十五分、大臺辻から約二里である、余が湯に浴してゐる頃、中村氏は人夫の荷物を擔いで人夫が大西氏を負ふて到着した。

五　大臺ヶ原山上

此敎會は福壽大臺敎會と云つて造化の三神を祈つてゐる、地は大和國に屬して吉野郡上北山村大字小橡番外三番屋敷で主人、古川嵩氏之が祭主會長である、敎會堂は今から十七年前に建てられたもので、間口十間、奥行十三間の敎會本部、同五間に四間二階建の住宅、同二間に三間の事務所、其他に湯殿、物置、大工塲等がある、本部は八疊の間五個十二疊の神殿、七十二疊の大廣間から成つてゐる、祭日は毎年七月十七八日の兩日と九月の十七八日の兩日である、登山者（多くは信者）は六七八九の四ヶ月に登り、大和が最も多くて紀伊が之に亞ぐ、伊勢方面は登路の困難であるのと村落へ遠いが爲に餘り人に知られて居ない、最も近い大杉谷等の人々でさへも、十數年前に建てられた此宏大な敎會のある事を近年になつて『山の上には大きな家が有るげな』と言つてゐる有樣であるから、全く信者は無いと言つてもよからう、唯稀に學生等が登る位なものである、年内の登山者は二千人内外といふ事である。

敎會の南隅に農商務省の依託測候所がある、溫度は平均酷暑攝氏二十七度、嚴寒〇度以下二十度である。

道路は吾等が來た道を四五町戻つて左に分れて西南大和の小橡村に至るものと、彼の大辻から入之波及紀伊の船津に至るものと其他に道は惡いが大和の西原及紀伊の木津に至るものがある、そして小橡へ三里、入之波へ五里、船津へ九里、木津へ六里である。

◎附錄　宮川水源泝行大臺ヶ原登山記

水系は北は宮川本流西谷の水源で、東南は支流土倉谷の水源、西南は北山川の水源、北西は吉野川の水源である、又正木ヶ原の東南はチョウシ川の水源である、最高峰日出ヶ岳は即ち宮川、北山川の源頭に在るのである。

北山川は元木谷、鹽辛谷、名古屋谷、中ノ谷、大和谷、山葵谷等に分かれて、鹽辛谷、名古屋谷、大和谷の三大溪流は各々東ノ瀑中ノ瀑、西ノ瀑となつて合してゐる、教會は名古屋谷の東に建つてゐるのである。

十八日早曉祭主の祓詞の聲が堂に響くので目を覺して午前六時に起床した、時に攝氏九度五分。

本日は處々の探勝に一日滯在と決定して人夫案内者を解傭した、案内料一日二圓、今日の歸りに又一日を費すからといふので四圓、人夫には同じく二日分二圓を拂ふた、案内料の二圓は隨分不廉であるが、樵夫として同額若くは其以上も儲けるのであるから致し方がない、大西氏は曾て大臺ヶ原山に登つた事があるから、當日の案内を頗はす事として午前九時十分教會を出發した、昨日の道を十町許り戻ると右側に「日ノ出岳登山道是より九町二十五間」と誌した木標が建つてゐる、茲から東南に向つて上つた此あたりは針濶混淆樹林である、二三伏起する峯を登降して十時日出ヶ岳に着いた、山頂は稍平夷で尺餘の熊笹が密生して其中央部に陸地測量部の一等三角標がある、此日紀州灘から盛に水氣を送つて大臺山に衝き當つて霧を生じた爲に海上の方面は望む事は出來なかつたが、東から北に當ては大杉谷の無數の溪谷を挾む峰巒を俯瞰し勢和國境の連峯は太洋の濤の樣に最正北に是が盟主顏を爲してゐるものは高見山である、西一帶は吉野山群が蜿蜒として連つてゐる、其西北に聳へてゐるのが吾が立つ峯と高低大差ない大峯山で、正西には彌山が此山群中に覇を唱へてゐる、西々南に當つて孤峯天を刺すものが釋迦ヶ岳で、漸く南に延びて大日岳天狗岳等は煙霧の間に隱顯してゐる。

午後一時山頂を辭して南へ下つた、嫩葉淺綠の灌木や深綠の針葉樹が入り交つて所々に梨に似た白い花が清奇の趣を添へて頭上の八汐は今盛であ

る、一條の逕路は紀勢國境に沿ふて叢樹翠滴の間に通じてゐる、やがて少しく上つて正木峠を越へて行くと唐檜の天然林が或るものは枯れて白骨のやうに立つてゐる、或るものは朽木となつて縱横に仆れて路を壓してゐる、此間を縫ふて行くと正木ヶ原や牛石ヶ原大蛇倉等いふ處があるが、是等の事は既に白井氏によつて詳しく記載されてあるから略して置く、あちこちと辨當も携帶せずに廻つて空腹をかゝへて午後五時に敎會に歸つた。

最初吾等は大臺ヶ原山から高見山へ縱走する計畫であつたが、或る故障の爲に此度は中止して後日を期して再擧を企てる事として尾鷲へ下ると定めた、豫め携帶して來た食料品等最早必要なき物は悉皆敎會へ進呈した。

六　大臺ヶ原山——尾鷲

十九日陰雨濛々として四山を閉ざしてゐる、午前十時半頃敎會を發足して南へ〳〵と二ノ俣國有林を下つて、午後一時五十五分木組(キグミ)峠に迫り着いた、右に下る道は出口に至るもので吾等は左に少しく登つて又下つて二時半チョウシ川の上流に出でゝ、是から新たに造られた木馬道を不動谷の澗流に沿ふて製板所に着いた。

製板所からはトロッコ道によつて山腰を繞つて進むと尾根を切り開いた處がある、其少し先方から右に山路を急に下つて午後五時過ぐる頃ヲレンジ匂ふ紀伊の村里に着た、之が木津といふ村である、チョウシ川に架る釣橋を渡つて川の左岸に沿ふて木津から二十四町で便(ビン)ノ山に出でゝ再び川を渡つて、馬越山の南に馬越峠を越へて夜の八時に尾鷲に着いた。

（編者曰）　本編には數多のスケッチ、及び地圖附隨したれど、發行期日逼りし爲め遺憾ながら挿入する事を得ず、次號に載する事あるべし。

大正元年十二月十日印刷
大正元年十二月十二日發行

著作權所有

定價金六拾錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

「山岳」需供欄

會員諸君の爲め、特に本欄を設けたり、本欄に掲載さるべき事項は、主として山岳に關聯せるものなるを要す、本欄の範圍外なりと認むる、需供は、掲載せざる事あるべし、又一定の頁を限られあれば、次號に廻す事あり。

本欄掲載中の匿名のものは末記の番號に由り、相當返信料封入の上事務所に問合さるべし。

本欄は單に、需供の仲介をなすのみにて、掲載の物品又は事項の內容に關しては本會の知悉せざる事と承知ありたし。

○一號一欄六號二十九字詰六行以內は會員に限り無料掲載の事、以上を超加せる時は、一欄三十錢の料金を要す。

○會員外は一欄（六號廿九字六行）に就き一回金四十錢を要す。

需　要

○日本產高山蝶の標本相等價格にて讓受けたし　（筑後柳河町　高椋惣吉）

○山岳第四年一號御不用の方は朝鮮古切手と交換　其他御希望の相當條件にて讓受け度候に付下名迄御照會を乞ふ。　（京城吉野町　芦田卓藏）

供　給

○山岳第一年度分より第七年度迄缺號なきもの（第一年第二年第三年、はクロース製合本）全部一揃として讓たし。

在姓名事務所